

奇譚クラス

新しい風俗文献誌

1965・11

11
月
号



奇譚クラス



11
月
号

定価 三〇〇円

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



11月号

¥ 300

オシメを当てたあと、ゴム
ムツカパーをしってもらう。

逞ましき臀部責め

美木乃々子 略号(ぬい)

高手小手に厳しく縛り上げられた若々しい乃々子嬢の全裸全身像から発する芳香が、ほのほのと匂ってくるような見事に逞ましい臀部の美しさが最大のポイント。

柔軟二つ折り緊縛

略号(ぬに)

伸びやかな自慢の脚線美を見せて前に投げだした両足の爪先はピンと反りかえって、二つ折りに辻村隆から責められた美木鏡の妖しい緊縛の美しさと女体の美しさ。

猿ぐつわ全裸縛り

美木乃々子 略号（ぬへ）

豆絞りの猿ぐつわの他は、一糸纏わぬ全裸に剥れた女体を嚴重な高手小手胴縛りにされて、さまざまポーズを強制されている八等身の美女の哀れな姿態。

真紅腰卷着用縛り

大手札三枚一組 四〇〇円

真紅な腰巻に豆絞りの猿ぐつわ

小手の裸身を衆目に晒したポーズは、腰巻ファンならずとも、その華麗な美しさに打たれるだろう、

柱縛り宙吊り晒し

大塚堅子 附号(一め)

足首に至るまで、全身くまなく縛り上げられて宙に浮いている。苦悶に声を挙げて顔をねじ曲げ、踏む場所を失った足は、一直線に下へ伸びて、もがいている。

柱縛り全裸臀晒し

大手札五枚一組 五〇〇円

大塚啓子 略号（つま）
後手に縛りあげられた全裸像が
柱を抱くような恰好で連縛されて
水蜜桃を剥いたような真白な臀部
を晒して、これから行われようと
しているムチ打を待っている。

柱正面縛り折檻

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚啓子 略号（つち）
柱を背にして裸身を正面向けて
縛られた女体は、見事な乳房、腹
部、お臍、太股を縄目にくびられ
て更に一層ポリウムを増し、電光
にきらめくような色気を発散する

坐禪縛り足吊揚げ

大手和二枚一組 三〇〇円
番号(又は)

坐禪を組む時のように両膝を一
杯に張り両足を交叉したポーズ
で、足首を括られ、その縄尻をぐ
いぐい引きつめて背の柱へ足を
吊り上げる。後手縛りの縄で上半
身を柱に固定されているので全身
は二つ折りになる。

足挙げ全裸正面

大正二枚一組
東浦ひかる
三〇〇円
略号(さこ)

見事なポリウムを見せた裸身を、柱に正面向いて、アグラをかいて縛り上げられた上、片足の足首に細く掛けて、ぐいぐいと吊り上げてゆくと、足首は女の顔よりも更に高く釣り上ってゆく。

柱抱擁全身縛り

大手料二枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 路号(さか)

丁度、人を抱擁するときは、
に柱を両手で抱き更に両足でも交
叉するように抱かされた東浦嬢の
裸身が、身動き出来ないように、
ぐるぐる巻きに括られてゆく。

柱縛り臀部晒し

大手机三枚一組 三〇〇円
東市心かる 格号(冬)

全裸の全身を柱にぐるぐると雁
字掬目に縛り上げられている東浦
嬢の最近とみに豊かさを増した聲
部に焦点を合わせて晒してみまし
た。答打ちでも何んでもどうぞ。

柱縛り正面晒し

大手櫃三枚一組 三〇〇円

東浦こかる
略号（さき）
組も弾き返えすようなポリウム
をダンダラ模様の綿ロープで力一
杯締めつけると、組目の間から、
ぷくりぷくりと肉が盛り上ってく
るひかる嬢の前面の素晴しさ。

鼻腔煙草挿し責め

大手利三枚一組 四〇〇円

鼻腔に火のついた紙巻煙草を差し込まれた彼女は、平常煙草をのまないだけに、苦しがつて身悶える上、髪を掴まれているため、どうすることも出来ずに涙を流す。

鼻責めアップ

大手札五枚一組 六〇〇円

乃々子嬢の美しい鼻が、辻村隆に依つて、さまざまな器具を用いて責められるさまを、鼻に焦点を合わせてアップで写しました。原貴めファンに捧げる傑作。

強烈縛り顔面翻弄

大手札八枚一組 八〇〇円

美木乃々子 略号（ぬほ）
亀甲縛りに身動き出来ない美木
嬢の裸身が、一番大切な顔を汁
村隆に責められて身悶える。鼻を
中心に女の顔を弄る男の手は、あ
くことを知らぬ執拗さである。

☆琵琶湖畔第二回『女相撲』写真分譲☆

近江舞子での第一回の女相撲の
写真撮影以来、頼に女相撲の
きた大塚啓子、東浦ひかるの二嬢
が今度こそは、砂浜の上で真剣な
勝負をやるというので、折柄水
泳に來ていた人達の観戦の中、力
ラーを含めて数十枚の写真を撮影
しました。実戦的な迫力のある女
相撲の美技がさんさんと陽の降り
そそぐ青空の下、輝一本の白い肌
も露わに展開されています。

湖畔第二回女相撲

モデル・大塚啓子・東浦ひかる
二人とも「相撲」着用

○女相撲連続スナツプ

大手札十枚一組 一五〇〇円
略号(すな)

お互いに相手を投げようと必死
に取り組むところをスナツプ。

○輝着用連続スナツプ

大手札十枚一組 一五〇〇円
略号(すな)

一糸纏わぬ素裸となつて相撲マ
ワシを締め合う大塚・東浦二嬢。

実戦迫力女相撲

躍動する女体の美しさを精緻に
キヤツチするため大型カメラを三
脚に据えて、連続撮影しました。

【第一組】

大手札印画紙焼付 略号(すに)

【第二組】

六枚一組 一〇〇〇円
略号(すぬ)

大手札印画紙焼付

六枚一組 一〇〇〇円

【第三組】

大手札印画紙焼付 略号(すの)

六枚一組 一〇〇〇円

【第四組】

大手札印画紙焼付 略号(すつ)

六枚一組 一〇〇〇円

美木乃々子 輝美フオト

相撲輝着用艶姿

大手札印画紙焼付

十二枚一組 一〇〇〇円

美木乃々子

略号(めわ)

六尺輝着用艶姿

大手札印画紙焼付

七枚一組 七〇〇円

美木乃々子

略号(めお)

東浦ひかる・大塚啓子

室内相撲熱戦譜

キヤンパスを敷きつめた室内に
て、数キロワットの人工光線を浴び
て、ここを先途と華麗な女相撲を
繰りひろげる二嬢の輝一丁の姿。

【第一組】

大手札印画紙焼付 略号(すも)

六枚一組 一〇〇〇円

【第二組】

大手札印画紙焼付 略号(すみ)

六枚一組 一〇〇〇円

【第三組】

大手札印画紙焼付 略号(すわ)

六枚一組 一〇〇〇円

【今月の新版分譲品】

開股高手小手逆吊

大手札二枚一組 三〇〇円

木村洋子 略号(つほ)

股が裂けんばかりに開かされて
逆さ吊りにされた女体は、痛い痛
いと泣き叫びながら、最も強烈な
逆さ吊りの醍醐味を味っている。

高手小手逆吊正面

大手札二枚一組 三〇〇円

木村洋子 略号(つふ)

両足を揃えて一本の棒のように
逆さ吊りにされた女体は、両手を
高手小手に縛られていて、み
じめに揺れうごいているばかり。

浣腸悦楽

大手札五枚一組 五〇〇円

美木乃々子 略号(める)

自らの手で自らの身に浣腸を施
そうとする若き女性のベッド上の
姿態が生々として描き出されている。

施される浣腸の味

大手札五枚一組 五〇〇円

美木乃々子 略号(めか)

辻村隆の手で、さまざまな浣腸
器を駆使して浣腸を施されている
乃々子の魅力的な姿態を浣腸ファ
ンの要求に応じて作成しました。

浣腸独り遊び

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚啓子 略号(ると)

いちじく、上様な浣腸器を用い
てプレイに興ずる啓子さん。

縄に悶える裸身

大手札三枚一組 三〇〇円

木村洋子 略号(さひ)

豆絞りの猿ぐつわ以外何物も着
けない裸身に、非情の縄がきびし
く、緊縛マニアの洋子嬢を身悶え
させるベッド上の狂演ポーズ。

全裸股間縛り

大手札三枚一組 三〇〇円

木村洋子 略号(さふ)

股間縛りに狂うように喘ぐ洋子
嬢のマニアぶりが、皆様の目にこ
れほどよく感じて頂けるフオトは
ないでしょう。

襲いくる浣腸器

大手札二枚一組 三〇〇円

大塚啓子 略号(るち)

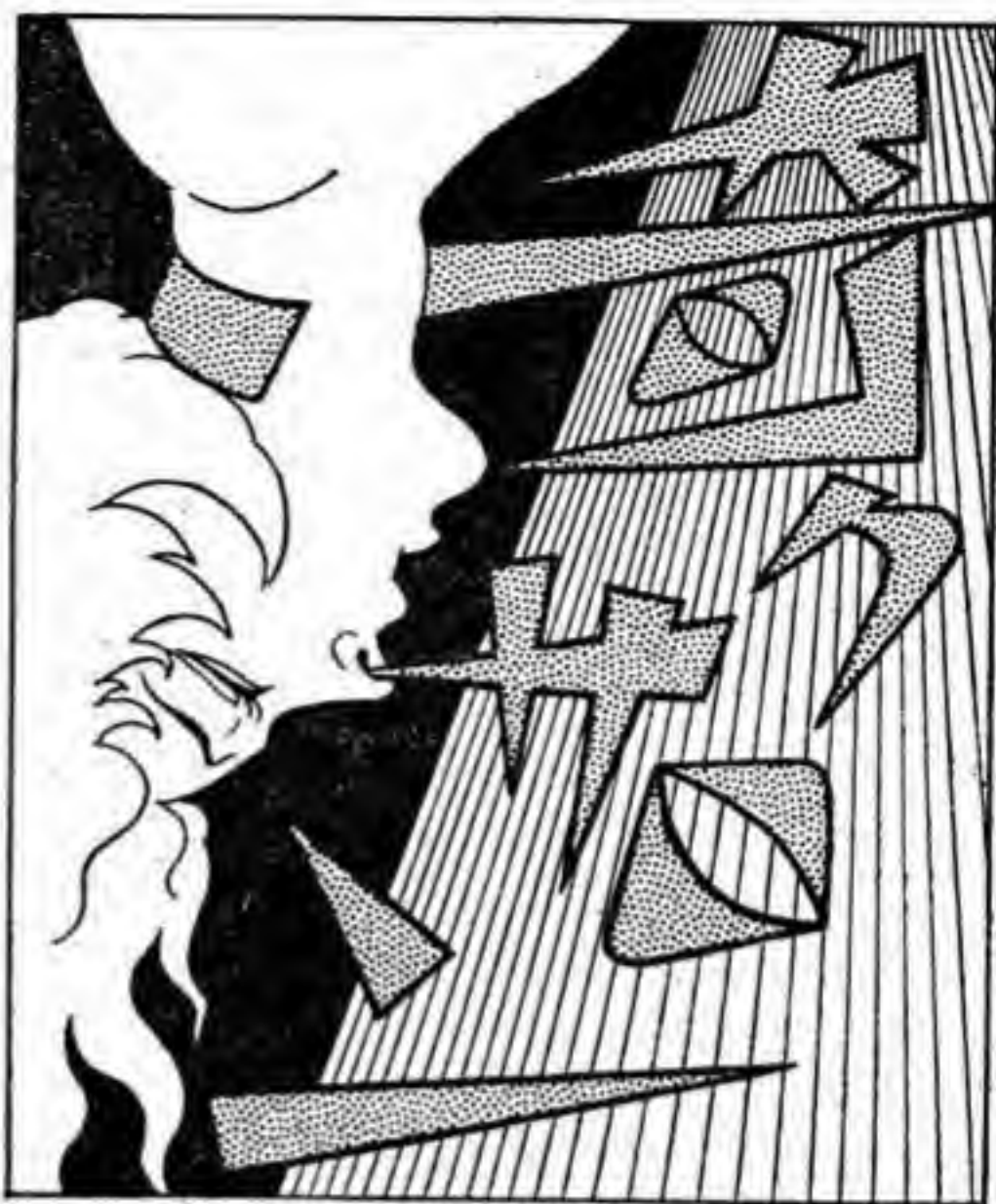
見事なガラス製の浣腸器が横臥した
啓子嬢に挿入されようとする。浣
腸器の恐怖におののく一瞬！

挿入された嘴管

大手札四枚一組 四〇〇円

大塚啓子 略号(るて)

器の嘴管が挿入され、今まさに薬
液が注入されようとしている浣腸
マニア垂涎の息づまる瞬間！



伊藤晴雨氏の思い出

編 集 子

毛筆で書かれた伊藤晴雨氏の原稿は、流石に若い人のものと違って変体仮名まじりで一種の風格があつて懐しく思ひ出される。

変体仮名もそうだが、漢字も毛筆書きでくずしてあるので見事に美しいのだが、若い文選係にとつては、これが又難解なので、原稿の右側にルビのようにペン書きの楷書の但書きしたものだ。非常に筆まめな方で、手紙や葉書をよく戴いたが、今にして思えば全部保存しておけばよかったと、悔まれてならない。

下書きに使った画用紙の裏によ

く絵を書いてこられたが、時には書きつぶしの下絵が素晴らしい春画であつたり、送って来られた絵の包装紙が、これすべて春画の書きつぶしであつたりして、思わず度肝をぬかれることがあつた。奔放不羈な氏の一面が躍如としているようで有難く鑑賞させて貰つたものだ。

責画の中にも、判じ絵式というか隠し絵というのか、意外なものが出てきて驚かされるがよくあつた。三十年四月特大号の氏の筆になる巻頭口絵がワイセツ罪の容疑を受けたときは驚かされた。

縛られた女性は完全に着衣なので安心して一瞥しただけで、すぐ整理担当者に渡したのだが、これがそもそも大失敗の巻であつた。警察で指摘されて始めて気付いたのだが、そのなんでもない責画の中に、数個の張形が巧妙にかくされていたのである。

勿論、知らなかったといつても通る筈のものでもなく、結局、雑誌の売行きを増加させるために、数個の張形を描いたワイセツ図画を掲載した云々ということ、送付されてしまった。幸いこの件は起訴はされなかったが、氏一流のサービスピットを發揮されたものだと思つてゐる。もっとも巧妙に隠してあつたのだろうが、警察もよく発見したものだと感心させられる。読者でも、この隠し絵は知らなかった人も多いのではなからうか。十年も以前のことだから、一昔ということになるが――。

氏が若い頃にモデルを使って撮影された写真を送って貰つたことがあるが、そのモデルとの失敗談を詳しく附記されているのには、思わず微笑させられた。礼儀正しくて思いやりのある親分肌の性質であつただけに、道にはずれたことをやらかす無軌道者には、激

しい口調で排撃されていた。その生涯を責一筋に生き抜き、その全身を没入された伊藤晴雨氏の如き方は、もう二度と現われることはないだろう。若しこの世に「責教」という宗教があつたとして、氏こそ、その教祖と呼ぶにふさわしい人物であるといつても過言ではないだろう。

氏の生前、『責の劇団』創設についての相談を受けたことがあつた。いろいろ資料も見せて貰つたが、その頃仕事の方が忙しくて本格的にタイアップすることも出来ずに終つてしまった。晴雨氏の苦難の途を考えると、胸が締めつけられるような気持ちに襲われる。そして、老年は不遇だったという記事を読むと、特異の趣味の途を歩む者のきびしさを一入身にしみてしみじみと考えさせられるのだ。晴雨氏の作品を発表させて貰つた期間は決して長いとはいえないが、本誌こそ、氏の作品の発表の場として、最も適当としていたのではないかと、今でも思つてゐる。氏も又、本誌に対してはマニア誌としての親しきをもつて、楽しく書いておられたように思えてならない。

マニアの手帖

池田

勝

縛り方教室……新趣向提案（女体射的）

数年来の奇クによってSMの内

容を読み返えして見ると、縛り、吊し、による悦虐が主で、Sである私には毎号楽しめる写真や記事、小説で一杯であるが、子供の頃の『死刑』という遊びからヒントをとって、いろいろの縛り、吊しに加えて『射的』を提案したい。

実際のプレイの場合、掴まえて脱がせ、抵抗を抑えて次第に縛り上げてゆき、曲げたり吊したり、磔にしたりして身動き出来ないようにして、次第に増す苦痛がSにとっては何よりの鑑賞すべき楽しみであり、Mにとっては悦楽の境地に吾を忘れるのであるが、厳密な意味で拷問の過程であって、刑の執行ではない。

拘束した挙句、止めをさすことによって、その楽しさも最高のものが味えると考える。

そこで私はいろいろ試した内、先ず最も効果的であった「射的」を紹介して、これを奇クの方々又愛読者同趣味の皆さんに提案する

次第である。

私は、数年前BGで、今は結婚して互に音信を断った或る女性とSMの趣味が合って、夕刻九時から延々八時間プレイしたことがあるが、その時の情景を披露して各位のご参考に供したいと思う。

まず、簡単に後手に縛って罪状を論告する。曰く、「人を待たせた罪」「悩殺の罪」等々。理由をつけて「射的刑」を宣告する。こうすることによって、それらしい気分になせしめることが準備運動でもある。

一、まずは皮膚を馴らすため、後手高手小手に緊縛し、足も縛って普通のくすぐり責めにかかる。二十分も全身の柔肌をくすぐると、冬でも汗びっしょりとなる。「待って」「苦しい」と言うまでくすぐり続ける。

二、次は両手を合わせて手首で縛り、足は足首を縛り、柱にそって吊しにする。一のくすぐりに反しこんどはツネる。

こうして、くすぐりとツネリで肌を十分に刺戟に対する抵抗力を与えておくと、いよいよ本題の射的を行っても、少々の痛さにも耐えられるようになる。途中少しづつ縛りのまま、吊しのまま五、六分の休憩を入れて次第に肌を馴らして行く。

三、さて、いよいよ「射的」であるが、先ずは机の上に仰向けに寝かせ、手足を机の脚にそれぞれ大の字に縛りつける。女体クッションとして腰掛けて見るのもよし、風変わりな机として茶碗の坐りは悪いが動いて落したら罰を加えることにして、土瓶茶碗、菓子などを並べて

一服過すのも悪くない、羊羹などはまな板のつもりで切ればよい。電灯を消して胸の双丘の間にローソクでも灯せば茶菓の風味また一段と増そうというものである。

さあ、いよいよ最初は爆撃から入る。上から、斜めから物を落して防禦を試してみよう。ゴルフの球が最も手頃である。乳首、へそ、斜め上から百発百中となるまで練習することである。次はまた柱に吊して野球の投球練習するのも面白い。相当長時間同じ姿勢で縛られていても、女性は球に気をとられて、「手首が痛い」など文句は仲々言わないものである。



四、そしていよいよ『射的』そのものにかかる。まずフックを柱に交叉する鴨居にとりつけ、大の字に爪先立ちさせて磔にする。女体のすべての肌が眼前にある。輪ゴムのゴム銃、玩具屋にあるコルクの玉の飛び出すピストルなどを使うのであるが、最初は直径十糎位の的を胸の溝落ちと、下の部分にとりつける。

ゴム銃の玉は紙を「へ」の字に曲げたものであり、ピストルの玉

は丸くして怪我は防ぐ。『死刑執行』として射的をねらって連続必中するまで打つ。ゴム銃は次第に強く引いて勢を強くする。かなり痛いが決して怪我はしないし、跡はつくが、風呂へ入っておけば一日で消える。弾でなく弓矢まで作って、そろえれば風勢十分である。但し矢は先にゴム吸盤のついたものを使用する。

射的は、実際の銃殺刑にならうて、顔の大きさのボール紙製の面

を耳に輪ゴムで掛けるように工夫して顔を覆うこと。これは女性に最も大切な顔を守るためと、顔を隠すことにより体の苦痛に耐える表情がクローズアップされるのが十分鑑賞出来るためでもある。また女性には恐怖心を柔らげることにもなり、嗜虐の楽しみを倍加する効果がある。そして特に始めてのとき、射的の女性には何も見えないから、此方が遠慮して興を殺ぐことがない。

以上当時のプレイを略記したのであるが、私もあれから共に楽しむM女性に回り会う機会もなく、徒らに頭中の遊戯となつて残念であるが、『射的』のいろいろの型考案に余念がない。奇くでも出来ればとり上げて頂き、また読者諸兄姉も『責め』の内容充実の一つとして試されることを提案する次第である。

(東京都目黒区・池田勝)

〔読者投稿絵画〕煙草責めにあう女

(煙草マニア生)

一、柱に縛られた女学生。マドロスパイプで責　二、がんじょうに縛り上げられた女。口に





〔読者投稿〕 娘 切 腹 画 森 英 生

小生の『女体切腹画』を二枚同封いたします。少々ドギツすぎるかもしれませんが、貴誌の片隅に御掲載願えれば幸いです。一枚は△女学生の切腹△出刃を使つての十文字腹という想定です。次は、△同性切腹心中△でも題しましょうか。

女性の腹というものの魅力に取り憑かれ、その柔かい下腹を刃物で、我と我が手で切り裂き、内臓をお



し出して死んでゆく様子に、たまらない憧憬を感じる、男の拙い画ですが、よろしく。事情により姓名・住所は省略させていただきます。

置いておきます。三角窓又は後部の窓を少しあけておきますから、貴女の目印及び面会場所を書いて封筒に入れて車の中へ投げ込んでおいて下さい。

置いておきます。三角窓又は後部の窓を少しあけておきますから、貴女の目印及び面会場所を書いて封筒に入れて車の中へ投げ込んでおいて下さい。

置いておきます。フェリーボートへの入り口は切符売場の建物を境として西と東の二つありますので西側の方から見えていって下さい。尚若し暗い時は車内灯をつけておきます。

では、私の方は心待ちしておりますから、貴女も覚悟を決めて出てきて下さい。

(神戸市八田中恭一)

ろ一流出版社から元宰相御曹司の翻訳で堂々と発行され、たちまち発売禁どころか、たちまちベストセラーにノシ上ったのだから。(中略)「ファニー・ヒル」が日本で初めてしかも全訳で出版されたのは昭和二年、例の円本合戦の序幕時代で、円本ならぬその後の『艶本』続出のハシリだったという。出版社は左翼あがりの奇人でエロ本出版の常習者、「前後三十一回も禁止勲章を頂戴した」と自称する有名な梅原北明の文芸資料研究会。——とあります。

○大塚啓子の平常着用している下着類は古くなったのが大分溜ったというので、先日写真撮影に来たとき、数枚のパンティを譲り受けました。その節、その下着を着けて各一ポーズだけ写真をとっておきました。読者の方々の中で欲しい方がありましたら、その写真と一緒にお願いします。枚数は六枚です。入札で高い方から順にお送りいたします。尚、啓子さんは御希望によつては、汚れたままのものをお分けしてもいいと言っていますから、御希望の方は一応編集部気付でご照会下さい。

「娘相撲物語」と「湖畔女相撲」に寄せて

雪崎 京人

十月号拝見。海野美津男氏「良男の体験」娘同志の相撲ばかりでなくコーチ格の良男の昭子に対する心理的、肉体的に恋に成長して行く過程が、相撲を通じて描き出されており、従来の御作に較べて変化があり傑作と思います。男性

対女性の相撲をこの様な角度から描いた作品は、始めてではないでしょうか。

海野氏は相撲に精通されている方と思いますが、取口の描写など髣髴と目に浮かぶ様で、汗にまみれた良男と昭子の裸の相撲姿、昭子と圭子の若々

M.U



しい輝姿が、生き生きと誌面に躍っています。それにつけても「湖畔の女相撲」(分譲写真)の大塚啓子、東浦ひかる両嬢の琵琶湖畔、近江舞子での相撲写真を再び三度び感服、飽かず眺めております。外光に輝く湖畔の白砂の上で、青い湖と紫に霞む比良岳をバックに、繰り広げられる女相撲絵

映画通信

映画「花と蛇」を見る

魔猿生

名古屋駅前に立ち並ぶビルの谷間に「テアトル希望」という映画館がある。成人向映画専門の映画館で、目下「花と蛇」が上映されている。

奇談クラブ連載の問題小説の映画化ノというスチール内の広告文句には、いささか興ざめで、若しこれが名古屋だけでなく、他の都市でも、こんなミステイクで宣伝されていたら、本社から映画会社に文句を言ってもらいたいものである。

さて、映画であるが、これも小説とはおよそかけ離れた、通り一

短歌「犬」

北条 冬子

庭木背に裸にむかれ晒される一夜の長さ思い知らさる

我れを打つムチをくわえて捧げ

遍の浅薄なストーリーでがっかりした。一応、団鬼六脚色とはなっていたが、かんじんのサディズムシーンが、ほんの申訳程度に出るだけで、期待外れも甚だしい内容だった。まだしも、この映画と併映の「冒涇の罌」の一コマに、吊し上げて操り責めするシーンがあって、満たされる思いがした。小人の、何とかちゃんという男が責め手を演じていたが、中々迫真の感あり、責められる女優の悲鳴、そして足をバタつかせているところなど、思わず魅き込まれる場面であり、それだけに、「花と蛇」の駄作ぶりが残念で仕方がない。

映画製作者にして若し良心があるならば、原作者の意向をもっと尊重した「続・花と蛇」を映画化すべきであると提言しておく。

(愛知県・魔猿)

いる犬となりたる身こそ哀しき
水を呑む苦しきまして悲しきは
脚をひろげて庭を這うとき
尻に尾の付けられてある身であればけものの如く這うて待つ鞭
身にまとう糸きぬさえもなき暮
し鞭打つ人のあざけりの眼よ

巻。海野氏作品中の昭子、圭子
現実に見れて取組んでいる様な錯
覚さえします。

自然の中で太陽の光を浴びて相
撲一本の二人の美女が、力一ぱ
い勝負を争い、暴れ回っている姿
は、何とも美しい限りです。室内
のものも勿論よさがありました。な
ともすると、作られたポーズにな
り勝ちでしたが、十月号「編集部
だより」によれば、大塚、東浦両
嬢共乗り気で、相撲に興味を持っ
て何番も繰り返して取組まれた
由、写真にもよくそれが感じられ
巧みな撮影の技術と相俟って、生
き生きとした無邪気な海野氏の作
品にある様な健康的なスポーツと
しての女相撲を具現しています。

山原清子後援会

山原清子を囲む第二回座談会並
にSMプレイ鑑賞会を八月中旬に開
催する予定でしたが、暑い最中で
したので、九月二十七日(月)午後

言ではないと思います。又、私の
お送りした秀の山勝一著「相撲」
を御利用頂いた由、光栄の至りで
少しでも御役に立ったことなら本
望です。

海野氏の十月号の御作を読んで
大塚、東浦両嬢が昭子、圭子の様
に見え、自分で良男になった様な
気になって両嬢に稽古をつけ寄倒
したり寄倒されたりする場面を考
え、妄想を逞しゅうしました。呵
々。もっとも、今の私の体力では
両嬢に到底歯が立たないことでし
よう。又、自分が二十代の青年で
あったなら、良男ならずとも、両
嬢のどちらか昭子か圭子かの遅ま
しい美しさと可愛らしさに、心を
引かれ、恋の虜になってしまった
かもしれません。海野氏の娘相撲
物語、今後も名作を期待し御健筆
を祈ります。

二時から開催することに決め、会
員の方々に案内状を送付いたしま
した。入会御希望の方は、入会金
千円同封の上、お申込み下さい。
S、M、刺青の中、御希望のスチ
ール、キャビネ版二枚贈呈します
からお申出下さい。

雨

梶 天平

橋がある
黒く濡れて灯をうつす
灯がまわる
まるくまわる
その回転の中ほど
ひめやかな呻きがちりちりに
織い両足に散らばり
河へ落ちていく

雨のなかで
お前の流れだす音を聞いた
すえた匂いが
私を少しづつわびしくさせる



ボクの責め方 宝塚二三夫

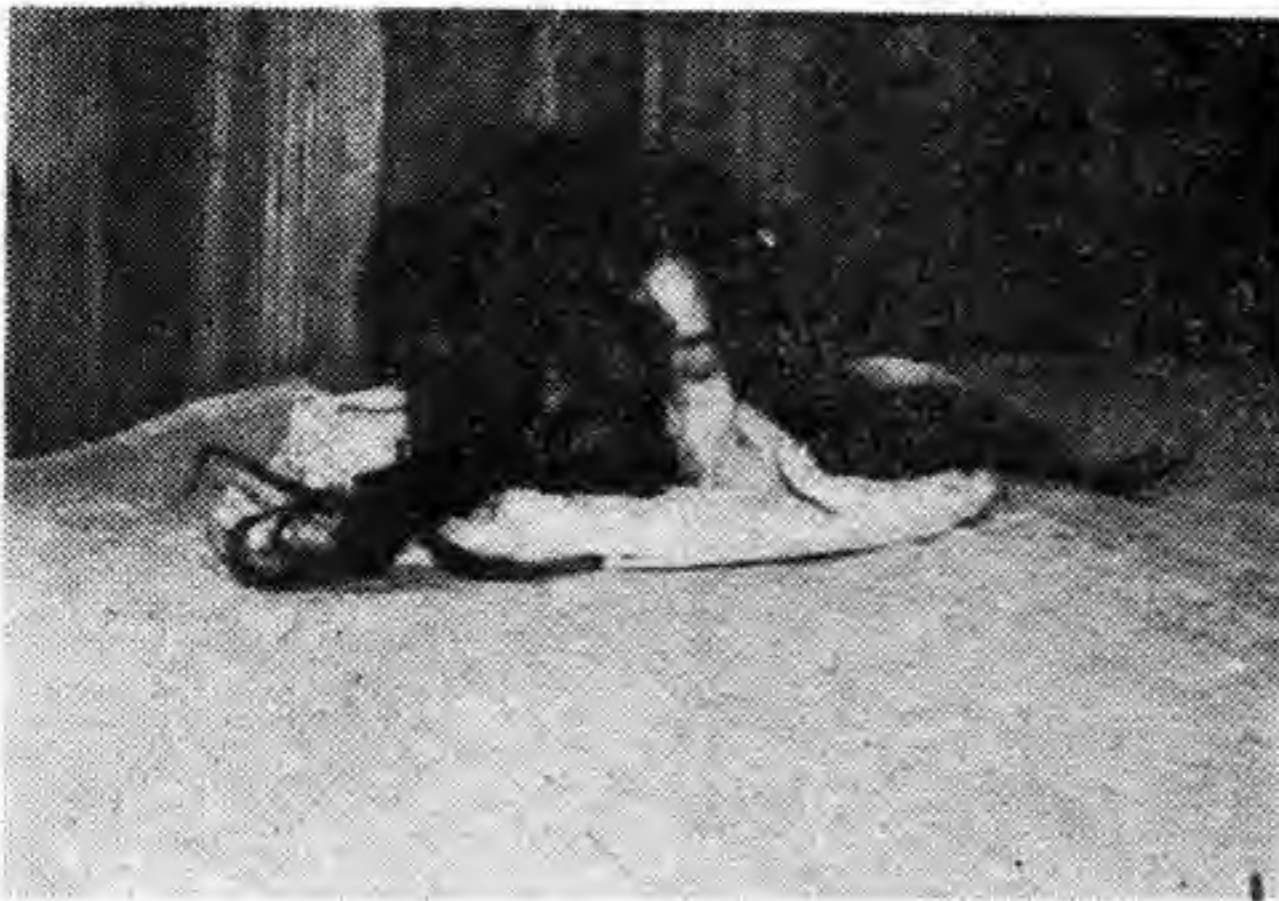
脚の美しさに注目をした縛り

△次号のお楽しみ——予告——▽
○夏彦蛇行録(堀夏彦) ○木戸川
健氏の耽美な生活(木戸川健) ○
善子の回想(山口広) ○耕土散筆
『落穂拾い』(保藤久人) ○イン
テレセクション(三原寛) 懸賞告
白「軟体動物」(春村豚児) 告白
「妊娠腹の記」(川口善子) ○耽
美ふあんたじー「でかだん」(夜
乃探郎) ○「マゾヒスト・古川裕
子」メモ(久我庄一) ○浣腸の方
法(宮辺紀美子) ○クワヘリ(お
もだかしの) ○続妊娠腹観賞会(高
野原美) ○初陣(万田不仁) ○
探郎SM版・パノラマ島奇談(夜
野探郎) ○悲歌(葉山啓) 洋子の
こと(山口広) その他連載物。

「映画に見る生首」

剣持逸人

間もなく、生首映画の圧巻ともいうべき『悪党』が封切られますが、生首ファンとして誠に欣快の至りです。これは独立プロの、新藤兼人監督のもので、足利時代、顔世御前（岸田今日子）の高貴な美しさに狂った高師直（小沢栄太



郎）が、塩谷判官（木村功）追討の命を下し、壮絶な死の合戦の末、権力への抵抗を象徴する判官の死と共に師直と対面する顔世のクビのラスト・シーンが一番のみものなものです。クビは美容整形の権威、秋山太一郎医博が、プラスチックで岸田今日子をそっくり型取ったもので、おぞましい死相漂うその迫真力は全く鬼気迫るものがあるそうです。

実物とつくりもののクビの見分けがつかぬ位精巧なものだそうで、岸田自身の顔にも青いチョークを塗り、口もとで一瞬あざ笑う表情に、死相の凄まじい効果を、監督はたんねんに要求しているそうです。写真（A）は青いチョークをぬって、生首の演技に取りくむ岸田今日子（左）と侍女役の乙羽信子です。

今ひとの生首映画は、東映の『怪談・片目の男』（監督小林恒夫）です。片目の男西村晃の妻になる中原早

苗が、亭主を裏切ったということ、西村晃に薬切り機で首を落とされるという、ショッキングな垂涎のシーンです。頭から熱湯を浴びせられてひたいはただれ、無惨に変貌した顔を歪め、首を薬切り機の上に乗せられた彼女は悶えます。西村は無情にも押し切りをガチャン。中原早苗のクビがポトリと前に落ちるといふシーンですが、勿論本当にやっは大変、トリックがあります。刃のところに彼女の首がはいりだけ挟ぐりとして、ガチャンと押し切る苦心の撮影とのこと。

この映画では残酷なシーンが他にも多く、北条きく子が西村晃のために、裏切りの代償として、背中に剣を突き立てられ、血みどろになるシーンもあるそうです。一流の女優が、映画で首を切られ、生首をさらすシーンが見られるとは思いますが、ただだけに、生首マニアにとっては、絶対見逃せない映画です。愛好の方々が千載に悔を残さぬよう紹介させていたかったです。

いずれこの映画鑑賞後、その出来栄をマニアの方々と共に再評価したいと思っています。

（写真は都合で省略します）

代理部だより

○本誌上にグラビア写真が姿を消し代って、限定版グラビア写真集が脚光を浴びてきました。「美しき縛しめ」の第五集「女性刑罰拷問特集、日本版」と第六集「緊縛美女艶姿百態」が刊行されると忽ち注目殺到！ 限定版のため既に残り少なくなっています。

○引続いてグラビア限定版写真集として「美しき縛しめ」第七集「刺青の魅力を縛る」という山原清子の縛りフォトを、特別にこの限定版のために撮影しました。第八集は「女性刑罰拷問特集、西洋篇」第九集は、鈴木晃子、大塚啓子、山原清子、玉田美代子、東浦ひかるの諸嬢による「女斗美緊縛女相撲集」を企画しております。

○尚、「美しき縛しめ」第三集は売切れにて在庫しません。どういうわけか、売切れになった直後、急にお申込みが殺到するので、お断りするの困っております。未だに「花と蛇」特集号や「悦特」をお申込み下さる

「奇ク・人生劇場」読む雑誌篇Vのこと」

— ああ、夢の、また夢よ…… —

夜乃探郎

九月号で久我庄一氏が「奇ク雑誌」で「夢の、また夢」とつぶやいている。十月号で芳野眉美氏が「御厠番秘聞」V夢の、また夢・を連載はじめた。

まさしく過ぎ去りしことは懐しく夢のまた夢であろうか。

——だが、△夢よ、もう一度Vという言葉もある。

「奇ク・人生劇場」△見る雑誌篇Vに登場された、あの人が、この人がふたたび、時代は移る△読む雑誌篇Vに現われ、カムバックのペンをふるわれたら、どんなにかうれしいことだろう。かつての古い寄稿家・レギュラーメンバー・新しい読者が手をつなぎ輪になって——奇クの「本文充実」に力をそそいで進むことを期待したい。

その意味で羽鳥水江女史のカムバックも、最も新しいトピックとして十月号の「伊藤晴雨先生を偲ぶ」黒



井珍平氏の十二年ぶりの登場も楽しく心強いことだ。

△時Vをきざむ歯車は、すぎ去ってみると、まことに早く感じられる。十年一昔という言葉を持ち出すまでもなくついこの間、△耳

責めに微笑む娘V(刑部典子の巻)カメラ・ハントで(4月号)。辻村さん、実にきれいな「さようなら」をしていたな——と、感じていたのに、もういまは残暑で新刊十月号が私の手もとに置かれてある。△——その後Vという書き方は、何んというノスタルジャーがこぼれることよ。ロマンの香りでもある。そこから、虹を見るような明日への夢のかけ橋にも通じるのだ。

(カメラ・ハントで「その後」を十一月号あたりで紹介すると△サロン楽我記V第十六回で辻村さんはいっている。ウレシイね。)

私が「ドラマ・奇譚クラブ」を「実録奇譚クラブ」を執筆、投稿したのも、苦しさも楽しさも……そこに生きた夢が、ろまんがあつたからで、それがとりもなおさず△本文充実Vへの道にも通じることを信じたからだ。

いまに生きることは大切だ。そして過ぎ去ったドラマを顧みるのも私たちに夢を、力を与えてくれる。

いよいよ「奇ク・人生劇場」も、見る舞台より△読むV舞台へと移った。奇クの青成瓢吉はだれか、飛車角はいずこ——。

方がございますが、案外新しい雑誌を見ておられない方があったと思います。

○只今のところ、代理部分譲品目録は作成しておりませんし、誌面の関係で本誌記事中の広告も思うにまかせず御迷惑をおかけしてありますが、次号あたりから大幅にまとめて誌上に発表したいと考えております。

○本誌九月号、十月号に旧号の表紙が掲載されたので、それを機会に旧号の在庫について大分御照会がございましたが、残念ながら一部も残っておりません。

○琵琶湖畔に於ける第二回の女相撲に始めてカラー撮影をいたしました。いづれ次号の広告で分譲品として発表したいと思っております。カラーといえば、山原清子さんの刺青を天然色写真で見たいという希望も相当ありますので、今後天然色写真の緊縛フォトの分譲も開始したいと思っております。

○局留で御送付した雑誌や分譲品が受取りに行かれないため返戻されるものが時々ありますが局留の際は、御手数でも二日おき位に入手されるまで、局へお出かけ下さるようお願いいたします。

サロソ楽我記

辻村 隆

(第十七回)

映画も最近、我が意を得たりと言ふのが薩張りないので、見に行く機会が段々少なくなった。数年前に読んだ、山田風太郎の「棺の中の悦楽」が、大島渚の監督で「悦楽」となって近日封切りされるが、これが若し原作に忠実なれば可成り面白いと期待している。

初恋の女の為人を殺した主人公脇坂篤がひよんなことで、農林省の下級役人のつまみ喰いの千五百万円を預かる羽目になり、その金に手をつけて、次々に金で女を自由にして行く。すっかり使い果たした時、下級役人は獄死していたが、彼も亦、初恋の女の裏切りで逮捕されるといった粗筋である。彼の金で自由にした女は六人登場するが、一人一人の女の性格が全部異なっていて実に面白い。

一番目は代表的アプレの浪費的な若い女、

三番目は清純な女子アルバイト学生。

五番目は、事後必らず洗滌し消毒する女医。六番目は唾で最高の技巧を示す少女娼婦。問題は、二

番目と四番目であるが、

二番目の女は凄くケチで、しかも女夜叉の如きサジストの女性で、小説のその内容の一部を少し紹介すると、次の様な個所が随所に出てくる。

△男は全裸で、うしろ手にくられて、蒲団の上にくるがっていった。からだのあちこちにみみず服れがはって、血さえにじんんでいた。(三行略) 女は、すこし血のついた縄をぶらさげて、うめいている男のまわりをあるきまわった。彼女は長襦袢一枚だった。それが汗のため、からだにはりついて、赤い人魚みたいな曲線をえがいている。まっしろな乳房がひとつ、ころがり出していた。彼女はさっきから四度、男を犯した。女の方から男を犯したのである。無抵抗な男をごろごろところがしたり、まゐめた掛布団に弓なりにのせたりして、最も不自然な姿勢で……。「もうゆるしてくれ。おれは死ぬ……」と篤はうめいた。演技でいんどかくりかえした言葉だが、いまはもう本気だった▽



△もう昂奮しない男のまわりを

笹代はいらいらと、あるきまわった。彼女はあせりと腹立たしさに、あたまの中が、まっかな血であふれているような気がした。彼女はいきなり、男の顔の上にどすんと馬乗りになった。ぬれた粘土のような肉を篤の顔をおしつけ、その鼻口をつまらせた。彼はひきつるようなうめき声を立てた▽

とまあ、こんな描写が随所にあつて、この真剣なSMプレイを地上三十米の望楼から、消防署員が覗いているといった、のぞき趣味までお負けがついている。

四番目の女性には反対にマゾの女性で、主人公がサジストの立場になつてゐる、この女性が夫と密かに逢つてゐるところを見て主人公は狂暴な行為にかられる個所がある。

△彼は志津子のからだをくるくるまわしながら、帯はむろんのと、帯しめや腰ひもとをとってから、

彼女をひたして、筆筒の環にその両手くびをゆわえつけた。彼女のまえははだけて、蠟色の乳房から腹部までむき出しになった。「もう決して不貞行為はしないか」篤はそうわめくと、いきなり

帯しめで、彼女のはだかの肩をぴしとたたきつけた。志津子は痛みに身もだえし乍らいった。「ゆるして下さい。でもあれは不貞じゃありません」「不貞だ、よし、そんなつもりなら——」彼はまた女を鞭うった。筆筒の環がちゃかちやと鳴り、志津子のはのけぞろうとして、こんどは前にからだを折りまげた。雪のように白い

私の飼育奴隷

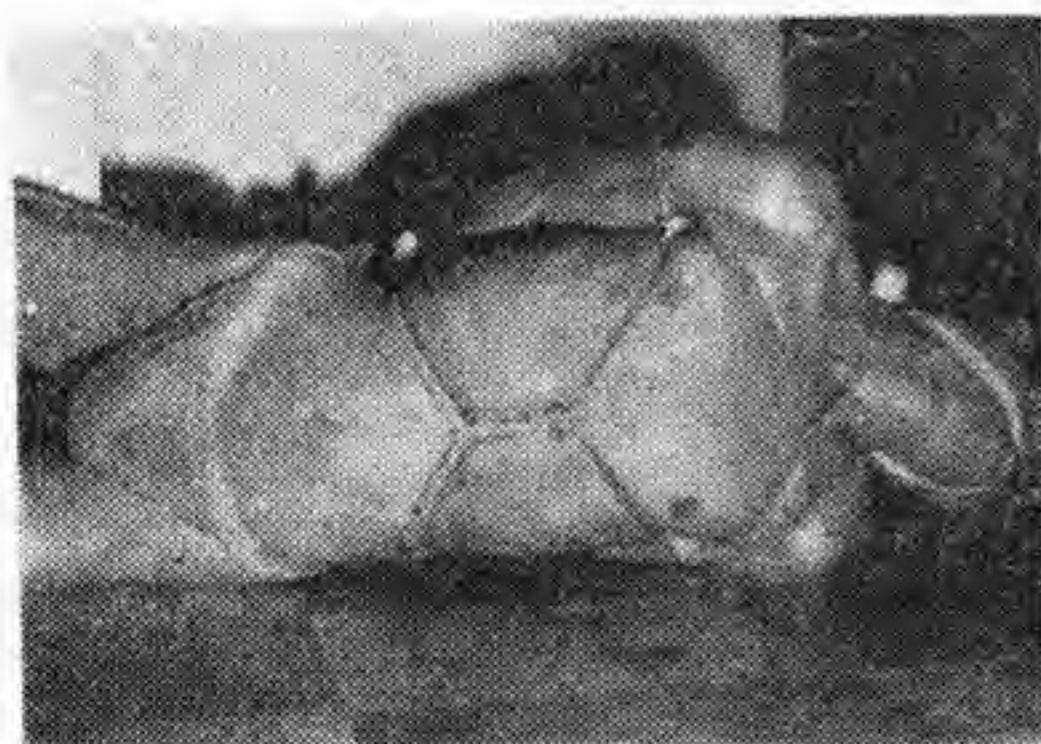
竹内君子（東京）

始めてお便りさせて頂きます。数年前より奇クを拝見し、私の奴隷の責めの参考にしております。この所グラビヤがなくなり見る楽しさが減りましたが、ファンの記事、写真、読者通信等で皆様方の一端を伺い、又想像もし、私のプレイの参考に供しております。ふとした事から二人の奴隷を交互に責める立場となり、共通の目的？ 私のSと彼等のMが一点となり、トラブルもなく今迄溜った

肩から乳房へかけて、赤いすじがうかんできた。篤の行為は理窟も何もない。ただ女をひどい目にあわせるためにひどい目にあわせているだけだ。（中略）彼としては、これを生垣のすきまからのぞきこんでいる男に見せつけるつもりでやりはじめたことだった。じぶんの女房がこれほどひどい目にあっているのを見て、あの男はどうするか。（中略）彼は志津子のくびに腰ひもをあてて、両こぶしを箆筒におしつけた。志津子の蒼白い顔が充血し、乳房が彼の胸で熱く

奇クも二十数冊となりました。

奴隷の一人は裸体責めを好み、一人はどんな時でも裸だけは取らないでと、二人二様で私は全裸責の奴隷を愛玩しております。どなたか同性の方で六尺禪の男を責めたい方、御連絡下さい。二、三度文通の上確実なる奴隷を差し上げます。今年の夏、奴隷を連れ長野のひなびた湯治温泉へ行き、山の中で奴隷を高手小手に縛り上げ引き回し責め上げて私のSを発散させてまいりました。野外責めに奴隷は人目を嫌いました。彼の羞恥心と警戒心が私を最高の責め気分を満喫させてくれました。



気を存分にまきちらす原作に忠実な『悦楽』を愉しみにしているのだが。八月二十九日松竹系関西封切の予定です。

『悦楽』の紹介でスペースをすっかりとってしまった、残り少ないが、青木順子さんの事を少し触れておこう。来阪中の公演で、青木、向井の両氏と逢い、夕食を共にした上、『死と沼泥の女』という題のベトナムに取材した演しものを見せていただいた。以前にも一寸触れたが、『後援会の件』お二人

は、やって戴きたいし、といって、現在『家庭の事情』もあって、派手にやられても困るとあって、この問題解決まで待つて欲しいと仰有る。半年先か、一年先か、それまでそっとしておいてあげたい。青木順子の近況を最もよく知っていると自負する私だけに、すべて打明けられては反って何も書けない。従って『後援会の件』は改めてこの欄でとり上げるまで、中止したいと思ひます。青木順子ファンの方々には本当に申し訳ありませんが、御本人の為に何卒御諒承下さい。

カメラ・ハント十月号の、山本阿津子の巻を見て、実にがっかりした。私はグラビヤ廃止の折柄、せめてカメラ・ハントだけでも、皆様の眼を慰さめてあげたいと、フォト十八葉も送ったのに、掲載はたった二葉。これではカメラ・ハントの名前が泣く。箕田氏も些か神経過敏になり過ぎの感あり。十一月カメラ・ハントとして、井沢南海子の巻でフォト十二葉送ったが、さて何葉のるだろうか？出来るだけ沢山掲載して戴く様頼んでおいたのだが――。

女を責める楽しみ

城野道一



一、空想

女を責めるには、まず半裸にするか全裸にしたい。女学生ならセーラー服を着せてスカートを脱がせパンティ一枚にしたい。両手を後手に縛り上げて横縄も三重四重にも締め上げよう。横縄はなしか一本がよいか、二本以上がよいかは、その時の女体の体格によって左右すべきだろう。

縄は荒縄と針金（一・五耗）位が一番よい。縄尻は手で持つか柱などに固定したい。首縄を縄尻とするのもよい。足はたんねんに縛

り上げて動けないようにしよう。

猿ぐつは顔半分をおおうような布よりも荒縄か細い布切れて唇を割ってかますべきである。こうして女を裸にし、縛り上げて猿ぐつわをかまし、引き廻し柱に引き据えた。これからどのようなにして責め上げようか。

鞭もよい。前から後から鞭打ちだ。縄目に棒をこじ入れて締めつけるのもいい。

次に電気掃除機の吹き出し口を猿ぐつわをはずして女の口にくわえさせよう。葉巻に火をつけて吸

い込み口に近づけると、女の口の中へ煙が入って苦しみもだえるだろう。

最後に女の口に重い銀キセルをくわえさせて煙草責のシゴキにかけよう。

二、実行

喫茶店へ日参してやっと二十二年になる女性を承知させた。白い靴とセーターを買うと言うことで。もともと煙草を少しは吸う子だから煙草責については安心だった。貸衣裳屋へ行ってセーラー服を貸してくれと言ったらないと言う。仕方なくその娘さんのを借りて来た。或るお茶屋の一室で女を責めた。

まずパンティ一枚にしてセーラー服の上着だけ着せて綿ロープで後手に縛り上げた。横縄は乳の上下合せて五重にがんじがらめに縛り、両手を縛った残りの縄で首縄もかけた。床の間の柱に縄尻をつなぎ足は柱を後へ抱くように交叉して縛った。インサイドベルトで猿ぐつわをかませた。腰ひもの端を結んで結び目を作り、これで乳、腰、下半身、太ももをベーゴマを廻すように鞭打った。女はムムツ、ムムツ、と猿ぐつわで出ない声をしばらく出すようにうめくだけだった。

た。女の体に汗がにじみ出るようになったので、初めて猿ぐつわをはずした。

電気掃除機の吹き出し口を唇を割って、無理に押し込みくわえさせる。スイッチを入れる、煙草に火を付けて掃除機の吸い込み口に近づける。猛烈にむせるが煙は出て来ない。仕方なく吸い付けて吸い込み口に吹きかけた。今度は女の鼻の穴から白い煙がこたえだよい始めた。約一分間で気を失ないそうになったから、やっと掃除機の拷問から許してやった。

最後に責めの仕上げの意味で、セーラー服の女をキセルで責めた。柱から縄尻をほどき手に持ち古道具屋で八百円で買って来た長さ三十纏位のかかなり重い太いキセルを歯の間に割り込みガツチリくわえさせた。くわえさせたまま、キザミ煙草をキセルの先に十分詰めて巻煙草の火で付けてやる。女はホホをつぼめてチリチリと吸い付ける。火がついて歯の間から白い煙が立ちのぼり出した。左手で縄尻を取り両足を短い縄でやっと歩ける位に縛り部屋の中を引き廻す。右手で棒を後手に縛った手首からと横縄の間にこじ入れて、キセルが水平より下るとぐいっと締



『僕のイメージ画集』

室井亜砂路

印刷された自分の絵を見るたび
一ト冷汗を流しています。そのく

せ性懲りもなく描いたら又投稿し
てしまうのです。これから多分
下手な絵を描き続けては編集部や
読者諸兄姉の方々を悩ませる事と
思います。夜乃探郎氏、橘行司子

め上げる。女は悲鳴を上げて重い
キセルを水平にくわえ直す。次に
私は吸った煙草の煙は全部、二つ
の鼻孔より出すように命じた。セ
ーラー服の女学生の二つの鼻孔か
ら白い煙が自動車の排気ガスのよ
うにもうもうと出て、キセルをぐ

っとくわえて早く遅く部屋の中を
ぐるぐると引き廻されていた。

三、後味

看護婦の白衣や女学生のセーラ
ー服を着た女を縛り上げると実際
の顔立ちよりも、より可憐さが増
し責味は向上するように思えた。

柱に縛り付けたり足を縛ったりす
るのは動けず逃げられないように
する意味で同様責味も向上する。
鞭と電気掃除機での責めは、苦し
みもだえる様子が單なるプレイ以
上に真実味のある責めとなる。キ
セル責めについては、セーラー服

の少女が大きい太いキセルをくわ
えて無理に煙草を吸わされている
姿が責味をそそり、特に鼻孔から
白煙をふき上げながら引き立てら
れて行く女学生の姿は一段とショ
ッキングなものと言えよう。

氏、黒田寿氏の身にあまる御言葉
すっかり恐縮しております。恐縮
しながら、大いにハリキツていま
す。自分の絵についてのべるのは
大変つらいのでありますが。(こ

こでもう一度ヒヤ汗を流す)
〔A図〕『鳥獣戯画』
〔B図〕『カリアティード』女像
柱のことです。(暗い室)丸ペン
でこれだけ描くのは大変でした。



世相診断室

木戸川 健

奇譚クラブは次第に「奇譚」の名に恥じつつあるようである。

こんなものが、「奇譚」であるべき筈がない、実にまともな話である、ようなものがサロンにも本文にも多くなつた。黒淵一氏の「SM・世界史シリーズ」や西条操氏の「心傷む遍歴」などは、オール読物や小説新潮に載つても、むしろ固すぎるくらいのものである。実に真面目に書かれている。オール読物や小説新潮の小説はもつと不真面目である。両氏に限らず、久我庄一、山口広、保藤久人……の諸氏、みなそうである。実に生一本である。

久我庄一氏などは、ヤカマシイほどご自分の書かれたものに責任を持っておられる。一言一句もおろそかにされない。引用の部分は一々それを明記されている。私は感心してしまった。

私などは「世相診断室」という小文でも、書けばなしで、字を間違えても訂正ということをしな。引用しても、そのまま借りっぱなしである。いい事ではない。

大いに久我氏に学ぶべきである。

K誌の寄稿者投稿者は、例え経験がなくても、SMに異常な関心を持つておられる人々ばかりであると思う。そうして、そういう性向を有しているが故に、所詮常識の世界には受け入れられないのだと、私にいわせれば「錯覚」していらつしやる人々ばかりだと思ふ。書かれたものも、いわゆる「奇譚」であると思つていらつしやる。しかし、私にいわせれば、毎度「私」が出て恐縮だが、奇譚クラブに載つてゐるから「奇譚」なので、普通の雑誌に載れば奇譚でも何でもない。

世の中の方がおかしくなつてゐるからである。全体がおかしくなつていけば、それをおかしいと感じる者の方が、むしろおかしいと思われてしまう程、おかしくなつてゐる。(この部分、三度読み返えして下さい)

アンデルセンの童話に「裸の王様」という有名な話がある。話の内容は勿論御存知と思うので割愛させていただくが、何かをお感じ

になつていただきたい。

気がついた時、まともな雑誌は奇譚クラブだけだった、というような事態が到来しない事を私は祈つてゐる。

× × ×

この欄は、昨年の十一月号から書きはじめたので、これで丸一年である。途中五月号が抜けたのは、グラビアが抜けて、気が抜けたのである。

ところで、この一年間「世相診断室」は、折角の編集長の御好意にもかかわらず、余り読まれなかつた。読者通信にも、ついぞ「木戸川健」への呼びかけはない。他の人々はもてているのに、どうももてない。筆ツラが悪いせいだろうか。——マア、イヤ。

私の書いているものはSMとは何の関係もない。だからどうなんだ、という口である。

しかし、私は四月号でも述べたように、基本的には「その」つもりである。SMに理解のある者ばかりがK誌の読者ではないので、大体一冊の本や雑誌は、最低十人の人に読まれてゐるといわれてゐる。一万部出しても、延十万人の人が読むのである。そこに出版事業の偉大さがある。例え、資本金

百万円の小出版社でも、社会的影響力は資本金百億円の大会社以上である。

それに、活字にされたものは、半永久的である。孫子の代まで残る。時間性保存性という点では、ラジオ、テレビ、映画など、華やかだが、問題ではない。これ等のものは、瞬間に消えるのだ。活字は証拠にされるが、テープ・レコードは参考にされても証拠にはされない所以である。

私は、いわゆる良識の世界に住む人々に対してK誌の冤罪を訴えたと共に、時々世相をも皮肉つてゐる。K誌が風俗文献誌である以上、意義はあると思つてゐる。いうまでもなく、十年二十年たつた人々が、その当時の世相に全く無頓着であるべき筈がない、と思うからである。風俗研究家であれば猶の事である。

大体、「世相」のない雑誌は、雑誌ではない。一月号、二月号……と、わざわざ断わるまでもない訳だ。まして、文献誌である以上。一九六五年、十一月号には、やはり一九六五年、十一月号でなければならぬものが、一つぐらひは欲しい、いやなければならぬ

いのである。

本当は、編集後記の後にでも、その月々の主な出来事を表にして掲載されておかれた方がよいのではなからうか、と実は私思ひ、編集長にその事を提案した。

ついで、といつては失礼だが、この際寄稿家投稿者諸賢にも提案する。お書きになられたものに、もっと現代風俗が扱われてもよいのではないか。人間を書く事は大変むずかしい。芳野眉美氏がいはれるように簡単なものではない。

しかし、風俗を書く事はさして難事ではない。人間を書く事に吐血の苦心をなさるより、風俗を書かれて、しかも人間をばかす手だつて、小説作法にはあるのである。いや、絵にもあるな。

K誌は風俗誌である。が、故に、時代の背景、風俗がなければならぬ。私が八世相診断室Vを書く所以である。編集子が、サロンの冒頭でもの申す所以である。

五十年後に、この雑誌を読まれ

る方に――

SMは所詮「視覚」に訴えるものです。故谷崎潤一郎先生の「春琴抄」という小説をお読みになった事と存じますが、江戸末期ごろの大阪の道修町の薬種商の美しい娘琴、師匠名春琴が、人の恨みをうけ、顔に熱湯をあびせられ、やけどのあとが残ります。彼女の下男として、又琴の弟子として絶えず付きそつていた佐助は、最愛の女性の美しい面影を永遠に心に留めようとして、自分の目を針でつ

足ぐさり、手錠、それに胴をくさりで束縛

され鼻輪をつけられた全裸のドレイ青年が朝の日課の洗濯を強制されているところ。



△連作Mフォト▽

美 柳 輪 生

洗濯をさせられるドレイ青年

ぶし、生涯彼女への奉仕をつづける、という見事なシチュエーションです。しかし、私は十年前に、この小説を読んで大変感動したほどには、今再読してみても、非常に感動はしませんでした。

もし私が佐助なら、醜くなった春琴のもとを離れるでしょう。それが、現在の正直な気持ちなのです。困ったものだ、と私は苦笑しました。感動しなければならぬのに、感動出来ない、もとより、私は佐助のようにMではないという事もありましょうが、どうも、それだけではない。

先日、ハマの南京町で、Mだという盲目の中国娘を買いました。現在はまだ金で女が買える時代なのです。完全に社会保証されたあなた方の時代では、最早やそういう事はありますまい。とも角、その折、私は件の疑問を感じた事でした。「光の無い世界」に、果して、SMエモーションはありうるでしょうか？と。佐助をめくらにしたのは、谷崎先生の失敗ではないのか？等々、盲目の中国娘を責めながら、盛んに考えた事でした。時代が変われば、ものの考え方も変わってきます。私は、あなたの方のお声が聞きたい。



—女性への期待—

保藤久人

十月号の読者通信で、最近にな
いショッキングな一文を拝見させ
て戴いた。

△東京Ⅱ山中冬子Ⅱさんがそれ
—書かれていたことが「事実」
なのかどうか、私には判らない。
併し、読む程に僅かな文章なのに
「羞恥小説Ⅱ花と蛇Ⅱ」を思わせる
場面が展開され、幾分変な気持ちに
なってくる。その変な気持は、創
られたものであって欲しいという
心と、ああMの愛が実在するとい
う驚嘆との二つ。文章は丹念で良
く纏まり、その要所を完全に掴ん
で描写してある。若し、もう少し
詳しく続稿でもあれば立派な「小
説Ⅱ」になる。——事実は小説より
奇なり——という諺もあるので必
ず「実在」を疑うのではないが文
が上手なので少し気になった——
このことから女性方の投稿につ

いて一筆したい。△奇クⅡには古
くからの女性健筆家も多く、私は
何時も感心させられている。確か
に感覚が鋭く文章そのものも緻細
で、男の書く文章にない緻密な入
弱Ⅱ裏Ⅱ秘Ⅱ的なのを感じさせ
る。此の頃、私などまで投稿する
様になり、自然に女性を「書く」
ことに専念しているが、時々判ら
ぬことに遭遇することがある。それ
は私が「男」であり、男の目で見
た「女」だから、その底まで判ら
ないのが当然。中には滑稽だと思
われる様なことを平気で書いてい
る場合もある筈なのだ。

其処で、男の書いているものに
対して、女の立場で感じることな
ど、積極的に書いて戴けるなら更
に「誌」的な充実が期待出来ると思
うし、別な意味で「対男性論」
もどしどし発表して貰える则有難
いのだが——

元来、慣習的に女性方は家庭で
は多忙で男の様に夕食後チョット

ペンを……という訳にも行かない
と思うが、SM的なレターを書く
つもりで、寸暇を見出し意見発表
をして貰えるなら、私など益々嬉
しくなってくるのだが。どうぞ宜
敷くと、右一文を女性方へ——

雑感

山本一章

見る雑誌から読む雑誌への変移
は、現況では残念ながら止むを得
ないと思います。しかし見方を変
えれば充実した読む雑誌は反って
内容を高揚し文献的価値を濃密に
するともいえましよう。今後のK
誌に期待するのは、まさにそれだ
と思います。そして公刊誌として
一般読者を対象とするものである
以上、K誌のバックボーンはS小
説であり、S的事実ないし研究の
記述であるべきです。特定の読者
や寄稿者だけのオナニーの場にし
ることは公刊誌としては自殺だと
思います。論争や評論もその意味
からはバックボーンを侵してはな
らないと思います。(極論すればそ
れらはすべて「読者通信」欄で充
分だし、簡単にすべきものです。)

K誌の現状は残念ながら淋しい
限りで、執筆者、寄稿家、編集者

の奮起を望んでやみません。K誌
のより発展のため、本格的S小説
の出現を望んで敢て苦言を呈する
次第です。(四〇、八、三〇)

挿絵について

室井亜砂路

三月号のグラビヤ全廃以後、本
文も大変充実してきたように思っ
ます。やがて挿絵のあり方も考え
なおされねばならない時がくるで
しょう。単に本文の内容を絵で表
現したにすぎない様な挿絵では山
口広氏のご意見のように、消え去
るより仕方ないでしょう。今後の
イラストというのは本文の説明で
はなく、絵画でなくては表現出来
得ないものを表現しようとした物
(ヤヤコシイネ)でなくてはなら
ないと思うのです。

第二のピアズレーやラピスが現
われて本誌そのものが芸術品とし
て鑑賞出来る日がくる事を期待し
ます。昔の表紙絵や栗原伸画伯の
挿絵はとても美しく気品のあるも
のでした。九月号の小妻容子さん
の責画はデフォルメされた女性の
姿態に不思議な魅力がある傑作だ
と思います。この人の絵はこれか
らも掲載してほしいものです。

本誌の信条

一、本誌は特殊な風俗文獻を研究する成人を対象にして編集しておりますので、十八才未満の方には絶対販売いたしません。

一、本誌は平和で穏健な社会生活を営む真面目な成人を対象としておりますが、青少年の保護育成に関する条例には抵触しないよう十分注意して編集いたします。

一、新聞紙やその他に本誌の広告は一切いたしません。従って発行部数は最低限定にとどめ、部数の増大を企むための努力はいたしません。

一、徒らに煽情的な写真や刺戟的な絵画によって読者を獲得しようはしません。そのためグラビア写真と口絵は廃止いたします。

一、本文中の挿絵も極力数を減らし、読む雑誌としての体裁を漸次徹底してゆきます。



奇 譚 ク ラ ブ

昭和40年11月号

(1965年・11月号 <第19巻第11号・通刊208号>)



「人間・梅原北明伝」や「創作・伊藤晴雨画伯」ETCと、この所、書く方も正眼にペンをかまえてオーソドックスな手法で執筆、発表してきたので肩がこった。たまにはザックバランスなアブ的世界のあれこれを、とんだ脱線放題にやらかしてみるのが一興と、斯くは『アブ談義』と相成った次第だ。

ペンの走るままに書いてみよう——。

殺人小説マニヤの黒田寿氏に刺激されて、何か美女の首をスパッと斬るような芸術的な小説でも書いてみようかと、江戸川乱歩の旧作や、いま出版界の売れっ子である山田風太郎の忍法小説などを読んで構想をねってはいざ原稿用紙にむかうと、こんなにうまく行くものかと、書く本人がゲラゲラ笑ってしま

う始末でいけません。それでも題だけはもっともらしく書いてみた。

「久我流・立川文庫『忍法女忠臣蔵』」

——赤穂浪士外伝というところで、大石内蔵助に若き日頃のカクシ児が十人（それも女ばかり）程あり、吉良上野介にも同様のカクシ児が十人（こちらは男ばかり）程あり、それがある事情の下に、どちらも忍法の修業をして、それぞれ父のために陰の世界で活躍をする。ラストは大石党の美女揃えの忍者すべて首を斬られ、吉良党の美男子揃いの忍者も、一人のみ残して惨死という、だれかの文句じやないが、血わき肉おどるような物語に仕なかったわけだ。まさに立川文庫式ほら吹きストーリーだ。勿論、私は旧式な人間だから、赤穂浪士の忠義な精神に加勢し？、その成功を祈りつつ死んでゆく女忍者の死に方とびきり美的に表現しようと思った。スイカの如くゴロゴロとなど生首の行方を書くつもりはない。真紅のダイヤのようにキラキラ輝いてともしたであろうか……。

女忍者には奇ク、緊縛モデル諸君に御登場願おうかとも考えた。

大塚啓子は、大石啓子、長野良子は、大石良子ETCというように——、一シーンだけ紹

介。

△女忍者・大石良子は、キーツノと声を出す。みよ、その二つのオッパイは、みるみるまに、えりもとより顔をのぞかせ、やがて空間にぐんぐん伸びて行く。

吉良党、忍者・伊須井無は、そのやわらかきオッパイにはさまれチツソク、もがきつつ死んでゆく。

「忍法・乳房変化ノ」

女忍者は快心の意味を口元にただよわす。その時、どこからともなく一筋の縄が飛んできて、女忍者の首がスポツノと斬られ、その血は桜の花片のようにハラハラと地面にこぼれる（おお、あまりにも耽美的なるデタラメ表現よ）。

「忍法・かまいたちノ」

しあがれ声をする。

もう一人の仲間がいたのだ。縄には特殊な細工、つまり刃物が付けてあった。▽



『私流解釈・サロメ伝』。これは、九月号の△ガン作・マニヤのノート▽芳野眉美氏の「D高岡久人氏への返書」の一節「昼でも夜でも気がむいたときに、奴隷の舌で奉仕させる女帝のことが書いてありました」及び

「……女たちが、集団で一人の奴隷を、集中的に便器にしたら」の文に刺激されて四、五枚書きはじめ、頭にきて止めにした表題である。私は、人間トイレを数十人ほど設けた美少女サロメのまことに華麗な？神秘的な？ドラマを書くかと思ったのである。

△美少女サロメは、生来一つの病氣をもっていた、それはお小用が近いことだ。それで、いつでも間に合う特別教育をどこされた専用のトイレを有していた。

小さいうちはよいが、年頃になるとトイレの御注文がやかましく舞踊の御稽古の時は、それにふさわしいエキゾティックな容貌をもった奴隷とか、散策の時は、野性的な男とかETC、——多くの人間トイレが必要だった▽

書いてる内に、空想と現実のわが身とがコングラがって「百考は一味に如かず」（こんな諺があるかな、久我式新造語だよ）ひとつバーにでも行って美少女でもくどいて実地研究でもしようか——というような妖しき倒錯した気分になり……そんなわけで小説の方は未完である。（とても出来そうもない。）



あるダンスパーティーに招待された時だ。

（それでも私はダンスには仕事の関係でだいぶ月謝をはらった方なのでチョイとした名人？である。）ところが、その晩はどうも調子がわるくステップを間違えては相手のつま先ばかりふんでいた。

「痛いっ！」

「すみません」

——まあ、そんな按配だ。そこで発見したのだが、下手に踊るのも面白いということである。

赤いドレスなどを召した、うら若きお嬢さんが黄色いひめいを上げるのも、S的なスリルが感じられるのだ。

それで、まるで渡り鳥のようにホールのそこそこを犠牲者？を見付けようと、（パートナ―を物色しては）SM踊り？を展開した。

秘訣は、さも習いたてのように下手なステップをふむことで、これならいくら本気になっても彼女のつま先をいやというほどふんでも大丈夫、かえって「教えてあげるわ」と同情？される。

また、つま先をふむばかりでなく、タンゴなどを踊るとき、背の低いやせ形の女性を、乱ぼうに振り廻すのも楽しい。この時はぐいと彼女の身体を持上げるようにするとよい。

クイック、クイックと進むとき相手を倒し、その上にドサリノ、こうなるとなおさらスリルだ。

いつか

『華やかなるサディズム・美女ダンス責め』という研究？執筆をしてみたいと思っている――。



街で見た風景。若い男性ばかりでなく近頃は中年男も、赤いポロシャツに鼠のズボンをはいて、トクイ然として歩いているのを見付ける。そして女性とは、見ると黒いブラウスが流行のようだ。つまり、性の倒錯性を応用した色彩が流行のポイント。これは社会時評的どんな意味があるのか……。



――これは遊そびによく来る夜の通人でもあるMの話。

男娼って、グループを作って集団で全国を股にかけ移動、商売？をしてあるくそうだ。つい七月の末頃までは、駅裏X橋のたもとで夜になると倒錯コンクールを開催？していたようだが、八月初旬現在は、その姿は消えた。他の土地に行ったようだ。いずれ東京あたりから、また別なグループが来るだろう……

：「現代のジプシー」とでも言おうか。こうなると男娼の存在もロマンチックだね。



「サロン楽我記」九月号で、辻村隆氏が芳野眉美氏の手紙を御ひろうしている。その中に「陽気なニヒリスト」という言葉があった。「明るくて、健康で、その裏のどうしようもない暗くて、淋しくてヘンな気持」――これが「陽気なニヒリスト」の有する世界であるらしい。

これをよんで、私はすぐ映画『甘い生活』を思い出した。上流階級の、底抜けに明るくて、そしてなんとも表現しようもないアンニイー（倦怠感）。

ニヒリストという言葉も、アンニイーがともなうと本物に近いようだ。

どだい、ニヒリストとは八虚無感Vのことであり、よんで字の如く、ナンニモ無い意味で、説明のしようもない代物だ。

昭和の初期頃か、ダダイズム運動とかが流行した。奇人、辻潤などが盛んに「ですべら」とか「らぶそでいや・ほへみあな」とか「わりあちおん」とかダダったものだ。

また、絵などの世界も「白地に赤インキをふりかけて「聖母マリアの肖像」だと称した

りETC……」これもニヒリストの一種の表現だろうか――。

ヘンな気持の作者が書いた小説の行間を読んでもくれと言っても、ヘンな気持になるだけで、無理だろうさ。

「孤独なファンタジー」で出発したであろう芳野氏が、（孤独だ、なんだと言ってるうちは単なるセンチメンタリスト）「贗作・芳野眉美氏の優雅な生活」では、ようやく生活も板に付き、氏一流のユーモアの連発ということになったようだが、まだまだ優雅とよぶには神酒の、のみっぷりが、ガサツなように考えられる。（小人が、大人になろうと背のびしているような感じ……）これが現実生活に立脚したETCと言われれば、それまでだが――。

別な例を上げてみよう。かえってなっとくできようか。貴族とは、得てして立シヨンがお上手だったらしい。内外を問わないで。またしても大宰治でおそれいるが、たしか「斜陽」の中で、貴婦人の、そんな場面があったと思う八優雅Vとは「さりげなく」とでも形容しておこうか。小道具のら列も、あつかい方によっては、ともすると感情のマスターベーションになりがちだ。

妊娠腹観賞会

高野原美

(一)

佐藤京子は、妊娠九カ月の丸く大きいお腹をもてあますようにして、肩で息をつきながら楽屋の等身大の鏡台の前に座っていた。ふつくらとした赤い座蒲団が豊かな脂肪をつけた臀部をのせて、その堂々たる体軀の下で圧平されて痛々しいばかりである。肩からダラリと締めなく垂れ下ったナイト・ガウンが、腹部のところで異様な膨らみを見せて盛り上っている。

京子は、鏡に全身を写して、やや腫れぼったいその美貌を化粧するのに、余念がなかった。鏡に写ったその手は、緩慢な動きをみせて顔を美しくいどって行くが、時々、大き

く肩で息をつき、その手を休めながら化粧を続けて行く。

大きなお腹が、どっしりとした重さを彼女に感じさせるのである。構座りにして美しい曲線線を見せている脚が、その重みに耐え苦しそうにあえいでいるようである。

化粧がすむと、長い素直な黒髪が丸い肩をおおうばかりに垂れ下っているのを、櫛で丁寧にすいた。黒々と光沢のある長い髪は、輝きを増し彼女を美しく彩っていた。

十畳程の楽屋の鏡に向って佐藤京子の他に五人の女性が化粧していた。その各々の若々しい身体は、すべて腹部が妖しく丸く膨れていた。六名の妊婦が夫々薄いナイロンのナイ

ト・ガウンを着て大きなお腹を突出している様は、この部屋の中に異様な雰囲気をかもし出していた。彼女らは、全て今日の秘密ショーである「妊娠腹観賞会」に出演する女性たちであったのである。

長い時間かかって念入りの化粧をすませた京子は、鏡台に両手をかけて重い腰を浮かせて立ち上ると、鏡に全身を映した。妊娠のために元々グラマーと云われた京子のからだは、より豊かに皮下脂肪がのり丸々と肥え太っていた。この身体の中央部で大きく丸い弧を描いて重々しく突出したお腹は、実に立派な膨らみを見せているのであった。

京子は、その鏡に写る偉大な自分の腹部

を、じっと見凝めていたが、やがてお腹をいとも愛らしげに右手で愛撫するのだった。「妊娠腹観賞会、このお腹を好色な男性の前に裸になって曝すのかわい……」

とつぶやく様に静かに独り言を云った。

そうして、再びその大きく膨れたお腹に眼をやった。そのお腹が、ナイト・ガウンの下で誇らし気に息づいているのが、ガウンを透して見られた。

顔の化粧を終えた妊婦たちは、思い思いにポーズを取ってガウンを脱ぎ捨てて、今日のシヨ一の最も主役であり注目を集める腹部の粧いに取りかかっていた。パンティを腰の下まで下してむき出しにされた大きな妊娠腹が二つ、三つ見られて、ますます部屋の中が妖しい空気に包まれた。

京子も、ナイト・ガウンを脱ぐと思いい切りパンティを腰まで押し下げた。丸い小山の様な乳白色のお腹が、その全容をあらわした。今や京子の美しい腹部は、何の覆い隠すべきものもな

く、堂々たる姿を鏡に映し出している。京子は、一瞬眼を閉じ、怖しいものでも見るように恐る恐る眼を開くと、自分のお腹を見凝めた。自分でも恐ろしいほど美事に隆起した球状のお腹である。

「私、やっぱり羞しいわ、こんなお腹を、多くの男性の前にさらけ出すなんて……私、果してそんな勇気が出るだろうか。でも、今更嫌

とは云えないし……」

一度に襲って来た羞恥心のため顔を朱に染めて身を震わしていた。

眼を固くつぶって羞恥から逃避しようとしたが、眼を閉じると、かえって網膜に灼け付くように、男性の射る様な眼を浴びてお腹をさらして立ちすくんでいる自分の姿が映って来るのだった。

「元氣を出すのよ、仲間が居るのだから、私だけではないのよ……」

と勇気づけると、あきらめに似た気持ちで湧き起り、化粧品を手にとると右手で愛撫するように、大きい腹部に美身クリームを塗りつけ、お白粉をはたき、お腹を美しく化粧し初めた。

佐藤京子は、大阪北のヌード・シヨウ専門館の専属ヌード・ダンサーをしていた。その均整のとれた肢態と豊かなヴォリュームある肉体、乳白色の美しい滑めらかな肌と美貌でナンバー・ワンの名声をほしいままにし



ていた。

彼女は、大阪の某女子短期大学の文学部に籍を置いていた時、同学年の中でも特にその大柄な美しい引締った曲線のグラマーな肢態は目立つ方であった。学校の帰途などにも遊び好きな男子学生から、よくデイトやドライブを持ちかけられたものである。

時には同級生の友達らと一緒に男性を混えて遊びに行くことはあったが、それらの男性が女子大生としての知性ある女性との交際を望むと云うのではなく、ほとんど全てのものが彼女の貌と白く美しい豊満なグラマーが日常であることを嫌と云うほど知らされ、女性仲間には羨望され、自分の肉体美ばかりが問題視され人間性というものが存在しないのに嫌気がさしていた。

「男達って何と嫌な動物なんだろう」

「女性の人格や精神面を尊重するような交わりが出来ないのか知ら」

彼女は自分のグラマーなからだ、男性の魅惑を感じさせるからだに誇りを感じるばかりか、むしろ肉体美であることを邪魔なこと、つまらぬことと考えていたのである。彼女は、普通の特別扱いされない女子学生としての青春を楽しみたいと思っていた。

ある日、その京子にとって大変な事件が巻き起った。

クラス・メイトのある女学生が、彼女に黙って神戸で行なわれた水着の女王コンクールに参加する申込みをしてしまったのである。このコンクールは第一次予選を写真で行なうことになっていたもので、友人は彼女の写真を黙って申込と同時に送ってしまった。その結果、第一次予選は美事に合格し、その合格通知が彼女のもとにとどけられて来た。

突然の何の前ぶれも無しの合格通知であり、彼女は呆然としてしまった。しかし、両親はかねてから娘の発育のよいからだを自慢にしていたことでもあり、その合格通知を見て大変喜んで、第二次選考を受けることをすすめて、水着も特別にあつらえて大いに乗り気になり、そのまま両親に進められて審査会場に臨んだ。

京子のグラマーな引締った曲線美は、他を圧してゆうゆう第一位、水着の女王の栄冠をかち得たのであった。会場の中には、両親をはじめ、多くのクラス・メイトが今日の栄冠を期待して集まっていた。彼女は、会場に集った観衆に祝福を受けつつ、女王としての山のような賞品の数々を受けとった。

女王となった彼女には、翌日からフォト・モデルとしてカメラの前に立つ生活が待っていて、広告宣伝写真に学業もおろそかになる程、多忙なスケジュールが組まれて脚光を浴び、その魅惑的なグラマーはジャーナリズムの賞讃をうけて喧伝された。

彼女が女子短大を卒業すると、写真家たちは水着だけのポーズでは承知せず、機会あるごとにヌードを希望し、裸になる決心を迫った。

その頃になって彼女は考え方も次第に変化をはじめ、自分のからだに自信をもち、男性を自分のからだで征服することに一種の快感すらも感じ出していたのである。美しい肉体の前に頭を下げて群がる芸術家たち、また芸術家気どりの男達を、ただ美しいからだ一つで云うことを聞かせることが出来ると云うこと、この女としての武器を徹底的に利用してやろうと思った。そう思った時、彼女は裸になる決心がついた。

彼女は、最も好意をもっていた若い新進の商業フォト・デザイナーのアトリエに行った時、彼に向かって

「私の裸を撮ってみたいと思わない」と話しかけた。彼は、驚いて彼女の顔を穴

をあくほど見凝めていたが「私をからかわないで下さいよ。勿論、のどから手がでる程の気持ですが」と云った。

「からかっているのではなくってよ。私、真面目に、裸になってあげようと思っているのよ」

「えッ、本当ですか、あなたのヌードを発表できれば、私は……」

感謝と驚きで、もう声にもならなかった。

こうして彼女は、裸になった。女が初めて男の前で裸になるのは清水の舞台からとび下りるほどの気持にならねば出来ないと云うことを痛切に感じて……。その日の彼女は、羞恥のために何も判らず、ただ彼の云うままのポーズを無意識にしているに過ぎなかった。

それからの彼女はヌード・モデルとして大いに名前を売っていたが、ヌード・ダンサーが不足しているヌード界で、それを指をくわえては見えていなかった。女子大卒で、ミス水着の女王の経歴を持つ彼女を、プリマ・ドンナとして迎え入れて観客を集めることをはかった。勿論、彼女は二つ返事でヌード・ショー出演を承諾したのである。

こうして彼女は、その美しいグラマーの肢体を、舞台の上で七彩の光に照し出されて観

客にみせ、ヌード・フォトの形で男性の眼に、観賞する機会を与えて来たのであった。

この肉体美と云う面では、彼女の右に出るものは先ずないであろう完璧の美人としてもてはやされた。

その美しいからだとともに、天性の素質とでも云おうか、ミュージックに合わせて踊るその姿態は、実に軽く天女の空に舞うようなもので、観客はただ彼女のショーを観賞したためにくるほどであった。

その彼女が、今日のこのような妊娠腹をさらけだして観衆の眼の前にさらさねばならなくなつたのは、よくよくの事情があつたからである。

彼女は、貧しいが将来を嘱望される若い写真家と恋愛におち入り、自らのヌードで稼いだ金をせっせと貢いで写真の勉強をさせていたのである。しかし、超現実的ヌード・フォトは、未だ世に入れられず、若い芸術家は京子の温かい物心両面の援助を得て新しい芸術と真剣に取り組んでいたのであった。やがて恋が実を結び結婚生活に入ったが、その生活は変らなかつた。

そのうち京子は妊娠して腹が膨れて来たので家庭に籠り収入の道は途絶えてしまった。

その時、自分の芸術を大衆に訴えて理解してもらうために銀座の真中で個展を開きたいと彼は云いだした。

お金は無いが、彼の芸術のために、どうしても個展をやらしてやりたいと彼女は金策に大きいお腹をかかえて走りまわった。

どこでも余り良い話が無い、その時、ヌード・ダンサーとしてお世話になっていたこのバーのマダムが妊婦ショーに出演してくれるなら入り用なお金は全額都合してあげようと話にのってくれた。

彼女は、いくら今迄ヌードを多くの男性の前で見せて来たとは云え、妊娠して大きなお腹をした肌を好色な男の前に曝すことに抵抗を感じたのであるが、夫の芸術のためには思い承諾したのであった。

自分の愛する男性のために、これほどまで自己を犠牲にする女心のいじらしさよ。

彼女は、いまだに処女の頃の美しいからだのあとをとどめて、からだの中央部でまんましく膨れ上っているお腹を化粧しつづけた。

膨れ上った妊娠腹の妊娠線や浮き上った静脈で異様に見えるお腹を少しでも美しく見せようと、肩で息をしながら化粧した。

他の五人の妊婦たちは、どういう動機で今

日のショーに出演することになったのかは知らないが、やはり飾るということは女のたしなみでもあり、また本能でもある。六人の妊婦が、それぞれ思い思いのポーズで豊かに盛り上った腹部を露出して等身大の鏡台に映して化粧する姿は、またと見られぬ見物であった。

こうして、妊婦たちは妊娠腹観賞会の主役としての準備におこたりなかった。

(二)

今日のこの秘密ショー、全裸の妊娠腹観賞会は、クラブ「M」の奥の間で秘密に行なわれた。この会に出席する人達は、このクラブの特別な顧客たちであった。経済界の不況は夜の歓楽街にも及んで、日一日と淋れて行くばかりでお客を何んとか惹き付けるために種々の手が打たれていた。しかし、尋常な手段ではお客を惹き付けることもできず、遊びに慣れた社長、重役の金持連中は少々濃厚なお色気戦法でも魅力を感じなくなっている。

そこで、新手として考え出されたのがブルームフィルム等でも盛んに取り上げられているマゾ・サドの手段であった。秘密に美しい専属のグラマーを使って、ある時は一対一、また、ある時は複数で緊縛や浣腸、鞭打ち、女

相撲、女性切腹等々とマゾ、サディズムのプレイをさせてお客を集めた。この新趣向は非常にあたり、クラブの稼ぎ高はウナギ上り、マダムは全く笑いがとまらぬ有様であった。お客が増えるに従って曜日によって種類を分け、日程表を造り、客の好奇心を満足させるまでになっていた。

この奥の密室で催される秘密ショーによって、むんむんする妖しい官能の渦に巻きこまれた男性達は、次々と新しい催しを考えてはマダムに要求をつきつけた。そのため、専属の女たちでは足らず、常に新しい新鮮な女を探し求めねばならなかった。

この集って来る客達の要望は、ついに妊娠の臨月腹を観賞する機会を与えて欲しいと云うところまで行きついた。この愛好家たちの大半は、この奥の間で若いピチピチとした張り切った肌のグラマー嬢を相手に、強制空気浣腸や強制温水浣注などを行ない、人工的に美女のお腹を大きく膨らまして、その堅く張りきった蛙腹を観賞し、押えて見たり鼓のよう叩いたりして楽しんで来た。しかし、人工的に腹部膨満させると云っても臨月腹のあの偉大な丸い膨らみには到底かなうものではない。若く美しい女の大きく膨れた妖しい美

に陶然とする等は望み得ないことだった。そのため、マダムの努力のかいあって六名の妊婦が一室に集められ、その各々妊娠月は異なるが大きく膨れたいろいろの形の妊娠腹を観賞することになったのである。

洋室の部屋で、二十名程の客が入っていた。その客に対して薄い透けるネグリジェをまとったホステスが二人に一人の割で寄り添い酒席のサービスに当たっている。勿論、このホステス達は秘密ショーの主役を演じ客とはなじみの女達である。客たちは、この女達の柔肌に触れ、お色気サービスを満喫しながら妊娠ショーを観賞しようというのである。

客達は、もう酒もほどほどに入り、妊婦の登場を今か今かと待っていた。いきおい、話題は今日の妊婦について色々と花が咲いていた。

やがて、奥の入口にピンクの明るい照明が向けられたので、客達は一せいに眼をむけた。マダムの姿が照明の中に浮き上がった。うやうやしく笑顔で頭を下げると

「今日は、ようこそ、おこし下さいました。さて、これから皆様お待ちかねの妊婦観賞会を行なわせていただきます。どうぞ最後まで、ゆっくりと観賞になっていただきたいと

存じます」

開会の言葉を述べると、満面に快心の笑みを浮べて一瞬ざわめきが巻き起こった。秘密ショーであるから拍手は絶対禁止である。

心に浸みこむような甘い柔かいメロディが奏でられると、温い照明の光に浮き上って、入口から妊婦たちが、その大きく膨満したお腹を突きだして背を反らすような姿勢で舞台正面に現われた。

思い思いのネグリジェは、脂肪ののった艶々とした豊かな裸身をみせて、ブラジャーと薄いパンティだけの妊婦のからだの線を鮮かにみせていた。妊婦たちは、ゆっくりとムード・ミュージックにあわせて歩を運び、室内を一順すると、今度は観客のテーブルの間をぬって、男性の妖しく輝く好奇の眼を満身に受けながら、そのネグリジェを透してみえる豊かな隆起を示している妊娠腹を展示し、危なっかしい歩を運んだ。

観客たちは、あらかじめ配られていた豪華なカタログを見ながら、眼の前の晴れの妊婦ショーを真剣に観賞していた。カタログには、今日の出演者たちの妊娠前のグラマーマーのヌード・フォトが名前・年令・妊娠月数、それらと身体各部のサイズの表とともに

印刷されていた。観客たちは、妊娠前のグラマーマーのヌードを前にして、それと比較しながら観賞できるようになっていたのであった。

今日の趣向は徹底したもので、美しいグラマーマーが妊娠によって変化する様子を、あらゆる角度から見せようとするものであって、帰りには出演者の美事な妊娠腹ヌード・フォトをお土産としてもらうだけでなく、写真撮影も自由であり、各部分のサイズの記録の横には空欄があり、観客の眼の前で測られる妊婦のサイズを書き込むようにしてあった。

こうして、全員が観客の前にネグリジェ・スタイルの姿を見せ終ると、次は、個々の妊婦が充分に、その裸身を観客の満足が行くまでみせることになる。

まず最初は、芳紀十九才、妊娠八カ月、初産の女性が大い丸いお腹を前に突き出すようにして、背を後に反らせ気味にして白いハイヒールをはき、紫色のブラジャーに、同じく紫色のナイロン・パンティの上に紅色の薄い半透明のネグリジェをつけて現われた。

明るく照らされて、やや上気したような顔をして、ややうつ向き正面中央に立った。ムード・ミュージックが奏でられると、ゆっくり緩慢な動作で手を上げ、厚く広いヴォリュームのある腰を廻し、踊りはじめた。薄いナイロンを透して、踊る妊婦のからだの曲線の変化が見られる。こうして、三曲ほど踊ると、大きく肩で激しい呼吸をしながら、舞台中央で後向きになって、思わせぶりに腰をゆすりながらネグリジェを下に落した。そのまま手を後に廻すとブラジャーもはずす。いよいよ大きく豊かな膨らみを見せている下腹部に、スガリ付くようにピッタリとひっついて

いるナイロンのパンティに女性の手がかかった。

観客たちは思わずゴクンと生つばを飲み込み、手に力が入り身体をのり出す。パンティは腰の曲線に沿って太腿から脚先の方へ、ためらいながら滑り下って行く。遂に豊かな脂肪の張り切った若々しい肌の白い裸身は、観客の前にその姿をあまねく見せて後向きに立っている。

再び、静かな甘い快いムード・ミュージックにあわせて、身をくねらせ腰を振りながら、待望の妊婦の裸身は観客の方に魅惑的な、その前面を現わした。丸く大きく豊かな膨らみを見せた半球の乳房は、厚く脂肪ののった胸に、しっかりと腰を据えたように突出し、乳腺が脹り、脂肪が付いて充実に緊張し

たその美事な姿を誇らし気に見せている。白い滑らかな弾力の乳房の表面を青い静脈が網目のように浮き上って走り、その中心部で乳頭がピンクの頭をもたげて突出し、やや褐色味を帯びた乳量がとりまいている。

腹部はと見れば、豊かな乳房のやや下から縦長の卵形に大きく丸い豊満な膨らみを見せており、白い滑らかな肌は皮下脂肪が厚く沈着しているため、より一層の艶々しい美しさを見せて輝くばかりである。

若い初産の裸身は、妊娠のためにより豊かに充実し皮膚は弾力を帯びて張り付め丸味をもつてふっくらとした身体となり、丸い大きい中央部の膨らみを美しく見せていた。

彼女は、ミュージックにあわせ、身をくねらせ緩慢な踊りを見せて、裸身を前から横、後からと、あらゆる方向から観客にみせていた。

その背後の銀色のスクリーンには、彼女の妊娠前のグラマーの裸身が等身大で映しだされており、観客たちは、スクリーンの像と眼前の裸身を見比べつつ観賞していた。

そのうち、彼女は正面舞台をおりて、身をくねらせながら観客席の間を縫って歩き、明るい照明のもとで妖しい美しさをみせた。観

客たちは、余りの特別サービスに喜び、その偉大な丸い腹部を撫で擦り、妊婦の豊かなお腹の感触を味わい、眼の前で心ゆくまで観賞したのであった。

正面に戻ると、マダムは巻尺をもって現われ、各部分のサイズが細かく測られ、それが逐次報告される。観客たちは、余白にペンを手にして熱心に記入するのだった。

こうして、まず一人目の出演者は、早くも出席者に深い感銘を与え、陶醉させ成功裏に一礼すると控え室に消えて行った。

観客席には、ザワメキが流れ放心したような顔、まだその楽しい余韻を味わうように黙想している顔、そうしてホステスの美しいからだを抱き何か興奮して喋っているもの、いろいろであったが、全ての観客は満足の色をみせていた。

その興奮が覚めやらぬ時、再び照明が輝き妊婦が姿を現わした彼女は二十六才、二産目であった。

ピンクの薄いネグリジェに身を包み、最初の妊婦と同じようにミュージックに合わせて踊ったあと、身につけている衣装を脱ぎすて裸身を観客の前にみせた。乳房は胸を圧迫するほどに大きく豊かで柔かい膨らみは、や

や垂れて、静脈の青い網目の中心部の乳量は大く濃く暗褐色のかげを見せていた。乳量の真中に太く長い乳首は、褐色に染まり大きく突出している。

お腹はとみるに、横に広い卵円形に大きく突出し、妊娠は九カ月と云うのに初産の女性のお腹ほどの緊張をみせず、ゆったりした膨らみをみせている。そのお腹の皮膚には、お臍を中心に暗褐色の黒線が下の方へ連なり、豊かな下腹部には赤い妊娠線が紡錘型にみえている。

大柄な体格のグラマーのからだに、やや肥り過ぎと感ぜられるほど豊かに脂肪がのっているため、その窪んだ丸い影を宿していたお臍が平たく飛出している妊娠腹は、実に大きく雄大とでも形容したいほどの姿をして突出している。彼女は重く膨大した乳房と腹部を支えるため、膝関節を伸ばし腰のところを凹ませて、上体のみを後ろに反らせた姿勢で立ち、大きく肩で息をし、波うたせている。

マダムが巻尺とマジック・インキを持って現われた。まず身体の各部が測られて発表されたが、胸の周りは一、〇七メートル、お臍を通る腹囲は九八センチであった。外国人の妊婦の腹囲が約一メートルと云うことである

から立波なものである。

ついで、マダムは客席の方に向って云った。

「どなたでも、ご希望の方は、ここに赤と青のマジック・インキを用意していますので、この妊婦のお腹を画布として自由に落書して下さい。何人でも結構ですから、遠慮なくどうぞ。」

妊婦は、その裸身を一尺ほどの台の上に運び起立した。その時、頭がはげ上り薄い毛が油でカスカに揃えすかれてへばりついている好色そうな男が立ち上って舞台上に上った。

彼はマダムからマジックを受取ると、先ず

手で妊娠腹を撫でて感触を楽しんでから、青いマジックで臍の下の広い下腹部に絵を描きはじめた。やや中腰になって、照明に頭を光らせてニヤニヤと頬に笑みを浮かべながら妊娠腹に絵を描くと云う思いがけない光栄に浴したのを喜び、マジックを走らせていた。少しずつ絵が、その姿を現し初めた。なかなか絵の才能があるようである。

彼が立ち上ってマジックをマダムに返し、妊婦の下腹部を見た時、観客たちはあっと驚いた。着物を広く開けて胸から下腹部まで大

きく露出した若い妊婦が赤い腰巻を着物の裾

からちらつかせて、腹を短刀で真一文に大きく切り裂いている妊婦切腹の図であった。苦痛に耐える美しい女の表情から、苦痛にもたえる妊婦の身悶える肢態、とび散る血汐。実に美事な図が、大きく豊かな九カ月の妊婦腹の下腹部に描きだされているではないか。

まだ、その上にその切腹を右横から冷やかな眼で見下している中年の女の立ち姿が、より一層凄愴美をかもし出していた。

あっち、こっちでカメラのフラッシュの光が点滅し、シャッターの音が聞える。何んと言ふ素晴らしい余興であろう。もう、これ以上妊娠の腹にマジックの跡を、とどめようとするものもなく、美事な絵でいんどられた白い小山の腹部を眺めるのだった。妊婦は、下腹部に描かれたこの素晴らしい絵を充分に自分で見ることができず、しきりに身体を屈して見たがっていた。

マダムは、早速鏡を運ばせて下腹部を写して見せた。彼女は、自分の下腹部に描かれた妊婦切腹の絵を見て、あっと驚いた。その表情が、また観客たちを喜ばせたのである。

次の妊婦の出演の都合もあり退場しかけたが、観客たちが承知しない。それで、マダム

現在在庫『本誌既刊号、特集号、限定版』案内

○臨時増刊号「写真と絵画」文献特集号

定価 五〇〇円 略号〔文献〕

○限定版写真集「豊満と清楚」

女体緊縛グラフ集

頒価 一〇〇〇円 略号「限二」

○限定版写真集「美しき縛しめ」第四集

頒価 一〇〇〇円 略号〔美4〕

○限定版写真集「女性刑罰拷問特集」日本版

頒価 一〇〇〇円 略号〔美5〕

○限定版写真集「緊縛美女艶姿百態」

頒価 一〇〇〇円 略号〔美6〕

は、三日間だけ下腹部の絵を、そのまま洗い落さずに残しておき、毎晩、この席で観賞させることを約束して退場させた。

(三)

何とスバラしいショーであろう。どんな秘密ショーでも、これほど魅力的で、好色な男の心を満足させ、これほど印象づけるものはないであろうと思われる。観客たちは、もう妊婦の大きな裸のお腹と、その膨満腹が演ずる動物的・肉感的なショーに陶醉して我れを忘れていた。

観客たちの横でサービスに努めていたホステス達も、出演している同じ女性の動物的なからだの中心部が、丸く重たく突出した一見グロテスクなからだの裸身の妖した雰囲気のにまれて、男達と同様に羞しさも忘れて見惚れているのだった。彼女たちも、観客の前で秘密ショーの主役を演じて来た女性たちであり、現在もホステスとして、今日は観客のサービスに努めているが、明日は舞台上に立ち他の客の好みの演技を行なう身である。

しかし、同性の、それも最も神聖ではあるが動物的な白く偉大に膨れ上り腹中に胎児を宿した妊娠腹を羞恥をのりこえて、男達の眼の前にみせ、また触れさせる行為の心臓がキ

ューンと引締るようなショーには、たじたじとなり、その魅惑の前には、女の心の内に秘そむマゾ心理も、完全に敗退の色を見せていた。異常な興奮の渦の中で室内の男女に、夫々思い思いの感じ方で反応し、その身も心も打ち震わせ、頭に血がカーッと上るほどであるため、ショーも一時中断のかたちであったが、異常美を求める男心を充分に知り尽しているマダムは、頃合を見て、次の妊婦の登場を告げた。

次は、二人の妊婦が揃って現われる。年の頃は二十三・四才であろうか。二人とも若く美しい顔をしていて秋田の女のように雪白のきめ細かな餅肌が、羞恥のためかポーッと赤らみ、清潔な美しさが惹き付ける。

彼女らは、最初からその妊娠のために脂肪のよくのった裸身とお腹をむき出しにしており、ナイロンの薄いパンティもクルクルと巻いて腰の下までおろしているので一見したところフシドシでもしているように見えた。

彼女らは妊娠八カ月と臨月の妊娠腹を突き出しているために、観客達には、そのお腹の膨れ方の区別が手に取るように見られた。どちらも初産であるために弾力性に富んで美しい隆起をみせていたお腹の皮膚は痛々しいほ

どに引伸され、そのために下腹部を中心に赤い妊娠線がはっきりでている。

八カ月のお腹は上腹部が緊張して、まんましく膨れ上っていて、あの豊かな丸い影をつくって愛きょうのあるお腹の美をつくっているお臍は平坦になっていた。さすがに臨月ともなると、より一層お腹の膨らみは大きさを増し動物的な感じを与え、胎児は骨盤内部に下降してくるために上腹部は弛緩し下腹部の丸みが強くなり、お臍は完全にむくれ上って、やや隆起した無惨な姿をみせている。そのべんべんと膨れた丸いお腹にのりかかるように大きく豊かな張りを見せた乳房が両胸から突出している。

彼らは、その豊満な皮下脂肪のよくのった妊娠腹を客達の前で先分に観賞させた。

十分に観客が妊娠腹に酔った頃にマダムは例のごとく腹囲をはじめ各部を測ってその偉大なお腹の膨らみを記録させると、再び余興がまっていた。マダムは、二本の浣腸器と薬液を用意した。これから、これから、この妊婦の浣腸を見せよう云うのである。次々と今日のお客様のために新趣向を用意するマダムの心憎いまでの配慮に、客席からはどよめきが起った。

彼女たちは、後向きになると僅かに前を覆っていたにすぎないパンティを脱ぎ捨てた。いよいよ妊婦の浣腸が実演されようとしているのである。

臨月腹の女性が苦しうに客席にまともに豊満な臀部を見せて四つ這いになった。八カ月の女性はマダムから浣腸器を受け取るとグリセリンを二〇〇Cとり、あぐらをかくような姿勢で四つ這いの臀部の後に坐った。動物のように四つ這いになった妊婦の臨月腹は、支えのないままに腹壁をぐっと引伸して垂れ下り舞台の床に触れんばかりに膨れている。薬液が注入されると妊婦は重くのしかかるお腹を空に向けに寝た。八カ月妊婦も、同じようにマダムの手で四つ這いにされ浣腸されると、仰向けに並ぶようにして寝て便意とたたかうことになった。

グリセリンは腸壁を強く刺戟して強くまた弱く、間隔を置いて便意がつき上げてくる。襲いくる便意に耐えて腰を振り身もだえする妊婦は、大きな小山の腹をゆすぶり、腹壁の弛張のためお腹の形がぐぐっとゆがむ。

今日の客たちは、浣腸に耐える女性の苦悶の表情、身悶え等は、常に見て来ているので目新しいものではないが、この目の前の巨大

な白い小山をゆすぶって便意に耐える姿は、たまらない官能的なものであった。

「う、うっ……。ト、トイレへ……」

「うーん、も、もうだめ……」

二人の妊婦は激しく身をよじり歯を喰いしばって耐える。お腹は大きく波うち腰が上下左右に激しく揺れる。額には汗がにじみ悲鳴にも似た声が上がる。

「だ、だめ……は、早く……マダム……」

どちらからともなく声が上がる。マダムは、便意苦悶の妊婦を徹底的に見せるため、便器は少々なことでは渡さない覚悟で見守っていた。

全身には汗が流れ白い小山に白く光る汗の筋が見え、水滴がキラキラと輝き、強烈な刺戟が全身を麻痺させんばかりになった。その頃になって、やっと挿入便器の使用が許された。何んとスガスガシイ気持だろう。このまま気が遠くなるほどの爽快感であった。

マダムは、蒸しタオルを用意すると妊婦のマッサージと臀部の始末を客に頼んだ。客たちは、この光栄に浴そうと全員が希望したので、抽選できめることになった。

しばらく彼女たちは休息させてもらいブドウ酒で疲れを癒したが、ぐったりとしたから

だで足を投げ出して坐っている姿、妊婦であると云う緊張感はどこにもなくスキだらけのからだは余りにも肉感的で、動物的なものであった。完全に人間性は無視されていた。五分程もそのまま休憩していたであろうか。

妊婦たちは、マダムから浣腸器と美しいガラス製の便器を受け取ると客席の中へ歩を運んだ。彼女らは思い思いの客の前に行き、浣腸器を客に手渡し、便器を隣りでサービスに努めているホステスに渡した。

客席の直中で、しかも同性のホステスたちの直ぐ眼の前で妊婦と云うグロテスクな姿の浣腸を見せようと云うのである。男だけならともかくも、若い女性の手のとどくほど間近での浣腸は、耐え切れぬほどの苦痛であっただろう。

「どうぞお願いします」

妊婦は、男やホステスの前に脂ぎった丸々としたお尻を向けて四つ這いになった。

彼女らは、やがて襲ってきた便意のために身もだえして苦悶に耐えた。臀部の豊満な脂肪の下で筋肉が緊張し、臀部はゆれ動いた。耐え切れぬ便意が頭まで突き上げるように起ってきて悲鳴が上がる。

「痴^ち人^{じん}の糧^{かて}」

△屈辱の夜▽

山本一章

夜は深く、時々ざわめく梢の音が無気味な次の静寂を底知れないものにしていた。暗闇の雑木林の中は眠ってはおらずに、植物の微かな運動を音もなく繰返しているような気はいを漂わしていた。時々乾いた葉がアケミの肌を擦りながら落ちて行った。

アケミは少し疲れを感じた。

（わたしって、どうしたんだろう？どうしてこんな目に逢うことを期待し、望んでいたのだろう。わたしは誰かに体を汚がされ、そして噛み捨てられたチューインガムのようなものを待っているのだろうか？わたしには淫らな娼婦の血が流れているのかしら？）

二本の木の間には彼女は立たされていた。

両手を横に、足を左右に、二本の樹は彼女の体を大の字に引張っていた。体に着けているものは何もなかった。目かくしをされ、縄の轡を咬まされ、耳を詰められている外は生まれたままの姿だった。彼女はこんな姿にされた女を映画で観たことがあった。しかし、その女は服を着ていたし、顔にもいましめはなかったし、手首や足首を縛った縄ももっとも緩かった。その西部劇を観た時、彼女は自分も一度そんな姿で野蛮人の餌食になってみたいと空想した。それは空想の世界だけで過ぎ去って行く性質のものだった。

今、アケミはもっと羞しい姿で、その主人公になつていた。殺されるという恐怖だけはなかったが、残酷な仕打ちは、その映画のようになり、三分だけの場面で終るといふものはなかった。

大山と百合子が去ってから二十分近く経っていた。揺げられた手足を動かそうとすると樹が揺れて、ガサガサと葉ずれの音を立てた。固く根元を括られた乳房が呼吸する度につままれていくようで、それだけで胴体の自由を奪われてしまったような感じさえしていた、大山等の戻ってくる気配いはなかった。

耳を詰められているとはいへ、彼等が話している時は、僅かながら、その気配いが感じられるのだったが、今は全く音のない静寂の中にいた。

大山の家を出て十分ばかり歩かされた場所だったので、その家の裏に続いている雑木林の奥だということはわかったが、周囲の様子は何もわからなかった。

やがてアケミは時々体をぶるぶるとふるわした。食事に神戸へ行った時から足していない生理が、彼女の体をそうさせたのだった。誰も見ていないから——そうは思ったが、そんな姿勢のまま用を足すのには、まだ彼女の

自尊心が許さなかった。しかし時間が彼女を追いつめて行くだけで救いはなかった。

一気に排出した後の解放感は快よかった。体の緊張感が一ぺんに弛んで、体がぞくっと軽くなった。

（わたしを、どうするつもりかしら？）

次に眠気が襲ってきた。頭を前にうなだれて、うとうととしかけたが、左右の樹に結ばれた手足が、その眠りをさまたげた。

○

すでに十二時を過ぎていた。

「おい、こんなところへ来たら、出られなくなるぞ」

「しばらく隠れていた方が、いいんじゃないか」

二人の男が暗闇の中を、手さぐりで歩いていった。

一人は二十才位、もう一人は三十四、五才の男だった。彼等は今、駅前の荒物屋に押入って家人に騒がれて飛び出し、この雑木林に逃げ込んだのだった。

「どっかへ坐ろうや。疲れた疲れた」

年のいった方の男が云った時だった。

「ひやっ／＼おい、なにかあるぜ」

若い男は突然ぐにやっ／＼と触ったものに飛び

上る程驚いて叫んだ。一間程も飛び下った二人はしばらくうずくまって様子をさぐった。

「おい、びっくりさせるなよ。なんにもないじゃないか」

「電気で照らしてみな。確かになんかに触ったんや」

懐中電灯で照らした二人は、一瞬ビクッとしかたずをのんだ。若い女が大の字になって立っている姿は、二人に好奇心より先に恐怖を与えた。

「おい、生きてるんか？」

二人は電灯で照らしたまま傍へ近寄った。

「生きてるらしいぞ。えげつのう縛られてるじゃないか」

若い男は突然の出来事に、おろおろと体をふるわして言った。

「どうしたんやろな。可哀想に——」

年上の男は、そう云いながら懐中電灯で全身を嘗めるように照らした。

「どうする？」

「さあ、まあ電気を消せや。見つけれたらことやで」

若い男が彼女の後に廻った。

「解いてやろうか？」

「やめとけよ。騒がれたり、顔を見られたら、おしまいや。このままにしろといった方がいいぞ。どうや、やっちゃうか？」

年上の男は、そう云いながら女の乳房を撫でた。後の男が尻をさすった。暗闇の中で二人は思い思いの気持を持て余していた。

アケミは胸をドキドキさせていた。大山等とは違う男らしいことはわかった。彼が寄越した男たちだろうか？

男の手が前と後から彼女の体をまさぐるのを避けようがなかった。わずかに腰をふって悶えるだけだった。

「おい、変なところへ手をやるなよ」

「お前だって同じやないか」

二人はクククッと笑った。前と後から二人の手が触れたからだだった。

「しっ／＼誰か来るぞ」

手を離れた前の男が、坐り込んだ若い男に云った。二人は中腰になって、その場から逃げた。後のことが気になったが、引返して見届ける勇気が二人にはなかった。（あれで結構余録したんやからいいじゃないか）

○

「あれっ、誰か来てたんじゃない？」

百合子のびっくりしたような声に、大山はどきっとした。懐中電灯で照らし出されたア

ケミの姿が、前のままだったので、ちょっと安心した。

「どうしたんだ？」

「見てごらんよ。これ男の白涙っていうやつよ」

アケミの背の方に廻った大山は、彼女の尻のところから腿を伝ってふくらはぎまで、白く光った跡があるのを見た。

「まだ間もないようよ。怖いわ」

百合子は心細そうな声で言った。大山はポケットから塵紙を出すと拭ってやった。

「とに角、解いて連れて帰ろう」

縄を解かれたアケミは、うずくまって顔を伏せた。

両腕を左右からかかえられて、アケミはよろよろと歩いた。素足に当る小石の痛みも感じなかった。

（どうする気だろう。このまま不潔な女と軽蔑され捨てられるのではないかしら？）

このまま捨てられてしまった方がいいような気もした。彼はきっとわたしが犯されたと思っただろう。軽蔑されるのが辛かった。

家に戻されたアケミは、目かくしだけを残した自由な姿で浴室へ入れられ、百合子に体を洗われた。子供のように手をだらりとさせ

て立っている彼女の全身を、百合子は丹念に洗った。

「疲れたでしょう。可哀想にね」

空々しい言葉だった。むしろ面白がっているような響きさえあったので、アケミは黙っていた。

手を上げて——足を開いて——腰を曲げるのよ——そんな言葉のままに、アケミは体を動かしした。もう百合子に対して羞恥心はなくなっていた。生きた人形だった。

入浴を済ませると、書斎へ連れて行かれて坐らされ、大山の手で熱いコーヒーを飲まされた。目かくしのままなので目は見えなかったが、大山の優しい心づかいが涙の出る程嬉しかったし、甘い香りはびっくりする程美味しかった。人心地がついたような気がしてアケミは、首筋にあてがわれた彼の手に少し凭れかかるようにした。甘えて抱かれない気持だった。

「誰が来たか、わかるか？」

アケミは頭を横に振った。

「一人か？」

「二人」

「なにかされたの？」

「いいえ、抱きつかれただけ」

「うそだろう。白状してやる」

大山は彼女が自由にされたのではないことを知っていた。入浴の後で百合子が報告したからだ。しかし、彼はそれを口実にアケミを責めることを考えていた。どれだけ辛抱するだろうか？今までの彼女の苦痛に対する忍耐強さからして、簡単には嘘を言う筈がないように思えたし、よし白状したところで、それがまた彼女を責める材料になることを計算に入れていた。どっちにしろ彼女は大山の生贄でしかなかった。

「そうよ、しゃあしゃあとして嘘を言うなんて、図太い女だわ。拷問にかけちゃいましょうよ」

百合子は相槌を打ってけしかけるように云うと、自分でもこの芝居がかった遊びが、おかしくなったのか、くすくすと咽喉の奥で笑った。

「違います。本当に違うんです」

アケミは二人の表情を見ることができないため、必死になって弁解していた。百合子にはやにや笑いながら大山に言った。

「鞭打ちがいいわ。さあ行きましょうよ」

アケミは再び納屋へ連れて行かれたが、別に反抗もしなかった。なるようにしかならな

いという諦めと、自分の体がまだ大山に必要なのだという満足感があったからだだった。ガタガタと金属音をさせて百合子がサイドテーブルを運んできた。高さ一メートルばかり、上の台は縦六十センチ、横三十センチ位で四つの脚の下は車になっているものだった。アケミは俯伏せにそのサイドテーブルの上に載せられ、手足がその四つの脚にしっかりと縛りつけられた。胸と上腹部だけが台に載って、頭と尻がはみ出して突き出た恰好になった。殊に膝もテーブルの脚に沿って縛られたため、大腿が少し腹部の方に曲り、またぐように開いたまま尻を突き出した姿勢だった。

「口は、どうする？」

「そのままにして置けよ。それより顔を正面向けさせた方がいいな」

大山はそう云うと、アケミの髪の毛を束ねて握り、縄を固く巻きつけた。その縄尻を左右に振分けると後へ引張って顔を起し、後の両膝のところへ結んだ。アケミの顔は正面向いた。

「さあ、どこからやる？」

そう言いながら百合子は上になった滑らかで白い背中から臀部へと手で撫

で下した。家畜を調べるような無操作な手つきだった。

「あなた、左をやりなさいよ。わたし、右をするから」

手にプラスチックの靴ベラを持った二人はアケミの四つんばいになった体の左右後方に立つと、交代にその尻を打ち始めた。

ピシッピシッ、肌が一打ごとにふるえた。

爪先が少し床についていたが、どうにもならなかった。

「餅つきね」

百合子は面白がっているようだった。答は交代に尻を打ち据えた。

「アアアアッ、イタッッ、ウウウアウッ」

声を出すまいとしても、自由にされている口は、苦痛に対して正直だった。

「どうだ、自由にされたんだろう？」

「違います。でも、もう打つのは止めて下さい」

顔を正面に向けたまま、泣くように言った。

「白状したら、許してやるわ。早く認めちまいなさいよ」

百合子い太腿の内側を打った。その痛さは四つんばいの体をのけぞらす程激しかった。

「ああーん、うわーん、いたいっ、いたいったら／やめて、やめてえー」

「やかましいわね。口を塞いだ方がいいわ」

百合子はアケミの口に縄を咬まし、ぐるぐるまいて、引きしぼった。

「あううう、うううあッ」



「どうだ、これでも違うって言うのか。やられたんだろう？」

アケミは頭を横にした。どんなにされても、そんなことを認めずに置こうと決心していた。認めない以上、大山は自分を責めるだろうし、責められることは捨てられることにはならなかったからだ。そして残酷な仕置の苦悶の中でも、彼女は体の奥ではのかな欲びを感じていたからだ。正面向けられた顔のため頸がだるく、咬まれた縄のため呼吸が乱れた。

パチッ、パチッ／＼ピチッ、ピチッ／＼

肌を打つ音が、そのたびに体をけいれんさせているアケミの耳にも聞えていたが、その音は徐々に遠くなって行くようだった。

「もういいようだわ。気を失いそうよ」

百合子は突き出された肌を摘むようにして揉んだ。熱を持っていた。

「浣腸してやりましょうよ。だいぶ溜ってるはずよ」

朦朧とした意識の中で、アケミは、そんなことされたら死んでしまうと思った。こんな姿のまま人の目の前で排泄するなんて考えただけでも気が狂いそうだった。

「お前やってやれよ。薬があったかな？イチ

ジクのがあったと思うが」

百合子が納屋を出て行き、二、三分で戻って来た。

「あったわ。だいぶ古いようだから効くかしらねえ。二、三本入れちゃいましょうよ」

大川の手が、いちじく浣腸の球をプツと握り潰すと、冷い液体がすっと入った。

脱脂綿が当てられた。そしてもう一本。三本目の時には、もうアケミは体を、もぞもぞと動かして効果を現わしはじめていた。

「さあ、これで大丈夫。外でやらせましょうよ。くさいからね」

そう云いながら百合子は、フッフと含み笑いをした。サイドテーブルに載せられたまま、押されて納屋から出され、百合子が古いバケツを下に置いた。大山の手が離れる。

胸を突き上げるような便意が、アケミの忍耐力を打ち砕いた。ドドツと怒涛のような勢いだった。B音からP音へ。

「ぎょうさんするわ。いやだわねえ」

アケミの失われた羞恥心を蘇らせるような言葉だった。

後始末は大山がした。彼は赤ん坊の世話も、こんなものだろうと思ひながら紙を手にかけていた。更に湯で洗った。アケミはくすぐ

ったいとは感じなくなっていた。全身から力が抜けると激しい眠気が襲ってきた。

再び納屋の中に入れられるとテーブルから解かれ猿轡も外された。

「まだ使えるかなあ——」

そう云いながら大山は古い木箱の中から半分以上錆びた金属の手錠を二つ取り出した。

鍵を入れてガチャガチャ音を立てていたが充分使えそうだった。彼が十年程前、古道具屋の店先にぶらさがっていたのを買って、亡くなった妻のために使ったこともある品物だった。

アケミを立たせて、その一つを後に廻わした手首にかけ、もう一つを両足首にかけた。そして納屋の隅にむしるを敷いて彼女の体を横たえた。

「眠るんだな。眠いだろう。また明日を楽しみに、いい夢でも見たらいい。おやすみ」

「オヤスミナサーイ。あしたのお仕置は、考えて置くから」

アケミの体の上から、はげて薄くなって、かび臭い毛布が掛けられた。

二人は納屋の戸を締め、外から錠をおろすと立去った。目かくしの絆創膏の下で、アケミは泣いていた。悲しいからばかりではな

った。お尻の打たれたところが痛んだからだ
けではなかった。満足感と解放感が意味もな
く彼女を泣かせたのかもしれない。疲れ切っ
た体は、直ぐ眠りの中に陥った。
白い蛾が空いちめんに舞いあがっていた。

その一匹一匹が、一つ一つ生きているのに、
こちらから見ると、まるで花吹雪のように美
しかった。生あたたかい芳香を含んだ空気が
その蛾の集団をくるくると舞わしているよう
に思えた。

頭の芯がしびれるような倦怠感が手足の指
先にまで及んでくると、お腹の中は空っぽの
ように、すがすがしいのに、気持の上では快
い満腹感があった。とにかく、抜けるように
ふわふわとだるかった。

△華々しき女体緊縛の組写真集△

美しき縛しめ

〔第四集〕

限定版 グラビア印刷写真集

頒価一部 一〇〇〇円（送共） 略号「美4」

◎縛られた美女ばかりのフोट八十態◎

最新撮影の新しいモデル、山原清子、木村洋子、玉田美佐子による美しい緊縛フोटに加えるにべ
テラン大塚啓子の極最近撮影のフ
ोटなど、ここ数カ月に亘って、
フोट・アルバム「美しき縛し
め」用として撮影し保存してきた
写真を、極めて鮮明なるグラビヤ
印刷の特アート紙によって、皆様
にごらんに入れます。写真はいず
れも未発表のとおきおきの傑作ば

かりです。各モデル嬢の特徴をそ
れぞれに十二分に発揮した文獻的
価値豊かなフोट揃いです。春の
暖気に匂う花の如く全紙面から、
にっこりと皆様に微笑みかけてい
ます。緊縛による苦悶や苦痛も、
皆様に見て頂けるといふことだけ
で、彼女たちも嬉しいのです。ど
うか、この素晴らしい一冊をお求め
下さるようモデル嬢たちと共に心
からお待ちいたします。

登場モデル 山原清子、木村洋子、玉田美佐子、大塚啓子

◇写真集アルバム内容◇

- 刺青女体の逆エビ責め (山原清子)
- 鉄扉に緊縛首吊り晒し (玉田美佐子)
- ブロックの石抱き責め (木村洋子)
- 箆子の浣腸器と鼻責め (大塚啓子)
- 両足吊りにあう刺青女体 (山原清子)
- 古墳にて後手吊り組写真 (木村洋子)
- 両手吊りに悶える組写真 (山原清子)
- 立木から完全逆さ吊りに揺れる女体 (木村洋子)
- 猿ぐつわ百態組写真 (大塚啓子)
- 革拘束具による組写真 (大塚啓子)
- 柱縛りの晒し責め組写真 (玉田美佐子)
- セーラ服緊縛組写真 (大塚啓子)
- 野外に於ける晒責組写真 (玉田美佐子、木村洋子)
- 刺青女体の柱吊り責め (山原清子)
- 捕獲された縛られ女、裸身の悶え (大塚啓子)
- 入墨に映える緊縛絵模様 (山原清子)
- 両足半吊りの表と裏 (山原清子)

△以上緊縛写真八十葉△

以上を通り、本誌のグラビヤにし
て、何カ月分にも相当する豊富な女
体緊縛写真を、特アート紙に對する
鮮明なるグラビヤ印刷によって、写
真集を完成いたしました。必ずや皆
さまの御満足を得ることと信じま
す。限定版につき一般書店には姿を
現わしません。数にも限りがありま
す故、売切れにならない中、お早く
お申込み下さい。
一般書店売は一切いたしません。
直接発行所へお申込み下さい。

夢の、また夢



<御厠番秘聞>

芳野眉美

第三章

側室の香木

花仙老人の家宝の中には、愕くべき拝領物

室の名前はわからない。

ある高貴な側室からの拝領物なのだが、側

ある。

まであった
桐の小箱に収められた粉末も、その一つで

すでに、將軍の寵愛を失い、若い中臈に権力を奪われた側室が、最も残酷であったと老人は話している。

御台参の帰り、その側室は養父の上屋敷に立寄るのが習慣であった。側室は、かつて町家の娘であったが、御台所の身分の低い腰元にあがっていたところ、將軍の眼にとまり、ある大名の養女になり側室に召し出されたものである。

養父となった大名は、二万三千石、柳間詰、位記は五位であったが、無城の微々たる大名であった。

家名は薬種問屋の主人の交友録に書いてない。花仙老人も、お上をはばかって、側室の名前と同様、主人に話さなかったものと思われる。

側室に上って五年、一男一女をもうけたがいずれも夭折している。

せっかく將軍の子女をもうけながら、夭折してしまったのは、將軍の奢侈の好色のせいだろうが、側室とは名ばかりとなってしまうのも、また、將軍のあくことのない女色のためでもあろう。

將軍が持ち余す閑暇をつぶすのは、次々に新鮮な女を枕頭に侍らすことだけである。

將軍に閨房を辞退したといつても、側室はまだ二十を僅かに越えたばかりであつた。若い養父を訪問するのは、それだけの理由があつたはずであつた。

その日、養父は側室を茶室に迎えた。二人きりの茶室は、貴人口も、にじり口も閉められた。別棟の待合いに側室の腰元が、中門に大名の小姓が、それぞれ主君の命を待っていた。

側室の甘くすえた肌の匂いが、茶室に漂っていた。衿がはだけて、豊満な胸乳の白さが露わであつた。

台参の帰りの限られた、わずかな時間であつた。

側室は、襦も白綸子の袴も脱ぎ捨て、白羽二重の肌着の姿だけになつていた。

若い養父の手は側室の胸乳から鳩尾をまさぐり、ふつくらした腹のあたりをさすった。脂がよく乗って肥え、すべすべと丸くまるで練絹の肌を撫でているようであつた。

艶々と結い上げた髪が重たげに垂れ、蒼白いうなじに、すっと赤い血が走った。養父の齒型が、ここかしこにつけられる度に、側室の白い肌は息づいた。

側室の消えるようなあえぎは、つくばいの

静かな水音をぬって、炉の淡い灯影の中に長く尾を引いて続いていた。

待合いに待つ腰元も、中間に坐る小姓も、茶室の露路の風情などを鑑賞しているところではなかつたことだろう。

やがて、側室は腰元を呼んだ。廁の用意を命じたのである。腰元から、供をしてきた花仙老人に伝えられた。

茶室に近く、庭の樹木にかくれて、片流れの屋根が見え、曲った竹の柱に支えられた小屋があつた。

それは全く庭の延長と云つてよかつた。片木戸を開けると、三つ四つ石が極めて自然に置かれてあるだけの、茶室にふさわしい簡素な雪隠であつた。

踏み石の間に穴があり、白い砂が入れてある。老人は触杖で穴の中の砂を掃き、紙を幾枚も敷いて、その上にも少し砂をかけた。

側室の使用後、さらに触杖で砂をかけ、敷いた紙にくるんで始末する。側室の台参の供をした老人の役目は、これだけである。

茶室と雪隠の間の石畳に水をうち、老人は姿を消す。側室の目に触れることは許されない。

寒い日であつた。

老人に代つて、小姓が温石を踏み石の上に置いた。石を火で焼いて布で厚く包んだものである。いわば、保温器。

側室が養父と密会を楽しんでいる間、温石係の小姓は、主君の用命を待つて石を温め続けていくわけである。熱くても、冷たくても主君の気ままに、

——勤方思召に応ぜず候に付、謹慎。となるのである。

残酷な事件が起つたのはこの時であつた。寒い日であり、庭の茶室の雪隠であることに、係の小姓は氣を使いすぎた。それに、老人が用意してから、側室が廁に入る迄の間もいつもより短かつた。石が少しでも、さめる時間も無かつたのである。

その上、側室は足袋を脱いでいた。

側室は、両足の裏をやけどした。いや、やけどではなく、少し、温石が熱すぎたのである。ただ、それだけのことであつた。

ただならぬ側室の悲鳴が、葉の落ちた冬の木立をふるわせた。

温石係の小姓が、茶室の庭先にひき据えられたのは書くまでもない。

裸にされた小姓は、後手に縛りあげられると、松の木に吊るされ、木刀でさんざん打ち

すえられた。

そればかりではなかった。

失神した小姓を、側室は、首だけ出して池に沈めたのである。

曇り空は、みぞれになり、やがて、夜半から雪になった。

軽いやけど、とまではいかなかったはずなのに、公然と大奥に帰るのを延期した側室は養父と二人で、水責めの小姓を酒の肴に、夜のふけるまでたわむれていたという。

やけどしても、しなくても、大奥に帰らなくなかった側室の芝居とも受け取れた。

それにしても、あまりにも残酷な芝居であった。

数月後、奥女中の話から、小姓が泉水の中で凍死したのを老人は知った。池の中で、小姓が失神からさめていたことも、側室は知っていたらしい。

小姓の死体は、雪化粧の中に埋没していたことだろう。

公表は、

——殿様思召にしたがい、切腹。

であった。まだ十六才の少年であった。

よほど、この事件が気になったのか、老人の昔話もくわしく、主人も丁寧にそれを記し

ている。

花仙老人が側室から拝領したのは、その時であった。

側室の悲鳴を聞いて、誰よりも早くかけつけ、人には見せられない事後処理を、手早くかたずけたからであった。

拝領した品は、側室が、砂の上の紙に残した、小さな塊であった。

信じられるだろうか。

例え、それが、どんな物であるにせよ、主君から下賜された品である。

その夜、老人は側室のそれを桐の小箱に入れ、床の間に飾り、御厨番一統を招き、祝賀の杯を挙げた。

老人が拝領物を桐の箱に入れて保存したのは、主君の気まぐれから、いつ拝領物の返上を申し渡されるかもしれないからである。

拝領物の取扱いは、極度の注意が必要であった。もし、拝領物の返上を申し渡され、

それが無かった場合、どんなことが待ち受けているか、わかったものではなかった。

捨てるわけには、いかなかったのである。

側室にすれば、人に見せられない恥づかしい塊を、老人に見られた腹いせもあったかもしれない。

ぬくもりのさめやらぬ側室の黄金の塊を、老人は紙に包んでふところにしのはせ、誰に気づかれることなく、長屋まで持参したのである。

考え方によっては、雪見酒であり、拝領物とうり、やけくそだったのかもしれない。

年月を経て、その拝領物は粉末になった。これには後日譚がある。

側室の廁の掃除をおえた老人が、側室より招かれたことがあった。

使いに來た腰元が、老人に、廁の床下に入るように促した。理由を聞くことは許されな

い。

側室と老人とは、廁の上と下で向い合ったのである。

側室は老人をだまって見下していた。

老人は、何か云わなければならぬと思った。そして、老人の口から出た言葉は、

「家宝にしております」

側室は笑った。笑って、笑い転げた。

その間中、老人は、廁の床下に身を投げ出し、砂宮の上に平伏していた。

側室のかん高い笑い声がやみ、老人に顔を見せるように声があった。

側室を見上げた老人の顔に、ひとかたまり

の、やわらかい落下物が、ゆっくりと付着したのはその時であった。

その落下物は、あたたかく、老人の顔を次々に埋めていった。

太く、また、細く、早く、また、おそく、側室の体内から次々とはなれた黄金の塊は、老人の眼といわず、鼻といわず、口の中までも入り込んでいったのである。

「家宝にしや」

遠いところで側室が叫んでいるのを、夢うつつのうちに、老人は聞いていた。

側室から下賜された数塊を、老人はたべていたのである。

不思議な陶酔がそこにあった。

第四章

羽根と金魚

誰にもまして花仙老人が忘れられないのは、生来病弱であった姫の一人であった。

將軍家齊の晩年の女であったが五十五人の子女のうち、幾番目にあたるかわからない。

老人は姫君というだけで、名前を明らかにしていない。その母も不明である。

厚地の織物に、金襴の縁をとった五六寸厚

みのものを二枚重ねた敷布団と、唐織白地に色糸で鶴亀松竹を散らした、五枚重ねの掛布団の間に、姫はいつでも埋まっていた。

連台の上の蒔絵の函ふたを開けると、柔かい紙をさらに腰元たちがもんでひろげた紙が収められていた。紙でさえも傷つきやすい透明な柔肌の姫であった。

病弱な姫であれば、屏風、鏡台、燈台、香炉、くしばこ、薬ばこ、手ばこに交って、姫の寝室に樋宮があったとしても、不思議はないと思われる。

姫の樋宮は、定紋のついた金銀をあしらった華美なものであり、薄物で蔽われ、屏風のかげに置かれてあった。

御用済みになった樋宮は、姫の腰元から雑用をつとめるお末の者に渡され、御廁番である老人に下げられるのがしきたりであった。

老人は姫の顔を知らなかった。毎日何回か下げられる樋宮に、姫のこの世のものとは思われぬ（この言葉が老人は好きらしい）馥郁たる香を嗅ぎ、いつのまにか姫を忘れられなくなったとしても、それは決して老人のつみではないだろう。

といっても、老人は、姫の樋宮を通して親しくなった奥女中から、姫の話を聞くだけに

すぎない。老人にとって、姫は、樋宮の中に収められた透明な液体であり、小さなかぼそい塊であった。それ以上は考えられないことであった。

老人は若かった。老人は姫の樋宮を通して姫に恋をしたとしても、死んでも口に出して云える筋合のものではない。口に出せば、それは打首につながっていた

花仙老人が、如何に姫を崇拜し、憧憬したか、薬種問屋の主人が記した小冊子にはこうある。

その頃、御廁番の同僚は、老人が非番になると、早朝から長屋を出、夜に疲労しきって帰って来るのをよく目撃するようになった。

老人は手ぶらのこともあったし、生きた鶏をさげていることもあった。

老人は、近郊の農家を一日中歩いて、良質の羽根を持つ鶏を買い求めていたのである。

鶏を前にして、老人は黙々として羽根をむしっていた。それも一羽だけではない。二羽三羽と、老人の仕事は続けられた。

長屋の中の一軒である。生臭い肉の匂いが長屋中にたちこめた。

そのことに、長屋の住人が文句をつけなかったのは、老人が羽根をむしったあとの鶏の

肉を、同僚におしげもなくくばったからである。

老人が求めていたのは、鶏の肉ではなかった。

むしった鶏の羽根一本一本に、老人は注意をはらった。羽根についた肉片は丁寧にとられ、なま臭い匂いの消えるのを待って、汚れない美しい羽根を選んだ。

その美しい羽根を何に使うのか、同僚はいくらたずねても老人は笑って答えなかった。

御厠番としての給料は微々たるものであったに違いない。老人のわずかなたくわえも鶏の羽根に消えた。酒もばくちもやめてしまったという。老人の頭の中は、鶏の羽根で埋まっていたといってもよかった。

事実、羽根をむしりつつしている時の老人は楽しそうであった。

花仙老人は、姫の樋宮にまっ白な鶏の羽根を、一面に敷き詰めたのである。

美しい羽根に包まれた姫の可愛い塊は、老人を狂喜させた。

無数に積み重ねられた羽根を見て、姫はおもわず微笑をもらしたと、おつきの腰元から老人に伝えられた。

姫は、自分の樋宮を洗う御厠番の老人に、

ちよっぴり興味を持ったらしい。しかし、それだけのことであった。

老人は、それ以来、今迄以上に、姫の生活を知りたがった。姫の話を聞くだけで満足した。時には、腰元の話にショックを受けたこともあったことだろう。

その頃の老人の日常生活は、まだ見ぬ姫のあこがれで終始したのである。

姫の朝の洗面は、畳の上に鍋島段通を敷き湯を入れた黒塗りの二尺たらいを置いた。

別のところに、八寸角の塗台にのせた、唐草模様の大茶碗、湯を入れた湯桶、歯医師の調合した香歯磨粉の皿一枚、傍の一枚には赤穂の焼塩が置かれ、房楊枝が添えてあった。

姫が膝をついて湯にかがみ込むと、腰元が姫のうしろに進んで両袖を支える。湯桶で顔を洗うのだが姫は手をつかわない。腰元が白木綿のぬか袋で満べんなくこするのである。

口をそそいだあとの湯は、黒塗りのたん吐きに吐くのだが、姫の虫のいどころが悪いとたん吐きでなく、腰元に口を開けさせて、姫は口をゆすいだあとの水を吐きだすこともあった。

そうされた腰元は、あわててその水を飲み下した、捨てることは許されなかった。

その話を聞いた老人は、姫のたん吐きになりたいと思ったことだった。

まだある。

姫の病気が進み、体力が一度におとろえたことがあった。

樋宮を用いる力もなくなった姫のために、おつきの中年寄が、バラの香油に指を浸してそっと差し込み、指に触れるものを静かに取り出したという。

今でいう、便秘だったのかもしれない。

手際よく、驚くほど巧妙に、ことは運ばれた、その間中、姫は少しも痛い顔もせず、やすらかに寝息をたてていた。

中年寄といっても、三十に満たない奥女中であつた。姫に心から奉仕していなければ、出来ない看護であつた。

話を聞いて、老人は、自分だったら、許されるならば、口をあてて吸ったであろうと思つた。そして、舌で綺麗にふいたことだろうと思つた。

さらに、病気の姫の小用を吸った中年寄のことを、側にいて目撃した腰元は、顔を赤らめて老人に告げたことだった。

ここで、老人の話を聞きながら、唐女が、二度程顔を朱に染めてうつむいたことが、小

冊子に記されている。

一度は、老人が姫の小さな秘所に吸いついても、というところと、二度目は、姫の小用を中年寄が吸った、というところである。

この唐女の見せた羞恥から、薬種問屋の主人は、老人が唐女の小さな秘所を、口をつけて吸ったのではないか、また、二本の銚子にくむだけでなく、唐女のもう一つの小さな秘所にじかに口をつけて、これまた吸い取ったのではないか、という、刺激的な疑問を投げ掛けている。

このくわしい話は、いずれあとでくわしく書くことにする。

姫は病身にかかわらず、將軍の命で、ある中大名に嫁ぐことになった。

四万六千石、親藩であり、小さいながら城持ちの当主は、莫大な借財をかかえて、將軍の姫の持参金に眼をつけたのである。

その道中のことであった。

行列の中には、姫愛用の樋宮と樋宮をまたぐためのふみ台、囲のための天幕もあった。

長旅もそろそろ終りとなった、湖の見える山腹にさしかかったときであった。お供の老人に廁の用意をするように伝えられたのである。

長い道中の間、宿泊所以外で、老人に伝えられたのは初めてであった。病弱の姫のことではあり、行列は非常にゆっくりと進んでいたのである。外で廁の天幕を張る必要は無かった。

老人は、自分の役目の最後になるであろう姫の御用づくり、情熱をかたむけたのである。

即ち、姫の樋宮に、水を張って青い藻を浮かせ、赤い金魚を放ったのである。

樋宮をまたぐための、ふみ台もあることだし、水がはねかえる無礼もないと判断したからであった。

中年寄に手をとられて姫が急場しのぎの御用場に入ると、老人は天幕の中に入るよう呼び出された。

老人は草の上に平伏した。

姫のかるやかな笑い声が、老人を石のように硬直させた。

「お前だったのね」

と姫が云った。美しい声であった。

「美しい羽根は忘れません」

老人は姫の顔を見たいと思った。今見逃がしたら、永久に見られない顔であった。しかし、老人の鼻は、泥にめりこんで離れなかつた。

た。

「でも」

と姫は涼しい声で続けた。

「金魚は可哀そう」

「それで」

と中年寄が云った。

「姫さまは、お前の望みをかなえてやると申されました」

お末の者にもらした老人の願いは、お末の者から腰元へ、腰元から中年寄へと、笑い話にされて、伝わったものなのだろう。

老人は、中年寄の帯あげで目かくしをされた。

「金魚のかわりに、お前が姫さまに奉仕するのです」

姫の笑い声の中に、あたたかい姫の尿は、外にもれることなく、細い一本の線となって老人の口中に流れていった

老人は、直接に、姫の樋宮になったのである。生きた樋宮であった。

姫は嫁いで一月とたたぬうちに病死した。最後まで処女だったらしい。

花仙老人は、姫の顔を知らない。

(未完)

「美少女煩惱」

夜乃探郎

いつハサミを入れたか判らないような、眼元まで前髪がたれる伊沙子が姿を現わした時、私の胸は異様に動悸した。

この春、新制中学を卒業。眼が弱いため会社勤めを断念し、家庭も貧しい故に、医者にかけるという約束で私の所で小間使いにやと入れる事にしたのだ。

子供の無い私達夫婦にとって、別段、人手を借りる程の雑用もないが、そこは私のひそかな工作が効をそうしたわけである――。

伊沙子が住込むようになってから、私の家は甘ずっぱい、大人になりたての少女の身体からあふれる香りで一杯になった。

どちらかというと、妻のK子は理智的な女

で潔癖な方だった。お風呂に入らない夜は、どんなに私が一緒にねようと言ってもはねつけた。

背も私より高く、年令も上で常に姉女房を氣どっていた。

それでも新婚当初は、男兄弟の中で育った私には、あまえると言の意味で、またこれどころにか正常な生活にもどれるかと必死だった。だが、年日は平坦な道をひらくことなく、遠く夢魔の出来事があってから、私の身体にしみこませてしまったサド的な慾望が……、いつか、おさえようにもなく灰色の日々を迎える破目になってしまったのだ――。

K子は、セックスの際いつも女上位を望ん

だ。私は不満足な姿勢で夜をあまんじた。しかし、男って考えてみると、気ままな所もある。若いときは人一倍の器量望みで、ハミス・××Vに選ばれたこともある女性を、どうしても嫁にやれない（K子は一人娘であった）というのを苦心さんたんして手に入れたというのに……。

私は二重人格者でもあったようだ。本質的にはSなのに、外面的なすべての動作は、いつもM的なそぶりを見せていた。BG生活をしていた時にもK子は年下の新入女社員の面倒を見、いつも休けい時間など、ゾロゾロと、それらをお供にして屋上などに現われたようだが、私は静かに事務室などで本などを一人よむにすぎなかった。そしてときたま、どうしても、がまんが出来なくなると旅行をし、よその土地で酒を浴びるほどにのみ、けんかなどをしてきた。また赤線地帯（終戦当時はまだ存在した）に、それも郊外などの小さな娼家を見付け、金の力で肺病もちのような弱々しい女を物色しては、責めたりもした。あやしげな書物で学んだ陰語などを好んで使い、いっぱしのあそび人たらんと演技した。K子が、私と結婚しようとしたのは、表面的には品行方正でもあり、この男なら家庭

をもっても女王さま気取りで過せると思ったからでもあろうが、若いくせにすでに課長候補に噂さされるという出世街道を進む好青年と信じたからでもあろうか――。

独身時代のジェキル・ハイドの生活は、自分だけの城をもっているという意味で（私は親元を離れアパート生活をしていた）ひかく的やさしいが、「夫婦生活」の場となると、いつも、一つの部屋で肉体を知りすぎた男女が過さなければならぬという事実から、心理的にむづかしいことでもある。

一つベッドの中の、ほんの少しの沈黙が無限の焦燥を生むのだ。

――ともあれ、K子がS的な女性で私がMであつたなら破局は、むしろパラダイスを現出させたことであろう……。だが、そこまでは気付かず、彼女の美貌にポイントを置いた出発点が青くさい人性Vを無視したおろかな行動ではあつたのだ。はじめはれた弱身が、いつまでたっても後を引き、K子もそれをよいことに……。

美少女、田川伊沙子が登場したのは、そんな時期でもあつたのだ。

伊沙子はK子の入浴好きと違って、むしろ不精の方で、いつもK子が風呂に入ること

すすめても、何かと理由をつけては逃げていた。顔に自信のあるK子にとって、眼もわるく十六・七位の小便くさいような小娘は眼中に無いとばかり、けいべつしたような顔付でこきつかった。

ひ弱そうな身体のわりに張った胸が重たそうな、黒い瞳がいつもうるみがちな伊沙子を見ると、私はそのすべてをコッパミジンにしてやりたい慾望をおさえるのに苦しかった。また私は女の体臭に引かれる方で、その点、つとめてそれを消そうとするK子より、いつも汗くさい分泌物を流す伊沙子の薄黒い肌を渴した。

――ある晩。

実家に急用が出来て、一週間ほどの予定でK子は泊りがけで出かけて行った。

……床についてから、私はある考えのもとに伊沙子をよび肩をもませた。だまって三千円ほどの金を小使いだと彼女に差出した。伊沙子は、はじめは辞退したようだが、すぐ大事そうに前掛のポケットにしまいこんだ。最初の計画ではひもで縛り責めようと思ったが、その時になって気持が変った。独身の頃、あるカストリ雑誌でよんだことのある、中国の「死姦」という異常な魔窟の出来事を連想し

たからだ。死んだばかりの美少女に……その身は冷めたく、それがむしろ表現を絶した……どのような姿勢を取らしても……、その実地体験記だった。

私は伊沙子を残し台所に行き、ねむれない夜のためにしまっておいた催眠剤を取り出しジュースを入れた一つのコップに投入した。ぐったりとした伊沙子を自由に……その空想が私を刺激した。

――いつか、伊沙子は私の思う通りに深い眠りにはいった。……その着ているものすべてをはぎ取った。……二つの足首をあわせてよくロープで縛り……天井のらんまを利用して……百燭の電気に照らされて……。

それは陸に上げられた一匹の金魚のように無抵抗でもあり、そして美しかった。まだ、だれにも手を触れさせないであろう金魚のえらのあたりが苦しうに息づく酸いにおいが部屋にたちこめる……。

私は、その金魚の全体を貪らんな眼で、なめるように追って行く。

ここも、このへんも、このあたりも……視線は海草のように、かすかにゆれるところにも……。

「月と美少女」

夜乃探郎ざれ筆



「美少女がいたずらをしてたのよ
ロープで括られ、星のくさりをつながれて
お月さまのとがった先に付けられ
さかさ吊りにされました……」

——私と伊沙子のかくれた妖しい世界も、いつかK子の気付く所となり、伊沙子にひまを出さざるを得なくなり、その後、K子も実家に逃げてしまって、広い部屋に私一人が取残された。

ジェキル・ハイド的な生活が、やぶれてしまった私にとって、もはや仮面は無かった。

おそれかれ正体はK子の実家にも、そしていつか会社にも……

——それは風の吹く星の散らばる晩だった。

私は有金ありがねを懐中にし小さなポストンバッグを手にしふらりと、すみなれた家を出た。近くのポストの前を通るとき「退職願」を投げ

入れた。

伊沙子がひまを出された時、私は約束の場所と期日を耳打ちしていた。

僅かな日数であったが、私はたしかに伊沙子をマゾ的な女性にしたと信じた。伊沙子さえ居たら……

この時の心境を説明することはむずかしいが、とにかく他者から見たら狂った中年男の地獄図だ。

駅の待合室は、人生の縮図である——と、だれかがいった。成程、そこには来る者、去る者の幾多の悲喜劇が展開され、旅愁があたり一杯にこぼれている。

『電気時計』が、八時を指していた。その時間、いまの私にとって賭けられた一頁が秘められていた。どのような運命がそこから、めくられて行くだろうか。

かつて、私もアブ的な世界を逃がれるために結婚の場に必死になってしがみつこうとした男だった。しかし、いまの私は複雑な気持ちを抱えて、この駅前広場に美少女伊沙子を待っている——。

△時計の針は八時を打った。だが、彼女の姿は見えなかった▽
……その罪人は刀葉樹林におかれる。樹木の

葉も枝もすべてが鋭い刃である。その樹上に美女をおく。淫猥の人はそれをめがけて樹上に昇るわけだが、全身ごとく刀葉のため裂け、血を流し、殆んど骨となったとき漸く樹上の美女のもとに辿りつき抱こうとすれば、美女は忽ち樹上に身を横たえて言う。「何んぞ近く我に來らざる。何んぞ我を抱かざる」と。

そこで罪人はますます慾望を燃やし、今度は樹上をめがけて再び刃に裂かれながらおりてゆく。そして、女のもとに至ると、女は再び樹上にあつて招く。これが永久にくりかえされる。

——「往生要集」の地獄篇の情景が私の脳髓を強烈な色彩をともなつて点滅した。

だが、私は行くだろう。この道が幻の「美少女煩惱」の黒い砂漠に通ずるものであったとしても、一步を印した、そのアブ追求を消すことはできない。ただ、進むことより他に何があるか。喜劇であろうが、悲劇であろうが、その幕は上った。

私は夜空にむかつて宣言した。いまから、過去の私は死んだ。そして新しく、自称・耽美主義者たる夜乃探郎こと私が、誕生したのだ。私は、すでに舞台より去った伊沙子の面

影をだいて住みなれた街に背をむけた。

× × ×

……片道切符は、そのまま私の前途を暗示するかのように、私の手の中で汗ばんでいた。夜汽車の窓から眺める家々の灯は、流れるように去って行く。自虐的な思いは、むしろセシな哀愁をよび、私は現実の世界に居るのか、映画のストリー通りに動く俳優であるのか……、私はケースを取り出し煙草に火をつけ、にがい煙りを吐いた。

しなびたN駅に着いた時、私はどこからかたまたま磯の香をかいだ。

私はいつそう、旅人であることを意識した。

暗い中に駅前からの一本道だけが月のあかりでしらじらとした線を引いていた。小さい漁港の近くにある駅。

私は黒い影法師とともにその道をおるく。

そう、この道だ。子供の頃のショックキングな印象があざやかによみ返ってきた。この道につづく夏の浜辺で目撃したあられもない情景のことだった。月の光に露出された白い幻想画は、サイレント（無声）映画のように音なく……さるぐつわをされた美しい少女の細い

足が宙におどっていた。たくましい男たちが野獣のように……。

——私の美少女を責めたいというサディズム的な願望は、たしかにあの異常な体験が伏線ともなっていたらうか。

厳格な家庭に育っただけに、その八白い幻想Vは禁じられた世界の彼方に、いつも妖しい光りをはなっていた。温和な青年として成長した影の部分で、私はいつもどすくろい私の分身にそそのかされ、ジェキル・ハイドの生活をやめることができなかった。そして精算しようとしての結婚が……。

いつか、私はある酒場で、すり切れたようなレコードから流れる古くさい流行歌を耳にし、幾度か酒のお代りをしていた。田舎くさい厚化粧のマダムは親切そうにサービスしてくれたが……。

いまの私には現実はずかしく寒く酔眼もうろうとした中に、月光に映し出された白い幻想画が、裸体をさらけ出す伊沙子の苦しげな吐息が、青白い表情で鞭もつ私にとりする若い娼婦の着くずれした姿が、取りとめもなく浮び、そして消えていった。

△Mレポート▽

連れ込みホテル特別室

福田 久 文

それは僥倖だったのだろうか。それとも、ながくわたしの胸裡に秘められていた絶望的な願望が、その持続の長さで胸を嘔む深さのために、人智では測り知れない力を動かしたのだろうか。数年前読者の極限された一冊の幾何学書がどうしても必要になった。半世紀以前にロンドンで出版されたのを最後に版を絶っているその書物は、必要になってから旬日を出ずして場末の古本屋の片隅に埃にまみれているのを見出したことがある。そのとき喜びよりもむしろ、妖術にかけられたような当惑を覚えたものだ。同じ当惑が半月前連れ込みホテルの一室でわたしを捉えた。

靴下をはくのを忘れていたのに気づいて、薄暗い廊下でFに別れを告げて引き返えした

とき、後仕末をするためにわたしについて部屋に入って来た女中がいた。瘠せて皺が寄っているのに、白粉を顔に塗った表情の卑しいその女中は、気軽にわたしに言葉をかけた。「何か、忘れもんだっか？」

「靴下をはくのを忘れて」

女中はにやりと笑ったが、わたしは沈み勝ちな表情を崩さずに、靴下を取って椅子に腰を降した。わたしが手拭に石鹸を塗ろうとしたら、肌直接石鹸を塗って素手で擦れといったF。湯上りのままの体で、騎乗するよう深く椅子に腰を降し、そり反った凭れに倒れかかって、両手を上げたF。

わたしの頭を両手で捉えたまま椅子から立ち上って、わたしをベッドへ移したF。涙な

くひとしきり号泣したのち、巨岩のようにわたしを押し潰して動かなかったF。「サービスしておかないと、なかなか逢って貰えないからねえ」といいながら、ぐったりと横たわるわたしを縛りにかかったF。床へ突き落したわたしを太い両足で踏みつけながら、煙草をのんでいたF。

それが愛する妻の姻族の叔母なのだ。

「気分悪いのと違いまっか？薬おまっせ」

「いや、有難う」

「しゃんとした人だんな。ひっこおまんねんやろ」

「……」

「ひどいこと、されたん違う？」

「手足を縛られて、踏んだり、蹴ったりされ

た」

わたしは顔は火照るのを覚えた。顔が真赤になっていたことであろう。

「あれは彼女の意志であるよりはむしろ、わたしの希望だったのだ。嘘というべきであろう。第一、他人に言うべきことでもない。気分の上のマスターベーションではないか」

わたしはきさくに話しかけている老婢に対して、ひどく恥ずかしくなった。

女中はシーツを畳むのをやめた。老人が善意で娘をからかうような明るさが、その表情から消え去った。

「そういう約束で付き合うたはんねんやろ」
「約束？何のことだ」

わたしは一瞬戸惑ったあと、一層頬が火照るのを覚えた。

「あれは、家内の叔母で、未亡人だ」

「そんな阿呆なこと。一銭にもなれしまへんのか、鰥りもんになされて」

こんどは女中の方が如何にも馬鹿馬鹿しいという表情を露骨に現わした。

「あんだ、弱いとこ握られてんねんね？」

弱味、それは双方にある。妻の叔母と同じ男と姪の夫を誘惑した女と。しかし三年も病床にある妻をもった三十男と夫を失って久

しい四十女とは、みずからを抑えることができなかったのだ。

「そんなことない」

わたしはすでに靴下をはきおえ、女中はいつの間にか卓をへだてて椅子に坐り込んでいた。そしてエプロンのポケットから取り出した煙草の箱をわたしに差し出していた。のまないというと、卓上に残っていた宣伝マッチを取り上げて、口にした煙草に火をつけた。

「あんだはんも好きでんねんあ、未亡人にいじめて貰うて。次から、この特別室使いはなれ。責道具も置いたるし、あんじょう出来てまっせ」

「……」

「なあ、あんだ、叔母さんもええけど、よかったらもっとええ人紹介しまっせ。金の慾しい人やないやろけど、あんだやったら、ええ目して、一回で一本ぐらいになりまっせ」

女中は片手をあげて人差指を出した。

「行き過ぎのないように、手伝いがたら、わてが付き添いまんねん、恰好の悪い怪我したりせえしまへんで。心配おまへん」

自動扉は薄暗いフロントと廊下の一部を現わして音高く開いた。胸の一部が一瞬ずり落ちて空洞になったような衝動は、閉じて静ま

った扉とともに平静に返っていた。

「おカツさんいる？」

この言葉は教えられた暗号なのだ。若い女中は出て来たフロント側の廊下へ身を引いて、婆さんが待ち兼ねたようにすぐ顔を出した。

「ほんまに、この前は無駄を踏まして、済んまへんでしたんなあ。もうじき見えまっしゃろ。部屋へ案内しまっせ、どうぞ」

婆さんに促がされてその部屋に這入ると、狭い通路が続いていて、右側は黒のカーテンが垂れ下り、左側は縁が磨りガラスになっている透明なガラスの壁で、巨大な長円型のその透明部分越しに、広い浴室が見えた。

浴室は進行方向に沿って縦長になっており、凸字形の浴槽の前方は白い広々としたタイルで、後方部屋の入口側の壁と浴槽との間には人一人横たわれるほどの幅をあけて那智石が敷き詰められ、その上に白石が二つ重ねてあった。浴槽の浅い底には二人並んで横たわるように彫り込みがしてあって、向う側のタイルの壁に接した浴槽の縁が、小高く盛り上がり、枕になっていた。

その浴槽に身を沈めて煙草をのむ中年女のかたわらで、脚を噛む那智石の上に正坐して

白石を抱かされていたことがあったような奇妙な錯覚が、湯煙りに混じる煙草の匂いまで伴ってわたしを捉え、軽いめまいをふと覺えたのは、やはり、極度の緊張と意識しない被虐願望のせいだったのであろうか。

さきに部屋の奥へ行った婆さんが、正面の窓に黒いカーテンを引くと、シャンデリヤが鮮やかに浮んで、人工の深夜はたちどころに部屋に満ちた。

突き当りのその窓側に大きな鉢植のゴムの木があり、その前に堅牢な木製椅子が二つ覗いていた。近づくと、その木製椅子の前にあったのは、加虐と凌辱の台に使われるであろう、極端に細長い六本足のテーブルで、その上に俯せに置かれた犠牲者の下腹部のくるあたりには、大きな穴がくり抜いてあった。テーブルの向う側には、大小二つの赤黒いピロイド張りの応接椅子。

立ちどまったわたしの視線は、やがて現れる女が腰かけるそのピロイドの椅子の背後、左端の洋服ダンス横から壁にずらりと吊り下げられて左側寢室を包む黒いカーテンのそばまで並んでいる、各種の鞭、ベルト、鎖などに吸いつけられた。手錠はなかった。

「小道具揃うてまっしゃろ。突っ立っとらん

と、かけなはれ」

その並んでいる責道具の前に立って、そう言った婆さんはカーテンを引いて寢室へ這入って行った。

「大きなベッドでっしゃろ。三、四人で使わはる人もおまんねんで」

片側には、いまその横を通り抜けた浴室側のカーテンが垂れ下り、片側は一面の鏡だった。直角に交る太いカーテンレールをがっちり受け止めて立っている直径三十糎ばかりの黒塗りの鉄柱。浴室側のカーテンを入口の壁の方へ寄せてしまったら、この鉄柱は部屋のほぼ中央にベッドを見下して立つ拷問柱ではないか。

その鉄柱以上に生々しく情慾を唆ってわたしの眼を釘付けにしたのは、眼前に現れたベッドの足もとになる部分が木枠よりも敷布の方が高くて、木枠に真鍮の環が三つ垂れ下がっていたことだった。

△入口の壁側にあるベッドの枕もとにも、この環はつけられているのであろう。両手を広げたY字形にベッドに縛りつけて、足のうらを婆さんに鞭打たせながら、女はわたしを貪り、からかうような愛玩の言葉を口にしないだろうかV

わたしの妄想はベッドの枕もとにある電話機を使った婆さんの声にさえぎられた。

「奥さん？Aさん来やはるまでここで一緒に待ってま。ふふふっ、何言うたはんの。オバアチャンはね、銭にならんのに男ひっぱたりしまへんわ。奥さん、Aさん来やはれへなんだら、どないしまひよ、ふ、ふっ」

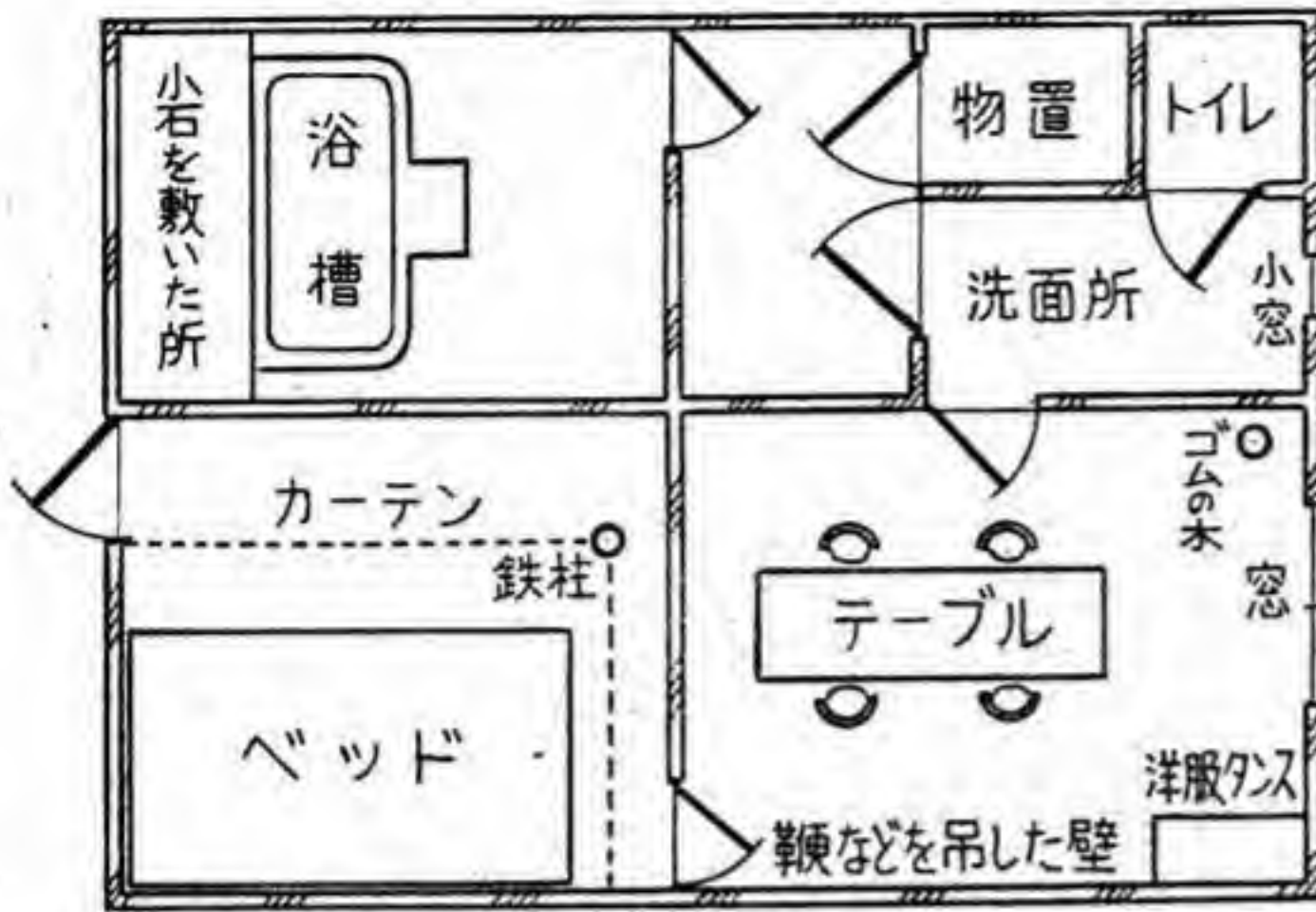
カーテンを、もと通りに張った婆さんは、わたしの前の、大きい方の応接イスに腰を降した。

「このホテル持ってる人の」にやりと笑って小指を一本出して片手を上げた。「これだね。ここの経営者言うのが、おなごに責め折檻の真似してもらわな埒があかん人であ。奥さんも好きやからよろしおまっけど、手伝うこっちゃ仕事やし、この年でっしゃろ。ふらふらだすわ。第一、若い女郎責めんのと違おうて、中年の男の体は、ほんまに色気も何もうて、艶消しや」

わたしは遣り手婆をしていた女だろうと思つて、尋ねた。

「遊廓のあった頃は、経営者がひどい折檻もしたそうだね」

「あんたはんみたい年頃でも遊廓知ってなはるか？」



「もう三十過ぎてる」
 「ほんま？そんなこというたら、あきまへんで、二十五、六やいうときはなはれ」
 話しているうちに婆さんは、関係文献を二、三読んでいただけのわたしを、すっかり道楽息子と勘違いしてしまった。
 ドアの音がした。

「どうぞ、お待ちしとりました」

婆さんは立って入口の方へ歩み寄った。わたしは両手を膝の上に置いたまま俯く自分をどうしようもなかった。

女はわたしの前の大きな椅子に「奥さん」は、その横の小さな椅子に、婆さんはわたしと並んで同じ木製椅子に坐った。

渋い緑の小さな木の葉が散っていて、その木の葉と木の葉の間の布地が薄く透いているワンピースの頸の周りに緑の石と小さな黒石を繋いだ頸飾が下がっていた。中背、瘠身で奥様風の五十女だった。額に少しばかり木目の細かいネットがかかっている、枇杷の葉ほどの大きさの焦茶のレースがおとなしくセツトされた頭髪の上にあって、そのネットを抑えていた。顔は丸くて、やや小さい。

「この人なの？」

「おかッさんが、うちのホテルの中でスカウトしましたんや」

女主人は、後を追って遣入って来た若い女中の置いて行ったオレンジ・ジュースを、女とわたしの前にすすめながら、笑顔を見せた。婆さんが面白そうにすぐ口を挟んだ。

「この人、親類の未亡人の人にいじめられて、靴下はくのを忘れて出て来やはりまして

ん。この部屋とは違いまっせ」

女はにっこりと笑った。性的虐待を含めて恣に享樂するために、若い男を買おうとする五十女の凄まじさは、わたしの予期に反してそこにはなかった。若い恋人を探して、帰らぬ青春の面影を偲ぼうとする初老の女の優しさをさえ感じて、わたしも微笑を返した。

「じゃ、どうぞ、ごゆっくり」

すでに話をつけていたのであろうか、女主人は生真面目な顔をして席を立った。わたしをバナナのように叩き売りにする必要はなかったと見える。

「纏まったお金か、月々の生活費が必要なの？」

「……」

「ほんの出来心の遊びなんじゃない？」

金で縛られて惨たらしく弄ばれてみたいという、自虐の心が、女の言葉に反撓するかのようにならんと強まって来て、別に頬も火照らなかつたのをさいわい、わたしは女の眼を見、ふてぶてしい、下品な言葉を口にした。

「小遣が欲しいんだ」

「そう。ま、金額のことは、帰りに決めたいわ」

女はいささかの動揺も見せず、わたしの視

線を捉えたのち、婆さんに顔を向けた。

「この子、湯へつけられるようにして」

たぶん席を立った婆さんがにやりと笑ったのであろう、女の顔に嫌な微笑がちょっと現れて消えた。

「脱ぎなさい、ここで」

女はわたしに顎を向けてそういつてから、ハンドバッグから煙草とライターを出して、火をつけた。

「あんたは、パンツをはいて風呂へ這入るの？」

「これは、みずから求めた遊戯なのだ」

そう自分にいい聴かせて、わたしは両手で前を覆って立った。女は黙って煙草をのみ続けた。

と、婆さんが、どこで脱いだのか、どこから取り出したのか、湯文字一枚の三助姿になり、手に青いビニール張りの細引きを下げて現れるや、いきなりわたしの手を取って、後手に縛りにかかった。二の腕にも紐を廻す本格的な束縛だった。

そして婆さんも黙ってドアを引き、わたしの肩を小突いて、浴室へ促した。

ドアを開くと一坪ほどの洗面所になっていて、右に小窓、左に浴室へ這入るドアが開い

ていた。正面の壁は右端にトイレのドアがあったが、浴室へ這いると、その正面の壁は浴室の中にドアのついた物置だったのだ。木馬状の台、二、三の木製の棚、変な十字架のようなものや、綱や紐が放り込んであって、脱ぎ捨てた婆さんのエプロンやワンピースも見られた。

「少々ひっぱたかれても、湿布して一晩寝たら殆んど分らんようになってまっさかい、心配しなはんなや」

婆さんはようやく恐ろしくなつて立ち竦むわたしを尻目に、木馬状の台を引っぱり出して、浴槽の突き出た部分に跨がせた。部屋へ連れて来られたときは気がつかなかったが、その上に滑車が下がっていた。絞首刑の真似をしようとするのか、（とわたしはとっさに勘違いしたのだ）西部劇に出て来る首吊綱と同じものを取りつけた。

壁には、その滑車の綱を止める金具が一つと、上の方に鎖が三つ内蔵されており、同じ鎖は那智石を敷いた側の壁にも、下の方に二つ付いていた。木馬をしまつて婆さんは浴室を出た。

浴室というよりもむしろ性的悦楽のための拷問室だったのだ。そこに一人後手に縛られ

て立っている自分を省察して、自分がマゾヒストでもなく、また男妾の真似も出来る者でなかったことを、はつきりと知った。が、すでに遅かった。

薄く透き通る黒いネグルジェを着、金色のけばけばしい寝室用のネットを帽った女が現れ、そのあとから婆さんが短い犬鞭と一緒に木製椅子の凭れを握んで曳いて来た。

「さあ、入りなはれ」

足のうらだけが耐えられる熱さだった。股を開いて椅子に腰かけ、新しく火をつけて来た煙草を二本の指に挟んで口に横啜えにしている女に魅せられて、辛うじて両脚を漬けたとき、うなりとともに婆さんの鞭が背中を襲った。よろめいてようやく浴槽に倒れるのを防ぐと、すぐ第二撃が当たった。

「早ようつからな、余計につかりにくくなりまっせ」

女は無言。遊びの気分は吹き飛んで、激しい当惑と悔恨とが狂ほしくわたしを捉えた。

「やめてくれ！帰る！」

声をあげて女に迫った。女は黙然と喫煙を続けた。

「這入らんかいな！」

婆さんに腰を蹴られ、悲鳴をあげて浴槽に

のけぞった。

「わめいてーのたうって！さあ！さあ！」

跳ね出そうとするわたしを、平たく萎びた乳房を下げて、金歯をむき出した鬼婆が、力任せに浴槽の縁を打ち続けた。白い湯文字がその湯しぶきに濡れて、腰にべったりとついていたのを憶い出す。

「もうええやろ、洗って」

女は立ち上って滑車に下がる綱を引いた。

婆さんは白いタイルの上に俯せになったわたしの片足を持ち上げて、綱を締めつけ、滑車

の音をききませて、腰の高さぐらいにまで引

上げた。婆さんがわたしの体を調べたのは、

そのときだった。

「かぶせる必要おまへんで」

「そうやろ。いま定期入れ見たけど、ま、あ

んたの診断信じてよさそうね」

「ええ会社へ勤めてまんのか」

女は婆さんの問いに答えず、鞭を拾い上げ

て近づき、拘束してない片足を掴んだ。わ

たしは女の表情と姿態を求めて、頸を限度一

杯にまげ、女を見上げた。眼は冷い光を帯び

煙草を捨てた赤い唇は半ば開かれて、やや低

い鼻がその鼻孔を拡げていた。空想のなかで

焦れた魅惑がそこにあった。が、それもひと

とき。女はすぐわたしに襲いかかった。頭や

胴を蹴られては臀部を狙い打たれて、激痛と

ともに白いタイル床が眼前で揺れ動いた。

女は鞭を捨ててまた椅子に坐り、婆さんが

石鹼をつけて体を洗っては水をかけるのを眺

めた。そして、水気を拭い取られて綱をはず

されたわたしを、待ち兼ねたようにしてカー

テンの中に引き立てた。

【最新版】 ニューモデル悦虐写真五十集

K組五十集 大手札判印画紙(9×13種)焼付

| | |
|--------|-------|
| 一組一枚 | 一五〇円 |
| 五組五枚 | 五〇〇円 |
| 十組十枚 | 九〇〇円 |
| 二十組二十枚 | 一七〇〇円 |
| 三十組三十枚 | 二五〇〇円 |
| 四十組四十枚 | 三二〇〇円 |
| 五十組五十枚 | 四〇〇〇円 |

| | |
|-----|---------------|
| K 1 | 全裸刺青自慢緊縛 (山原) |
| K 2 | 恍惚たる責の境地 (山原) |
| K 3 | 苦悶の表情海老責 (大塚) |
| K 4 | 海老責にあえぐ女 (大塚) |
| K 5 | 全裸のぐるぐる巻 (玉田) |

| | |
|------|---------------|
| K 6 | 豊満な臀部を晒す (刑部) |
| K 7 | 厳しき縛りに酔う (山原) |
| K 8 | 荒縄で仕置される (美木) |
| K 9 | 土壇に観念した女 (美木) |
| K 10 | ムチ打たれる女囚 (美木) |
| K 11 | 縛り人形を眺める (山原) |
| K 12 | 開孔器で鼻を弄ぶ (山原) |
| K 13 | 足首と首を連繫す (大塚) |
| K 14 | 後手の複雑な縛り (玉田) |
| K 15 | 裸縛りに恥らう女 (山原) |
| K 16 | 夫にされる鼻責め (増田) |
| K 17 | 緊縛にあう若妻姿 (増田) |
| K 18 | 猿轡で鼻を虐める (増田) |

| | |
|------|---------------|
| K 19 | 開股縛にあう女囚 (美木) |
| K 20 | 罪状を訊かれる女 (美木) |
| K 21 | 股間縛りの全裸像 (山原) |
| K 22 | 荷造り縛りで晒す (玉田) |
| K 23 | 革拘束衣で括らる (大塚) |
| K 24 | 庭木に立縛りなる (木村) |
| K 25 | 柱に晒される裸身 (玉田) |
| K 26 | セーラー服しぼり (大塚) |
| K 27 | 高手小手首縄緊縛 (山原) |
| K 28 | 黒輝豊満刺青縛り (山原) |
| K 29 | 踏みにじられた女 (山原) |
| K 30 | 古墳にて吊り準備 (木村) |
| K 31 | 拷問にあう裸女賊 (山原) |
| K 32 | ロープブラジャー (山原) |
| K 33 | 嚴重な後手縛猿轡 (刑部) |
| K 34 | エビ縛りにあう女 (木村) |

| | |
|------|---------------|
| K 35 | イルリのある風景 (大塚) |
| K 36 | 麗しき裸身を晒す (大塚) |
| K 37 | 亀甲縛り正面裸像 (刑部) |
| K 38 | 豊満乳房縛り上げ (山原) |
| K 39 | 全裸を投げだして (山原) |
| K 40 | 縛しめに哭く乙女 (木村) |
| K 41 | エビ責め放置十分 (木村) |
| K 42 | 豊かな全裸を緊縛 (玉田) |
| K 43 | 観念アグラ縛り囚 (玉田) |
| K 44 | 笑顔を縛る強烈さ (刑部) |
| K 45 | 猿轡の下にあえぐ (刑部) |
| K 46 | 縛りに典子の素顔 (刑部) |
| K 47 | 伸びやかな裸縛り (刑部) |
| K 48 | エビ縛り刺青姐御 (山原) |
| K 49 | 立木より逆さ吊り (木村) |
| K 50 | 裸身の緊縛と羞恥 (玉田) |

| |
|---|
| S |
| M |
| カ |
| メ |
| ラ |
| ・ |
| ハ |
| ン |
| ト |

いざわなみこ まき
 井沢南海子の巻

「黒の幻想」

辻村 隆

数葉の暑中見舞の葉書の中の、絵葉書の一
 枚に、私はおやっと目を惹かれた。小さな美
 しい女文字に見覚えはなかったが、それが長
 田実氏の奥さんからであった事が、私には珍
 らしかった。模範的な夫婦プレーのお二人
 で、長田夫人の端麗な緊縛ポーズは、かつて
 奇クサロンでも評判になったことがある。

若狭湾国定公園の、敦賀花城展望所より気
 比の松原を望む絵葉書の表には、こう書かれ
 てあった。

「暑さ厳しゆ御座いますが、其後皆様御壮健
 何よりと存じます。唯今主人とこの地に車で
 旅行しております。平素は主人が大変に御世

話さまになりましたして有難う御座います。本当
 に毎日暑い連続でございますね。何かと御
 迷惑お掛けいたしますが今後共よろしく御指
 導御鞭撻の程お願いします。暑さの折柄大切
 に。先はお見舞いまで」

同好者の方々の暑中見舞は頂戴しても、奥
 さんから、斯様な懇切なお見舞状は長田夫人
 が始めてである。あの淑やかな、大きな声で
 ついぞ喋べつたことのない夫人が、長田氏の
 好みを甘受されて、夫婦プレーにはありとあ
 らゆるプレーに協力し、同調しておられるの
 が実に奥床しく思えた。しかも、こうして主
 人である長田氏への暑中見舞に托した繊細な

配慮は、彼女の賢夫人たることを如実に裏書
 していた。

久しく忘れていた長田実氏への懐旧が、夫
 人の一筆によって、私に湧き上って来た。

旅行中を考慮にいられて、数日して、私は彼
 の勤務先へ電話した。久瀧をし、奥さんのお
 見舞状の礼を述べる。彼は元来性急な性分
 方であるが、その時も挨拶もそこそこに話を
 いきなりカメラ・ハントの方へ持っていっ
 た。いい娘が一人いて、現在小当りに当って
 いるが、是非撮らないかと云う。それは願っ
 てもない話だし、兎も角電話では辺りに憚か
 って精しくも言えない、と言う。夕方退社後

写真 (A)



ミナミで逢いましょうとの早速の話。私も取立てて要件もないので、応諾して電話を切った。話は思いもかけぬところから転がり込んでくるものである。

× × ×

繁華なミナミの戎橋筋の、街角の喫茶『マリモ』の二階で私は約束の時間、長田実と相対していた。近頃ぼつぼつ甘いものも僅かながら摂るようになって、それでも幾分加減して、私は相変らずレモンスカツユ。彼はコー

ルコーヒ。長田実は少々身を乗り出す様にして、手振りも交えて語る。最初のヒソヒソ声も、いつしか熱が入って次第に大きくなりつつある。

「どう、イケそうでしょう。相手は先程も言った様に、パートタイム制の仕事だから、かなり時間の自由もきくし、ボクの当たった処ではカメラもOKといってるんですが流石に緊縛の点までは話し難くて、その事は未だ

告げていないんですよ。ボクの妹の同級生という点で一寸引かかるんだが、女学生当時よくボクの家遊びに来た頃から気心も知っているし、それにこれはボクの慾目かも知れないけど、少しボクに気があったように思うんですよ。ここから十分も掛りませんから、辻村さん、どうです一度逢って見ませんか」彼は多少のろけも交えて、しきりに奨めてくれる。当の女性は井沢南海子という二十六才の人で、今も彼がいった通り、妹の同級生

で、高校時代、よく彼の家へ遊びに来たらしい。妹が不在の一日、応接間で井沢南海子が妹の帰るのを待つ間、彼はフト悪戯心と好奇心の織り交った若い情熱で、強引に接吻し、抱擁したという。彼女は猛烈には拒まず、許容した態度を示し、彼が冗談半分に彼女の両腕を後にねじて、両手を後手に重ねて握り、体ごと抱きしめたが、じっとしていたというのである。妹が帰って来なかったら、事態はもつと進展していたかも知れないと、長田実は残念そうな口吻である。

妹も嫁ぎ、その後は井沢南海子について逢うこともなく、彼の脳裡からすっかり忘却していたのに、心斎橋筋のメンズ・ショップでごく最近彼女とバツタリと出合ってしまった。奇遇で喫茶に誘い、その後の彼女の生活をきくと、結婚話もあって結納まで交し、婚前交際では、旅行もして、既にすべてを許していた仲だったのに、急に破談になってしまったということだった。理由は男性の方に、彼女と婚約する前、既に約束した女性があって妊娠していた事が明るみに出て、彼女の両親がこの話を壊したということだった。

傷心の胸を抱いて約半歳、もう結婚は懲々と、彼女は比較的自由に自分の時間を過して

いたが、不況のあほりで、父の経営する下着縫製所が苦しくなるにつれて、働らきに出る様になり、以前の知合いで、男子科専門の今の店にパートタイムで勤めているという。

一度写真をとらさないかと、その時いったら、案外簡単に承諾したが、フोटの内容については何も知らない。でも全部裸じやいやとあったそうである。とすると、単なるフोटではないとは彼女自身も男性科のショップに勤めている今、感じている様な口吻であったと、長田実独りで喋った。だからあとは辻村隆の腕次第と煽てるが、そうそううまくゆくかどうか私にも自信はない。折角の話だから、じゃあ一度逢って見ようかと口を滞らせると、間髪をいれず、彼は立上って、レジの傍らの電話に飛んでいった。いわずと知れた、呼出しの電話に違いない。

二十分待って、井沢南海子は「マリモ」への階段を上って来てルームに姿を見せた。長田実が手を挙げて招く。

「紹介しよう、ボクの無二の友人で辻村隆、カメラのベテランだよ（大きくホラを吹いたな……苦笑）こちら井沢南海子さん——」

型通りの紹介で、私と彼女は黙礼してチラリと視線を交す。仄暗いボックスに白く浮上

った彼女のつつまじやかな顔には、羞らいと微笑みが交錯し、妖しい女盛りのなまめかしさが、そこはかとなく漂う。二の腕も露わに、薄着の下に息づく盛り上った胸のふくらみ、すらりと伸びた、かもしか、のようにたくましく、たおやかな脚。そしてその足を黒いタイツがピッタリと絹の光沢を鈍くたたえて包んでいた。真夏に黒のタイツは珍らしい。しかもそ

の黒のタイツは厭味でもなく、彼女の濃目の花模様のツーピースに見事にマッチしていた。婉然たる女体の完成された爛熟の美しさが彼女のすべてから汲みとられた。処女の清純さはないかも知れない。しかし肌で男性を感じ得た、男心をそそらずにはおかない、妖しい豊満な円熟と媚態がなまめいて発散されていた。

最初の男性に裏切られた傷心の痛手を癒さん手段として、男性の遍歴があるに違いない

写真 (B)



と私はにらんだ。

「貴女がお店で、男性客の相手をする、よく売れるでしょうね。私だって、年甲斐もなく、貴女に奨められたら買う気になるかも知れないな——」

「御冗談ばかり。でも、まあ、お陰様で何とか」

井沢南海子はニンマリと笑った。真白い歯がこぼれて、八重歯が印象的に光った。

「ナミちゃん、ホラ、この間いってたでしょ



写真 (C)

う、例のフォートの件ね。いいだろうね。勿論タダで頼みはしないよ、沢山も出来ないけどお礼はするつもりだが（下手、下手。いきなり、報酬のことを言うと言性は嫌がる。欲しくても、素振りに見せないのが、女性のプライドなんだから）ボクはもう辻村さんに約束したんだよ」

「……………」

果して井沢南海子は返事をしない。

「長田さん、実に素晴らしいね、この人は、

私も今迄、随分女の人を撮って来たが、若し撮らしてもらえたとすれば、こんな魅力のある人は始めてだよ（嘘つけ！方便、方便、うまいこといいよる）。是非撮らしてもらいたいな」

私も心得てぬけぬけという。事実魅力のある女性だった。始めてというのは少しオーバーだが、この際仕方ない。女性は自分をより高く評価して貰って、怒る人は絶対にいないからね。果して（又、果してだが）彼女は私に興味をもった様だった。金銭的なことはチャンと頭に入れた上で、努めてその話から避けるのも女性の賢いところ。

「随分撮っていらっしやる様ですね。そんな御商売ですの？」

「とんでもない。純粹の道楽ですよ。女性美の探求をする、これはキリがありません。既にお察しの様に、数々のモデルを頼んで、ヌードを撮らしてもらいましたが、近

頃のように市販の週刊誌にまでヌードが氾濫すると、最近ではすっかり飽いてしまっていますね。よりそれ以上のものを望みなくなるものです。歓喜の苦痛、悦楽の極致、苦悶の陶醉。いろいろありますが、これは見方によっては異常美ともいえましようが、私はそこそこ、真の赤裸々な女の魅力と美しさを感じるので。生々しい迫真力こそ、虚飾を捨てた真の女体の美しさではないでしょうか。」

齒の浮く様なことを喋っている私自身も、何だか薩張り意味が分らないのだから、相手に意味の判らう筈がない。ズバリ、責めの写真、緊縛プレイのフォートを撮らせてくれと頼めば簡単だが、所詮縁なき衆生には、これは無理。だから訳の分った様な分らない様な表現の羅列で、一応気を引いて見るに如くはない。

しかし面白いもので教養のある女性程、何かなし判った顔をしてのってくるから愉快。果して（又、又果してだが）井沢南海子は乗った。

「例えば、具体的にいいいますと、どんな事なんでしょうか。辻村さんの仰有る意味、分る様な気がするんですけど…」

「そう、先ず具体的にいつて見ましよう。」

写真 (D)



厚く蔽っている。悶え、呻き、苦悶する貴女。

「そこにはヌード如き、とりすまし作られた人造美とは較べものにならぬ、素晴らしい、生々とした流動の、偽りなき真の美しさが生み出されてくるのです。もっと分りやすく世間一般のフォトで云えば、写真館でとる、お見合写真、又乙に澄ました学校の集団写真にくらべ、躍動する瞬間をスナップした。自然の笑い、

微笑みの方に、如何に、その人の真の人間らしさを感じるかという事です。

口でチーズと唱えて無理につくった作り笑いと、スナップで真に快く笑った瞬間をとったものを見較べて見て、そのどちらが一生の思い出になるか、これはもう分り過ぎる位判っきりしたことです。この違いですよ、私の言いたいのは——」

ヘンな論理だが、まんざら口から出任せでもない。幾分は的をいているかもしれない。

長田実が傍らで、あきれた様に、半ば感心した様に、私のこの口説きを聞いていた。

黒への魅力を私が強調した事に、彼女は我が意を得たりと思ったに違いなかった。それが私のつけ目でもあったのだ。

「そうでしょうね。黒を強調して撮ればいいかも知れませんわね。私、どうしてか黒が好きですの。神秘的で、グルミーで、シンブルな様で凄く複雑で、それに何となくドラマチックですものネ」

「是非とらして下さい。黒と白のコントラストを。私なりの構図で、充分考えて見ましょう。貴女の肌は凄く白いから（ほら又、殺し文句）もっとよくマッチするでしょう。じゃあ、長田さん、このくらいで」

失礼するよと私は立上った。だから口説くより退け際が肝心、あとは彼に任せておいて大丈夫。私の伏線に副って、彼はきつとうまく口説き落してくれろことだろう。

伝票を掴んで私は軽くステップを踏んで階段を降りていった。井沢南海子の視線を背後に痛い程感じながら。

× × ×

今、私は長田氏の運転するパブリカの後部シートで揺られている。口火を切ったあの喫

番に貴女に言えるのは黒の魅力です。黒のタイツ、黒のブラジャー、そして、それに蔽われぬ貴女の肌は鮮やかなコントラストを描いて、なめらかな陶器の如く真白くぬめって輝きを放っている。その美を耽溺しようと、サタンは貴女の自由を奪ってしまう。ベルトでウエストをくびって締めつけ、革の手錠が犂々と貴女のたおやかな手首をしめつけて行く。喘ぎ、助けを求める貴女に、無情にも、箝口具が、その声を閉塞して、貴女の口を

茶で、あれから一時間許りかかって、彼は井沢南海子を、どうやらうまく口説き落したのである。

彼からうまくいったと、弾んだ声の電話があったのは、午後十時頃だった。車で迎えに行くからというので、一切を彼に任すことにした。

日照りは続き、今日も暑い。八月十三日の金曜日、暦を見ると「三りんぼ」である。アチラとコチラの厄日の重なった今日、車に乗って事故でもあればと、フトそんな危惧をもったが、気にしなければ、それまでの事。私は努めて迷信意識を振り払う様にして、彼を待った。約束の午前十一時きっかり、彼は車で迎えに来た。

そして今、私はシートに凭れて揺られている。車用の小型扇はあっても、車内は熱気が溢れて、ともすれば汗が吹き出してくる。

車は大阪の都心を既に外れて稲葉のそよぐ河内平野を走っている。生駒山脈が蔽いかぶさる様に車窓一杯に立ちはだかり、急坂がつづいている。近鉄特急が山の中腹をうねりながら、昇って行くのが隠見される。ここは石切の近くか――。

「市内よりは、少し涼しいですよ。知ってい

る旅館がありましたね。岩風呂が又風流なすんでよ。もうすぐです」

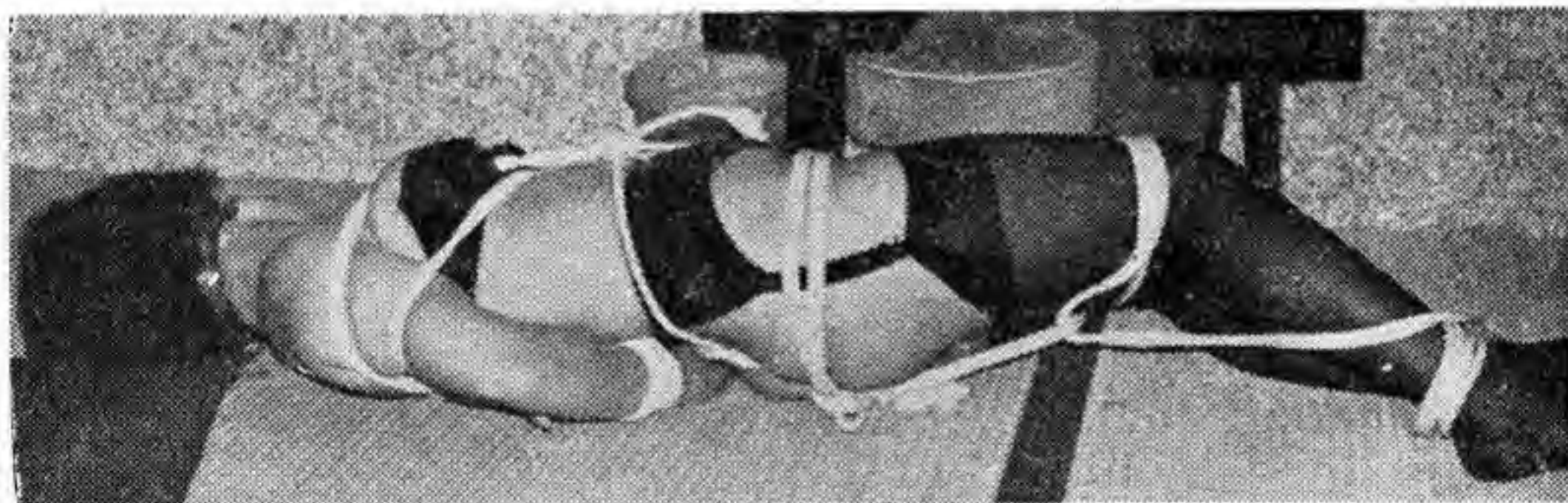
長田氏は勝手知った道程か、くねくね昇る山腹の舗装の細道を、一向気にもかけず、巧みに運転していた。

目指す旅館は木立隠れに古風な構えで、ひっそりと静かな中にあった。

「連絡しといたけど、女の人見えてますか」

「ハイ、十分許り前に……」既に井沢南海子は到着しているとの、女中の口振りだった。

車のリヤーシートから、三脚やら、アクセサリをぎっしりつめた黒の大鞆をとり出すと、長田氏は照れもせず、ズンズン奥へ通っていった。私の荷物は黒のいつものバッグ一つ。中味は小型カメラとストロボと



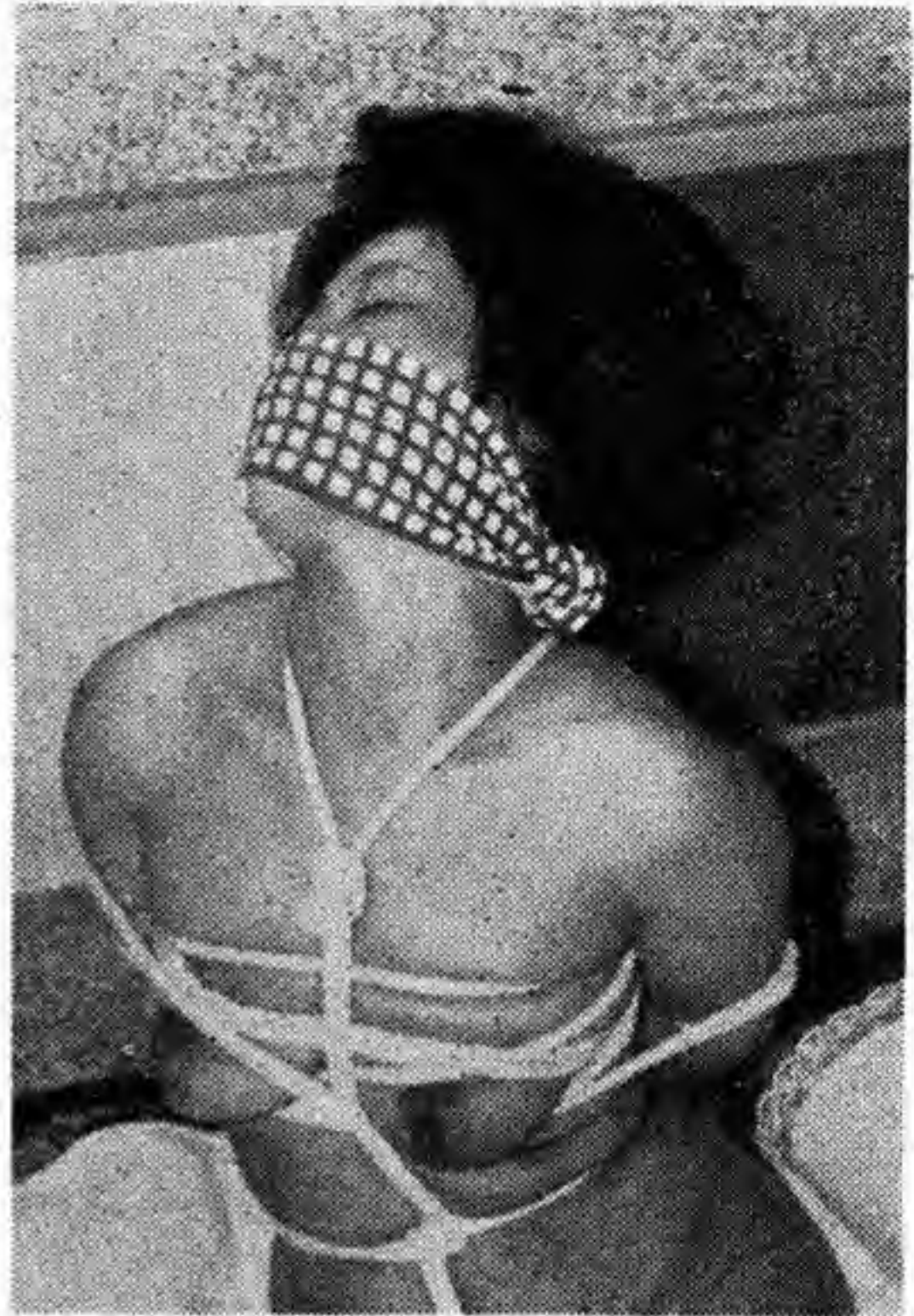
数条の縄が入っているのみ、お膳立てはすべて長田氏が整えてくれて、彼は大張切りであるに反し、私はその膳立ての今日のプレイ料理を頂戴すればいいだけに過ぎない。

「あれッ、いないですよ。岩風呂へでも行ったのかな。あ、きっとそうですよ。服とバッグが乱れ籠に入っていますよ。ノンキな奴だな。どうです、先に一風呂浴びますか。なあに押しかけたって構いませんよ。今更逃げも隠れもしないでしょうからね」

暑かったので、私も賛成した。浴衣を抱えパンツとランニングシャツ一枚になつて、のこのこ長田氏の後に従がう。廊下を突切った奥に扉があった、それを押すと、すぐ

岩風呂の脱衣室だった、混浴ではないが、アベツクや、同伴、夫婦連れ

写真 (F)



けてくるなんて」

少々批難めいた声で、

シャボンだらけのタオルで胸を掩った。

「あれッ失礼、女中さんがどうぞお風呂へと言ったもんだから、いいんだと思って——悪いから待とうか」

洒々と長田氏は言っ私に目配せする。タオルで前を押えて、二人によつきり佇立しているのもいい恰好ではない。

「今更、仕方ありませんわ。いいわ、どうぞ」

は、大概一緒に入るそうで、時にはダブっても、客さえ承知なら、文句もいわないらしい。近くに豪勢に建つ五洲閣の様に、展望はきかないが、梅や竹藪や、さまざまな樹木で自然の囲いとなった岩風呂は、これはこれで又雅趣に富んでいた。

私達が裸で立現われた時、井沢南海子は、全身をシャボンの泡で包んで、体を洗っている真最中だった。

「まあ、ひどいわ、レデイの入浴中に押しか

南海子はあきらめたのか、心持ち体をよせるしぐさをした。ジロジロ凝視するのは失礼に当る。私は努めてさりげなく振舞い、風景を賞で、今日から始まる全国高校野球の優勝校の下馬評などしていた。しかし、この空気は、彼女と私達の隔たりを、一挙にとり払ってしまった感があった。私達は早風呂である。早々に汗だけ流して忽ち上る。戻りは三人連れの恰好になってしまった。

いつしか南海子の言葉遣いの端々に、じつと碎けた親しみと心易さが交っていた。

× × ×

いつもながらの緊縛への過程は先ずヌードから、そして極くシンプルな型通りの縛り。それは省こう。冗慢になる許りだから。

既に初期の目的である黒のイメージの第一歩に、私達は到達しつつあった。

準備万端、長田実が整えてくれ、しかもその装填は、すべて彼が引受けてくれた。私は唯、第三者の様に傍観し、その推移を刻々カメラに納めればよいだけだった。今日のカメラ・ハントの主役は長田実であり、私は傍観者に過ぎないのに、私は自分のカメラ・ハントの様に描写するが、些か気がひけるくらいである。

井沢南海子は意外なくらい易々諾々と、彼の命ずる尽、為すが尽に協力し、同調していた。その顔に嫌悪の相はない。

「余り判っきり、顔をとらないでね。若し長田さんの妹さんに、何かの事で見られた場合、恥かしいし、誤解されると困るもの」

と、時々正面から撮ろうとすると、顔を背け、そんな程度の発言のみで、プレイに対する批判や難詰は一切しなかった。大胆に肌を

曝し、身を投げ出して、私達のプレイに順応する彼女は、矢張りおそい昼食時の過度のアルコールの摂取が、より彼女を大胆にさせているのかも知れない。ぼっと桃色づいた肌、桜色に染った双眸のほとり、うるんでキラキラ輝く瞳、そのすべてが、少し度を越したアルコールのせいであるかも知れない。

「彼女、わりかし飲む方でしてね。ビールぐらいじやコタえんで、サントリーの小瓶持参しましたが、その方がきつとプレイし易いと思うんですよ。婚約が破れた頃、よくトリスパやハイボールスタンドへ、女友達と出掛けて、大分腕を挙げたらしいです。心のウサを酒で晴らす、そんな古風なところもある彼女ですよ」

道々、車中で、長田実とは、そんな事をきれぎれに私に話してくれたが、昼食事も、彼女はつがれた洋酒を、のみっ振りよく口に運んでいた。風呂上りと昼酒がどっと体中を駆け巡ったのであろうか、物憂げな瞳が挑発するかの様に、崩れた姿勢で妖しく、体をくねらせ、身を投げ出すかの様に見えた。

今更、くどくどした説明もいらず、その刹那を逃さず、私達は支度を始め、一時間も経たずして、黒の予定のプレイに到達していた

のであった。私も彼も、洋酒はおつき合い程度だから、すっかりしていた。こちらが一緒に酔っ払ってしまったのは「骨折損のくたぶれ儲け」になりかねないからだった。

すべてぬかりなく準備を整えた筈の長田氏が、肝心の黒タイツを忘れてきたのには、ガツカリしたが、いざ撮れるとなると、嬉しくなって、得てしてこういう事が起りがちである。

兎も角黒で行こうじやないかと、彼女に黒のストッキングをはいてもらい、パンティの上からガーターで吊った。ウエストに太い黒の革バンドを配し両腕をバンドでしめつけ、両肢を通して、後手を革手錠で結索する、長田氏苦心の作による革の結索具を装填する。

ついで革の箝口具で、これは口唇に当たるところに突起があつて、それが口腔に深く埋没する様になっていて、これを装填すると、呻き声も洩れない様になっている。この箝口具を、後頭部の尾錠でしめつけて、一応彼の装填は終る。(A・B) 酔っていて、少し苦しいのか、井沢南海子は眼を閉じてあけ様としない。この居間はアベック用なのか、たみ敷きの洋間まがい、アパートなんかによく見かける体裁をとっている。

「辻村さん、見ていないで、一度縛って見たらどうです。ボクばかり、やってる見たいだなあ」

長田実が少し疲れたのか、私に声をかけたので、しからばと、次は私が乗り出す。

彼の持参した、革の責具を一応外し、私は私なりに黒で徹底したく、彼がその儘、結索した、井沢南海子の白のブラジャーを剥ぎとると、長田氏の持参した、黒のなめし革のブラジャーに変えた。私は私なりに、やはり緊縛は縄を使う方が好きである。南海子はうっとりとした眼で、私のなすが俤になっている。上体が左右に少し揺れるのは、酔いのためでもあろうか。豊満な胸のふくらみは、革のブラジャーを圧して、盛り上っていた。私は黙々と、彼女のパンティをとり、代りに、アンネの編みパンティをつけさせた。粗い編みの目はゴジツクとなって、彼女の生まの体を辛うじて蔽っているに過ぎない。だらりと垂れ下った両手を捻じ上げて後手に真白なロープで縛り、胸に廻して二捻じ、三捻じ、腰から更に二の腕に廻してぐいと締め上げる。ウーツと声にならぬ呻きが彼女の箝口具の奥より洩れる。この立ち姿を、前後からシャツターを切る。(C・D)

よろよろとよろめき勝ちな彼女を、私は粗々しく体ごとぶつける様にして押し倒す。ぐらりと揺れて、どたりと彼女はタタミに転がった。私の気持は徐々に、そして、今は急激に荒やいでいった。アンネの編みパンティを剥きとり、更にもう一本のロープで股縛りして、余った縄で彼女の両脚を縛り上げる。カメラを近づけると、それでも彼女はやはりこちらを向けていた顔をそむけてしまう。酔いと激しい緊縛に盛り上った胸は喘いで浪を打っている。長田実が、その横転のポーズを前後左右からシャッターをきる。ストロボがその刹那刹那、白くきらめいて、音もなく静寂の部屋の空気を掻き乱す。(E)

もう私の心は、平静でいられなくなっていた。いつしか、私の手には無意識に一本のロープが握られていた。試みの一曳——。尾を曳いて、ロープは彼女の厚い胸に飛びかい、声もなく、全身に悶えを見せて、彼女は一転した。朱を刷いた様に一曳した個所が赤く染まる。更に仰臥して剥き出しの臀部に一振り、ムムと呻いて、井沢南海子は部屋を二転、二転、転げ廻る。長田実が気遣わしげに私を見守っている。

その悶える姿に私のストロボが発光する。

パツと白く光った瞬間、更に大きく、窓に曳光が走る。つづいて雷鳴。おどろおどろと雷鳴は生駒の上でなり響き、とどろき始めた。

間断なく閃光はまたたき、窓は漆黒となって溶闇に包まれて行く。雷光と雷鳴はかしましく、井沢南海子の喉はひきつり、恐怖の瞳孔は次第に拡大してゆく。時を措かずして、激しい車軸を流す夕立がバチバチとしぶきを白くはね上げて窓を撃ち出した。

「黒はもう、このくらいにして、緊縛でゆこう——」

私は南海子と長田実のどちらへともなく、稍々、命令調で調う。長田実はうなずき、井沢南海子は黙して応えず。私はさながら、この夕立に歩調を合わせるかの如く、粗々しく彼女の黒を剥きとっていった。偉大な夕立が彼女を虚勢させたのか、いつしか酔のさめ果てて、蒼白く、蛍光の光に浮び上る彼女は、裸体をたたみに投げ出して凝然と身動きもしない。私の手は素早く彼女の両手を握り上げて後手に廻していた。首縄にして乳房からこの腕を犂々と締め上げて、余剰の縄を股へと通し、ぐいと臀部で引き絞る。長田氏がタイミングよく差出す猿轡の格子縞の布片。いつも長田氏夫人の口辺を蔽う、あの懐しき猿轡

の愛用の布だ。私はとり上げて、彼女の口をしっかりと蔽う。むき出しの体を二人で抱えると、二の間の、誰の為に敷かれたのか、純白のシートが目にしみる。ダブルマットの上へどさりと投げ出す。長田氏が髪を掴んでぐいと引起す。観念したかの如く、閉じた瞼の奥底に、心なしか、陶酔の萌しが見えるのは私の僻眼だろうか。(F)

いつしか主役は長田実より私に移行していった。私の粗暴とも見えるプレイの陶酔に、彼は半ば懼れ、半ば心酔しているかに見えた。そして、一気に、彼女をこのプレイの極致にまで進行させた私の手腕を、羨望しているかの様に凝然と佇立していたのである。

無念無想とは、彼女の現在の心境ではなからうか。そしてその無念無想の中に、プレイに耽溺して悔いを止めぬ、彼女の陶酔の悦楽が脈々と浪打つ、その胸底から汲みとれる様に、私には思えたのである。

× × ×

最寄りの駅、近鉄の奈良線「額田」で、私は二人と別れ、潔きよく車中の人となっていた。長田実は恐らく今日の経験を基として今後彼女との、プレイを通じての交際を始めるかも知れない。さもあらばあれ、それもよし

私は私なりに久し振りの悦楽の満足感で、快く疲労して体を、列車の震動に委ねていた。別れ際、そっと私に手渡された小型の女名刺。それはあながち、私の彼女のプレイに対する報酬への儀礼的なものばかりでないだろうと受け取るのは、私の慾目であろうか。車は私を駅に残して、再び坂道を下っていた。彼女は、アルカイツクな笑みをたたえた。

て小さく手を振っていた。今日のプレイに彼女は決して怒っていない、むしろ、さばさばした、心のうさの捨てどころを見つけた様な爾後の立居振舞だった。所詮は長田実が独占する彼女かも知れないが、折あらば又いつか巡り合えそうな気もする井沢南海子。私は彼女の真の幸福を乞い希う気持で一杯であった。私にとって十三日の金曜日は厄日でなく、

意外にも、近年稀な善き日でもあった。列車が終着駅につくと、そこに池田前首相の死去が報じられてあった。私にとってはグッド・デイでも池田家にとっては、やはり最悪の十三日の金曜日の三りんぼであったのか浮世の奇妙な輪廻を感じつつ、私は早くも今夜このフィルムの中のD・P・Eの愉しさに胸をはずませ一路帰途についていたのである。

新人モデル美木乃々子嬢の熱演

大好評注文殺到

キャビネ版印画紙焼付

各組三枚一組 五〇〇円
八組全部にて 三五〇〇円

日本女性拷問刑罰集

美貌で清潔感溢れる新人美木乃々子嬢の体当たり演技と読者有志のセッティングで並に責役出演とによって完成された「日本女性拷問刑罰集」は、発表以来、大好者の間で大変な評判を賜わりました。是非一組、お求め下さい。

木馬責め

三枚一組 略号(もと)

後手高手小手に縛られた女囚が三角木馬に跨がされて、その痛さに髪ふり乱して泣き叫ぶ姿――。

海老責め

三枚一組 略号(もに)

両足の拇指はくの字にそり反って激しい苦痛と羞恥に悶えぬく凄絶な女囚の海老責め。

笞打ち折檻

三枚一組 略号(もほ)

白州の粗砂に引き据えられた女囚は高手小手首縄に絞られて竹のささらで、肩口を叩かれる。

土壇で胴斬り

三枚一組 略号(もり)

白紙で目かくしされた女死刑囚は土壇に仰向けに横たえられてい。白刃一閃、哀れ女囚の腹は。

石抱き算盤責め

三枚一組 略号(もへ)

柔かい脛に算盤板のギザギザが喰い込むのに更に膝の上へ伊豆石をのせて非人が揺さぶる痛さ。

竹棒責め

三枚一組 略号(もち)

白州の上の女囚がどす黒い捕縄で厳しく縛られ非人の手で竹の棒を縄目に捻じ込められて呻く。

開股羞恥責め

三枚一組 略号(もぬ)

腰の乱れを必死に防ごうとする真白い足を八の字に開かせて足首に非情の縄をからませてゆく。

白洲に悶える

三枚一組 略号(もは)

均整のとれた見事な肢体と肌、殊にすらりと伸びた脛と素足をあらわに投げだして悶える女囚。

(愛読者原稿)

亜紀子奇譚

(後篇)

麒麟児 久

~~~~~(モデル五月亜紀子のことについてなど)~~~~~

## 一、催痒剤の効能

諸君は痛いのと痒いのと、どちらが好きか、いや嫌いかと問うべきだが、どちらも我慢できない苦痛である。

しかし、まだ痛感の場合は、鉄のように強靱な意志の持主なら、ある程度は忍耐もできようし、痛感と快感は紙一重の裏表ともいわれているから耐えられるかも知れない。これを立証するのが、マゾヒストである。

だが、いかに被虐性嗜好者といえども、全身をダニにチクチクと咬まれるような耐え難い痒ゆみに、快美感を見い出すことができる

だろうか。

誰か奇ク読者の意見を聞きたい。

——さて、全身にトロロ責めを受けた五月亜紀子は、その後どうなったか。

亜紀子は、トロロ汁だけでも肌がかぶれて掻きむしりたいように痒いのに、あのヒリヒリするニンニクと胡椒のエキス、醬油の塩分でいやが上にも刺戟されて、畳の上を転がり廻っていた。

「そろそろ処女号を使う時が来たようだな」

亜紀子の両手首は交互に緊縛されている。それではいくら痒くとも、せいぜい両脚をこすり合わせて、膝から下を掻くことしか出

来ない。大胆に片足を挙げれば、腰から下なら好きなように掻く事ができるが、鬼頭に眺められている中で亜紀子にはそんな事は、とてもできなかった。

「あつ、耐らない。身体中をダニに咬まれるよう、アツ。痒いっ、あつ早く早く鞭を、鞭を頂戴。ああ、痒い、痒い」

「遠慮なく掻いてくれと言ったら、どうだ——一番熱心に塗り込まれた場所を掻かれるのが恥しいか」

「嫌っ嫌っ、そんな事、それより亜紀子に、鞭、鞭を——」

亜紀子は熱病に唸されたように、熱っぽい



吐息を洩らして喘でいる。両眼を虚ろにして、だらしなく口元をひろげて全身を畳の目にこすりつけている。

「どうだ。よく効くだろう。女に鞭打ちの喜びを教えるのには、この手に限るんだ。さあ、今度は両手吊りにして、天井からぶら下げてやろう」

亜紀子は身をもんで、唇をやっと開いた。「わ、わたし——さっきの縛られ方の方がいい……」

「さっきというと、片足宙ぶりの事か。これは驚いた。あんな縛られ方が好きなのか。右の手足と一緒に天井に吊らされて……、わたしも、あの縛り方は好きだが、今度はいかん、お前、わしの隙を盗んで片手を使って搔くつもりだろう」

ロープを天井の滑車にしっかり掛け直しズルズル引張ろうとして、思い直したように中止し、鬼頭はちょっと首をかしげる。

「もっとも、わしの見ている前で、わしの命令する場所を搔けば、亜紀子の望み通り縛ってやろう。どうだい、この取引は？」

その口元には下品な笑いが浮んでいる。

亜紀子はどうしようかと迷うように唇をわななかせていたが、ハッと眼を伏せると、紅

潮した顔をそむけてしまう。

「フッフ、お上品なお前さんには、できっこないよな」

それでもロープを改めて引張られると、亜紀子は眼をそらしながらも、自分の方から縛られた両手を差し出して、早く宙吊りにされたい様子を控え目に見せる。

「こんなに喜んで縛られると何んだか、気拔けがするな。さっきみたいに、あばれて抵抗するのを無理矢理畳をズルズル引張り合っとして、一汗も二汗もかいた方が面白いぞ」

「嫌っ、そんな云い方をしちゃ、ね、早く好きな、ああ、早く好きなようにして」

滑車がキリキリ鳴って、亜紀子を繋いだロープはピーーンと緊張する。両腕は肩から抜き取られるほど伸ばされて、亜紀子は趾の指だけで全身を支えて、ふらふらよろめく。

それまでうなだれていた顔を上げて、鬼頭を睨みつけると、思い切って

「早く鞭を、鞭を頂戴」

言ってしまったから、羞恥に頬をこわばらせて、自分でも自分の言葉に驚いている様子である

「まあ、そうあわてるな。年寄りになると気が長くなってな、わしはビールでも飲んで元

気でもつけなくちゃ。一休みしながら、この鞭で血まみれになる前に、もう一度ゆっくり亜紀子の美しい肌を見ておきたいんだ」

部屋の隅にある冷蔵庫からビールを取出すと、自分でもラッパ飲みしながら、鬼頭は亜紀子にもすすめる。

「どうだ、お前も一杯やらんか。トロロ汁でこんなに肌が火照っているぞ。さぞかし咽喉が渴くだろう、冷たいビールは美味いぞ」

よほど咽喉が渴いていたのだろうか。それとも酔っぱらって、女らしい感情を痙攣させようという捨鉢な気持からか、ビール瓶を咥えさせられると、拒みもしないで、亜紀子は咽喉を鳴らした。

「奈良漬のアルコール分だけでも顔が赤くなるといってお前さんが、ビール一本空にしてしまったぜ。酔っぱらって粗相したって、わたしは知らないぜ」

亜紀子はまんまと鬼頭の奸計に陥されてしまった。空腹と疲労で弱り切った体にアルコール分が廻るのは早い。血管の末梢部まで浸透して痒感と、更には尿意を一層増進させる筈だ。亜紀子はそれに気付かないで、あんな痛飲をしたのか。

朱色に全身が酩酊した亜紀子を惚々とみつ



めながら、鬼頭は言った。

「お前さん、眼が廻って頭がふらふらしんないか。それにしても酔っぱらって眼元が赤くなつて、瞳の色も生き生きとしてきた。一段と艶めかしくなった」

鬼頭の眺めるのにまかせた亜紀子の肌は、テカテカ光り、毒々しいというか、カンパスに画かれた裸婦のように輝いて、絵具の臭いがプーンと鼻にくるようである。

両手を宙吊りにされては、掻くこともできない。そうかといって、じっとしている事もできない新型の拷問——その苦痛に亜紀子は乳房を波打たせ脇腹をよじらせ、へそをふくらませたり凹ませたりして、鬼頭を喜ばせてしまう。

「ああ、亜紀子の乳房は、何度眺めても惚々として溜息が出る。この赤く色づいた大きな乳首がある為に、お前の乳房はよけいに悩ましいのだ。ああ、見たり触ったりするだけではたまらん。これはわしの宝物だ。五百万円の価値は充分にある。わしの所有物だ、財産だ。え、そうじゃろうが、亜紀子」

「ハイ、確かに貴方の物でございます」  
「お前、始めて気に入った返事をしたな。その調子、その調子。トロロで痒ゆいか、何ん

とも絶妙なる眺めだ。美しい花ほど男は摘みたくなるものだ。わしは縛ったり、鞭打つだけでは満足できん。ああ、一思いに摘み取ってやりたい」

亜紀子はその恐怖より、身体中の痒感の方に気を奪われているのか、無表情な視線を一瞬、乳頭に送っただけである。

数時間前、洞窟温泉の中で話を聞き、私が信じていた亜紀子とは似ても似つかない別人——被虐性女性に一変してしまったのか。或いは、それほど彼女は捨鉢の悲しい気持なのか。私は危惧の念を捨て切れなかった。

## 二、排泄寸前

亜紀子は吊るされて、肩を喘えがせて、苦しい呼吸をしていた。受け口気味の可憐な唇と、鼻すじは高く整っているが、細い美人型ではなく、ヴィーナスの鼻のように太くて遅ましさを感じさせる。

色白のしっとりした肌は一層鮮紅色に染って、その体温でトロロ汁が乾いて、ところどころ石膏の剥け落ちたヴィーナス像のようになっていた。しかもその逆に肩中から胸の谷間、臀部のあたりは玉の汗が吹き出してキラキラ光っている。

それと対照的に、縄目のくい込んだ手首から上は貧血して、真白に変色している。滑車のキリキリ鳴る音が、一段と劇しくなつて、亜紀子のもだえは、いよいよ末期的症状を帯びてくる。趾の爪先は、その下に焼けたトタン板でもあるかのように、休みなく跳んだり、撓ねたりしている。

亜紀子がトロロによる痒ゆさとは別な生理的現象に苦呻しているのが刻明に判る。

「そ、そんなに見てばかり居ないで、アッ痒ゆい。よく知っているくせに——」

こうして下眼を使うと、美しい二重瞼がくっきり現れて、控え目に画いたアイラインというのか、瞼の縁を黒く隈取った線が見えて悩ましい。奇ク誌上で見たことのある、含羞に目を伏せた亜紀子の表情になった。

しかしその表情は同じ含羞でも、奇ク誌上の時のような爽やかな黒瞳ではない。いつもの純白な下着がない事と、尿意のために、その瞳は曇って、切迫した悲哀と狼狽が籠められている。半分諦めかけた亜紀子とはいっても、毛虫のような老人に最後の抵抗を示すかのように、これも控え目に画かれた眦をつり上げている。円顔によく似合った眉毛をひそめている。



その必死な眼配せの意味を知らながら、あくまで鬼頭は空トボケて見せる。猪首をのけぞらせ、大きな咽喉仏を突出してビール瓶をかたげるだけである。それでも両眼だけは、亜紀子のあらわな肌から離さない。

「意地悪、よく御存知のくせに、あつ、もうわたし……」

その続きを言えというように、鬼頭はニヤニヤ笑っている。

亜紀子は取りすぎるような眼で、鬼頭の興奮と期待を体内に隠した顔をみつめる。

「ああ、嫌っ、わたし、言えない」

様々な責め折檻で花卉をむしり取られてしまったといっても、亜紀子は、おトイレへ行かせて、というそれだけの言葉が、口先まで出かかって、言い出せないのであろうか。

眼で必死に物を言っているのを解らせようと、思い詰めた瞳の色をして、亜紀子は懸命に哀願する。その今にも泣き出しそうとも、媚び入っているようにも受取れる亜紀子の表情は美貌であどけない顔立ちであるだけに、ふるいつきたくなるような魅力があった。

その光景と身のこなしは、見る者をひどく感動させた。私は奇ク読者に見せたかったと嘆き、同時に私の描写力の力弱さを嘆くので

ある。

その時、亜紀子はやや大きな目の下唇を血が出るほど噛みしめて、口惜しい無念という激情を示しながらも、その美しい瞳には色濃いつ憂色の裏側に、女性の最大の武器である媚びの挑発さえしのばせていた。

鬼頭にしてみれば、その感激と同時に更に一段と嗜虐心と所有欲を、そそられる結果になる。

カールした前髪の垂れ下った額に脂汗のにじんだ亜紀子に向って、その感動のためか、幾分顔色をやわらげて、

「フッフ、鞭打と、どちらを先にするか？」

「それは——あつ、そ、そんな。嫌っ、聞かなくとも、よ、よく知っているくせに」

「イッヒッヒ、そんな情無さそうな顔をして眼がつり上っているぞ。この花びらのように可愛らしい唇を開いて、パパ、オシッコと言って見なよ」

そこで鬼頭は何か特殊な使用をしたのか、独りでニーツと笑うと、死んでもそんな言葉を云うものかと、懸命に閉ざしている亜紀子の唇に指頭をつき込んで、

「フッフ、亜紀子、ここでお前は何した。それを想えば恥しくもあるまい。さあ、オシッ

コだ、オシッコと言え」

涙をポロポロ流して、いやいやをする亜紀子の顎を持ち上げて、そう強制する。

「アーア、ア、一思いに死ねたら、で、でもおトイレへ、おトイレへ行きたい。亜紀子、もう辛、辛抱できない、ワーワー」

そう言ってしまった、始めて、亜紀子は自分のほしたくない言葉に気が付いたのか、気が狂ったように号泣した。

「よし、言葉は違うが、その位いで勘弁してやろう」

一瞬、亜紀子の顔にほっとした安堵の色が浮んだ。それでも相手が相手だけに、疑い深い眼つきをして、蚊の鳴くような細い声で、

「そ、それでは、早、早く——おト、イレへ——」

「早合点しちゃいけない。トイレなんか行く必要はあるまい。体の隅々まで知り合った仲間じゃないか」

「えッ、そ、それでは、こんな処で、あつ、いや、いや」

亜紀子は悲鳴と一緒に、ヒステリックにそう叫んだ。しかし憎んでも憎み切れない相手ではあっても、限界に達した尿意に負けて、そんな浅ましい真似だけはどうか許して、と



つい哀れみを乞う眼で、鬼頭をみつめてしまふのだった。

そんな亜紀子を冷たくつき放すように、鬼頭は、更にネチネチした口調で無理を言う。

「そうとも、これも浣腸と一緒に我慢に我慢を重ねるところが、わたしには見物なのだ。ストリップだって思わせ振りに一枚一枚脱いで行くところに味がある。それと同年なじ理屈だ。フッフ亜紀子、イチジク浣腸を五つも一遍にされた時も、もう駄目だ、許してと言いながらも二十分も我慢できたじゃないか。思い出しても胸が躍る。いいか、わしがよしと言うまで漏しちゃいかんぞ。途中で粗相でもしてみろ、直ぐ下は海だ。塩水を鼻の穴まで詰まるほど飲ませて、亜紀子が好きだといった片足宙吊りにするぞ」

このどこまでも残忍な老人は、天井を向いて哄笑する。

手足の自由さえ効いたら、亜紀子はかなわぬまでも掴み掛って、鬼頭をのけぞらして隙だらけの首を締め上げたかも知れない。しかし両手を天井に吊られた悲しさ。腰から崩れた蹠の爪先がよろめいて、全身がぐるぐる回転しただけである。

「判ったわ。亜紀子、もう、どうなってもい

い。早く早く好きなように、気のすむようにして頂戴。わたし誰が見ていようと、どんな場所で何をされようと平気」

しかしその捨鉢な言葉とはうら腹に、亜紀子はワーツと痛哭した。涙が咽喉に詰って、咳き込み、鼻をすすって彼女は悲しむ。

### 三、羞恥地獄

「どうだい、見ているだけでは、つまらんだろう」

鬼頭はそう言う、私を縛りつけた円卓を引張って、亜紀子の脚の下に置いた。

そうされると、亜紀子はキャーツと跳び反ねるようにして、宙吊りにされた蹠を上げて狼狽する。

「ここが一番の特別席だぞ。いくら関西ストリップだって、こんな特別サービスはしてくれまい」

女王様、どうぞそのオミ足で思う存分に踏みつけて下さい、と願う私の心とは逆に、亜紀子の蹠は私の胸板から離れて、じりじりと宙に舞い上ってしまうのだ。乳房やヒップの大きいグラマーでありながら、全体にどこか華奢な感じのする亜紀子の姿体の中で、そこだけは平坦なべた足で、横に広く甲も厚い、

指の造作も太い。大型の足を見せるのを、ヴィーナスがはじらうように。それだけに、踏まれ甲斐がある、押しつぶしてもらいたいと一層感激する私を無視して、亜紀子の大型の蹠は逃げ去った。

それほどに亜紀子は礼儀正しく、神経も繊細なのか。キリスト像を踏み得ずして殉教した美女たちのように、亜紀子は男性を踏台にする事ができないのか。或いは脚下から眺められる肌身を、そうする事によって少しでも遠ざけようとする女性本能の美德か。しかしそれも私には無駄な努力に想われる。ただいくらかでも遠ざける行為によって、気高い亜紀子の心は、その救いを求めようとするのであろうか。

亜紀子は必死に閉ざした羞恥の両脚を、空中でくの字型に屈曲した。キリキリ歯が鳴り、華奢な腕には力瘤が痛々しく盛り上がる。美しい顔は一面苦渋に引きつっていた。その俛、放尿しないのが不思議な位であった。しかし空しい抵抗もそれまでであった。次第次第に、膝頭の両側に丸い凹みができて亜紀子の脚線美の肉付きを想わせる膝は、離れ出す。屈曲してヒップに接近していた両脚も蹠からじりじりと、ゆっくりした速度で下





向し始める。そうすまいと、あせればあせるだけ、もがけばもがくだけ、宙吊りの全身は揺らぎ、その体重を支え切れなくなる。

「あんまり力むと粗相してしまうぜ。それに、足をバタつかせると、よけい下から丸見

えになるぜ。お前達二人は好き合っているよ。うだから、大事な恋人に見せられて、さぞかし本望であろうが——」

その時私は、亜紀子を冒瀆しまいと、見たがるもう一人の私と必死に闘いながら瞑目していた。その睨に鬼頭は指先をつき込んで、白眼をあばき出した。

「さあ色男、しっかり眼を開けて、見てやれよ。あんな恰好にされても救い出せないのが口惜しいか。色男、金と力はなかりけりとは貴様の事だ」

今度は眼を上げて、亜紀子をいたぶる。

「亜紀子、お前からもお願いしろ。——愛していच्छやるなら、よく御覧になつて、あら、そんなに目を外らしちゃ嫌つ、見たくないの——甘い声を出して、そう言え」

その言葉が終る前に亜紀子の瞼が私の胸に落下してきた。

「貴方——許して、足で踏むなんて、御免なさいね。ああ、亜紀子、どうしよう」

しかし私は、少しニク臭いが、亜紀子に踏まれて、美しい天女を胸に休ま

せたように恍惚した気持だった。もっともつと踏んで下さい、と私は感泣した。

私には、ちょっと首をかしげて可愛らしげに見えるのだが、亜紀子にすれば酩酊して真赤になった頬を一層紅潮させて、必死に顔を外らしている。いかにも悪びれて困惑し切った表情が、身悶えする全身に表れていた。

その心痛が、閉ざした膝の顫えと一緒に亜紀子の瞼から私の胸に伝ってくる。

その亜紀子に、無情な催促が襲いかかってくる。

「亜紀子、もういいぞ。あんまり我慢すると身体に悪いぜ。そんな虫も殺さぬ顔をして、どんな場所でも、誰が見て居ても平気で好きなように、気のすむようにしてと痰阿を切ったのはお前だぞ。あの元氣はどうしたんだ。ヤケツパチの言葉か。それとも鞭打ちと一緒にしてもらいたいのか」

亜紀子は頑強に伏せていた顔を上げる。口惜しさと屈辱に噛み合わせていた唇をやっと開いて、

「洗、洗面器か何かを、早く洗面器を頂戴。床、床の間の花活けでもいい」

その声は顫えて、力が無い。

「フッフ、遠慮はいらない。しかし、それで



は、亜紀子の言う通り、あんまりだ。いつも行儀のよいお前さんだ。下の男を便器代りに使うんだ」

鬼頭と同じ好奇心と期待を抱きながらも、これ以上馴ら者にされる亜紀子を眺める事に罪の意識を覚えて、私は再び目をとじた。

「ウ、ウ、ウー、洗面器を、ム、ムウ」

うめき声は断末魔の絶望に変わった。

「いよいよ、御臨終のようだな」

「アッ、ム、ウー、わ、わたし、どうしよう」

亜紀子の踏みつける圧力が一瞬、強烈になつて、私は胸が押しひしがれるショックを受けた。その途端、にわかに蹴から力が抜けていつて軽くなり、私は亜紀子の緊張し切った筋肉が弛緩していくのが判った。

——話は変わるが、私はいずれが菖蒲か杜若という美人揃いの奇クモデル中でも、器量は絹川文代嬢のような窈窕たる美人が居るので、これは別に採点しても、女性美の理想といわれるビーナス像に最も近いのは、五月亜紀子と知っている。

その亜紀子の便器にされて私は歓喜に慄えていた。事実私は、花々が爛漫と咲き乱れ、芳香に蜜蜂が飛びかう公園の花壇に仰臥し

て、ビーナス像の噴水を浴びる夢見心地に蕩然としていた。小水の音も、その噴水の中を流れる水の響きのように快よく、私には感じられるのである。

亜紀子は、がっくりと肩を落して、もう涙も出てこない。その苦痛から脱出する方法は、私が今彼女を救うことでも、慰めの言葉を掛けることでもない。自ら気絶する以外に道はあるまい。

#### 四、感泣の鞭打

「もうこれで気が済んだでしょう、早く鞭を、亜紀子、もうどうしようもないの」

おずおずとした声だが、いまは鞭さえ甘美とでも言いたげに、眼もとに精一杯の媚びを含んで、亜紀子は懇願した。

「そうか、トロロの催痒剤には、さすがの亜紀子も負けたか。だが、この鞭は痛いぞ」

「痛くとも、ああこんな痒ゆさよりはいい」

「そうか、鞭は好きか、大好きと云え」

屈伏の唇を慄かせて、亜紀子は言った。

「亜紀子、鞭は大、大好きです。鬼頭さんを喜ばせるためには、亜紀子、何んでも喜んで致します」

鬼頭は満悦して、もう一度亜紀子の裸身を

しげしげと眺めた。

「こういう裸もいいが、このポツテリした尻のあたりを真赤な腰巻で締めてみたい。一度長襦袢一枚だけの亜紀子も見たい。そこへわしの処女号が、ああ、そんなお前を答うちたい」

そう思い付くと、トランクを引っくり返して目的の下着を探し出し、不器用な手つきで纏わせる。湯文字だけはおへそが半分隠れる位置で、どうにか、着用させることができたが、赤い長襦袢の方は宙吊りの姿では、どうにもならない。両手を解くのも面倒なので、鬼頭は諦める事にした。

ヒューと鋭い声を立てて、処女号が亜紀子の肌を襲った。

「アッ、ヒイ、ム、ムウ」

細い鞭は、女体を回転させるほどの力はない。鬼頭も手加減を加えているのである。うが、白い背中に鞭が走ると鮮やかなミミズ脹れが肌に長く尾を引く。

むき出しの背中から脇腹にかけて、旧い条痕の上に更に、縦横に新しい鞭痕をつけられて、ポツポツ汗を吐き出す。亜紀子自身にしても、若し両手さえ自由ならば、トロロの肌を深々と爪を立てて掻きむしったであろう。



薄物とはいえ、湯文字で防備され、それがあるために一層悩ましい丸みを見せている臀部を答うつ時は、手加減を加えられない。亜紀子は優美な拷問に皺を寄せ、噛み締めた唇から軽い苦痛の呻きを漏らす。

「アツツ、痛っ、でも我慢できる。もっと背中の方も、遠慮はいらなくてよ、お、お尻の時のように強く、ああ、もっと強く打って」その言葉は鬼頭にも私にも、黄色い煽情の誘いのように聞えるのだ。

「よし、鞭は快いか、美味いか」  
「ハ、ハイ、ああ、もっと——」

「しかし、あんまり劇しくては、大事なお前があとで使い物にならなくなる」

「そ、そんな事、いまの亜紀子には、ム、ムチが無精に恋しいの」

自分の言葉に驚いたように、長い睫毛を覗かせて、亜紀子は羞恥の顔を伏せる。

私は亜紀子に踏みしかれながら、その変貌振りに驚く。単なる痒ゆい処を搔かれるだけの快感か。それとも先刻の劇しい汚辱によって新しい世界の女に生れ変わったのか。湯文字の裾を深くひるがえして、亜紀子は身悶えする。

亜紀子は鞭に感応して、顎をかすかにつき

上げ、睨と唇を夢見心地に見開いている。避けようとはせず、鞭音のする方に進んで身を委せようとする。

奇ク誌上で読者が知っている純白のパンティから上は、打たれ裂かれて、白い砂漠に真赤な熱帯の夕日が落ちたように、無数の条痕が無慚についている。

亜紀子は、その世界に感泣して涙にむせんでいるかのように見える。トロロ汁の催痒剤に、亜紀子は、地獄を天国の喜びに幻惑されているのであろうか。ムチ音と一緒にあがる感動の呻き。そして鞭が離れ去る一瞬の失望に、身体全体がもだえる。

「あーあー、もっと太い鞭を、太い鞭で思い切りぶって」

鬼頭はハンガーに吊された背広からワニ皮の太いバンドを抜き取り、トランクの中から手頃な鞭を二三本選び出すと、それを一握りにして、亜紀子を鞭打つ、  
「アツ、ヒイ、熱っ、ウ、ウー」

それはそれぞれ違った音を立てて肌に当たると、亜紀子をつき飛ばすような威力がある。滑車が軋し、吊り上げられた裸身が悲鳴と一緒に、そり返り、ねじれくねって、私の胸の上で回転する。

肌を斬る鋭さはないが、重厚な骨身にこたえる痛感というか、叩かれる面積も広く、一度に三、四本のミミズ脹れがつく。古い痕を拡げられ、こすられる燃焼的な劇痛に、亜紀子は身をもんで、歯ざしりを続ける。

「どうだ、大部こたえるか」

そう訊ねる鬼頭の顔を、複雑な表情で睨めて、亜紀子はどっちとも受け取れるように首を動かす。苦痛と快喜の紙一重の境地にある様子である。一瞬肌を締めつけるようなショックと痛感が、忽ちトロロ汁の痒感を鎮めるであろうか。或いは変貌した女の被虐を愉しんでいるのであろうか。鬼頭がムチ打ちの手を休めることがあると、どうしたのという風に眺めて、その濡れた黒い瞳には性急な欲望の色が秘められていた。

そして、最後に亜紀子は、私が全く予想もしなかった言葉を吐いた。

「お、お腰を、お腰を解いて、亜紀子、片足宙吊りにされたい。そうして、貴方の鞭がほしい」

それは入念に化粧された催痒剤が夢中で言わせる言葉なのか。それとも私が知らない寝室の中でも、結局最後にはこういう風に崩れていったのであろうか。



私は鬼頭の思いの尽に所有されてしまつて亜紀子を知つて、絶望と幻滅の悲哀を味うのだった。

## 五、新しい屈伏

部屋は静かになった。鞭音の代りに階下の岸壁を洗う潮騒いの音だけが聞える。

結局亜紀子の願ひは実行されなかつた。さすが屈強な鬼頭も鞭を一握りにした手を大きく広げて、睡たげな欠伸をする。

「ああ、くたびれた。今夜はもうこのくらいにして置こう。どれ下してやるか」

何回もまた欠伸を繰り返して、左手で右肩を揉みながら、柱に留めたロープを解く。

「アッ」

軽い悲鳴をあげて、亜紀子は私の上に落ちてきた。もう縄を解かれると全身を支える力は腰にも脚にもないのだ。

身体を縮めると、両手を縛られた俛、よろめき倒れつつ、畳を這うように逃げ出す。

その行先は鬼頭の胸の中であつた。睨が弛んで睡たげな老人だが、亜紀子に近寄られると一遍に上気嫌になつて、征服感に酔つた顔を綻らせる。

「早く解いて——」

亜紀子は長いロープを引きずつた両手をさし出す。鬼頭はその手を引寄せて、どっこいしょと胡坐を組む。

「どうだ、今夜は楽しかったか、フッフ」

亜紀子はその時だけ恥しげに顔を外らして「ハ、ハイ、亜紀子、とっても」

両手が自由になると、亜紀子は鬼頭の膝の上に自分の方から這い上つて、荒い胸毛の覗いた胸に頬を寄せる。その哀切とも感動とも受け取れる瞳は、何かを訴えるように、鬼頭のドングリ眼に注がれている。鬼頭は亜紀子に甘えられて一層上気嫌になつて、睡いのも忘れて、真白になつた亜紀子の両掌を交替に揉んでやっている。

「どうやら、虐められる喜びが解つたようだな。片足宙吊りにして鞭打ってくれとせがまれた時は、わしも正直ドキリとした。フッフ亜紀子、お前は、そんなに……」

「嫌つ、嫌つ、亜紀子、そんなと違ふ」

「フッフ、だが、その眼は感激して、接吻でも求めているようだぞ」

私は眼のやり場に困つた。

私は二人の横顔を眺めただけで、そのあと二つの唇が重なり合う光景を見るにしのびなかつた。あれほど憎い、殺してやりたい、生地

獄だと嘆いていた亜紀子が、その憎悪の対象に向つて、心酔し切つた表情をあらわに見せて、自分から身を委せようとしている。

私は孤独であつた。縛られた体を震わせて慟哭した。心底から身も魂も鬼頭の所有物になつてしまつた亜紀子——無理やりそうさせられてしまつた彼女の心を想えば、胸を掻きむしられるように切なく、悲痛な気持にもなる。しかし、ああも蕩然とした亜紀子を眺める事は、私には死に勝る苦痛であつた。屈伏し切り、敗北し切つた奴隷の眼の色——いまはそれを屈辱とも口惜しいとも思わず、嬉々として肌をすり寄せて媚態を見せる亜紀子。哀れと思えば思うほど、その気持に同情できればできるほど、その逆に私は狂暴な嫉妬と憎悪を抱いてしまうのだ。

おそらく奇クファンの方々も、私と同様な気持ではなからうか。

## 六、後記

諸君は私の悪文を読んで、看板に偽りがあつた映画を観て、映画館を出る時の後悔といきどおりを抱いているか。私の奇譚は、この辺で完結をつけるべきであらう。

しかし奇クの誇る大切なモデル嬢を勝手に



御利用させてもらった以上、私には決して五月亜紀子嬢を冒瀆する気持も凌辱する気持もないし、努めて抒情的に詩い上げるつもりではあったが、そこは私の筆力の稚拙のなす処、出版社とモデル嬢の名誉のために、一応あとの締めくくりだけは、キチンとして置かねばなるまい。

翌日、私は正午近くに目をさました。朝食は枕元に用意されて、すっかり冷え切っている。しかし私には全然食欲はない。急いで電話で女中を呼びつけた。

御用でございますか、と指を付く手許に咄嗟に千円札を握らせて、十号室の様子を訊ね

## 挿絵画家

### 募集!

○本誌の挿絵をより充実させるため、読者の方々の中から才能豊かな腕に自信のある方の応援を求めています。

○自作画（画用紙に墨又は黒インキ）をお送り下さい。幻想的な妖しい魅力を含んだカット、挿絵をお送り下さい。

○佳作は漸次誌上に発表したいと思いますが、今まで数多くご送付下さいましたが残念ながら掲載に耐える作品は見当りませんでした。力作をお待ちします。

た。

「いいえ、十号室は、ずっと前から空部屋でございますよ」

中年の女中は目を丸めて、何を寝ぼけたことをおっしゃいますかという顔をする。

「君、君、そんな筈はない。ぼくは、ちゃんと……」

あわてて私は両掌をひろげてみた。確かに側壁を乗り越えたときの傷痕があつて、凝血してかなり深い口を開けている。私はのんびり顔な女中の衿を掴むように、海の上に展がったテラスに連れてくると、

「君、君、ぼくは昨晚ちゃんと、こうして、この壁を乗り越えて十号室に——これ、これを見てくれ」

「まあ、この創は一体どうしたんですか、早く手当をしなくちゃ。でもお客さん、例えこの壁が乗り越えられたとしても、十号室は空部屋ですから、嚴重に鍵が掛っていたんですよ。まあいやですねえ、悪い夢でも御覧になったんじゃないのですか」

静かな内海を遊覧船や旅館のヘリポートが征きかい、別れを惜しむ旅客が手を振り、テープが舞う。階下の玄関から堂の光の曲が鳴っている。

私は船中に恋しい亜紀子の人影を探がそうと血眼になった。お互に本名も知り合わない内に別れてしまつて、いくら恋しい逢いたいと思つても、どうして再会できようか。

——白日夢か、夜の幻夢か。

しかし今日の夜明けまで私は十号室に居て狒狒爺に若い女性が責め折檻を受けていたのだ。そう早口に喋り上げ、帰りがたがる女中を部屋に押しとどめて、私は昨夜の一部始終を語って聞せた。この女中に奇クの五月亜紀子といつても解る道理がない。

「君は昨晚、年寄りと若い女のアベックなど泊らなかつたというが、ぼくは昨晚、ちゃんとフロント掛りから十号室に居ると聞いたんだぜ」

それだけ言つて、私はアッと叫んだ。昨晚のフロント掛——それは正さしく鬼頭老人の顔であつた。私は背中に冷水を浴びせられたような驚愕と恐怖を覚えた。このホテルにそんなフロント掛は居ない。いま想えば、老人の眼球は白っぽく濁つて生気がなく、チップを握らせた掌ふやけて屍体のように冷たく、汐の匂いがした。

私達は昨晚私が縛りつけられたのと同じ形の黒檀机を囲んで対決した。何か納得のいく



返事を聞くまでは死んでも離すものかと、私は女中の手を掴んでいる。

曖昧な微笑を浮べて、どうしようか迷っている表情を女中はしている。深刻な顔をした私に向って、仕方がないという風に、とうとう女中は口を開いた。

「これは、ここだけの内緒話ですがね。十号室が空部屋になっているのには、少し事情があるですよ」

私は嫌がる女中を引張り出して、十号室に駆け込んだ。空部屋とはいってもホテル旅館のことで掃除だけは行届いている。別に変った様子はないが、部屋の片隅に朽ち果てた罎網が落ちている。指さきで摘むと海水に濡れていてポロポロ崩れてしまう。一体何十年前の、いや何世紀前の遺物であろうか。後で判ったが、女中はもちろん他のホテルの従業員もそんな縄はしらないといった。

海賊の亡霊——昔この地方一帯には複雑なリヤス式海岸と静かな内湾に恵まれて、海賊どもの絶好の生棲地であった。この旅館のある岬にも海賊の棲んだという洞窟がある。そういえば鬼頭は、海賊の首魁と考えても可笑しくない貫録と体軀をしていた。その人骨が海底に沈んで遊泳し、岩石に当ってコツコツ

音を立てている光景が瞬に浮んだ。

そう言えば、夜が白々と明ける頃、亜紀子も鬼頭も二人とも、水に映った影のように輪郭がぼやけていたのを思い出す。表口から出て行ったが、その時、戸が開いたかどうか私はハッキリ記憶していない。外の廊下には絨氈が敷いてあるが、それにしてもスリッパで叩く音も足音一つしなかったのも怪奇といえは怪奇である。不思議にも私を縛った縄も自然と解けた。

今更古めかしい幽霊話でもあるまいと諸君は笑うか。それなら勝浦温泉のこのホテルに若し諸君が宿したら、十号室の怪談について質問して見給え。勝浦温泉には油虫が多く生棲しているが、その事実さえ夏期以外の旅客には女中達は営業上支障があるので、必死に隠そうとする。それくらいだから仲々教えてくれないかも知れないが。

——女中の話では一カ月前、このホテル旅館の裏の岬に、身元不明の若い女の水死体被打ち上げられた。それから十号室には夜になると、女の啜り泣く声や悲鳴や苦呻、天井でキリキリと滑車の舞う音が聞えるというのである。

この旅館の裏手には千畳敷きといって砂漠

のように広くて平坦な、白い一枚岩の海岸があつて、私が亜紀子と遭遇した洞窟泉に続いている。その海岸には太平洋の黒潮が打ち寄せて、高い波濤を上げている。

その波打ちぎわに浮んだ死体は、腐爛が劇しく、かなり肉体美の娘という事実が判明しただけである。眼球は両方とも深海魚に食われてポツカリ無気味な穴があいていた。鼻も同様に魚の餌食になって半分は骨が露出して片側も肉がそげ落ちそうになって波に洗われてヒラヒラ骨から離れたたり、くっついたたりしていた。大きな乳房も乳首は、あらかた食い荒らされてなく、腹部は臨月の妊婦そっくりに海水を飲んでふくれ上がり、全身は海底の岩石に衝突してできた創か、見ようによっては劇しい鞭の条痕ともとれる無数の傷跡があつた。

その溺屍体は、腹部に十文字に引きつった切腹の跡のような創痕が認められはしたが、果してこれが五月亜紀子嬢であつたのか、それとも十号室の女性であつたのか、あるいは全然別人であつたか果してその水死体と十号室の怪奇とどういう因果関係にあるのか——それは今となつては誰にも判らない。

(完 結)



# 〔最新版〕 女体悦虐写真集印画紙版

## G組百姿集

大手札型印画紙(9×13寸) 焼付

各組一枚一組(送料共)

|        |       |
|--------|-------|
| 一組一枚   | 一五〇円  |
| 五組五枚   | 五〇〇円  |
| 十組十枚   | 九〇〇円  |
| 二十組二十枚 | 一七〇〇円 |
| 三十組三十枚 | 二五〇〇円 |
| 四十組四十枚 | 三二〇〇円 |
| 五十組五十枚 | 四〇〇〇円 |
| 六十組六十枚 | 四七〇〇円 |
| 七十組七十枚 | 五四〇〇円 |
| 八十組八十枚 | 六〇〇〇円 |
| 九十組九十枚 | 六五〇〇円 |
| 百組百枚   | 七〇〇〇円 |

|      |           |      |
|------|-----------|------|
| G 1  | 顔面から全身嚴重縛 | (東浦) |
| G 2  | アグラで縛られる  | (玉田) |
| G 3  | 豊臀と足首と後手縛 | (玉田) |
| G 4  | 一糸まとわぬ晒し者 | (玉田) |
| G 5  | 敷布に悶える白い肌 | (玉田) |
| G 6  | 縄に羞らう裸しぼり | (長野) |
| G 7  | 煙草責と荒縄緊縛  | (大塚) |
| G 8  | 全身ガンジガラメ  | (大塚) |
| G 9  | 手吊り全裸さらし  | (玉田) |
| G 10 | 恐怖のいたぶり   | (新井) |
| G 11 | 浣腸器に脅びえる女 | (玉田) |
| G 12 | 全裸しぼりと浣腸器 | (玉田) |

|      |           |      |
|------|-----------|------|
| G 13 | 踏みつけられる美貌 | (大塚) |
| G 14 | 美しき全裸強調縛り | (大塚) |
| G 15 | そりかえる鼻の頭  | (大塚) |
| G 16 | 黒フンで縛られる女 | (玉田) |
| G 17 | 責写真に埋れた緊縛 | (大塚) |
| G 18 | 諦観の後手しぼり  | (玉田) |
| G 19 | 椅子に縛られた全裸 | (玉田) |
| G 20 | 足首と後手首と縛り | (玉田) |
| G 21 | 二つの乳房アップ  | (長野) |
| G 22 | 縛られて鼻を任す  | (大塚) |
| G 23 | 後手縛全裸椅子跨ぎ | (東浦) |
| G 24 | 豊胸に黒紐の輝やき | (長野) |
| G 25 | 肌につき刺さる荒縄 | (大塚) |
| G 26 | 机の脚に縛られる女 | (新井) |
| G 27 | 革の猿轡で責める  | (新井) |
| G 28 | 白肌は縄にくびれて | (大塚) |
| G 29 | 緊縛裸身を誇る足  | (長野) |
| G 30 | 逆エビと浣腸器   | (大塚) |
| G 31 | 肥り肉を晒らす女  | (東浦) |
| G 32 | 踊子の緊縛ポーズ  | (絹川) |
| G 33 | 足でなぶられる鼻  | (大塚) |
| G 34 | 典型的な股間しぼり | (大塚) |
| G 35 | 美貌と豊胸を誇る女 | (長野) |
| G 36 | 写真に埋れた全裸姿 | (大塚) |
| G 37 | 裸を誇りの椅子縛り | (玉田) |
| G 38 | 柔肌は縄にくびれて | (玉田) |

|      |           |      |
|------|-----------|------|
| G 39 | 全裸の肌は縄まかせ | (玉田) |
| G 40 | 女囚哀歎      | (宇治) |
| G 41 | 女囚の縛られ姿   | (宇治) |
| G 42 | オシメカバー縛り  | (大塚) |
| G 43 | 庭の見える部屋にて | (大塚) |
| G 44 | トイレを前にして  | (大塚) |
| G 45 | 荒縄と豆絞りの猿轡 | (大塚) |
| G 46 | 裸身の美を誇る縛り | (長野) |
| G 47 | 後手逆エビ強烈鼻責 | (大塚) |
| G 48 | 股間縛り全裸重量感 | (大塚) |
| G 49 | 嚴重荷造縛りの全裸 | (玉田) |
| G 50 | 全裸正面強烈亀甲縛 | (木村) |
| G 51 | 全裸胸絞め首縄猿轡 | (木村) |
| G 52 | 後手首縄膝頭一括縛 | (木村) |
| G 53 | 全裸後手吊り晒し  | (玉田) |
| G 54 | 後手吊り全裸の美  | (玉田) |
| G 55 | 椅子に跨がされた女 | (新井) |
| G 56 | 後手縛りで寝室へ  | (絹川) |
| G 57 | 色魔に脱がされる  | (新井) |
| G 58 | 不安定な台上股間縛 | (大塚) |
| G 59 | 無抵抗の裸いじめ  | (大塚) |
| G 60 | 両手吊りの猿ぐつわ | (新井) |
| G 61 | 可憐ないじめられ様 | (大塚) |
| G 62 | 責めぬかれた表情美 | (大塚) |
| G 63 | 強奪されたパンティ | (大塚) |
| G 64 | 後手縛全裸の美しさ | (大塚) |
| G 65 | 猿ぐつわの婉な表情 | (新井) |
| G 66 | 手吊り足縛り仰臥  | (新井) |
| G 67 | 目かくしのハリッケ | (大塚) |
| G 68 | 首枷のさらしもの  | (大塚) |
| G 69 | 木馬責め斜め後姿  | (大塚) |

|       |           |      |
|-------|-----------|------|
| G 70  | 木馬責め斜め前姿  | (大塚) |
| G 71  | 革全頭マスクと手錠 | (大塚) |
| G 72  | 火あぶりにあう女  | (大塚) |
| G 73  | 長髪垂らし全裸縛り | (長野) |
| G 74  | 豊満を誇る露出癖  | (長野) |
| G 75  | 白肌で縄にうそぶく | (長野) |
| G 76  | 縄にもだえる美女  | (絹川) |
| G 77  | 美貌をいためつける | (絹川) |
| G 78  | 首吊りの責め    | (新井) |
| G 79  | 両手開き吊り顔虐め | (新井) |
| G 80  | 全裸後手足首連繫縛 | (玉田) |
| G 81  | 蒲団上に転がった女 | (遠藤) |
| G 82  | 首縄開股強烈縛り  | (木村) |
| G 83  | 巨大な臀部全裸後手 | (大塚) |
| G 84  | 膨隆見事な乳房責め | (長野) |
| G 85  | ヤンチャ娘開股縛り | (長野) |
| G 86  | 全裸でしやがむ後手 | (玉田) |
| G 87  | 豊満裸身を誇る緊縛 | (玉田) |
| G 88  | 美麗の全裸に嚴重縄 | (玉田) |
| G 89  | 後手縛り裸立姿晒し | (木村) |
| G 90  | 奴隷の裸身を捧げる | (木村) |
| G 91  | 白布の猿轡と白肌責 | (木村) |
| G 92  | 六尺権巨大臀部虐め | (大塚) |
| G 93  | 裸身を晒す両手縛り | (大塚) |
| G 94  | 全裸アグラ坐り縛り | (玉田) |
| G 95  | 白肌に映える光の縞 | (玉田) |
| G 96  | 臍乳房強調喰込む縄 | (大塚) |
| G 97  | 股間縛り全裸の膝立 | (大塚) |
| G 98  | 台上的緊縛裸身像  | (長野) |
| G 99  | 反りかえる緊縛裸身 | (長野) |
| G 100 | 膨大な臀部を眼前に | (大塚) |



## ◆知性作家・執筆者を料理？する……

ゴキゲン・オシャベリ

## 論評「奇譚クラブ」

夜乃探郎

## △前書▽

「SM時評」の、橘行司子氏をまねて前もって「妄言多謝」と断わっておく。料理？などと乙にかまえてもおどろくことなかれ、これ通刊二百号突破ノを記念して神酒（これはネクターでなくジャパニーズ・アルコールである）で祝杯を上げ、そのメートルのあがった所ではじめるのだから……△快笑！▽。

「奇ク三匹の侍」辻村・芳野・とやまの各諸氏には、このところ種々とお付合い？して頂いたので今回は観客特別席で、せいせいヤジ馬？を買ってもらうことにする。（辻村氏には「VAT69」を、芳野氏にはむろん「奇

クの飲物」を、とやま氏には、美少女の「？」を、たっぷり直接、係員に運び？サービスさせます）

さて、迷料理人はカスミ・クウタロウこと夜乃探郎。そして奇クの超マナイト台に並ぶ異色人物ベスト・10、——は、……？……。「整列ノ 右並えノ 番号ノ ——肩書と氏名を。」

## 「人身御供」志願者

△羽村京子・改め▽羽鳥 水江  
哀れな？ドレイ青年 美枷 輪生  
ハギエクボ・マニヤ 宝塚二三夫  
ペンの殺人魔？ 黒田 寿

芸術的？「世相診断室」長

木戸川 健

ひっくりがえる？研究美術家

高野 原美

かんちよう流の達人

栗瀬 長

女の生首創造K・K「技師」

水野 弘

オーソ・ドックス切腹研究の元老

中康 弘通

カスミ風船狂

夜乃 探郎

以上、（とんでもない「カスミ風船狂」夜乃郎が入って）十人の、それぞれ、ひとくせも、二くせもある諸氏である。この他にも、なにせ△新しい発見▽ある奇クのことであるか



ら続々と、おあとに控えてあろうけれど、またの機会に――。

現在(九月号)おなじみのマニヤを対象としましたので、主として本誌・昭和四十年新年号・九月号・他は旧号若干・までを参考とした。

では、一丁ノ手にツバつけてハジメルか。



### 羽鳥水江女史御登場

「……体の表と裏とを『裏返し』にするのではなくて、体の外側と内側とを『裏返し』にして、今まで体の中に秘められていて目で見ることでできなかった部分を、えぐり出して、白日のもとにさらして見ようというのです。私の、膨満したお腹の中に秘められている『A感覚の秘密』を、私のお腹を立ちわって、お腹の中のどろどろとしたものを、すっかりぶちひろげてみることに、つかみ出したいと思うのです。」

——これは、昭和三十年新年特大号・『A感覚の秘密』(吾妻先生に)羽村京子の一節であるが、羽村京子改め現、羽鳥水江女史の『生胎解剖』へのふあんだじいはあきることなく、いや、いっそう強烈な願望を秘めて不

死鳥の羽ばたきを見せている。それは、

「しばらくぶりでお便りいたします。名前がかわっていますので、何のことかわかりにならないかも知れません。わたし、羽村京子でございます。昭和二十七年以来、十三年の投稿歴?をもつわたしが」

——と(40・4)「最近のわたし」(羽鳥水江)でカムバックしてより、「帝王切開分娩のこと——生胎解剖記——」(五月号)「孕み犬」(六月号)ETC、やつぎ早やの投稿発表が、そのすべてを物語っているのだ。

羽鳥女史はマゾヒストであろう。ただし、同じMでも、ちょっとケタハズレである。とにかく自分体を料理し解剖されて、相手にたべられてしまいたいV(30・1)

——というような、食人種という未開の土人の話と反対の、切望だからで、

この問題について、もう少し考察してみよう。

チャンバラ(時代劇)に例を取ってみる。

ある時。マゾヒスト某姫と腰元、羽鳥水江の君が月の夜道をあるいていた。おなじみ辻斬が出現!某姫はおどろきの底にも、その辻斬氏のぶかっような姿とガラガラ声にまゆをひそめた。どうせ出るなら、もう少し、ましな

好男子が現われてもという不満だ。その点腰元、水江の君は、そんなことは問題じゃない。ハラワタが飛び出し血煙立って斃れる自分の姿を、一瞬ノ頭に描き、辻斬氏の刀の前にいさぎよくわれとわが身を進め、ズブリノと刺された――。

……マゾヒストはロマンチスト(夢想家)でもある。だから、現実生活とは別に「マゾヒズム天国」を演技?することができるようだ。

○筆者註・「……朝の日課が終って、かおる様を送り出した私は、背広に着替えると迎えるの車に乗り、社長としての一日を過すべく、Hマッシュンを後にするのでした。」「奴隷・どれい」平伏人・八月号。

羽鳥女史はマゾヒストであろうけれど、リアリスト(現実派)である。よってマゾヒズムの世界では、異端者的存在と云うことになるであろうか。

「リアルに徹する私に」(サロン楽我記・第十五回、辻村隆・九月号)という辻村隆氏のリアリスト的存在は、カメラからのぞく意味もふくまれようか。詩との結び付は、あのレンズがなせる透明さからもくるようだ。

一方、羽鳥女史の△現実▽は、眼から直接



触れる世界（浣腸・妊婦・解剖）だけあって、まことに生ぐさい凄絶さが感じられるのである。

一般マゾヒストは、別の世界を（舞台を）

もつことが出来る。そして、そのアブ的極致に自虐的悦楽はあろうけれど「死」は無い。

羽鳥女史のアブ的極致は「死」が条件とされる。（彼女のマニヤとしての本質が、自己の生体解剖・その肉を・内臓をだれかに食べられたい）これは生きてる限り不可能なことである。そうかと云ってまさか本当に……。

マニヤの限界すれすれの地点で、いつも羽鳥女史は、すべてに欲求不満の状態をさまよっていることになるようだ。中年女？の油切った……（失礼！）。……逃げ場のないだけ、それが原稿用紙の上に叩きつけられるとなると「無残地獄図絵」を描き出す。マニヤたる大方読者は「スゲエナァー」と、——そのスリルに拍手カッサイするが、書いた本人の心境たるや……？……。

「快楽きわまりて哀歎多し」など、つぶやきながら、せつせと酒と女を求める、しようのない「野郎」の世界と同じく、「人身御供」志願者・羽鳥水江女史は、今日もまた明日も「生体解剖」への夢を思い、書きつつけるだ

ろうか……。

○筆者註・『妖花』29・2「羽村京子」は名作としていまなお語り草となっている。

### 美柳輪生御登場

手枷、足枷、それに鼻輪まで装着されたドレイ青年は、着ているものの全部をはがれて、動物輸送用の檻に入れられ、遠く異国へ売られるために運び去られるのである。この哀れなドレイ青年の運命や如何に？（傍点は筆者）。——という昭和四十年五月号・連作Mフォト・箱詰にされたドレイ青年「美柳輪生」のフォトを見たとき、——私は、哀れな？というより、美柳輪兄のみち足りた表情に微笑を禁じ得なかった。幸福なお人だという、いつわらない感想だ。

夢のない現代に、もし「夢」があったとしたら、この哀れなドレイ青年こそ美柳輪兄の描き出す世界の物ではなからうか……。

七月号の「尻打ちのポーズ」では、座禅のときに禅坊主がケイサクをもってあるく姿をしのばせるようなポーズでモダンな顔付の女王、奥さん？が、棒をもち、にっこり笑って立っている前で、へもう、駄目だよーと、

ドレイ青年は、ぐったりとなっている。この青年、なかなかの美青年で、「庭に晒される男」では、映画スター顔まけの表情だ。

「——鼻輪くさり、手錠くさり、腰くさりで逃亡を防いだ奴隷が、茶碗を洗わせられている。M族にとっては刺戟的な場面である。」

——「台所仕事をさせられるドレイ」八月号・M族にとってはスリルのあるシーンであるうが、あいにくS族のはしぐれの私にとっては、ユーモラスな風景と受取れた。同じマゾヒズムの世界でも、無惨地獄図にのたうつ羽鳥水江女史の人生と、こうも違うものかと痛感した。マゾ男というと、犬の茶碗に冷飯をあてがって、庭の片隅にでも、ほったらかしておけばよいだろう——という世界は小説上で、実際にはマゾ男にも云い分はある。むしろ自虐的なよろこびをうるためには、これぞ仲々注文がうるさいようだ。

「鞭をもつスバラシイ美女がほしい。ネクタイルがどうのと、ETC……」

だから単に経済的なソロバンをはじいて、下男代りでも「マゾ男、募集」の貴婦人？連はみなこれで失敗の巻だ？余談はともかく、楽しきかな？ドレイ青年たるカンキョウ





にめぐまれる美伽輪生は幸  
せである。



### 宝塚二三夫大人御登場

△手錠をはめられたみどり  
のあで姿▽とか、△パンツ  
一つの痛ましい手錠姿の純  
ちゃん▽・△ピチピチとし  
た肉体を持つ節ちゃん▽と  
か、——いい面倒くさいオ

レは頭にくるよ。……ボ  
クの脚趣味は、それ以来ズ  
ーッと続いている”と、宝  
塚二三夫氏は云うが△脚▽  
だけとはもったいない。で  
は、その可愛いクチビルと  
か、ツンと上をむくオッパ  
イとか、脚の他、みんな大  
方読者におすそわけしてく  
れ！

△ボクの責め方▽のボク  
と、ペンネーム？「宝塚二  
三夫」の宝塚などの文字面  
だけみると、キザッポイ、

大家の若旦那が、札ビラ切って花街の小便く  
さい（そこがまた夢男というヤ郎も御同様大  
好きなのだ）小娘を、またバーの女給初年  
兵？を召集？してSMプレイのお道楽。チェ  
ッ！ウメエコトヤツテヤガル、——こんな言  
葉も、そそかしい読者は吐き出すことに……  
（オレじゃねイよ）。

ところが、この宝塚二三夫氏は「大人」と  
も云うべき尊称を捧げタテマツルべき、奇ク  
にとつては、筆歴の古い御年配の人物（マニ  
ヤ）である。

“その時分から考えると、今のボクは大いに  
成長もしているが、マニヤ道としての情熱だ  
けは”。の、宝塚氏のその気持、まさに詩人  
のものである。美の求道者のものである。

ゲートは（世界的な詩人でもある作家）、  
老齢の身をもって、美少女に生命がけて“ホ  
レテ、ホレテ”、そのあげく、友人を介して  
プロポーズしたとの事。（失敗したが）そ  
のところがけたるや、壮なるものがある。  
“マニヤ道としての情熱だけは”——のその  
言葉。よきかな。よきかな。

ちなみに、旧号（30・5・特大号）をのぞ  
いてみると、その一九二頁に、ちゃんと『ボ  
クの責め方』（エレヴェーター内女責めと久



保よし子水責めの巻。」が、四馬孝・画で掲載されている。今回は晴雨調のクラシック乱れ髪とは全く正反対の、超モダンスタイル折檻の話。エレヴェーターガール、市川みよ子（一九）の登場。」と、この当時の筆勢も新鮮なものだが、現在の（40・5・）縛られて、さあ見て下さい。といわんばかりに誇らし気に差しだした足立冷子の脚にはいささか食指がうごいた。（足立冷子の脚）などのフオト説明など、どうしてどうしてお若い筆跡、御立派なもの——。



### 黒田寿氏御登場

黒田寿氏の名前を見ると、なぜか彼の流血惨たるフランス大革命を思い出す。そして、「スッテンコロリンと××の首が転ンダ、マタモスイカの如く……」という、だれかサン・オトギ話。『風流夢譚』を複雑な気持ちで思ひ出す。ともかく、△奇ク▽異色ベスト・テン——の、中に入れることは、だれも文句はないだろうか。

黒田氏の存在は稀少価値がある。  
ただし共産党代議士の如く、その少数なる世界——という所でよいのではないか。

正直のところ、奇クのお城にたてこもるモデル嬢たちや、女性の投稿が、殺人マニヤの大群におそわれ一夜あけたら全滅、あとは血の海では、お後の補充が大変だからね。……？……。

探偵作家のだけれど、たしかこんな意味のことを言った。「殺人小説を好む人間は、みな善人だ。」

ペンの殺人魔？たる黒田氏も、善良すぎる市民生活の中で△妖しきおどろおどろなる殺人パノラマ世界を夢みる▽殺人マニヤ・または推理小説ファンでもあるようだ。

空想と、原稿用紙の上で△美女の首が「はずれた」「もげた」「チョン斬った」▽40・9月号より。と、良い気持ちになっているのは罪のないおあそびである。

なんでも、英国の教養ある紳士の頭のレクリエーション、高級なおあそびは、あたたかき暖炉の前で、ソファにふかふかと身体をうずめ、パイプをふかしつつ推理小説を読みふけることとか。

黒田寿氏も、ジャパニーズ・ゼントルマンであることは、間違いないことだ。



### 木戸川健先生御登場

私は……がのみたい。おれは美女の乳首を責めたい。アグラ縛りがどうかETCと、いとも悩ましき、またはアブ的な世界の中で、『世相診断室』という立看板？もいかめしく。

「私は△南ベトナム問題▽には」とか（40・8月号より）、時局を論ずるかとおもうと、「好きである。全く好きである。しかし、この生命力。嗚呼私は生きている」（40・9月号より）など横浜は「セントラル劇場」御見学？記をもとに、ストリップ礼讃？をやらかし、そのすぐ後で「ストリップは余り好きではない」など苦笑にまぎらわす。（いったいどっちなんだい。じれったいよ。）

燕雀何ぞ鴻鵠の志を知らんや——と、（だれかサンも言ってたようだが）嗚呼、木戸川健先生。とにかく、この人物ただものじゃない。

ピエロなのか、はたまた大通人なのか、学者なのか、政治家なのか。

一応、「私も学生ながらワセダだったので、彼の下で助手をしたり、脚本を書いたりしていた一時期がある。——中略——ストリップ芸術



論を”など言っているところからみて、また、  
 △SM時評▽橋行司子との間に取りかわされ  
 た「新奇?女陰芸術論」40・7月号と8月号  
 参照。——などの点で、まア、ユーモア的芸  
 術家と称しておく方が無難であろうか。

○筆者註・奇クサロン・「世相診断室」木戸  
 川健・40・9月号・△セントラル劇場にて▽  
 は、ヒット作である。

### 高野原美生御登場

奇クの九月界、「奇クサロン」の「蛙腹通  
 信」高野原美・を見たとき、その便りにそえ  
 てあった蛙の吊り下げられたカットが、実に  
 印象的であった。成程、妊婦の花盛りは、ひ  
 っくりがえるのオンパレードでもあるよう  
 だ。——私はすぐさま、高野△蛙腹▽研究生  
 に、「ひっくりがえる?研究美術家」のニッ  
 ク・ネームを付けることにした。

同じ妊婦マニヤでも、羽鳥水江女史級とも  
 なると、いくらユーモア?作家・芳野眉美さ  
 んをまねて、△バー「ぼて」の妊婦たち▽を  
 書いても、(40・8月号)「まっ黒に色づい  
 た大きな乳房を出して見せているのもある」  
 と、生ぐさく?妖気?がただよう。

その点、高野生となると、文学的で、とき  
 として△わたしゃこれが好き——妊婦腹——なん  
 だ!▽というあたたかいものが感じられる。  
 蛙腹の世界にろまんを打ち出したい——とい  
 う思想は、本質的にロマンチストのものであ  
 る。

だから、「啓子散華」四月号・八月号・掲  
 載まだ未完・ただし九月号現在から見ても——  
 などを読んで、そのサブ・タイトルからし  
 て——憧れのモデル大塚啓子に捧げる——◇  
 傍点は筆者・と、△憧れの▽と云う慕情がた  
 だよう。

どのように作者(高野原美)が、モデル・  
 大塚啓子を「女王の好みのままに」と、フィ  
 ックション(小説の中で)凄じいとも思われ  
 る「責場」を展開させても、むごさというよ  
 りは、美の殉教者としてのナンバーワン・ミ  
 ス・大塚啓子をクローズ・アップさせること  
 が倍するのみである。

高野原美生は、女性の美を追求する手段と  
 して、「蛙腹マニヤ」たる位置で彩筆をふる  
 う作家でもあるのだ。

◇筆者註・「啓子散華」高野原美・は△未  
 完▽であるが、ケツ作であるの評判が高い。

### 栗瀬長氏御登場

かんちよう流の達人栗瀬長氏。この「氏」  
 は、△うじ▽と発言して頂かないと気分がで  
 ない。(失礼!)

通刊二百号を突破した「奇ク」城には、あ  
 また「かんちよう流」をまなぶサムライはあ  
 るうが、まず、栗瀬氏は、達人クラスであろ  
 うか。

「……だが、だがどうして、浣腸などという  
 ことが言えるであろう。私は浣腸マニヤだ。  
 緊縛、フェチ、レスボス、女斗、切腹といっ  
 た言葉は平然として口にすることが出来るし、  
 今も彼女に、こうした世界のあること随分説  
 明もした。しかし、遂に「カンチョウ」とい  
 う発音をするには、あまりに心理的抵抗が強  
 く、遂に一時間の長きにわたる奇ク談義の中  
 に、浣腸の力の字も言い出すことなく終った  
 のである。」40・2月号・「体験記」女よ、汝  
 の名は魔性なり。栗瀬長。

——俗なる剣客?と違って、達人・栗瀬氏  
 はデリケートな、心情の持主でもある。だか  
 ら、「……浣腸を言う勇氣が、なかったこと  
 を、心から喜んだのである」と、酔いにふら  
 つく足を踏みしめながら「女よ、汝の名は魔



性なり」と一人、黄昏の道をおるく時もあるのである。……あの、中野のアパートで縛った山科啓子が、マニヤのエチケツトをやぶり山のグループの上原に口外しようとは……

——げに、かんちよう流をきわめることの道はけわしく、秘技また神韻漂々としてとらえがたし。されど孤独の道を、いつかめぐり逢う永遠なるオアシスを求めて、旅と浣腸の郷愁ある放浪はつづくのである……。



### 水野弘技師御登場

私は、「見世物」に関するメモ・七月号で「幽霊屋敷」を紹介した。これについて、水野弘技師の御高評をひそかに待っていたが、——アウトだった。おそらく科学的なる研究の下に、「出刃庖丁を凝せられた女」・「三方にのせられた女の生首」40・8月号。ETCを創造されている世界の方には、幻の世界は、にがてのものだったのであろうか。

私は、生首マニヤとまでは行かないが、あの竹箆を、かきわけ、かきわけして進み、青白き豆電気の光りにおぼろに照らされている獄門台上の美女の生首をこわごわながら見るスリルは、好きである。

そうだ、推理作家の、江戸川乱歩の作品にも、オバケ大会があつて、生首が、氏一流の筆致で描かれていたことを、おぼろげながら記憶している。

奇クにとって、「生首」というジャンルは新しい、これからもっともっと開拓されるべき分野であらうか。

他の方は、どうであらうか判らないが、私は（乱歩ファンの一人でもあるために）、いと妖しきおどろおどろなる「郷愁としての惨虐」、生首ある風景を、こよなく愛するものだ。水野弘技師の生首研究の成果を、そのベスト・メンバーでもある、（美女生首創造K・K）の一員・新宮明夫技師と共に、期待したいのである。

○筆者註・「……生首も切腹も処刑も、すべてはサジスチックな願望の変型ではないかということです。」——これは昭和三十九年十二月号・「奇譚三十九夜物語」完結記念「わが体験を語る」座談会」に出席された岐阜・水野弘氏の発言の一節。因みにこの日、八和歌山Vの新宮明夫氏も出席されている。



### 中康弘通先生御登場

中康先生は、切腹研究界のオーソリテイであり、奇クとの関係も古い。私の知るハンイでも、すでに昭和二十八年五月号に、「マゾヒズムの極致——少年及び女性の切腹」という稿を発表せられている。

最近号（九月号）では「切腹研究夜話・田谷敬生論」である。

私は、この切腹については、やはり、九月号・「自殺学校奇譚」で、取り上げたが、これは劇をすすめるための小道具に使ったもので、研究などというものではない——が、日本独自の切腹という作法については、関心がある。幼にして剣道を学び、無手の場合の護身術としては、空手初段を持って居り、老師の下に独参して「無字」の公案をもらっている、どちらかと言えば現代の逆を行く古武士の世界を憧憬したことも、あったからである。ただし、いまだに死生一如の何物かも知らず、相も変わらず、幻の世界をさまよう愚者であるため、「切腹。」——この言葉に恐怖と魅力を感じるのみにとどまる。

切腹マニヤでもない私に、その実験談を告白することは出来ない。



ただし、切腹とは、人間にとって最高の自殺形式であることは肯定したのである。私は、かつて戦時中、出征する友のため、小指を切って、血で白紙に文字を書いた経験はある。この程度のことでも、私は油汗が出たことをおぼえている。いわんや——切腹においておやである。厳肅な意味で、中康弘通先生に御登場願ったので、私の精一杯の事実を簡略であるが、記させて頂いた。

### 夜乃探郎氏登場

迷料理人・夜乃探郎が、カスミ風船狂・カスミクウタロウを料理するという。さて、どんな事になるやら？

哀れなドレイ青年美柳輪生の奥さんに鞭うたれ、宝塚二三夫人にブンナグラレ、木戸川健先生に芸術的吊し上げにさせられ、高野原美生にひっくりがえされ、中康弘通先生、お立合いの下、介錯人・黒田寿氏の愛刀で首

をチョン斬られ、羽鳥水江女史の妊婦腹・立わられた内臓からつかみ出されたハラワタをなすりつけられ・水野弘技師の手によって、獄門台にさらし首にされる。

——その情景をもくもくとして旅の武者者、かんちよう流の達人・栗瀬長氏（うじ）が、チラリと、一べつして通りすぎる。

「観客特別席」より声あり、

芳野 眉美「いいきなものさ」

辻村 隆「……とにかくゴーイング・マイウェイで行こう」

とやま・かづひこ「わが党の顔が見えないのが淋しい、——だが面白かったわい」

〔訂正〕 十月号掲載「実録・奇譚クラブ」中、一五八頁、マゾヒスト古川裕子が昭和二十九年三月号八裕子の告別の言葉以前に発表した告白投稿に「慟哭の記」と「わが心の記」も上げておきましたが、アヤマリに付、取消します。

なお、「慟哭の記」は二十九年四月号、八わが心の記は同年六月号所載によるもの。古川裕子氏は、二度「さようなら」を誌上でしているという特殊なケースをふんだ寄稿家なので、混同したことをおわびします。

## 新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

### ☆賞金☆

|    |       |     |
|----|-------|-----|
| 優作 | 一篇につき | 参万円 |
| 秀作 | 一篇につき | 五千元 |
| 佳作 | 一篇につき | 二千元 |

### ☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文獻味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもつて誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんから、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号に発表。

一、入選作には掲載誌発売と同時に、賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「懸賞」とお書き下さい。



# 女相撲物語

## 花の女斗美たち

奮 斗 士 好 太

今日は、わたしたち新相撲部員が、はじめて練習する日です。

わたしが相撲部へ入ったのは、同じクラスのヒロちゃんに、さそわれたからです。

ヒロちゃんとわたしは中学からの親友で、ふたりともお相撲が好きなところから、TVの大相撲に夢中になったり、体育大会などの相撲競技を、いっしょに見に行ったりしてきました。

それでも、わたしは、どっちかといえば、見る方が専門なのに、ヒロちゃんの方は自分でもやってみたいという方で、お相撲を見たあとなどに、「取り口の解説よ」などといって組みついてきて、わたしを投げとばして得意になったりしていたのでした。

高校でまた同じクラスになったのですが、

わたしが、どのクラブへ入ろうかなあと思っていると、ヒロちゃんが、

「ねえ、相撲部へ入らない」と、さそったのです。

わたしは、お相撲は好きでも、自分でやってみたくないという方ではないし、高校体育大会などの時、女子選手たちが乱暴なかけ声をかけて練習をしているのを見て、なんて野蛮なんだろうかと思っていました。女のくせに裸で組み合ったりしているのだから、よっぽど、おてんばな人ばかりなんだわと考えていましたので

「入りたくないわ」

と、ことわったのですが、ヒロちゃんは「どうしてよ、ねえ、いいじゃないの」と、云います。

「だってお相撲なんかやる人って、みんなスゴクらんぼうなんでしょ、わたし、あんな人たちこわいわ」

と、いいましたが、ヒロちゃんは

「あら、そんなことないわよ。わたしのいとこにも、W高校の相撲の選手をしている人がいるけど、スゴクまじめだよ。それに彼女ったら、秀才でうちの親戚のホープなのよ。わたしなんか彼女とくらべられるので、へいこうだわ。お相撲するからって、らんぼうだとは、かぎらないと思うわ」

と、云い返します。

「でも、女の子が裸かになってとっくみ合うなんて、なんだか野ばんみたいだよ。それに……わたしなんか、こんなにやせて貧弱だし力もないから……」





M.U

わざわざマウシ締め  
てやることがある  
なんて、云ってた  
わ」

と、云いまくら  
れて

「ねえ、いいでし  
よ。もし、どうし  
ても、いやだった  
ら、止めさしても  
らえば、いいじゃ  
ないの。わたしが  
むりにさそったん  
だって話してあげ  
るわよ」

と、とうとう、強引に承知させられてしま  
ったのでした。

相撲部の新入部員は、わたしとヒロちゃん  
のほか、別に別の組から津野ヨシエという人と西  
田エミ子という人の四人です。

西田さんは身長はわたしと同じくらいです  
が、わたしみたいにやせていないし、無口で  
すが、勝気そうな人でした。津野さんはすこ  
し小がらでガッチリした感じ、いつもニコニ  
コしていたすら好きらしい目つきをしていま

す。この前、新入部員が、呼ばれて集ったと  
き、はじめて会ったのですが、すぐになかよ  
しになってしまいました。

今日は西田さんが用事で行かれず、ヒロち  
ゃんは、おそうじ当番ですこしおそくなるの  
で、津野さんと二人で行きました。

ガッチリした体格の津野さんとならんで歩  
いてると、またなんだか相撲部へ入ったのが  
間ちがいったという気持ちが起きてきて心配  
になりましたが、津野さんが

「あなた、背が高くていいわね。あなたくら  
いの体格だったら、どんなスポーツでも上達  
するわよ。わたしなんか、あなたくらいの背  
になるのが理想なのよ」

と、いいますので

「そうかしら」

と、ちょっと、とくいに、なったりしまし  
た。

部室のドアをあけると、そのドアのわきの  
机にこの前、わたしたち新入部員にいろいろ  
説明してくれたマネージャーの笠原さんがい  
ました。そして顔をあげて、わたしと津野さ  
んを見ると

「アアきたわね。待ってたのよ」  
と、声をかけました。

「あら、スポーツだからよ。裸になるんだっ  
て、水泳だとか体操だって、あんなうすいも  
のしか着ないんでしょ、あの方がかえって、  
ヌードみたいだっていうわよ。力がなかった  
ら、わざで行けば良いんじゃない。やってる  
うちに体格だって良くなるわよ。それにね、  
わたしのいとこにいわせると、マウシってス  
ゴクいいんだって。あれをするとね、からだ  
中がピリッと緊張してくるんだって。だから  
彼女なんかむづかしい試験勉強になると、わ





M.U.

風呂場へ入るのです。ちょうど上級生がふたり、裸かになってマワシをつけているところでした。

ひとりは色白でふつうの体格でしたが、もうひとりの人は、背はそんなに高くないのですが、スゴイボリュームです。

肩が丸くもり上がっているようで、胸からおなかがおもちゃみたいで。お尻のあたりなどはわたしの二倍くらいもあるようでした。

びっくりして、その方を行っていると「ちょっと、こっちへきて」

笠原さんに呼ばれて行くと、並んだロッカーのはじの方に、わたしたち新入部員の、名札のついたのがありました。

「これが、あなたたちのよ」

笠原さんは開けながら

「服をぬいだら、ぬぎっぱなしにしないで、かならずこの中く入れるのよ。それから、あなたたちのマワシはいま注文してるから、それがくるまで、これを使ってちょうだい。これ正選用のなんだから特別なのよ」

中から青い色のマワシをとって、わたし津

野さんに渡してくれました。

受けとると、ズッシリと分厚な布地の手ざわりがすごく重い感じでした。

「練習がすんだら、またキチンとたたんで、このロッカーへもどしておくのよ。自分の体につけるものなんだから、キレイにしておかなくちゃ自分が困ることになるわよ」

笠原さんは、そう云って、ちょうど練習場へ行こうとしているさっきの二人のひとを呼び止めて

「ちょっと、あなたたち、この子のマワシを手伝ってやってよ。わたしこれから部長先生とお話があるから」

と、声をかけて

「じゃね、まじめにやるのよ」

もう一ぺん、わたしたちに注意すると、部屋を出て行きました。

わたしと津野さんが、マワシを手にして、それを見送っていると、さっきの色白の人八榎本さんという人でした。Vがわたしの方へきました。津野さんの方へ行ったふとった人は小林さんというひとでした。

「そいじゃ、服をぬぎなさいよ、手伝ってあげるから」

と、いわれて

わたしと津野さんは、ピョコンと頭を下げて部屋へ入りました。

つきあたりの壁に黒板があって、日程などが書いてあります。

そのわきから右の方へ、ズラッとロッカーがならんでいて、いちばん奥の方にドアが二つあって、ひとつは練習場、もうひとつはお



「はい」と返事をしましたが、上級生の見て  
いる前で裸になるのかと思うと、ちょっと  
恥かしくなってモジモジしながら横目で津野  
さんを見ると、津野さんもチラッと、わたし  
の方を見ましたが、急にパッと服をぬぎはじ  
めました。

それを見ると、わたしも「まけるもんか」  
と思って、らんぼうに服のホックをはずして  
どんどんと脱いでいきました。

さいごにパンティをとる時は、やっぱり恥  
かしくなって顔が赤くなりましたが、思い切  
ってぬいで教わったように、マワシを前に当  
てました。ヒヤッとした肌ざわりに、思わず  
ブルッとからだがふるえました。

折ってあるのをひろげて胸のあたりへ当て  
ると、すごく広くてわたしのからだの巾くら  
いもあるので、びっくりしましたが股を通す  
ところは何回も折りたたむので逆三角型のピ  
キニスタイルみたいになり、ちょっとときげ  
んでした。榎本さんは

「あんだ、マワシははじめてでしょ」

と、声をかけて

「はい」と答えますと、榎本さんは

「こんな厚いのを、はじめての人に締めさせ  
るなんて無理なんだけど」

と、半分ひとりごとのように

「もし痛かったら、笠原さんにそう云って別  
なのにしてもらいなさいよ」

と、いいながら股を通したのを、お尻へ引  
きあげて腰へまわし、一回、二回と巻いてか  
らグッと締めます。引くのに合わせて腰をひ  
ねるのがうまくタイミングが合わなくて、な  
かなか締められませんでしたが、四回目くらい  
に、うまく行って「ウッ」と声の出るほどき  
つく締められました。

あんな厚いマワシが腰へ吸いついてくるよ  
うに締まって、まるで腰を大きな手で強くに  
ぎられたみたいな感じです。

すこし息苦しいくらいですけど、体中が  
引きしまったという気持で「ワァッ」と大き  
な声をあげてみたいようでした。

こんなのを、ファイトが湧くというのでし  
よう。胸へ当てていた部分をおろすとマワシ  
の上にチョコンと乗ったような形でオヘソが  
顔を出しました。マワシをきつく締めたため  
におなかの肉が押し上げられて、そのためす  
っかり小さくなって、細い棒でつつ突いたよ  
うな形です。私のおヘソって、こんなかわい  
かったかしらなどと、変なことを考えて、ひ  
とりでおかしくなりました。

一回巻いてから、前に下がっている部分を  
折りたたんで、その上へまた一回、二回と巻  
いてギュッと締めます。

となりで締めてもらっている津野さんの方  
を見ると、うまく行かなかったのか、せつか  
く締めたのをといて、やり直しをしていると  
ころでした。前のはしをのどのあたりまで上  
げていたのを、お乳のあたりまで下げてまた  
締めはじめます。唇をギュッと噛んでコワイ  
ような顔をしていましたが、わたしの見てい  
るのに気がつくニコッと笑いかけました。

「はい、いいわよ」

榎本さんに云われて、あわてて頭を下げま  
した。何だか体がフワフワと浮き上がったみ  
たいで足元が落ちつきません。股を締めてい  
るところが体を持ち上げているような、何か  
にまたがっているような妙な気持です。

すると津野さんが、そばへやって来て

「あなた、なかなかイカスわよ」

と、云いながら、わたしのお尻をチョッと  
つつきます。でも彼女の方が体格が良いだけ  
にずっとイカスのです。とくに肉づきの良い  
お尻にギュッと締めこんだタテの部分など最  
高のミリキだと思いました。

「何云ってんのよ、それ、あんだのことだし



よう」

と、云い返えしますと、津野さんはいきなりわたしのマワシのうしろの結び目をつかんでグッと持ち上げました。

それだけでなく、足元がフワフワしているところなので、思わず、前の方へ転びそうに

なっ

「キャッ、止めて」

と、叫んでしまいました。

その声に、小林さんがふりかえって

「あんたたち、何してんの。ふざけてるとウソどしほってあげるわよ」

と、にらんだので、津野さんは首をすくめてペロツと舌を出し、またにらまれてしまいました。そしておとなしく、榎本さんと小林さんのあとから練習場へ入りました。

(未完)

## 週刊紙に表われた

### 「女優の美鼻学」 その他について

湯谷 照夫

『週刊文春』の六月十四日号に、「女優の美鼻学」と題して古今東西の名女優の鼻、特に鼻筋と鼻孔に就いて評論しながら、筆者の好みを述べて読者に共感を呼びかけている。筆者のYS氏と私の好みと性向が一致して、近頃世の中が拓けたような気持で、ひそかに楽しい日を過している。

私の特異的(そう特異とは思っては居ないのだが、一般に友達と取り交す皮相的な性向でなく、自分の体内からネトリと湧き出る様な興奮を反射的に誘発する特異性をもって

いる)——その特異点を指摘した記事が週刊誌に告白されていたので、何だか自分が筆者になって、世の中の男女性に自分を理解して貰った様な気持である。

言い換えると、自分だけに秘めている特異性向を街頭に山積みされている週刊誌上に告白して、世の中の紳士淑女の視線の裡に見返られる羞恥感、又その何倍の人達は私と同じ性向であると感じて、自ら心のゆとりを抱き得る境地にある。これは啓子嬢が被虐のあけく電車の中で多くの視線に身を晒す哀欲羞恥

感に似て、私の心の中のマゾ感の悦びであると思う。

話を元に戻して、週刊文春紙上で筆者が讚美する鼻は、その鼻筋が少しづまりに軽くそり、鼻先がクツと上向き加減で、正面から見ると、細長い楕円形の鼻孔が窺える。その鼻孔に連る口元と唇との組合わせは、凄く挑発的であると云う。天下の女優をあげて色々と言くと、全く同感で、読んでいるうちに、体が熱っぽくなってしまった。こんな鼻の持主の女の顔を仰向けて至近距離に、その鼻と接して觀賞し、又深い鼻息を受けると、私の特異な性向が激しく掻き立てられるのである。

近頃は、テレビでもレンズを低く構えて、鼻孔表情をとらえて、タレントの美しさと感情を画面に出そうとする場面が多くなってき





て楽しい。例えば、浜美枝はそれである。九重佑三子も、もっと色っぽくなってきたら、斜前下方から、レンズを向け、目をつぶらせて、薄く唇を緩めたポーズをつけたら、私共の心を掻き立てるに違いない。

奇ク旧刊号に「私は死にたくない」と題して、処刑されている美女の鼻孔表情の動きが刻々と細かく写述された記事があり大切に保存して繰返えし繰返えし読み耽っている。細

長く縦に伸びている鼻の美しい女優が演じているのであるが、黒い鼻孔の奥にひそむ神秘的な陰影、薄い粘膜に宿っている粘液を含んでいる繊毛が刑の責めを伝える様にひそかにゆれる。深い吸息吐息のバランスがくずれ、美しい鼻翼に力が入って無我の苦痛の後に、被虐の悦びが口元の辺に歪んでくる。

鼻翼に入った力がスーッと解けると、一瞬間自然のままの美しい鼻孔型になる。呼吸が合って私の肩の力も稍柔ぐ。一息入れると、受刑女の美鼻が一段と上向いて紅唇と二筋の美しい鼻孔が眼前に迫り、激しい責めを鼻孔周辺から内面の表情で繰り広げ、鼻障子（鼻中隔）粘液が渴いて行く。鼻孔尖端の変化や両鼻翼と上唇との接点周辺の拡がったり狭ばまったりする動きが受刑女の体全部の変情（移り変って行く情態）を表現して悶える様は、能楽の面の持ち表す表情の変化も遙かに及ばない。

私は、よく飛行機で東京大阪間を往来しているが、いつも座席を通路側にとって窓側にとらない。塔乗して、先ずスチュワーデスを見て美し

い鼻孔の持主だと、もうたまらなくなってしまう。離陸して安定飛行に移ると間もなく、スチュワーデス呼び、何かと用を頼み話し易くする。それから椅子をグッと後に倒して仰向けの姿勢をとる。改めて彼女を呼び、今度は窓外の景色、地名等色々と質問をする。前に呼んでいくらか親しくなっているのと、小さい丸窓で外部が見え難く中央通路からは体に乗出さねばならず、丁度仰向けになった私の顔の上に、奇麗な鼻孔を覗かすような姿勢をして小窓を通して、あれこれ説明してくれる。その間私は説明をきくより、うっとりとして美しい鼻孔の変化に異常な神経を刺戟して息をつめる。

或る時は、彼女の方でも私の気持を感知する事があり、自分の鼻孔美を自覚しているスチュワーデスに当たると、言わず語らずに、私の好む姿勢をとって満足させて呉れるのである。其の後乗客から感謝の意を彼女に手紙で届ける（塔乗後直ぐ彼女は本名を自己紹介するから、私は気付便で本心を伝える）。恐らく受取った彼女も満足していると思う。飛行機利用の日が浅いので、まだ二度同じスチュワーデスに会えないが、そのうち再会したら楽しい事になることと期待している。



## 本誌二〇〇号突破記念原稿

## アリアドネ

ビブリオテケー  
 さいへんせい  
 希臘神話の再編成

「クリート・エムパイア」

黒 渕 嬰 一

更に九年が過ぎた。ミノス五十二世がエーゲウスから第三回の貢献を徴する期限が到来した事になる。

紀元前一四九七年四月二十四日の朝。

二艘の大艦船がエーゲ海を南へ向って航行していた。

此の当時、外洋を自由に航海する艦船があれば、それはクレテ海上帝国所属のものと思つて間違いない。二隻は北方からクノススの外港に接近していた。あと数時間でクレテの島影が水平線に現れるだろう。

一隻は商船型の輸送船だった。船腹は重く沈んでいる。灰黒色の帆が風を受け、両舷各十五挺の櫓が水を切っていた。大櫓頂には日

章の金球。船尾柱には月章の銀球を飾り、藍地に七星を描いた長旗を流している。吃水線下は瀝青で塗り、ハルライン（舷側線）は五彩の石灰を以て波形に描き、舳には黄銅の獅子頭を打ってあった。ガレースレイブ（櫓漕奴隷）は予備を含み三十五人。操船に必要な人員は七人。甲板上にキャビン（船室）を設け、長期航海に適する居住区劃を有し、舳は高くして浚波性を向上させ、艫は一層高くなつてその上に船橋を置き、操舵を便にして運転性能を良好にしてあった。そして此の船は武装兵士百五十人をその全装備と共に塔載出来るし、物資なら百八十噸を輸送し得る。三千年後の千石船に、相当して更に堅牢だつ

た。但し今日はアッティカ地方から徴発する九年に一度の貢納品を満載していた。羊毛、穀物、オリーブ油、葡萄酒、蜂蜜酒、獸皮、牛、羊、蜜の類で、船一隻分は富裕なクレテ王国にとってこそ問題とするに足る程の物ではなかったが、納めるアッティカ地方を恒久的に貧困化させるには充分な量額だった。

他の一隻は三層百丁十挺櫓の戦艦だった。舷側は銅のアーマープレート（装甲板）で張り固め、舳の水線に青銅の鋭いラム（衝角）を備え、艦首にバリスタ（弩砲）艦尾にカタパルト（擲射器）を構えている。艦底の水に浸る部分は銅板で被覆してあった。操艦の定員は十人。他に武装戦闘員のうち七人は弓箭



を持ち、隊長を含む十三人は甲冑刀槍を帯びて陸戦に参加し得る。艦尾には馬二頭を収容する厩舎があり、チャリオット（二輪馬車）一輛が分解格納してあった。

下甲板には片舷三列、縦三十伍のガレーズレイブ（橈漕奴隸）が艦の推進に当り、二重底内の予備二十名を加えて漕者の総数は二百人である。地中海種もアリヤン種も黒人も居た。諸地方から捕獲して来た強制労働者である。ガレーズレイブ（橈漕奴隸）は艦尾方向を向いて漕いでいた。艦の速力を指示調節していた。指揮台の直後には垂直に近い梯子があり、上部の司令塔に続いていた。

制式戦艦は艀首尾樓の隆基部がなく、全体が高いアルマジロ（乾舷）になったフラッシュユデッキ（平甲板型）だった。その甲板後部に三階建の櫓塔を構え、戦闘航海の指揮中枢に当てていた。屋上は露天式戦闘艦橋、三階は海図や天測機械を備えた航海艦橋、二階は艦長以下将校の私室、公室等の居住区、一階後部は操舵室で、前部は武器索具の倉庫だった。但し此の倉庫は、特殊目的の為に改造され、三方を厚板で囲い、前方一面を格子で仕切って牢舎に利用されていた。中にはアケヤ人の少年少女各七人が監禁されていた。

右舷側の壁に背つけて、七人の少年達は両手を左右に拡げ、手首を壁の青銅環に繋がれていた。

左舷側の壁では、七人の少女達が、床に坐り、革紐を以て背に縛られた両手を更に壁の背銅環に固定されていた。

床の中央から正面の壁に向って食器や便器が置いてあった。一定時間を限って一人宛、使用を許可されるものだった。

少年達の中央に、際立って背の高い、逞しい体格の美男子が居た。亜麻色の髪を肩の辺迄垂らし、額の部分だけを剃りあげていた。

日本の中世に於ける月代のような剃り方だった。それで本来広い額が一層広く見えた。厚い胸。締った腰。体格だけ見ればとても少年には見えなかった。併しよく見ると未だ腹筋もなく、髯も生え揃わず、端麗な顔貌も子供らしかった。高い鼻梁の両側に鋭い眼があった。瞳は何かを見据えて燃えていた。両手を高く拘束されていたが、胸を張って姿勢を起し、王者然とした威厳が漂っていた。他の子供達が一樣に俯向き、又は眼を閉じている中で、彼一人昂然として見えた。頸の環にはクレテ文字で「ユーゲウスの子テセウス」と書いてあった。

牢舎の中に動揺が起った。格子戸が開かれクレテ海軍の制服を着た士官が現れた。

青の胴着に金糸の刺繍。編金の帯。紅の外袍。幅広の銅剣。確かにクレテ貴族には相違ないのだが、髪を高く結い上げ、顔に薄化粧を施した女性士官だった。

手には拘束具を解く鍵束を持っていた。大胆なのか、武技に自信あるのか、従者は誰も連れていなかった。体格は優れ、丈も高く歩幅も広く、堂々として見えた。

女士官は薄暗い牢内に、眼を慣らす為か、暫く立っていたが、やがて真直に右舷側の中央に歩み寄った。

「テセウスの噂は聞いていました。十七才だそうだが本当ですか。とてもそんな子供には見えないけれど」

厳めしい装束に似ず、女士官は女らしい声でやさしく問いかけた。テセウスは何の感動も起さないかのように相手を見上げた。

「わたしはクレテ王太子グラウコスの妃。クレテの風習によって、グラウケーと呼ばれる者。元の名はアンティオペー。テミスキーラの女王ヒュッポリテーの娘です」

グラウケーがアンティオペーならば、二十九才の筈である。併し実際より五年は若く見



えた。太子妃はテセウスの腕を軽く撫で下した。その筋骨に感じた逞しさを嘆賞している如くだった。

「立派な身体ですこと。エーゲウス王とは似てもつかぬ。エーゲウスの王子と言うのは箔をつける為の詐でありましょう。だがそんな事はどうでもよい。此の美しい容姿。此の立派な筋骨はクレテ王国でも、ついぞ見掛けなかったものです」

テセウスは汚らわしいとでも言うように脇を向いた。固定されている両手の拳を固く握りながら唇を歪めた。アンティオペーはテセウスの顎を持って顔を正面に向け変えた。

「わたしの夫グラウコスには能無し、臆病者。髯も胸毛ありません。一本残らず抜いてしまふのですよ。化粧や衣装にばかり凝って、わたしが側に居てやらないと、何も出来ない男。未だ子供も出来ません。尤も、そのお蔭でわたしは何時までも若いけれど。ミノス大王は十三人の子持ち。わたしの一族は皆子沢山なのに。亡くなったアンドロゲオースは、ミノス大王に生き写しの優れた戦士だったそうです。三男のデウカリオンも、顔は良くな

テ人の面汚し。わたしは餘程結婚運が悪かったに違いありません」

餘りにも大胆な、そして意外な告白にテセウスも漸く興味を覚えたらしい。依然として一言も発しないながら眼だけは正面を向けて太子妃を眺めた。

「テミスキーラの女が勇敢な事は聞き知って居るでしょう。中でも勇敢な女王ヒュッポリテの娘として、わたしも勇敢な男が好きなのに、撰りに撰ってグラウコスのような者を掴まされるとは。わたしの妹メラニッペーはデウカリオンと結婚する際、醜男だと言って歎いていましたが、今では姉のわたしを嘲っているかもしれません」

テセウスはアンティオペーの美貌に氣附く餘裕を得た。子供を生んだことのない胸は、武技、体育に鍛えられて、身体に密着する軍服の下から美事な曲線を見せていた。色は浅黒いが四肢逞しく、頬は健康的で黒い捲毛にも艶があった。並居る他の少年少女も、不由な姿勢ながら太子妃に注目している。

「テセウス。其方がエーゲウスの所に現れてから間もなくパラースは敗られたそう。マラトニに山寨を築いていたタウロスは捕えてアクロポリスで殺したとか聞いています。エ

ーゲウスも手離したくなかったでしょうに。其方は勇ましく、逞しい女性は嫌いですか。わたしを美しいと思いませんか」

太子の眼が妖しく光った。テセウスはアンティオペーの意を察した。寧ろ邪推した。慰んだ後で殺すのではないか。

そして太子妃の希望とは逆の反応をした。正面に向けていた視線を再び外らした。

「其方達がクレテ王国で何うなるか。知りたくはありませんか」

アンティオペーは話題を変えた。テセウス以外の十三人が一斉に動揺した。併し太子妃の目差す相手は動かなかった。アンティオペーはテセウスの氣を惹こうと更に語った。

「クレテは海上に無敵を誇る国。金銀に満ち富み栄える強大な国。その力と富の根源は海です。併し海は狂暴と惨忍を秘め、一度怒ると幾らでも犠牲を要求します。クレテの海神もその通りです。牡牛の形をしてラビリンス（迷宮）の奥に官居し、処女と童貞の。」

此の時、両舷甲板を舳から艫に向って伝令が走った。

「入港接岸用意。配置に就け」

アンティオペーは一寸外を見て言った。

「行かなければなりません。わたしの夫は操



艦が下手で、傍に居てやらなければ接岸が出来ないのです。又、後で会いましょう」

クレテの島影は眼前に迫っていた。高さ四百キュービットの大灯台が、高く聳えて見えた。一箇数噸の巨石を並べ沈めた防波堤が姿を現し、港口両側には金の海豚像が二箇。一方は躍り上り、他方は潜る姿勢で入船を迎えている

クレテ島は面積八六二〇平方呎。広島県より少し大きく、京都滋賀の合計より幾分小さい。中央には高さ二四八〇米のイダ山の如き高山を含む背梁山があり、全体として丘陵の多い山地形だが、メッサラ平原のような沃野も幾つかあって、それ等の平野は古代に於て肥料の要らない農耕地でもあった。本来沈降性の島であるから山脚が海に沈んで天然の良港湾を成す所も多い。

当時、全島の人口は六十万。その内、首府クノススが八万餘。極端な中央集権を裏附ける数字である。

人口の社会構成は貴族二万。平氏八万。奴隷五十万。貴族と平民の間に本質的な差はない。共にクレテ島土着の自由民である。貴族の特権は祭祠と海軍の士官程度で、財産権に関する法的優劣はなかった。クレテ人の財産

は商船の使用権であり、資産の流動性が大きく、勤労と幸運次第では容易に富豪となり得た。併し自由民の没落は重大な犯罪者でない限り極力防止された。クレテ人の総資産は大だったから、その一部はラピリンス（迷宮）に蓄積され、恩給形式や共済制度として支出され、遭難や戦闘に依る不慮の損害を填補した。又、貴族は農耕地を相当所有したから最悪の場合でも陸上の財産に頼れた。平民が傷害等で海上勤務の能力を失っても、鉾山や森林の監督等の（クレテ王国に於ける）賤業に甘んじたなら、王家から相当の給与を受ける事が出来た。

奴隷は不均衡な程に多いが、後述する如く社会不安を起す勢力たり得なかった。その消耗率は極めて高く、供給は島内の出生では到底、足らなかった。ガレースレイブ（橈漕奴隷）の如きは平均五年で無価値となる。毎年約三万の成年男女が主として捕獲に依り、一部は購買に依ってギリシャ、フェニキヤ、リビヤから供給された。

クレテ王国の人口構成に、もう一つの不均衡があった。男女の性別がそれで、自由民も奴隷も男は危険や過労で壮丁の早死が多かった。自由民十万の内訳は男四万、女六万。然

も十五才以下の男女数は均等だから、適齢期の男女比は怖らく一対二に及んだであろう。奴隷は五十万中男二十万、女三十万。その内十二才以下の未就労奴隷は男女各四万と推定された。奴隷間の結婚は禁止されていなかった。寧ろ労働力確保の為に奨励された。自由民が奴隷に生ませた子供は認知に依って籍を得られる事もあった。

クレテ王国の国防と富源はすべて海と船に依存した。壮丁は悉く海上で働いた。

三層百八十挺橈の戦艦は二百隻。

細かい計算は省略するが、エーゲ海、クレテ海、イオニヤ海、エジプト海からレパント水域一帯を橈漕速力で常時哨戒するには三隻編成二十箇戦艦が必要である。

橈漕戦艦の航続力は極めて少いから頻繁な交替が必要となる。重油こそ不要だが穀物が燃料に当り、下甲板は人間で充満し、奴隷ではあるが充分なカロリーを与えないと速力に影響する。穀物は容積の張る物資で無制限な積載は、出来ない。ガレースレイブ（橈漕奴隷）の疲労限度も考えなければならぬ。前進根拠地を利用するとしても作戦期間は三十日であろう。哨戒水域への航海と引継に十日平均要るとして三十隻が出撃中、同数が帰航



中と計算する。

木造船は航海毎に入渠修理を要する、整備期間は一箇月、従って待機中が六十隻、

複雑な操艦動作を新兵に教育する練習艦及び警備艦が若干、これを加えて総数二百隻、必要な人員は戦闘員四千、操艦二千、ガレースレイブ（橈漕奴隸）四万となる、

商船数の推定は少し難しいがしてみよう、壁画や古典より見るに、クレテ王国には二種類の商船があった、三十挺橈百八十屯積。船員七人。奴隸三十五人、乗りの型と、五十挺橈、三百屯積、船員十人、奴隸六十人乗の船である。航程の遠近、水路の浅深、積荷の如何で使い分けられた。フェニキヤ人や後代のギリシヤ人はクレテの船を模倣した、

十万の自由民が高度の文化生活を、五十万の奴隸が最底生活を維持する物資中、三割が輸入で賄われ、それと等量が輸出されると仮定し、各船は毎年二航海するとして重量屯から算出すれば、三十挺橈船一千隻、五十挺橈船五百隻が必要である。船腹保有量三十三万裁貨屯は先ず妥当な数字であろう。必要な乗員は自由民一万二千、奴隸六万五千である。

クレテ王国の艦船は国有で利用権の形で保証金と引換えに貸与された。危険分散の為で

もある。これ等の船はオリブ油、椰子油、

獣脂、魚油、葡萄酒、蜂蜜酒、薄荷、胡麻、陶器、家具調度、貝細工、羊毛、毛織物、海産乾物、燐製品、紅染料、銘木類、青銅器、錫器、金銀器、玉器、医薬品、麻織物、刺繍品をエジプト以下の地中海世界に輸出した。

青銅器と陶器は、殊に有名だった。麦類、豆類、亜麻糸、麦酒はエジプトから、紫染料はフェニキヤから、獅子、孔雀、駝鳥、象牙、象、鰐皮、羽毛、香料は、リビヤから輸入され、他に植民地経由の中継貿易や貢納があった。シチリヤ島からはイベリヤの銀や銅や鉛の原鉱石、アルモリカ（イギリス）からは錫や真珠、スカンジナビヤの琥珀が舶来し、ミレストからは、珍鳥、チーズ、リディヤの金、が、テミスキーラからは、虎、熊、豹の皮、馬、紅玉、水晶、軟玉、亜鉛が、運び込まれた。併し最大の価値あるものはギリシヤ本土から得られるアケーヤ人の奴隸だった。

軍艦と商船の他に沿岸用舟艇があった。

十五挺橈のリブルナ（快速艇）。これは水上警察的な哨戒艇であり、船員三人、武装員二人、奴隸二十人を乗せ、密貿易や入出国を取締る。遊覧用輕艇、連絡船、河山用渡船、各種漁舟、港内用交通艇、解、給水船、沿岸

用荷船、雑役船等一千八百隻。船員員は自由民二千、奴隸一万五千である。

艦船の総計三千五百隻。人員は自由民二万ガレースレイブ（橈漕奴隸）十二万に及ぶ。

冬季を除き、自由民一万五千、奴隸九万が常時、海上又は国外に居たと推定されるから、総人口から見ても驚くべき高率である。十二月一日から二月末日に至る三箇月間は航海不適期間で、此の時期のみ全壮丁がクレテ島に揃い、財産の計算をしたり全島挙げての祭典を行ったりした。

クレテ王国に於ける自由民の男は四万人だから、十六才から五十才迄の殆んど全員が海上で働いていた事になる。壮丁で陸上に常任する者は海上勤務不適格者、不具者、犯罪者準禁治産者に限られた。

自由民の女性は六万。その内十六才から三十才迄の一万二千が勤労義務を有した。勿論家庭に支障がなければ定年を過ぎて働く事も出来た。クレテ王国の富裕な経済力は婦人職員に充分な給与を払う事が出来た。クレテ王国の経営は殆んど全部門が此の年齢の女性に依って担当された。

チャリオット（二輪馬車）の馭者が、五百人。技術者五百人。行政官吏二千人。公共施



設の監督官は千人。神宮、巫女二千人。警官三千人。

チャリオット（二輪馬車）の取者は前述の如く最高の名誉官職で、その勇壮な疾走は憧憬の的でもあったから、殆んど貴族の娘に占められた。家柄、容姿、知性、体力が揃っていなければ此の仕事は勤まらなかった。但しクレテ貴族は一千年に亘り結婚の相手を厳選しながら維持されて来たから、優生学的にも劣等要素は淘汰され、候補者の供給に不自由を感じなかった。



神殿の最高祭祠権は、王族や高位貴族の世襲に属し、終身制だった。併し神殿は祭祠と託宣の場であると同時に、学校、病院、裁判所、銀行、天文台の機能を兼ねたから、神官や巫女は当然、学者、教師、医師、司法官、経理士の何れかの資格を必要とした。基礎的な学問に優れた女性は概して神殿に集り、定年後は私設の学校や病院や相談所を開いた。応用的な学術に長じた者は特殊教育を受けた後、造船、建築、製陶、金属精煉加工、化学工業等の技師になった。少数の解放奴隷以外はクレテ人の女性が当り、定年後も嘱託勤務する者が多かった。

行政官は迷宮や地方宮殿に務め、一般政務や徴税、記録等に当った。国家会計や人事行政を相当するのも彼女等だった。

監督官は工鑄業、公共建築、衛生施設、港湾、道路、灯台、灌漑水路、競技場等を管理し、多少に拘らず奴隷を使役した。生産、流通、交通のすべてがその管轄だった。中でも重要なのは造船で、木造船は七年で腐朽するから毎月二十隻の新造が必要であり、船台は十五日毎に艦船を進水させていた。クレテ王国では看手さえも女性の仕事だった。監督官になる者は二年の訓練期間内に鞭と武器の使

用を充分に習熟した。彼女等の手に負えない事態の為には女の警官が用意されてあった。六十万の人口を有するクレテ王国の治安が僅か三千の、それも婦人の警官に任されている事は、奇異に感じられるかもしれないが、常時、陸上に生活する者の七割が女であり、外寇の危険や奴隷叛乱の可能性が過去一千年間一度もなかった事を考えるなら理解されよう。クレテ王国は軍国でも警察国家でも、クレテ女性は武技鍛錬を義務と感ずるよりは体育として愛好していた。その中から体力、気力共に優れて撰抜された三千人は侮り難い実力を有した。然も満期除隊後の者も武器を家に備えて予備隊的存在となり、警察職以外の女性も武技に練達した者が多く、青銅製武器の使用法を知らない奴隷に対する潜在的警察力は強大だった。警官は通常十一人編成で行動したが、緊急時にはチャリオット（二輪馬車）五百輦を集中使用して五百人を非常動員し得た。併しそれは決して軍隊としてはなく、此の五百人を単一の戦術集団として運用する訓練は施されていなかった。

クレテ王国に於て、男は不在の事が多く、財産の管理は事実上不可能だった。島内にある家や農地や其他の（船を除く）財産の所有権



は戸主たる主婦に属した。法律上は二万五千人の女主人が王国の全資産を分有していた。クレテ王国で男は表面上無権利者だった。併し王国の安全と財宝の流入は海上に於ける男の勤労に依存するものであり、男女の比率から見ても壮丁は貴重だったから、上陸している時の男は公私の凡ゆる面で尊敬され、鄭重に扱われた。本来男というものは女から大切にされると喜んで働き、勤労の収穫は女に捧げながら適当に消耗して行く甚だ目出度い動物なのかしれない。

ミノス大王と雖も例外ではなかった。ラビリンス（迷宮）の主人は王后パーシファエーだった。カルキオペーの例が、それを証明する。ビブリオテーケー（希臘神話）でミノス大王が諸王子や王女の夫等を集めて法令を定めると、あとは王后以下の女達がそれを行政や司法に適用した。クレテ王国の法律は日本の刑法のように、解釈次第で幅の広い運用が可能だった。ミノス大王は対外的な国王であり、大元帥であり、オケワヌス（海神）の祭司長兼立法者ではあったが、それ以外には王室財産の所有権すら持たなかった。

王后パーシファエーはダー（地母神）の祭司長として、最高司法権を持ち、ラビリンス

（迷宮）の主人として、王国の首相でもあった。王后氣に入りの第二王女アカレーは内相で警視總監。王太子妃アンティオペーは通産相兼港灣局長。第二王子妃メラニシペーは蔵相兼宮内長官に類する地位にあった。又、国王の母エウローペは八十才で健在であり、ヒュペリオン（太陽神）の祭司長として国立天文台長に相当する職を既に六十年間務めていた。斯くの如く、クレテ王国の陸上の要職はすべて王后以下の女性が掌握していた。

奴隷の分属状態も自由民に準じた。

就労年齢の男奴隷十六万の内、十二万は前述の如く、ガレースレイブ（橈漕奴隷）である。これは極度の重労働で、規定の年数を務め終える者は少く、適時に補充交替させるのが経済的な運営だった。生き残った者は漁舟や渡船等の比較的自由のある船に廻された。陸上の四万は、腕に特殊の価値を認められた者以外は、橈漕に適さない不具者、虚弱者が多く、そうでない者は右手の親指を切断してあった。労働には支障ないが武器は持てないようにする為である。荷役に当る港灣労務者約一万。土木建築、造船、山林等に約二万。煉瓦、染料の製造や、下水等の汚賤労働や穀挽等の下等労働に約一万。最後の部門は懲役

的労働でもあり、穀挽専用の如きは労働上必要でない両眼を摘出してあった。

クレテ王国には、農民という階級がなかった。自由民の二万五千家庭が土地を分有し、各家所属の奴隷を適時農耕にも家内作業にも使った。就労年齢の女奴隷二十六万中二十万が家庭用として分配されていたが、これは一家庭平均八人に当る。下賤労働者は約四万。資質の優れた者二万は王室、宮殿、神殿で訓育されていた。その中からはカルキオペーの如き幸福又は不運を掴む者も出た。

奴隷が五十年の勤労を無罰で終ると自由民の末席に入り得た。解放奴隷本人の余生は幾らもない筈だが、自由民には私有財産権が附属し、蓄財如何では子供を自由民と結婚させる事が可能になり、三代目には完全な一家を作る事が出来た。此の恩典を受けた者は幾らも居ないのだが、奴隷の勤労に僅かな希望を持たせ、労働を促進する効果があった。

ダイダロスは此の制度で自由を得た稀有の一人だった。今年六十五才。十才の時にギリシャ本土から連れて来られた捕虜である。髪も髯も既に真白だった。元来が壮健な上に器用な性でガレースレイブ（橈漕奴隷）を勤めあげた後、腕を認められて工匠奴隷に採用さ



れ、建築原理を覚えてラビリンス（迷宮）の増築工事には工匠頭として働いた。発明の才もあって、王后パーシファエーの為に車附木牛を作ったりしたので重宝され、アッティカから貢納されてオケワヌス（海神）に捧げられていた王室用女奴隷ナウクラテーを賜り、晩年の独り息子イカロスが生れていた。ナウクラテーは自由を得ない内に、過労で死んだが、イカロスは母親似の美少年に成長し、今年は十二才だった。

女性の監督下に五十年間働き続けたダイダロスの生涯は随分M派向きの記事になるだろうが、本篇と余り関係がないから省略する。

クレテ王国で財産の所有は自由民にのみ認められた。自由権を売る事は禁止されていたが、解放奴隷が、近親の自由を買う事は出来た。その代価は莫大だったが法規上は可能だった。既に何年か労働していれば、その期間に応じて減額された。

イカロスは男だから国有奴隷に属した。オケワヌス（海神）とダー（地母神）に規定額の奉納を行えば自由民になれるのだが、未就労の為全額の払込が必要だった。そして、今年十二才なので来年はガレスレイブ（機漕奴隷）にされる筈であり、美男子だが余り丈

夫でないイカロスが海上の労働で何年も生き残れるとは思われなかった。あと一年の間にとダイダロスは、老骨を自ら励まして働き続けた。イカロスだけが人生の楽しみだった。ダイダロスは建築や木工に優れた腕があつて収入は多かった。時には新奇な発明をして王室に買い上げられた。併しイカロスを自由民にする額は未だ得られなかった。

王后パーシファエーはダイダロスを最負にしていた。好意で援助を申し出た。第二王女アカレーがイカロスを身近で使いたいと言っているとの事だった。承諾すれば莫大な報酬が約束されていた。アカレーの性格をよく知っているダイダロスはその意味が解ったが、身分上断れなかった。一年以内にイカロスの自由を買う額を溜める手段は、これより他に無かった。

グラウコスとアンティオペーの夫婦や、テセウス等のアケーヤ人を乗せた艦船がクノスス外港に入港せんとしている頃、ラビリンス（迷宮）では乾果と果汁を前にしてミノス大王夫婦が向き合っていた。

ラプリス（双刃戦斧）はクレテ王権の象徴で、オケワヌス（海神）たる牡牛の象徴でもあるラプリス（双刃戦斧）のある家。それが

ラビリンス（迷宮）の本義でもあるが、殊にラプリス（双刃戦斧）の間はオケワヌス（海神）の分院であり、王の居室でもあった。今、国王夫婦が対坐しているのは銀桿金刃のセキラ（戦斧）を飾ったその神聖な室だった。

ミノス五十二世ラダマンテュスは六十才。海上の指揮権を太子に譲って陸に引退し、祭祠と法治に専念している。

パーシファエー王后は五十八才。未だ次代に地位を譲る気はないらしい。

「ダイダロスが海の底に潜る機械を発明したので見物して来た。硝子鉢に鉛の重錘を附けた道具で起重機で捲き上げるのだ。底は無いが水は入って来ない。海の中は面白かった」  
「それは結構でした。併しお齡を考えて無理をなさいますねようお願いします。真逆此の次には、大祭にダイダロスが公開を予定している機械を陛下御自身でお試しになるのはごさいませんか」

「ダイダロスは不思議な男だ。次々に思い掛けないものを作り出す。今度は空を飛ぶ仕掛けだそうだが、何でも体重が軽い割に腕の強い子供でなければ使えないそうさ。余のような年齢では無理だと申して居る。尤も余が国王でなければ何うでも飛んでみるのだが」



長廊下を隔てた広間からは嬌声が聞えて来る。若い婦人多数が戯れているらしい。ラビリス（迷宮）は広大な割に平常は住人が少く、余り静粛を要求されないようだ。何か打ち当るような音。入乱れる足音。女だけの遊びにしては賑やか過ぎるみたいでもあるが。

王后気に入りの第二王女アカレーが白壇の椅子に掛けていた。今年既に二十六才だが未婚。警視總監の仕事が好きで止められないとかで、結婚の話など全然聞こうとしないとの事だった。毎朝食事の前に怠惰な奴隷を発見して鞭を振らないと調子が悪いと称しているそうだが、今日は武装を解いていた。併し盛装は嫌って鎧下の胴着だけになり、二人の女奴隷に孔雀羽の団扇で左右から扇がせながら紅玉を飾った銀盃で果実酒を飲んでいた。脚の下には大きな獣が寝ていた。よく見ると獣は生え揃っていないが確にリビヤ産の仔獅子だった。獅子は半眼は閉じ、睡そうにしながら、女達の嬌声が余り高いので眠れないとでもいうように、舌を出したり尾を振ったりしていた。時にはアカレーの脚を嘗めた。その度に王女は擦ったように脚を揺すった。

王女の前で親衛隊である八人の婦人警官が群れていた。九年前とメンバーは変わったらし

いが、何れも撰り抜きの女戦士と見えた。容姿、体格共に優れた八人が皆、アカレーと同じ胴着だけになって腕も脚も露出し、円陣を組んで汗を流しながら、高い天井に向けて肉棒のような物を交替で抛り上げていた。

排球の練習みたいなものを、連想すればよい。クレテにも古代ギリシャにも、竹類の皮で編んだ弾力ある球を衝き上げて遊ぶ少女遊戯がある。併し、空中に躍っている物はよく見ると少年だった。白色、金髪、碧眼、クレテ王国で珍重すべき純アケーヤ種の美少年だった。

「七、八、九、落したら駄目よ。もっと続けて——」

アカレーが励した。女共の歓声に押し上げられるように少年が捻ね飛んだ。少年の両手は胸前で縛っており、足首と膝も赤い腰帯のようなもので縛ってあった。

「十三、十四、危い。そら落した」

甲高い叫喚が乱れ、少年は王女の足下に、即ち獅子の面前に転って来た。獅子は本来臆病な獣なので、唸りながら後退した。

「イカロスは、来年自由民になれる身分なのよ。少しは大切にしないさい。怪我させたらダイダロス老人が悲しむわよ。さあ、落したの

は誰。ペルーサね。此処へ来なさい」  
アカレーは、立ち上ってイカロスを軽く抱き上げた。

「王女様。もう許して下さい」

イカロスが喘ぎながら言ったが、アカレーは全然聞いていなかった。女共の円陣に向い反動をつけてサーブの如く投げ込んだ。

十二才になれば少年とても相当な重量である。併し王女と八人の親衛隊は並外れて雄偉な体躯と四肢の力量を備えていた。イカロスの比較的小柄な身体は手頃な鞠だった。女達は落下して来るイカロスを胸前で受け止め、代る代る、思い切り高く投げ上げた。

ペルーサだけが円陣から離れてアカレーの前に平伏した。但し王女に尻を向けて。

規定の罰を受ける為だった。アカレーは答を把ってペルーサの尻を三度叩いた。相当な打撃である事は音で解ったが、慣れているのか撲たれた女は少し顔を歪めただけで、苦笑しながらすぐに円陣の一角へ駆け戻った。

落下位置に一番近い者が責任者とされた。

女達にとっては、気分発散にもなる適度の運動だったろう。併しイカロスにとっては何うか。誤って落される事は幾らもなかったし、床には獣皮が何重にも敷いてあったが、空中



に抛られる事自体が耐え難い苦痛だった。

「エイオネ。疲れたのなら列から出なさい。

抛り上げる高さが低くなったわよ」

アカレーが気合を入れた。声に応じてイカロスの身体が宙に三回転した。少し投げ過ぎた、と見る間に、争って差し伸べる数本の手も及ばず、イカロスはアカレーの上へ真逆様に落ち、更に半旋して獅子の尻尾を潰した。獅子は泣きながら、尾を股の間に挟んで室の片隅に遁げて行った。

「王女様。申し訳ありません」

八人の女は一斉に平伏した。

「いいのよ。何でもない」

アカレーは両手で頭を挟んでいたが、やがて首を振りながら言った。併し傍で鼻血を噴いて倒れているイカロスを顧る者は誰も居な

#### ★代理部分譲品について★

○本誌上に只今広告してありますものは全部在庫しておりますから、お申込み次第直ちにお送りできます。○お申込みはすべて（阿倍野局私書箱第14号天星社）へお願いします。○御希望の品名は略号をお書き下さるだけで結構です。○旧号に広告してありましても最近号に載っていないものは在庫しないものがありますから一応御照会願います。

かった。

「落したのは今度もエイオネのようね。これで三度目でしょう。解っているわね」

アカレーの合図で、七人が一斉に他の一人に襲い掛った。エイオネは他の者を掻き分けて逃げ出した。王女も一緒になった他の八人が歓声をあげて追い掛けた。三つ目の広間でエイオネが転倒した。数人が折り重って倒れた。嬌声一しきり。四肢に一人宛附いて抑えつけ、他の四人が両脇と両足裏を擦った。暴れて暴れ廻るのに対し、アカレーが馬乗りになり、腰帶を解いて後ろ手に縛りあげた。他の者が足を縛った。責める者も責められる者も愉快そうに哄笑し、悪意のない怒号、罵声を放って駆け廻っている。イカロスの事を思い出す者は誰も居ない。

反対側の奥にある薄暗い小部屋で、檻棲のようになつたイカロスが長椅子の上に寝かされていた。鼻孔が苦しうに拡張と収縮を反復していた。併し意識はないらしい。

傍に雪のような膚の美少女が居た。焦茶色の髪を頭の後で大きな鬘に纏め、顔も化粧は殆んどしていなかった。だが、彫の深い作りは美しさと共に素性の高貴を表していた。高い鼻。二重瞼の大きな黒い瞳。広い額。

白一色の、裾の長い衣裳を着ていた。袖口と襟にだけ色糸の刺繍があつた。彼女はイカロスの鼻血を拭き、氣附けの強い酒を数滴唇に滴した。肩から手、足、腰を揉み、陶製の小瓶から揮発性の液を出して関節に塗った。医療に相当の熟練があるようだった。

「王女様。すみません」

細く眼を開けたイカロスが微かに言った。「動いてはいけません。炎症を起しますよ」美少女は甘い感じの綺麗な声で言った。併しそれは他人に聞かれるのを恐れるような小声でもあった。

「牛跳の練習に行つて来ますから、静かに待っていて下さいね。今日は宴会があるからアカーレも此の事は忘れていて下さい。後でダイダロスの所へ送つてあげましょう」

王女様、と呼ばれた此の美少女がミノス五十二世の娘四人の一人であり、第二王女アカレーの妹であるならば、十才の末娘ファイドラでない事はすぐわかる。そうすると当年十七才の第三王女アリアドネに相違ない。アリアドネは飛ぶように軽く、それでいて殆んど足音を立てずに駆け去った。イカロスの眼から涙が一筋流れた。



# 「文化的悪讃美論」 あく

— 小説「花と蛇」にふれて —

久 我 庄 一

△文学に悪を認識する必要がある▽

— 劇作家 アーサー・ミラー —

小説「花と蛇」については、臨時増刊号・特集△花と蛇▽を手にし、改めて全篇を一挙に読破した時から感想をメモしてみたいと思っていた。機会なく「続・花と蛇」が連載されたいまになっても、そのままになってしまった。

何か書こうという気持はたしかだが、いざペンを取ろうとすると△この小説は、とにかく面白い。わかりやすい。いまさら解説めか

した物など▽という点が、つい筆不精にさしてしまったようだ。いまやっと「花と蛇」論をしようとペンを取る気になったのは、近刊八月号のガン作・マニヤのノート「濡れにぞ濡れし」芳野眉美氏の△花と蛇▽に触れた一節と、九月号・奇クサロンの、夜乃探郎氏の△読物か、小説か▽に刺激されたことと、このへんで大方マニヤの本格的な作家論（または作品論）の発表も、必要になってきたので

はと、思ったからでもある。（私のはその捨石。）結論をまず申しますと、「花と蛇」は小説である。それは作者・団鬼六氏が既成モラルに妥協せず書くという精神に忠実だからである。通俗的ないわゆる△大衆読物▽となると、いくら新しい衣をかぶせても、その底に（悪はついに滅び、善は勝つ。メダタシ、メダタシという安易なストーリーが結末付けられる）これが「読物」のおほむね常道である。現代文学の行詰りは悪が作品の中にひとつも生きてこない事にあると評されており、サド文学の再評価やヘンリー・ミラーの文学のベスト・セラー化は、その線にそった動きでもあろうか。

△悪▽と、いっても、ピストルやナイフをやたらに振りまわすような世界の意味でなく、「悪の実体」。そこから追求される人間の業のような事実のことだ。著者をして語らしめよ——という言葉があるようだが、以下「花と蛇」正・続にふれつつ考えてみたい。

このストーリーは簡単である。「花」の如き美女を「蛇」のような悪人が羞恥責めをする——題名がすべてを物語っている。

△深窓の令夫人・令嬢・女探偵・女学生が葉桜団・森田組の魔窟に捕えられ、そこに展開



する受難場面の数々。Vついいには『スター誕生』。ここで「続」となり、新たに村瀬宝石店のご令嬢とその弟、美少年、文夫が登場す

### ☆月と半裸の美女

たんろう・ざれ筆



るにつれて、華麗な羞恥責めは、益々興味深々となってくるわけだが――。

この稿が発表ともなり・手にする読者はあらかた「花と蛇」はよんで居り、筋書は、御承知だろうから、内容紹介はこのへんにして、どこが小説か――という点について書いてみたい。それが団鬼六論ともなろうから。

誤解をさけるために「文学と悪」についてまず一言しておきたい。

現実的に悪を肯定、行動することはいけない。(これは常識。)ただし、本質的に文学の世界では、どのような悪を描こうと、これは表現の自由と真実を追求されるために許されるべきである。別な例を上げると、推理小説に△殺人場面△を描こうと、悪を讚美しようが、それは小説として許されようが、現実的な行動は駄目。(これも常識)。余談になるが、作家・石川達三が、中央紙に「悪の愉しさ」を発表し、その異色的な作風を評価されたのは、そのモチーフが文学的構成上必要であったからだ。

さて、△花△なる美女たちは、どの

ように△蛇△なる男たち、またはズベ公たちに責められ、羞恥図を延々として、展開されようが、外部より絶対に(救いの手があっても、いずれも失敗。)救われないばかりか、ついには「今朝はあの令夫人、とうとうバナナを切って見せましたよ」(作者註・「続」九回の一節。遠山令夫人を、指す)という心境にまでストーリーをおし進めて行く。これは△悪△の勝利というより、かくされた女の「性」の哀しさから△被虐△の悦楽がうめき声をもって、いっそう現われてきたことを示すもので、団鬼六氏の筆勢は凡手ではない。

映画と小説の世界の違う所は、映画は羞恥をズバリ出せる。むしろ、それを制約するため苦心する位だ。小説は、文章のレトリック(技法)によるのだから(挿絵だけでは万全とまでは行かない)なかなか、羞恥図を出すのに苦労するが、反面、新しい発見を生み出すよろこびはある。

「花と蛇」第二章・陥穽では、△地獄の結婚式△で、ズベ公達の提案による運転手として遠山家に住み込んでいた川田と静子夫人との結婚式前夜。

……朱美は舌なめづりでもするような表情



で更につづけていう。

「次に、こういういな。川田さんの可愛い赤ちゃんを、早く生みたい、とね」

川田が、変なことをいうなよと照れ出したが朱美も、銀子も、こんな調子で、ブルジュワ夫人を責めつづけるのが楽しくてならないようだった。——中略——夫人は、激しく鳴咽しながら、蚊の泣くような声で、

「川田さんの可愛い赤ちゃんを——」

早く生みたい、とやっというのだった。

——このような、会話による反復表現は、作品の随処に見られる。会話による表現ほど、読者の（特にS的な男の）サディズムを狂おしいほどに妖しくかきむしるものはない。文学とは、言葉の魔術であるとも云われるが、まさに団鬼六氏の筆致は、この部分でいっそう油の乗った独断場を示めす。

小説に、会話の形式は、ボッカチオの「デカメロン」など散文形式が生れてよりまことにオーソドックスな手法であるが、団氏はこの形氏を独自の物として羞恥責めの表現技法の一つに取入れた。

いまは廃刊した「W」誌に「パノラマ島秘譚」というSM小説が連載され、その作者がハ私は、いわゆるサド小説は、まぎれもなく

女性讚美の小説だと思っている。女体讚美といってもいい。女性が憎いから女性をいじめる物語を書いているわけではけっしてない。

——中略——女性が、好きで好きでたまらないから、私はこういう小説を書くのだ。きらいなものを、こんなにも執拗に、熱っぽく書くバカもいないVと、言っていたが——。

「花と蛇」が華麗な羞恥責めを展開させる底には、やはり団氏の女性への審美眼がなければ単なる惨酷さと、グロになってしまいう筈である。

昭和40・2月号に「鬼六談義・SMプレイの知恵」がのっている。それによるとハSが五一%、Mが四九%とは、いみじくも申されたり正は至言で、そうでなくては美女羞恥責め（何だか妙な言葉だが）の味がわかう筈はない。Vこの団氏の談はハ小説「花と蛇」は、この精神的肉体的愛情の変形したものと私自身は思っている。Vとの言葉の裏付けが附加されているが、要するに、最も人間にとって素朴な「美しいから汚したい」という心情が、いっそう情熱をもって盛上る時に本当のS小説が生れるものであり、「花と蛇」は、その最たるものと思うのだ。

芳野眉美氏は、近刊九月号、ガン作・マニヤのノートで「女性の神酒はもっと好きだ。

だから、私は神酒を主題にした小説を書く」

といってるが、団氏の「美しい女性達の美しい肉体の変化は被虐を通して得た一種の満ちたりた性生活が、精神活動と相まって、肉体に波及するETC」だから、羞恥責めの小説を書こう、表現しようという世界と、本質的には同じだと思う。元来、セックスを美化しようとするのは芸術的な世界のものである。小説のジャンルも、その一つの手段である。ハ女性と美Vの世界には通俗も高級もない。

あるものは真実である。だから「花と蛇」が小説か、読物かという問題は、そこに美があるか、どうかでまきまるものと考えられる。そして、私はまさしく、この作品は小説であると固く信じるのだ。

「反復表現」という会話による独自の点について、私は触れたが、もう一つ文学的表現の最たる点を上げたい。

「洗面器」という用語については、畑村氏も上げているが、近刊九月号・続篇（第九回）のハ恐しい計画Vにも、

——「よし、任せるぜ。ところで、美津子の断髪の方はすんだのかい」（傍点は作者）など、なにげなく「断髪」という用語が使用されている。



また、会話に、なぞ解きの面白さもあるのが興味ある。例えば、同じく第九回の「悪魔の相談」で

「：今朝は、あの夫人、とうとうバナナを切って見せましたぜ。」

この言葉にしたり顔で「花電車」など持ち出すのはヤボの骨頂で、ひとり、美？を感じるのが大人の読書法でもある。とにかく、作者の創作的苦心は（表現的な）執筆態度は頭が下る。制約下でも、立派にSM小説は書くことができるという意味でも――。

かくされた「性」の事実とは何か。哀れな蛇にのみこまれた花のかんばせも羞恥にたえだえな美女達に、読者は同情の眼をそそぎながらも、いつか、自分を川田に、吉沢に、鬼源に、チンピラ達に位置づけ、もっと責めよ！もっと責めよ！と、性の倒錯した妖しき世界にめり込んで行く。

悪の世界に耽溺し、悪の世界を肯定してゆくこの不思議さ、そして「悪」のモラルが、ここでは真実となってくる。「文字」のもつ文章の魔力であり、作者のろまんである。そ

して、それは小説にのみ許された虚構の世界のものである――。

自然の美や、生れながらの女性の美は、如何にそれが美しくとも、そこに人工が加えられていないため、我々はそれを芸術とは呼ぶことは出来ない。芸術とは、人の手によって作り出され、描き出された虚構の美にのみ捧げることが出来るものであるとすれば、小説「花と蛇」こそ、まさしく「芸術」と呼ぶにふさわしい「人」の手によって作り出された女性の美というべきであろう。

## 【最新版】女体責写真五十粒選

A組五十集 大手札判印画紙（9×13型）焼付

|        |      |
|--------|------|
| 一組一枚   | 一五〇円 |
| 五組五枚   | 五〇〇円 |
| 十組十枚   | 九〇〇円 |
| 二十組二十枚 | 七〇〇円 |
| 三十組三十枚 | 五〇〇円 |
| 四十組四十枚 | 三〇〇円 |
| 五十組五十枚 | 四〇〇円 |

|    |              |
|----|--------------|
| A1 | フミツケ汚辱縛り（新井） |
| A2 | 手吊り乳房責め（五月）  |
| A3 | ハリツケ猿ぐつわ（新井） |
| A4 | 全裸正面柱しばり（遠藤） |

|     |              |
|-----|--------------|
| A5  | 亀甲強烈乳房縛り（遠藤） |
| A6  | 全裸手吊りムチ打（遠藤） |
| A7  | 豊満乳房いじめ（遠藤）  |
| A8  | 乳房責め股間縛り（遠藤） |
| A9  | 鼻責鼻梁いたぶり（遠藤） |
| A10 | 全裸後手高小手（遠藤）  |
| A11 | 膨隆臀部さらし（長野）  |
| A12 | 全裸正面強烈縛り（長野） |
| A13 | うねる緊縛裸身（長野）  |
| A14 | 色禪の開股しばり（長野） |
| A15 | 正面縛蛙股ひらき（長野） |
| A16 | 裸自慢縛りヌード（長野） |

|     |              |
|-----|--------------|
| A17 | 正面アグラしばり（長野） |
| A18 | 正面大の字開股縛（長野） |
| A19 | 遅ましき裸しばり（長野） |
| A20 | 荒縄縛豆絞り猿轡（大塚） |
| A21 | 両手前縛り髪首絞（大塚） |
| A22 | 両手吊り股間吊り（桜井） |
| A23 | 両手膝下しばり（関谷）  |
| A24 | 疼れんする裸身像（関谷） |
| A25 | 両股縄掛け開股縛（大塚） |
| A26 | 正面裸身強烈本縄（梨花） |
| A27 | 乳房晒し肉体自慢（長野） |
| A28 | 責衣にはみ出る肌（東浦） |
| A29 | 投げ出した全裸縛（長野） |
| A30 | 捕われの全裸緊縛（梨花） |
| A31 | 羞らいの両股縛り（大塚） |
| A32 | 猿轡乳房いたぶり（遠藤） |
| A33 | 荒縄全身縛り豆絞（大塚） |

|     |              |
|-----|--------------|
| A34 | 盛り上る乳房縄目（長野） |
| A35 | 亀甲本縄鼻いじめ（大塚） |
| A36 | ムチ打悶えポーズ（関谷） |
| A37 | 椅子またぎ汚辱責（東浦） |
| A38 | 縦縄股間縛り正面（関谷） |
| A39 | ゴム猿ぐつわ全身（大塚） |
| A40 | くさり乳房責め（長野）  |
| A41 | 強制片足挙げ責め（大塚） |
| A42 | 正面乳房くびり縛（関谷） |
| A43 | 鴨居正面ハリツケ（梨花） |
| A44 | 手吊りパンティ落（絹川） |
| A45 | 白バンド後手吊り（東浦） |
| A46 | 豆絞り高小手呻（絹川）  |
| A47 | 裸縛り鼻いじめ（梨花）  |
| A48 | ガンジガラメ立縛（愛川） |
| A49 | 亀甲本縄股間縛り（絹川） |
| A50 | 立木縛竹棒責め（桜井）  |



## — 耕土散筆 —

## 「落穂拾い」

(其の二)

と人 ひさ久 ふじ藤 やす保



## 7 旧刊号について

前号分を書くに当って、先ずその題名に苦  
 勞した。「——の散歩道」とか、「——の小  
 徑」とか。結局、自分の書こうとしているの  
 は、人様が既に書かれたものの中から拾い出

し、それを種にしているのだと思い到り、自  
 分の経験から、耕地から拾う落穂、と考え、  
 わざとらしく意味づけて、序文を書いたもの  
 だが——。

編集部へ発送してから数日後、私は小包便  
 を受取った。中味は古い奇クが十冊。二、三  
 年前なので忘れていたが、それは或る方に私  
 が貸したもので、同じ日にその人から手紙が  
 来て、「——とうとう投稿をお始めになった  
 のね。あなたのものでらしいので興味深く拝見  
 しました。それにつけても、これから後もお  
 書きになるなら、必らず旧号がお入用と思ひ  
 ますので、お借りしていたものと手許にある  
 ものを加えお送りします（原文のまま）」と  
 書いてある。投稿を報告した訳ではないが、  
 一月号の体験記（かつて私が喋ったことがあ  
 るらしい）と、ペンネームから、判ったとの  
 事。

そして、七月号の八両嬢に捧げるVの文中  
 （旧号不確）ということから、親切に返送し  
 て呉れたものの様であった。

その十冊は、号数も揃っていない。旧いも  
 の、白表紙、新装版。まちまちである。併し  
 拡げて見て私は吃驚した。確かに何度も読ん  
 だ筈のものなのに、殆ど、忘れて仕舞ってい

7 旧刊号について

8 文献的……その貴重な

9 脚線美

10 素足の表情 〈附記〉

〈補足〉

脚線美についての話題



る。△玉稿落穂集Vという言葉も、そういえば、そうだと思ひ出す。意気込んで△落穂拾いVの註釈まで付加えた自分が恥しくてたまらない。

又、九月号の△通信資料分類Vも、確か前に、誰方かが、発表しておられた記憶があるが、どうしても思ひ出せず、仕方なしに後記で、「愛読者の手で完成しつつあるのじゃないか」と逃げてしまったが、送られた中36年5月及び36年9月号（赤松義夫氏）に当時の詳しい色わけが出ている。自分の不勉強が悔まれ私は大急ぎで、殆ど半日を費し、古い本箱や本を詰めた木箱をかきまわし七冊の旧刊号を探し出した。又、古い雑誌の綴じ合したのも出て来た。

奇クは九月号で通刊二〇六号。その内少くとも百二、三十冊、或は百五十冊位は完全に読破している。物覚えは悪い方でないと思っていたが、人間の記憶というものは至極曖昧なことを思ひ知らされた。それ程、忘れ切っている。そして手離れた、旧刊号が惜しくなり、先立たぬ後悔の中でウロウロしている。

もともと私は保存するつもりはなかった。奇クを入手するのは近所の親しい古本屋の主人に委せてあり、彼は入手すると直ぐ届けて

呉れる。併し、読後は返して欲しいという。

「——この本がなければ、ウチ等は毎月減収ですわ——」儲けの多い本なので何人もの客に見せるらしい。そういう訳で、彼が二冊以上手に入れないと私の手許に残らない。それでも何年も経つと相当になる。が、私は二度整理している。結婚前と転宅時と。今になつて本当に惜しいと思う。唯の惜しいでなく、何か書く上にどうしても必要なのだ。

折も折、九月号から夜乃さんの△ドラマ・奇譚クラブVが始まり、編集部からの旧刊号の表紙が懐しく出ている。で、それに便乗する訳じゃないが、初めに△旧刊号Vを取上げた。——そして、私は声を大にして

「愛読者の皆さん。奇クの旧号は大切に保存して下さい」と叫び度い。私にも経験があるが、家庭の事情其の他で保存不可能な場合が多い。が、何か方法を考えて、仮令木箱詰密封してでも良いから、残すこと〴〵に留意して欲しいものだと思う。余計なお節介かも知れないが、SM愛好の皆さん、特に若い方は、十年、二十年先に、その必要な時が来る。

これは、今私が旧刊号を開き見ての泌々とした実感であり、奇クは残す価値がある。

## 8 文献的……その貴重な

最盛期、黄金時代と謂われるものは見事な充実ぶり、手に取っても重量感がある（勿論内容も）。試みに30年1月号を開いて見よう。頁数は現在より100頁多い。目次だけでも立派なものだ。△伊藤晴雨△血染の毛綱△画集Vがある。黒田さんが見たなら随喜する様な絵（大蛇が二匹、生首を啜えている）もある。本文の中に、編集部から△告白文体験談の書き方Vという投稿者への指針がある。そして△緊縛に関する十二章Vという辻村さんの快作がある。〇〇に関する十二章は当時の流行だったな、と思ひ出し乍ら、挿入されている写真三葉（剥き卵。括り猿。立姿）絵三枚（同じポーズ畔亭数久・画）の華麗さに驚く。——大部横道にそれてしまった。

旧刊号の各誌を見て、まず感じるのは「小説」の充実していること。SM的各分野を代表するに足る傑作が多い。最近の奇クの物足りなさの一つは小説陣の不毛であろう。情勢や紙数も関係するが、何としても物淋しい。が、文献的という意味でなら二次的なものになる。どちらかというとSM小説はマンネリ化の懸念もあり、又、フィクションなので、



同系統の秀作を新たに作り出すことも可能に思える。だが、再製不可能なのは、

△告白手記体験記▽である。これは二度と通用しない。従ってそれだけの価値がある。

又、この分野は、奇クの特色なのだ。(実話何とか……というのがあったが競べものにならない) △告白・手記▽は奇クの母体であった。(今も……)。多彩であり、物珍らしさも加わってか多角的に発展して来た。併し、現在のものに比較すると、フィクション的な気配が、感じられたが、これは私の僻目なのか。

何れにしても、その価値、その貴重さは、後世に伝えて決して恥しいものでなく、強固な自負を以て、推奨出来るものなのだ。又、△論説、時評、随筆▽など、旧刊誌には優れたものが多過ぎる。纏めれば類のない文献書が出来ると思う。そういう中に納めて欲しいものを列記して見よう。特筆に価するのは、

△告白文学(と謂えると思う) 古川裕子▽  
『彗星の如く現われ消えて行った伝説的な白いマスクの女王・古川裕子!』(註・九月号 伊藤画伯の文中、久我庄一さんが書いていらっしやるのを拝見し、清書の際に、その俚の表現を引用させて頂きました)

27年12月から30年11月まで。(註・最終の『告別』は30年3月末に原稿受領と編集部への添書あり) その間に十五篇、何れも彼女の魂で書かれたと思える程の気迫に満ちていて、ファンを熱狂させたものである。

△残酷なる女性達Ⅱ森本愛造▽

△あるマゾヒストの手帖からⅡ沼 正三▽

△緊縛、縄のプレイ(論説随筆) 辻村 隆▽

△切腹、史実研究(論説随筆) 中康弘道▽

△海外S雑誌、他(論説随筆) 吾妻 新▽

どれもこれも、単行本になれば先ず手に入れた見たいと思うものばかり。数が多過ぎて困る程で、思いついただけでも、

△原忠正▽ △鬼山絢作▽ △とやま・かつ

ひこ▽ △川合伊都子▽ △川端多奈子▽

△羽村京子(現在の羽鳥さんでなく)▽と増えて行く。

SM的な感覚で自らの肌を感じ取る、という事は比較的少い。マニア、愛読者も、そういう状態に恵まれない人の方が多いのじゃないか。肌で感受出来ないなら読んで消化するより方法がない。仮令、それが空しく、かえって悩み心が増えたと、知り乍ら読むことで、ささやかな慰安を求めようとする。そういう方々にとっての参考書は、奇ク旧刊号に

ある数々の秀作だと思う。又、折にふれて取出して見て、少しも時代の、ズレが感じられず、或るものは、かえって先行している様に思うことすらある。営利、という面で、殆どそのものが単行本には出来ない(出版済のものもある)のなら、旧刊号に依存し、それを大切に残して置くより仕方がない。

## 9 脚 線 美

脚線美。美しい脚。——実にいい言葉である。小さく咬いて見るだけで、心の何処からか、熱い塊が芽生えて来る。

普通、男性が女性を見る場合、一番先に目を止めるのは顔であろう。輪郭・目鼻唇・髪の毛・といった容貌。そしてバスト・ヒップ・ウエスト・で形造られている姿勢に移る。次いで腕や脚、手指にまで及ぶ。その上で好ましいと観て感歎する。併し、行き交う女性に対しては、充分な観察が不可能なので、最初に注目するのは姿態である。その場合、矢張り胸臀胴といった外貌を目が追うことになる。が、夏期、薄着の時は剥き出しの肩の丸味に惹かれるし、靴下もない脚部に関心が集まる。冬は残念にもその殆どが隠れ、オーバーの為に、素敵な姿態さえ窺うことが出来ない。



い。自然に視線は、「女性の美」を誇示している唯一の個所、脚線に走る。

この様に、女性の脚部は年間を通じて最も良く男性の審美的な対象になる。

(お断りとお詫び。女性がたへ——。このところ暫く皆さん方の外貌に関しての不遜な文字を、綴ることになります。すみません。でも、これも皆、女性がたをへ唯美Vとして見詰める為ですので……お赦しを——)

M派男性にとって、垂涎の的であるへ脚線

## へお願いVとへお断りV

○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢達の住所氏名の照会には一切応じておりません。手紙の転送や文通の斡旋、或は読者の紹介といったことも原則として行っておりません故御諒解願います。読者間の文通交歓は、すべて読者通信欄にて行って頂くようお願いいたします。

○如何なる用件に拘らず、電話にてのお問合せや照会並に直接の御訪問は固く御断り致します。発行所に対するご連絡はすべて書面にて住所氏名明記の上、阿倍野局私書箱第十四号天星社宛お願い致します。面談又は電話連絡の必要のある方には、編集部から電話連絡の方法或は面会の日時場所な

美V。神秘的な(これは私の思想)個所より発して、腿・膝・胫腓・足首・足に到る、その実態はどんなものだろうか。

女性の脚線の美しさについては、今迄、数多くの大家が、それぞれ独特の筆致で表現しておられて、今更、私などが口を出す余地もない。耽美的・嗜好的・審美的・肉感的・愛情的・好みによって、その形態の相違はあるが、誰も彼も、美しいから美しいと観るのであろう。

どお知らせ致します。勝手に直接訪問されたり電話されることは、固くお断りいたします。

○編集部又は編集者に対して、ご依頼と相談などがございましたら、事前に通信にてその旨お申出下されば、時間の許すかぎりつとめてお逢いするよう致しておりますから、ご遠慮なくお便り下さい。

○分譲品に関するお問合せも、必ず通信にてお寄せ下さい。尚未着などのご照会は、ご注文の月日、金額、品名をお書き願います。調査の上折返し御返事いたします。

○原稿のご送付(読者通信を含む)は第五種便(半分を開封にするか、封の中央一カ所をとめる開封便)を利用下さると、五十瓦につき十円にて送れます。但し封筒に第五種郵便と捺印又はペン書き願います。

女性の脚を文章にして、最も生々しく描写するのは、矢張りへ谷崎潤一郎Vだと思う。

その作品の中には、さまざまな「脚」が登場して来て、マゾヒスチックな耽美感覚を堪能させて呉れる。その中でも最も「生」で「肉感的」なのはへ鍵Vの中のへ敏子の脚Vである。

——日頃から「思ウ存分我が舌ヲ以テ愛撫シ尽シタイ」と念願していた主人公(夫)が「素晴ラシイ美シイ足」をどの様に観察しているか。この辺りは興味のある一文だ。

「——彼女ハ明治生レデアルカラ、今日ノ青年女子ノヤウナ西洋人臭イ体格デハナイ(中略)脚モシナヤカニ長イノニハ長イケレドモ下腿部ガヤヤO型ニ外側ニ弯曲シテヨリ、遺憾ナガラ真ツ直グトハ云ヒニクイ。殊ニ足首ノトコロガ十分ニ細ク括レテキナイノガ欠点ダケレドモ、僕ハアマリ西洋人臭イ斯拉リトシタ脚ヨリモ、イクラカ昔ノ日本婦人式ノ脚(中略)歪ンダ脚ヲ思ヒ出サセル脚ノ方ガ懐シクテ好キダ。ノッペラボウニ棒ノヤウニ真ツ直グナノハ曲ガナサ過ギル——」

個人的な嗜好主観が、完璧に描写されていて如何にも「現実」「実感」を感じさせる。へ敏子Vという女性が生々として、この辺り



が「文豪」の麗筆でもあろうか。そして此処に、「人間的な観点」と、フォト等の「観る形態美」の相違がある。

個人差が多大なので一概に論じられないが所謂職業人（画家・写真家など）が、職業意識を離れて女性を観察した場合、一体どのような感覚を持っていられるのだろうか。

経験豊富な画家に登場して貰い、お伺いすることにする（註・性向はSEX的M派）

「——先ず全体の輪郭線。特に首筋に注目する。そこに「女」を感じる人なら——。次には手先（マニキュアは好きませんか）。それから腰部。そして膝。此処が最も「女らしい」ポイントでしょうね。膝小僧のふくらみがふつくと、柔かそうで美しければ、必ず「女体」は起伏豊かで匂やかで自然に素敵な形態美を秘めています。形だけでなく「女」としても。

それから膝から内股への線に眼を移し脚線を追って行きます。容貌は美しければ尚嬉しむという事になります。女性の観察はまあこんな処でしょうね。脚線美（形態美）は「人間の女性」と、という意味では、感心しません——」

——皆さんの観察主眼はどうでしょうか？

## 10 素足の表情

△脚Vが出たら必然的に△足Vを書かねばならない。M派にとって△足Vこそ△女王様Vへの唯一の足がかりなのだから——。

だが、女性の素足を愛でるということは、実際は、極めてF味豊かなサジスチックな行為ではないだろうか。東西古今の書を繙いても、「暴虐の素足」より「愛玩の素足」の方が多く、足は又、女性にとって「羞」の一部だと思われる。その好例が、お隣りの中国の二大奇習（註・宦官と纏足）の一つである纏足。その奇習は十世紀頃に起ったと謂われている。——「よちよちと危かしい足つきで歩く女性。その姿態は男性にとってえもいえぬ性的魅惑体であるという。そしてこの反道徳的習慣は、婦人の幽閉・抑圧の象徴でもあり、中国人の性的空想の最高の欺瞞である、とも謂われているが、或る人は又、よちよち歩きの体重の傾重により、女体に及す影響が大きく……とも言う。ともあれ、この場合の「素足」は、権力的男性の嗜虐味のある嗜好を満たしていたことは事実の様だ。

物の本の△性感帯の探求Vという項目の中に、「足のうら」という部分がある。（註・

性医学研究会編集『生活文化社33年発行』

「——古来、性感帯の一部位として使用されて来ました。（中略）くすぐったいというのと、快よいというのは隣同志。軽い刺戟は（以下略）」結論的に「快美小体」の分布が豊富で、従って、SEXを度外視しても、S味豊かな男性の「嗜虐趣向部位」になり易い要素を持っている。SM小説に於て、柱などに縛りつけた女性の素足を剥き出しにして、先ず羞恥を与え、更に、くすぐる。果ては舐めて廻すという場面の展開するのが多いのも、この様な女性の本質的な「性」を利用したものだといえる。

この秘めやかな性感を女性自身が知悉して逆用する。其処にM派の△足舐めVの要因が存在する。客観的には終始「暴虐の素足」なのだが、その裏には、S対Mの、人間男女としての豊かな部分、交情が滲み出て来る。そしてM派は、最もマゾヒスチックな奉仕行為の内に、細やかな△女王Vの快びを知り、心理的な愉悅に浸り切ることが出来る。

——△表情のある素足Vこれについて△目黒恒夫さんVが短文で見事にその外貌を捉えていらっしゃる（註・39年11月号サロン・女性の脚線美）



「——足の指には表情がある。殊に拇指の爪には容貌以上の表情が……」と。脚線の美しさもさること乍ら、M的男性にとって、女性の素足は足の指・足の爪・足の甲・足の裏・踵・踵Ⅱが又、この上もなく尊貴なものと写るのも自然な道程の様である。

素足、特に足首の表情は甚だエロチックでもある。映画などの表現手法で、愛欲場面の処理にはこの素足の表情が、一つの技法として強調されているのは、皆さんもご存知の通り。観ていて、生きている女体を感じ取るこ

とが出来、だからこそ、実態・実感として私も強く憧れる。そして、それが荒々しく傍若無人であればある程、被虐感情も倍加して、思わず拝跪し辱しめられようと欲する。これが真実の「M心理」だと思う。そして又、女性の美しい素足は、「M的男性」の心を、巧みに操り、玩弄する素質……表情を持っ

（註・素足については素足の記録Ⅱ佐藤紀男氏Ⅱ36年9月号Ⅱを始めとして、本誌旧刊号に度々掲載されていますので念の為一筆）

△附記Ⅴ(9)並に(10)に関して

脚の美しさ……とは。では一体、どんな脚が美しく、魅力的なのか、という問に対しての一般的な解答を書いて見よう。

勿論、これは厳密な表現不可能であり個人差により主眼点も異なるが、フロイドなどの性心理学者の言葉では、「脚は一種の連想的な性的欲情を持たせる」そうで男性は一般的傾向として、美しい脚の奥に秘められている、「無限の夢」を無意識の内に感じるらしい。人間男子の本能ともいえる。Mの場合は、その本能的な深部心理に、より強い被虐感情を伴う憧憬がプラスされるのであるから、M派の八女王様のおみあしⅤに対する希求も、その度合を推察することが出来る（註・我田引水の感があります。私も希求する一人なので——）。

扱て、性的魅力をたたえる脚線美の解答。

——まず、両脚を合せて直立姿勢になった時、内股が密着すること。隙間不可。逆に合

## 文献資料を求む

本誌上に紹介して価値のあるS・M・F等各種、資料を御所持の方で御提供可能の方は御連絡願います。誌上の発表につきましては、出来るだけの謝礼を差上げたいと存じますので、文献誌としての本誌の価値を高めるためにも何卒新古多少に拘らず御提供願います。

写真、絵画、文章、パンフレット、広告スクラップ・ブック、チラシ等なんでも結構です。御希望により使用後資料は御返却いたします。

## 「奇クサロン」原稿募集

読者の皆さまの共通の広場として、「読者通信欄」と共に、皆さまに親しまれてい

充実させてゆきたいと思ひます。マニヤ通信、モデル通信、短信往来、編集者執筆者モデル投稿者などへの呼び掛け、文通交際写真、絵、告白の便り等々、なんでも構いませんからお気軽に寄せ下さい。

## 「読者通信」欄へ

読者の皆さまの共通の広場としての読者通信は、毎月多数の投稿文によって賑々しく飾られておりますが、広く読者の方々が読んで楽しい家庭的な雰囲気味わえるものの中から、つとめて選定してゆきたいと思ひます。従って三行広告的なものや自己宣伝に類したものは、ご遠慮いただきたく

（本誌編集部）

る「奇クサロン」の欄をこれから益々発展



すること。伝統的な坐位生活の為、関節の突出や、大きさで、美的観がそこなわれ易い。以上の形態に、肌ざわり、皮膚の美しさ、が加わり、更に、足部の肉付き、指・爪の形が脚線の美的彩りとなる。結局は概論的に、肌美しく、丸るやかで豊かで、健やかで逞ましく、柔かい線で継がれて、目の様など表現される爪先に到るもの——（註・性医学研究会の書物から）

（四〇・七・二八）

### △補足▽脚線美についての話題

◎八月二日。正午↓〇時五五分まで。NETテレビ△アフタヌーン・ショウ▽から。

最初からご覧の方も多いと思います。私は他用中で始めの部分を見落しましたが、興味ある話題の一つとして、ご存じのないお方の為に一筆。

◎脚線を美しくする体操△和田静郎▽担当。

「贅肉がつき易く美的観を損う個所を要点的に説明しますと次の通りです」

1. 太腿の外側面△腰部より広く見える。
2. 太腿の前面△著じるしく太く感じる。
3. 胫の外側前面△腓の肥大よりも胫骨の外側の肉付きがポイントになる。

4. 足首△すんなりと細く締ることが大切。
5. ピップ下部△肥満すると垂れた感じで形態美を損う。腰部筋肉の運動で、吊上げる。

右五項目を重点に体操指導がありました。尚、和田氏とホステス草笛光子との会話。

草笛「性的魅力ある脚線とはどんな——？」

和田「直接関係はない様です。要はカッコ良く見せる、又、見て貰う、という点に注意し心掛けることでしょうね。」

草笛「カッコいいって……どんなのでしょう？」

和田「此頃の若い方は皆心得ていらっしやいます。形態的に説明しますと、直立して四カ所の隙が出来る脚。この方をご覧下さい（モデル嬢で実際の説明）股の付根。膝の上。膝小僧の下の部分。足首の上。股下から踵までで今言った四カ所以外はくっつく。こういう脚は理想的で最も美しく見えます。胫骨の素直な、真っ直ぐな脚をお持ちの方は案外少く膝から下が外や内に曲り気味です。其処で片足を軽く曲げたり重ねたり、所謂カッコいいポーズを研究する訳です」

◎脚のお化粧について△大関早苗▽担当

「最近の若い方々は大変爪のお手入れが上手

です（小刷毛など使ったの手入。ペデキュア実施中の画面あり）ので、今日は一番お悩みの多いムダ毛の処理について説明します」

- 1 脱色△使用剤は自分で調合する（オキシドール・アンモニア少々・洗剤・小麦粉等々練り合せる）
- 2 脱毛△薬用クリームによる。
- 3 除毛△毛抜きで丹念に一本づつ。
- 4 剃毛△カミソリによる（最近アメリカ等で盛んに利用されている△三、四日毎）
- 5 注意△根気良く、というのが一番大事。

処理のあと、直射日光は、絶対避けること。毛抜きはクリームやカミソリと併用すると効果的。カミソリ剃毛は従来、濃く強くなるといわれているが、何度も繰返していると毛根刺戟度が重なり、かえって枯死し自然に薄く少くなってくる。

◎以上、二十数分間、素敵な脚線を真近くふんだんに拝見させて戴きました。女性の皆さんが、脚と足をより美しく健やかにと心掛けて下さることは、男性（特にM派は）にとって非常な悦びとなります。

（四〇・八・五）



# 【新版】 女体緊縛コレクト・フォト集

## E組百花選

大手札印面紙(9×13種)焼付

各組一枚一組(送料共)

|        |       |
|--------|-------|
| 一組一枚   | 一五〇円  |
| 五組五枚   | 五〇〇円  |
| 十組十枚   | 九〇〇円  |
| 二十組二十枚 | 一七〇〇円 |
| 三十組三十枚 | 二五〇〇円 |
| 四十組四十枚 | 三二〇〇円 |
| 五十組五十枚 | 四〇〇〇円 |
| 六十組六十枚 | 四七〇〇円 |
| 七十組七十枚 | 五四〇〇円 |
| 八十組八十枚 | 六〇〇〇円 |
| 九十組九十枚 | 六五〇〇円 |
| 百組百枚   | 七〇〇〇円 |

|      |              |
|------|--------------|
| E 1  | 全裸の悦虐プレイ(愛川) |
| E 2  | 仕置を受ける裸身(大塚) |
| E 3  | 荒縄に苦悶する肌(愛川) |
| E 4  | ムチに耐える美肌(関谷) |
| E 5  | 豊臀と豊胸しぼり(愛川) |
| E 6  | 捨身の後手観念像(大塚) |
| E 7  | 足から眺めた裸身(水本) |
| E 8  | 全裸エビ責尻強調(関谷) |
| E 9  | ハリツケられた娘(大塚) |
| E 10 | 強烈後手高手小手(愛川) |
| E 11 | 責め抜かれた疲労(梨花) |
| E 12 | 逆エビにもだえる(大塚) |

|      |              |
|------|--------------|
| E 13 | 拘禁された美囚女(大塚) |
| E 14 | 浴室に覗く股間縛(愛川) |
| E 15 | 海老責に泣く足首(大塚) |
| E 16 | 乳房強烈締めつけ(愛川) |
| E 17 | 牢獄で泣く縛り娘(大塚) |
| E 18 | 美しき全裸股間縛(大塚) |
| E 19 | 全身に溢れるマゾ(関谷) |
| E 20 | ベッドにもだえる(関谷) |
| E 21 | 身体中に強烈な縄(愛川) |
| E 22 | 放置された海老責(東浦) |
| E 23 | ゴム衣で縛られる(東浦) |
| E 24 | ローソクで責める(大塚) |
| E 25 | 寝台の排便ポーズ(絹川) |
| E 26 | 足指先に漂う媚態(関谷) |
| E 27 | 後手吊り正面裸像(関谷) |
| E 28 | 嚴重な高手小手縛(東浦) |
| E 29 | 女体の全部を晒す(愛川) |
| E 30 | 激しいムチ打の果(関谷) |
| E 31 | 若肌も縄にくびれ(東浦) |
| E 32 | 投げ出した脚線美(絹川) |
| E 33 | 臍中心の腹部緊縛(梨花) |
| E 34 | セーラー服の哀歎(梨花) |
| E 35 | 赤いムチ痕の臀部(関谷) |
| E 36 | 仰向けの囚衣の女(梨花) |
| E 37 | 制服の女学生縛り(梨花) |
| E 38 | 悦虐にむせぶ若妻(関谷) |

|      |              |
|------|--------------|
| E 39 | 痛打にくねる裸身(関谷) |
| E 40 | 乳房に加える金具(大塚) |
| E 41 | 鼻責めにあえぐ顔(大塚) |
| E 42 | あぐら縛りを拒む(大塚) |
| E 43 | 浣腸ポーズの裸身(梨花) |
| E 44 | 激烈なエビ責苦悶(大塚) |
| E 45 | 敷布の上ののびて(絹川) |
| E 46 | 鼻いじめのアップ(梨花) |
| E 47 | 柔肌に喰込む麻縄(東浦) |
| E 48 | 縄にくびれる裸身(東浦) |
| E 49 | 椅子に晒された女(大塚) |
| E 50 | 臍そうじをされる(大塚) |
| E 51 | 荒縄のトゲに狂う(絹川) |
| E 52 | 火のついた煙草責(四方) |
| E 53 | 踏みつけたれた胸(梨花) |
| E 54 | 裸身をゆだねた娘(大塚) |
| E 55 | 手足猪吊りの美態(絹川) |
| E 56 | 囚女の美しき緊縛(絹川) |
| E 57 | 諦めた観念全裸像(水本) |
| E 58 | 縄にもだえぬく姿(絹川) |
| E 59 | 黒髪を吊られた女(大塚) |
| E 60 | 女奴隷美しく悶ゆ(絹川) |
| E 61 | 袋の中の緊縛裸身(竹本) |
| E 62 | ビニール袋に蒸す(竹本) |
| E 63 | 亀甲型の雁字搦目(大塚) |
| E 64 | 緊縛裸像の舞踏会(絹川) |
| E 65 | 野外の後手宙吊り(梨花) |
| E 66 | 足首に鎖錠実施中(四方) |
| E 67 | 室内の後手宙吊り(梨花) |
| E 68 | 雨装束の悦虐姿態(梨花) |
| E 69 | 乳房いじめ踏つけ(大塚) |

|       |              |
|-------|--------------|
| E 70  | 足の裏ハネ擦り責(梨花) |
| E 71  | 乳首プライヤ挟み(竹本) |
| E 72  | 野外の逆さ吊り責(梨花) |
| E 73  | 梯子責にあう美女(梨花) |
| E 74  | 逆さ吊りに揺れる(梨花) |
| E 75  | 娘十六しぼり加減(花坂) |
| E 76  | 踏みにじられた顔(大塚) |
| E 77  | 逆エビニ反る足先(大塚) |
| E 78  | 両手吊りのお仕置(絹川) |
| E 79  | 責折檻に呻く若妻(梨花) |
| E 80  | 豊麗を誇る正面像(大塚) |
| E 81  | 食卓上の縛り人形(大塚) |
| E 82  | むしられる下着(大塚)  |
| E 83  | 月経帯の羞恥縛り(梨花) |
| E 84  | 寝台上的若妻狂態(関谷) |
| E 85  | 強烈全裸エビ縛り(東浦) |
| E 86  | 鞭姿後手縛り吊り(東浦) |
| E 87  | 後手縛豊満臀部晒(関谷) |
| E 88  | 黒髪いじめ凌辱図(大塚) |
| E 89  | 令嬢後手高手小手(絹川) |
| E 90  | 臍部乳房強調緊縛(東浦) |
| E 91  | 責衣にくるまれて(東浦) |
| E 92  | 全裸逆エビ責め(水本)  |
| E 93  | ローソク乳首ゼメ(梨花) |
| E 94  | 全裸後手縛り晒(関谷)  |
| E 95  | 強打全裸のあえぎ(関谷) |
| E 96  | 肉体美の責衣ゼメ(東浦) |
| E 97  | バンド二ツ折縛り(梨花) |
| E 98  | 全裸正坐縛り猿轡(関谷) |
| E 99  | 豆しぼりの猿轡(絹川)  |
| E 100 | 強烈縛り臍いじめ(東浦) |



## 谷崎潤一郎の作品と三者関係

## 「或る真面目なたわごと」

須 渾

朔

巨星、谷崎潤一郎氏がなくなられたが、二百号突破という輝しい業績をなしたとげた奇クの記事の中で、最も数多くあげられた文豪と云えば、おそらく大谷崎を挙げるべきではないかと思う。

曰く、沼正三氏の「夢想家の手帖」曰く、山本節夫氏の、「ファンタジア・マゾヒスチカ」、曰く田沼醜男氏の「マゾヒズム天国」等々。こうした文豪の名や、その名作への記事が、我が奇ク誌に登場するのは、思えば何となく奇妙な感じがしないでもないのだが如何？

もとより谷崎氏の作品にマゾヒズムの要素がいみじくも充満(?)しているためには違いないのだが、そうしたM(場合によっては

S)を最高の文学に定着させた文豪の才能には改めて驚異以外の何ものでもない、という当り前の感激はともかくとして、これは我が奇クが長年真摯にS・Mを追求してやまなかつた、すぐれた文献誌であることを示すものと云ってもよいことにもなるのではないか。

本誌のM派の方々の中の相当数の人々と同様、私の半生期は、この谷崎文学と、奇クをとり除いては、なり立ち得ないとさえ考えられるものである。或いは、過去の偉人に対して失礼じゃないか、などと叱られそうだが、谷崎文学に対しても、秘かに耽読させて貰って、その幽玄境に空想の世界で陶醉させて貰った私にとり、谷崎文学が無縁のものとはとても云いきれず、敢えて、こうしたたわごと

を連ねたくなった次第である。

文豪がなくなられて、色々な有名作家が書いたけれども、私がやはり一番印象的に思ったのは三島由起夫氏の文で、氏が、「細雪」や「少将滋幹の母」によって、谷崎文学の巨大な花が全日本を覆うようになったとき、私は自分の個人的な趣味が普遍妥当性を獲得したような気がして、多少うれしく、また多少迷惑に感じた。と書かれているのは大変嬉しいことで、自称マゾヒスト、空想的耽美主義者、且つ空想的三者関係の陶醉者兼自称研究家(?)であるところの私は、思わず一人で快哉を叫びたい位だった。

谷崎氏の偉業について、かかる空想的：無名人種の私などが、とやかく云うのはおこがましいし、笑止千万なことに決っているが、そこはそれ私といえば、中学生は一年の頃、古本屋である不思議な古本を見出してハッとした。陶醉、その言葉の意味を始めて知らされたような気がした。

それは水色の絹表紙の、水島爾布保という画家(漫画家でもあったらしい)の装幀になるもので、題して「饒太郎」、流石は文豪、この題名即ち、マゾヒストの主人公の名の、巧まざるユーモラスな題名(主人公の名)を



持つ小説本が存在していたこと、又それをば古本店で見つけて求め得た自分自身に、随分嬉しくなったものであった。

それは面白かった。こんな面白い小説が存在したこと自体が不思議に思う位に。云うまでもなく、それは売れっ子作家と、その女弟子の青年、その三者関係が、何となく滑稽に(?)描かれている。

女弟子の地位は女主人となり、主人公の作家は彼女の馬にもなる。又裸にひんむかれて彼女に縛られる。そして遂に彼は、彼女と、その恋人の弟子の青年の二人から色々はすかしめられ、命令され犬になり、馬になる。そんなきわめて、はっきりしたテーマだったが、この「饒太郎」こそ谷崎文学の骨子だと



思うのだが、どうなるのか?というのも「饒太郎」についてふれらることはごく少く、僅かに本誌旧号で、三者関係のくだりで沼氏がふれられた位のものは淋しい気がする。

「饒太郎」にこそ、この文豪の終生あくことなく書いたマゾ文学の要素が、きわめてビビッドにあます所なく、又無駄なく画かれているような気がするのだ。曰く、マゾヒズム、三者関係、逆転趣味——私のような或いは独りよがりのマゾヒズム又は谷崎文学を考えたくて仕方ない(?)者には他のいわゆる、あまりにも有名な「痴人の愛」や「卍」や、「芦刈」や「鍵」にしても皆「饒太郎」の変型、又は踏襲としか思えない位であるのだ。或いは、私が谷崎文学に接した最初の作品

が、この「饒太郎」であったためかも知れないのだが、それにしても、冒頭の、確か、初夏の青葉でものがなが青く見える中で、眼のやたらに大きい女が立っている、——あの描写は、いつまでも私の少年時代の、あの不思議な興奮、恍惚の中に永久に忘れられないものなのだ。

又「饒太郎」が実は記念的な、文豪の傑作である、という根拠は、この「饒太郎」によって、愈々三者関係という、シビアなテーマに、文豪がとり組むことになった(?)ことである、と推測され得ることでもあるのだが如何?作品年代順を詳らかにしてないので、何とも云えぬが、私の云いたいことは、この「饒太郎」にMの特性(谷崎文学の)が、うまく結集しているのではないかと云うことである。

「饒太郎」に対するたわごとは、とも角として、それから私は谷崎氏の他の作品が読みたくてたまらず、「本牧夜話」や「愛すればこそ」、「愛なき人々」、等の入っている改造社の円本の古本をあさり、むさぼるように、こっそり読み耽った。しかし、この時は「饒太郎」程には感激しなかった。妙に錯綜した男と女達の関係にエキセントリックな感興を



唆られはしたが、へんにサディスティックなポーズが目立ちすぎて、余り後味がよいとは云えなかった。又々文豪に対して失礼じゃないか(?)になりそうだが、素人考えに、文豪はやはりM派——といっても作品の上の、一種の観念的空想的M派であろうが——であって、こうしたサディスティックな作品は真骨頂ではなかったのではないか。(云うなれば一種のただれたデカタニズムと残酷美)

だが面白いことには、こうした本牧もの、即ちS的作品はM派の書いたS的作品としての特徴をよく現わしているのだ、と思うのだが、どうだろうか? というのは、必ず複数の女性群が登場するが、女が別の女の上に君臨し、いじめる、そんな描写——つまり、男が好きになった方の女に、別の女、例えば前に好きになった方の女性を、いじめさせて陶酔する、そうした部分が、中で最も光彩を放っているように、考えられるのだが、どうであらうか。

二号夫人の方が、新に勢力を益し、(つまり、男の気が二号夫人に傾くことにもなる)一号夫人の上に君臨したり、いばったり、いじめたりする。といった逆転趣味が大変色濃く出ているものも特長といえようし、この時

代の文豪の西洋崇拜趣味(エキゾチシズムでもある)からか、新勢力となり、威を揮うようになる女性は西洋女とか、混血女性とか、又は日本人ではごく西洋人くさい、パタ臭い女性が大部分であるのは実に面白い。

男が直接、女をいじめる描写は、余り面白く書かれていず、女対女の悦虐の部分が面白い、男は女対女を見て陶醉しているわけであるが、それもマゾヒストらしい、のぞき趣味なのか?

ともかく、本牧ものは私には余りピンとは来なかったし、「饒太郎」みたいには陶醉出来なかったが、ともかく何と凄い小説家が存在するものと益々驚き、私の妙にそわそわした、古本屋漁りが続けられた。そして「お国と五平」、「ある少年の怯れ」、「柳湯の事件」、「友田と松永の話」などの入っている、黄茶色の、小さな、チャチな装幀の、怪奇(?)文学叢書を探し、「アベ・マリア」「芦刈」改造社の文学全集の中に、「痴人の愛」や「金と銀」、「途上」「赤い屋根」等が入っているもの。

「赤い屋根」の中では、以下何字サクジョばかりでさっぱり判らなかったが「鮫人」という本、春陽堂(?)か、どこかの全集で

「友田と松永……」、「AとBの話」、「人面疽」、「業」、「神と人との間」の入っているもの、「刺青」等の初期短篇集、等々今から考えて、よく古本で探し得たと思うものだが、ともかく一冊探しては喜びにふるえて読み耽り、読んでしまえば又別のを読みたくて矢も楯もたまず、といったことをくりかえした思い出は忘れられるものではない、といって少年の私の理解力ということもあるだろうし、皆がすべて面白いと思ったわけでもない。例えば、「過マンガン酸カリの夢」とか「人面疽」とかは、実に下らないと、失礼千万にも思ったりしたもののだが、それでも氏でなければの、ミステリー趣味、エキゾチシズムを感じ、それらを読み終ると又別の作品、特に、再びあの「饒太郎」みたいな傑作を読みたいと古本屋漁りを続けたものであった。

伊藤整氏の文も興味を唆られ、特に経済的变化による身分の逆転をテーマに……云々とあって、面白いと思ったが、それは勿論そうだろうし、それも文豪の生い立ち、とも関係がありそうであるが、それよりも本質的に、マゾヒストにとっては、それ自体逆転への、陶酔、という要素がひそんで存在するわけで、まさか露骨に伊藤氏もそうは云えないために







……と記されている)が、後に一貫して、益々強く鮮明に彼の作品群に画かれる。(「饒太郎」あたりで極端となる)その端的な暗示のように思えてならないことから、記念的初期作品のように、思われるのだが如何。而も「幫間」にも「少年」にも逆転趣味がかなり鮮かに描かれてもいる。

「逆転趣味」と云えば、この文豪が、嬉しくなる程その趣向を作品にとり入れているの驚きもする。一寸あげても「痴人の愛」のナオミと譲二、「饒太郎」の作家と女弟子、「小さな王国」の教師とボスの少年、「アベ・マリア」の中のある少年の一人ひそかに、耽溺する王国での、赤と白の玩具、

この「アベ・マリア」という作品は余り顧りみられないようだが、文豪の悦虐趣味を伝えて妙だと思った。というのは、赤と白、二個の玩具を、異性におきかえて、みるのである。私が男となっているから、二個の玩具は二人の女性と考えれば、落語の「めかうま」を一寸ばかり連想しないでもない滑稽さ、ではないか。

文豪の逆転趣味がこのように鮮明に、端的に描かれている作品もないのではないか。或

いは初期の作品からして、西洋崇拝的作風を考へれば、赤と白のどちらが西洋人なのか、などと私はこの「アベ・マリア」から色々の空想を逞しくしたものだった。而も文豪の筆のすばらしさは、赤と白の玩具と私という少年とが、いつのまにか、同じ陶酔の場で同列(?)に並び自分という少年の位置づけ(赤と白と私の三角関係)から、逆転、又は転落現象による身分関係、又はその変化(三者関係)へと、妖しくも引き入れられてしまうのであり、テーマの単純さから甚だ端的で印象的に思ったのだった。――

又「花」での光子をめぐる男や女、等々、「台所太平記」にしても、お手伝さんを時代の推移につれて、何人か登場させ、その地位について、追及しているわけで、同じ女が複数、而も時代順にしてあるだけのからくりである。Mそのものに既に逆転趣味がひそみ、又はうらはらにくつついているわけだが、谷崎文学のように、しつように逆転趣味を謳歌すること激しいのは一驚する次第である。

これは文豪が三者関係の作家で、その関係をより追及するためのおせん立て、なのか。(三者関係にまで行かないマゾヒズムつまり、例えば夫婦のみのマゾ・プレイEgoで

は、夫婦間の逆転という、最もシンプルなマゾヒズム自体しかない、これは勿論だが)どうか、誰方か、お教を乞いたいものである。

私としては、氏の作品にこの趣味が色濃いために、益々堪能し得るものであるのだが：又、例えば、氏が生れたのが日本橋の相場師(株屋)で、それは浮沈の特に激しい職業であったことと、少しは関係があるのか、などなど、未熟な私は色々素人考へに、大谷崎氏の作品に長い間耽読させて貰っている者らしく、考をめぐらせ、こんなわごとを書き連ねる者である。

本誌二百号突破の記念作品として、大谷崎氏の、特に、こうした疑問などにふれるような労作を、旧号時代の沼正三先生のような立派な研究者に、お願いしたいと希望切な者である。

(又これは蛇足だが、大谷崎氏は我が奇クの存在をご存知であったか。例えば目にふれ、読まれたことがあったか、八かの溝口健二監督が、愛読者だったと聞いたことがあるがVと、それを私は知りたい者でもある。)

(おわり)



## ○臨月腹妊婦資料の部

臨月腹妊婦緊縛

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)  
田中美佐子 略号(にち)

診察を受ける妊婦

大手札四枚一組 略号(五〇〇円)  
田中美佐子 略号(にし)

臨月腹開陳

大手札四枚一組 略号(五〇〇円)  
田中美佐子 略号(にり)

臨月腹開陳

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)  
田中美佐子 略号(にす)

柱縛りの妊婦

大手札二枚一組 略号(三〇〇円)  
田中美佐子 略号(にや)

臨月のヌード

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)  
田中美佐子 略号(にわ)

妊婦の裸身像

大手札二枚一組 略号(三〇〇円)  
田中美佐子 略号(にた)

縛られた妊婦

大手札二枚一組 略号(三〇〇円)  
田中美佐子 略号(にる)

臨月の裸身像

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)  
田中美佐子 略号(にお)

臨月の裸身像

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)  
田中美佐子 略号(にぬ)

突き出した臨月腹

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)  
田中美佐子 略号(にい)

## ○刺青女体資料の部

入墨の高手小手

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)  
山原 清子 略号(いち)

縄に悶える入墨

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)  
山原 清子 略号(いへ)

足吊り三態

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)  
山原 清子 略号(いと)

剥れた腰巻

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)  
山原 清子 略号(いは)

女一匹御意見無用

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)  
山原 清子 略号(いお)

玉取姫が凄む

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)  
山原 清子 略号(いる)

全裸緊縛立像

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)  
山原 清子 略号(いに)

入墨ヌード

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)  
山原 清子 略号(いよ)

後手吊りの構図

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)  
山原 清子 略号(いほ)

黒細帯の裸身

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)  
山原 清子 略号(いわ)

黒禪を誇る

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)  
山原 清子 略号(いか)

入墨自慢

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)  
山原 清子 略号(いり)

黒ふんどし入墨姿

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)  
山原 清子 略号(くの)

黒ふん媚態の魅力

大手札五枚一組 略号(五〇〇円)  
山原 清子 略号(くな)

黒禪背面模様

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)  
山原 清子 略号(くこ)

黒ふん手吊り責め

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)  
山原 清子 略号(くり)

全裸入墨姿態

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)  
山原 清子 略号(いれ)

晒六尺ふんどし

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)  
山原 清子 略号(ろと)

白六尺禪一本の姿

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)  
山原 清子 略号(ろに)

白禪後手高手小手

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)  
山原 清子 略号(ろし)

日本髪全裸強烈縛り

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)  
山原 清子 略号(いら)

洋髪全裸強烈縛り

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)  
山原 清子 略号(いこ)

日本髪全裸股間縛り

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)

山原 清子 略号(いさ)

可憐島田髻全裸縛り

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)  
山原 清子 略号(いみ)

黒フン高手小手縛り

大手札八枚一組 略号(八〇〇円)  
山原 清子 略号(ひろ)

入墨女体全裸像

大手札十枚一組 略号(一〇〇〇円)  
山原 清子 略号(ひへ)

黒禪刺青女体美

大手札十枚一組 略号(一〇〇〇円)  
山原 清子 略号(ひね)

六尺禪をするまで

連続二十ポーズ組写真  
大手札二十枚一組 略号(二〇〇〇円)  
山原 清子 略号(ひは)

白ふんどし脇差切腹

大手札十枚一組 略号(一〇〇〇円)  
山原 清子 略号(ひに)

白ふんどし短刀切腹

大手札十枚一組 略号(一〇〇〇円)  
山原 清子 略号(ひぬ)

刺青姐御腹巻脇差

大手札十枚一組 略号(一〇〇〇円)  
山原 清子 略号(ひほ)

刺青姐御腹巻短刀

大手札十枚一組 略号(一〇〇〇円)  
山原 清子 略号(ひり)

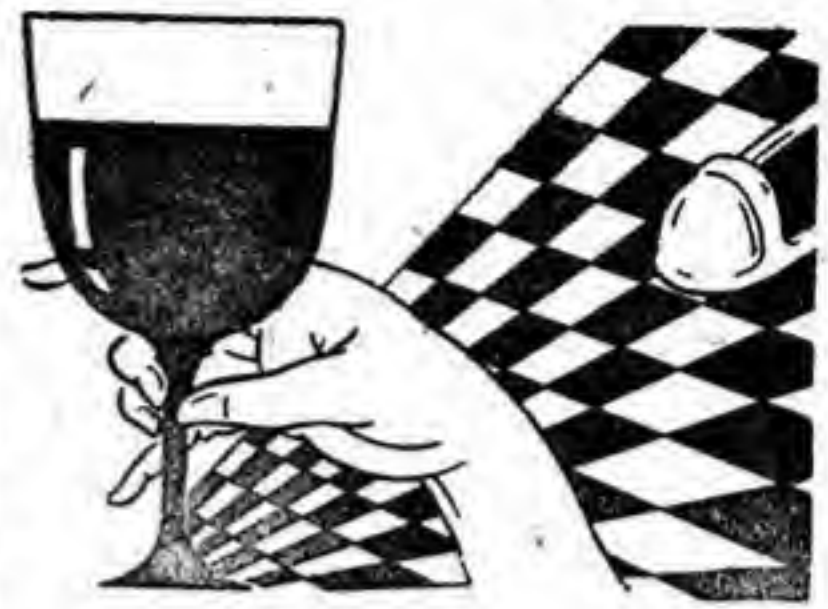
入墨女体海老責姿態

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)  
山原 清子 略号(ほか)

文身女体股間縛り

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)  
山原 清子 略号(ほき)





かずひこのノートから

最もみにくいもののなかに

ある最も美しい味

とやま・かずひこ

## 拝酒日記

私は、日記を二種類つけている。

ひとつは、私といっしょに働いてくれているオフィスの若い人たちのための連絡用の業務日誌。そして、別のひとつは、絶対に他人にはみせられない、わが、ひそやかな行動をかきとめておくためのものだ。禁を破って後者のほうから、一部の日記を抜すいしてお目にかけてよう。

拝酒—といつても、アルコール分を含まない神酒のほうであることは申すまでもない。

某日(月) 晴

## 2回

味なく、白湯(さゆ)のようだ。舌端にホ

ノボノたる清涼と軽いアムモニア。

某日(水) 雨

TELで呼び出し、早速伺う。

△きょうの雨のように、たくさん頂けますように▽

祈り叶って、たっぷり。

やや甘く、ホロにがく、ころよい香気が首のまわりにただよう。ただ感激。

某日(金) くもり

終日おそばにあり、断続6回。

そのときそのときで味が微妙に変化する。

だからあきない。ビールのあとは、ホロにがく、日本酒のあとは甘く、ウイスキーのあとは強烈な刺戟臭。洋菓子のアトのそれは最高の甘さ。きょうは、全量拝受のため、おそろく一・八リットル以上はあったと思う。くめどもつきぬこの世の美酒、神の酒。魔の味。

某日(木) くもり

暑き日、日中29度、大部分が汗になったためか、タンブラーに半ぶんの少量。しかし、濃縮されたその味は、舌先をシビレさせ、鼻腔をつんざき、のどになだれ込む、やはり不潔感。しかし、身を刺す屈辱感は強烈そのもの。



某日(月) 晴

帰りに八おみやげVを頂く。

トリスポケッピン一本ぶん。帰宅するまで待ちきれず、タクシーのなかでラッパのみ。

豪快。何をのんでいるのか、誰にもわからずひとりたのしめるのだから、ユカイだ。冷えた味もわるくない。ただ鮮度が失せると、ピリッと舌にくる。それがまた、たまらない魅力だ。

某日(水) 雨

きょうのは、ビタミン入りよ、とおっしゃる。疲れたので、昨夜二本打ち、そのまま朝までためている由。気のせいかな、いつもより苦が強い。ほんとうに効くような気がする。なぜか、顔がホテリ、全身、ポツポツとあつい。

某日(土) 晴

おとずれだから、きょうはお預け。だって気がすまないと宣告される。こんなとき、しつこく云うと、ほんとうに、事後給水中止の厳罰に合うので、あっさりあきらめる。そのかわり、もっといいものあげる、と、手の上ののるくらいの、丸い紙包み。ここであけてはいけない。うちに帰って、テーブルのうえで、ゆっくりたべなさいと命令される。そ

っと指でつつくとブヨブヨと水気を含み、かなりの重さ。ああわが待望久しきもの、いまわが手中にあり、命かけて恋せしもの、いま神よりめぐまる。

### 10円の悦楽

このごろ、悦楽をまたひとつ考えだした。例のコールガールクラブ。電話ボックスのなかなどに

△こんばんおひま?V

と、遊客の心をそそるカードが、ひそかにおかれてある、あれだ。

10円をフンパツして電話をかける。

時間は、夕方七時ごろが、いちばんよい。

たいてい女性がでる。

仲々美しい声だ。

さっそく商談にはいる。

…こんや、ヒカリの最終で、大阪にゆくんだけど、二時間ほどあるし、おこずかいが八千円ばかりあるんだけど、いいコ、こないかしら…

こんな要領で、エサを投げる。

相手は大てい真剣になり、

『え、いい人いますわ』

という。

『で、あなたさまのオコノミは?』

とくる。そこからは、アソビだ。

…うんボクのはね、すこし変わってるんだ。

つよい女の子がいいな、ボクは、いじめられるのがスキなんだ。

『まあ、すごいね』

だんだんくだけてくる。

…そうなんだよ、痛いめに合わされると最高なんだな。そんなコ、いないかしら。

『いますよ、その、なんていうんですか、マゾですか、あれでしょ』

…ソオ、ソオ、予算は、ぜんぶ使っちゃっていいから、そんなコ、紹介してよ…

『ハイ、ハイ、じゃ、ムチカナワでも持たせましょうか』

…あ、ついでにね、トイレへ行かないで、くるように云ってよ。

『え?』

…うん、ボクね、イキのよい東京のオネエちゃんのを、たっぷり飲みてえんだよ、それだけじゃない、たべちゃうぞ。

相手は、これで、ドキモを抜かれて絶句するか。

『バカ、ヘンタイの気狂いヤロー』

と、ガチャリ電話をきるだろう。



ここで10円、ムードたっぷりのお安いアソビだ。

ところが、これに、余談がある。

こちらの申込みが、堂に入った(?) ためか

『あたしのでよかったら...』

と真剣な返事。

とにかく、落合い場所を新橋駅西口にきめて、いってみた。

想像以上の、すばらしい女性が、そこにいた。これならわるくない。

ミイラトリかミイラになるというが、思いがけないプレゼントを、たっぷり頂けた。もちろん、10円ではすまなかったが...

## 忍法 走り水

午後の地下鉄は、さすがにすいている。

週刊誌を読みあきた私の目は、どこかに、

よき女性でもないか——と見まわす。

なんとなく、好みのひとが、いそうな気配だったから。

居た！、居た！、予感的中、ほっそりしたからだを、和服に包んだ、一見水商売ふうの女性。そろそろ、ギンザへでも出勤のホステスでもあろうか。

例のごとく、私は雑念をはらい。心の中では熱心に祈りつつ一心に女性をみつめる。

△神よ、奇蹟をめぐみたまえ▽

祈りの数分、果して、私の口中に、あたたかく、おいしいものが流れこむ。

その流れは、はじめは物しずかに、やがて激しく口中を溢れるばかり。

うまい、かぐわしい神のめぐみもうた、それはこの世の、何ものにもまさる、すばらしいのみものだ。

やがて、口中の流れは、静かになり、止んだ。その間、くだんの女性は、かすかに目をつぶり、口をつくんで、心地よさそうに、生理の用をたしているかのような表情。

とにかく、私は、車中でも、テイルームでも、ホテルのロビーでも、どこでも、欲するところで、みかけた女性を視線から離さずに、神に念ずると、かならず、のぞみが叶えられて、あこがれののみものを、いくらでも、わが口中へ吸いとることができるのだから、幸福。

いやいや、酒だけではない。

欲するなら、とくに腹がへったときなら、相手の、おなかのなかのものまで、存分に味わえるのだ！

たとえば、彼女が、タツタいま、レストランで、食事をしたとする、それを、ソツクリそのまま、消化しやすい形で、こちらの口中に通わすことができるのだ。もちろん消化を終わったあとの、形になったものだって、のぞみのまま、こんなたのしく、おいしい食事は他にない。

三度々々、こうして私は、ひそかに食事だって、のみものだって、自由自在に、とることが出来る。

しかも、相手の、生理の表情をまのあたりみながら、ご主人にも知られず、もちろん、第三者の誰からも、まったくさとられることなく——コプロ党として、こんなすばらしい生活はないだろう。

——しかし、これは残念ながら、白昼のユメ。ちかごろ、忍者ものにこった私が、欲望のあふれるものに創作したものにすぎない。ただ、私の前にすわった、かの女性が、あまりに美しすぎたためだ。

名づけて『忍法、美女のはしり水』タイクツな車内でのひとときに、こんな夢をみることも、けっしてわるくない。想像の世界は常にたのしい。



譲ります

女性週刊誌『女性セブン』7月14日号?告

知板という、読者相互の文通欄に

ゆずります。昨年買った水着。Lサイズ

水色ワンピース、2回使用、1800円

の品を900円で、金沢市六斗林一丁目

南野よしえ

という投書がでている。よしえさんは、恐

らく若い女性だろう。その若い肌を包んだ水

着を売りたいと云う。

投書の主は、マジメな女性、そしてマジメな女性に譲る目的であろう。

しかし、と、私は考える。

吾々が、これを買ってはいけないという理由はないだろう。

このようにして、ご用ずみの下着類を、堂々と買えたら、ズイキのナミダをこぼす向きも、少くないであろう。誰か、若き女性よ譲ってくださいませんか。

### 「非常階段」

春川ナミオ画  
分譲用秘蔵版

## 女体の下敷力作M画決定版

大中判印画紙極鮮明焼付

七枚一組 三〇〇〇円 略号(ぬけ)

Mマニヤである春川ナミオが、常に豊満な女性の臀の下にありたいという見果てぬ夢を画筆に托して、ものにした傑作M画

M派マニヤなら、二度と手に入らぬこの一組を!

一、若き女の股間で圧死する

五、尻の下に喘ぐ人間椅子

二、行水する美女の尻に敷かれる

六、逆エビで蠟燭責にあう

三、見事な美女の臀部の下敷き

七、臀の下に埋れて法悦に泣く

四、人間ハンモックになる男

(以上七葉のM画決定版)

一概にM趣味といっても、いろいろ多種多様な傾向があります。本画集はその中でも、若くてはち切れんばかりに豊満な女性の臀部の下敷になつて屈伏することに喜びを感じる男性にピントを合せてあります。この種嗜好の方にとっては、唯一無二の文献となるでしょう。分譲中止にならぬうちに、どうぞ。

梶山季之という作家は、好んでS・Mの世界を描く。昨年は『四』で、吾々を喜ばせてくれた。

いま『週刊マンガサンデー』に、『非常階段』を連載しているが、ここではSの夫とMの妻を活躍させ、楽しませてくれる。

顔めがけて発射したり、たべさせたり、浣腸薬も、ちよくちよく登場する。

梶山氏自身は、S・Mの実践者とはみえないが、少くとも、その理解者であることは間違いない。

なぜ、私は、そう断定するかというと、書いてあることのなかに、作者自身は決して溶け込まないからだ。

ついでに云えば、氏の文章を、仔細にみると、あきらかに、本誌などを参考にしているフシがみうけられる。

Mの女性に、本音を吐かせるために、本誌らしき雑誌を小道具に使ったりするので、ハアと思うときがある。

私も『四』をあつた女性によませて、彼女の『S度』をテストしたことがあるが、男の顔に、かけるくだりは鮮烈な印象を与えたらしく、以後、そのような行為をさせるのに、非常に役立った経験がある。梶山氏の健筆を祈



るとともに更に、更に、この美しき世界に、足をふみいれることを祈りたい。

附記―梶山氏の近刊―白い魔液―を発売早々よんだ。

ここでも、すばらしい美貌の少女が、女王となつて「バア・鞭」に集るM客のためにムチをふるい、あげくには「ホットビール」をのますシーンがある。

客らが、うめいて、ホットビールを飲みたがり「全部飲ませてください」と求める。

「女王のウインクを飲ませる」客の求めに応じて平然と、ウインを与えるドミナが生々と描がかれて、すばらしい。

黒岩重吾も、その作品のなかに、ときどき「ピスを飲ませる美少女」を登場させる。

妙なもので、私など、日常行っていることを、作家のペンで、生々しく表現されると、たまらない感興をおぼえるのは、どうしたわけだろう。

とにかく、梶山氏は、たしかに「液体を呑む」心理を理解していてくれるらしい

## 芳野眉美という作家

芳野眉美という作家を、吾々の代表と呼ぶことに、誰も異議はないであろう。

本誌へのデビューは、私などよりはるかに先で、沼正三氏（学究肌の、ネクターの命、名者として、過去の人とはなったが、本誌の誇る作家の一人）はなやかなりし頃だから、ずいぶんむかしのことだ。

かれは、その頃から今日まで、一貫して同じユメを追ひ、おなじ調子で、歌をうたいつづけている。

文章をかかせれば、ケンラン華麗、かつて私の師事する、ある情痴作家は、かれの文章をよんで「これは、作家としてモノになる」と評した。

かれは、とても若い。ハンサムで、明るく心もちくずれた、キレイでいかす、プレイボーイである。

実物をみたら、本誌の女性読者の多くは、喜んで、かれに、のぞみのものを吞ませ、あこがれのものをたべさせたくなるであろうと思う。（名文です。ウン）と、かれは、口グセをだすだろう。男ざらゐりの私でさえ、ホレボレする好漢だ。

そのかれが、8月号にかいた、豊満な女性（人妻か否か不明なのは物たりないが）からのまされた体験をかいている。実戦にのぞまなければ、ここまでリアルにかけない筈だ。

そして、このつぎは、いよいよたべさせられるらしい。これもよし、ただいささか気になるのは、さすがのかれも、たべる一段になると、女王さまに、かならず（このつぎにね）と云われてしまうことだ。

このつぎに―と避けるところに、まだかれは、たべることにたいこウを感じているのではないだろうか。

食パンにぬったり、サンドイッチの飲物代りにしたり、とアイデアは仲々奇抜だが、かれが、ズバリ、たべるところまで到達したら、かれは、さらに伸びるのではあるまいか。

かれの本職は、女性に、比較的縁の近いもののように、求めれば、そのチャンスは、かならずあるだろう。

そして、かれのよいところは、折り目の正しい、上手な交際態度にもある。友人に迷惑をかけないし、当代の紳士として、私はかれに惚れ込んでいます。

## 〔お願い〕

本誌の旧号を求めたいと思いますので、お譲り下される方は月号と価額を御一報願います。

（編集部）



## M資料分譲品一覧

## ○新人S女性出現○

遅ましき股に挟まる

大手札四枚一組 略号(あとお) 一〇〇〇円

素足の脂がべっとり

大手札五枚一組 略号(あて) 一二〇〇円

縛った男をムチで料理

大手札十枚一組 略号(あさ) 一〇〇〇円

女王様の人間便器になる

大手札十枚一組 略号(あす) 二〇〇〇円

蟻涙の雨を全身に浴びる

大手札四枚一組 略号(あせ) 一〇〇〇円

尻の下につぶされた男

大手札二枚一組 略号(あた) 六〇〇円

エビ責めに弄ぶ女

大手札六枚一組 略号(あそ) 一四〇〇円

神酒を与える女神

大手札六枚一組 略号(あち) 一四〇〇円

咽喉輪を股責極楽

大手札四枚一組 略号(あつ) 一〇〇〇円

素足の足舐と嗅香

大手札五枚一組 略号(あこ) 一二〇〇円

顔面に女の尻が乗る

大手札七枚一組 略号(あう) 一五〇〇円

人間犬の芸仕込み

大手札十枚一組 略号(あえ) 二〇〇〇円

女の尻に顔がつぶれる

大手札三枚一組 略号(あく) 八〇〇円

足指に挟んだ菓子

大手札二枚一組 略号(あの) 六〇〇円

男を縛って弄ぶ女

大手札十枚一組 略号(あに) 二〇〇〇円

尻責めと股責め

大手札十枚一組 略号(あぬ) 二〇〇〇円

大男の訓練風景

大手札十枚一組 略号(みら) 二〇〇〇円

男を刺し殺す美女

大手札十枚一組 略号(みむ) 二〇〇〇円

男を尻の下に敷く

大手札十枚一組 略号(みう) 二〇〇〇円

女の足下にうごめく顔

大手札六枚一組 略号(みれ) 一四〇〇円

汚物を戴く男

大手札六枚一組 略号(みわ) 一四〇〇円

男を馬にする美女

大手札五枚一組 略号(みか) 一二〇〇円

人間椅子の御褒美

大手札五枚一組 略号(みお) 一二〇〇円

飼犬に餌を与える

大手札四枚一組 略号(みた) 一〇〇〇円

浣腸器で男を弄ぶ女

大手札三枚一組 略号(みつ) 八〇〇円

股で絞められる首

大手札三枚一組 略号(みね) 八〇〇円

芳香を嗅がす尻

大手札二枚一組 略号(みな) 六〇〇円

人間馬の調教プレイ

大手札三枚一組 略号(まの) 五〇〇円

足舐めの奉仕と強制

大手札三枚一組 略号(まわ) 五〇〇円

股責めにあう男の顔

大手札三枚一組 略号(また) 五〇〇円

女に縛られて弄られる

大手札三枚一組 略号(まひ) 五〇〇円

踏みにじられる顔面

大手札三枚一組 略号(まな) 五〇〇円

肩車に奉仕する青年

大手札三枚一組 略号(まは) 五〇〇円

男を縛って玩具にする

大手札三枚一組 略号(まて) 五〇〇円

首を太股で絞めあげる

大手札三枚一組 略号(まや) 五〇〇円

灰皿にされた男

大手札四枚一組 略号(そほ) 六〇〇円

裸女の長靴に悶ゆ

大手札四枚一組 略号(そに) 六〇〇円

美女に飼われる犬の生態

大手札三枚一組 略号(そろ) 五〇〇円

美女の手で縛られる過程

大手札四枚一組 略号(そと) 六〇〇円

女御主人に使役される男

大手札四枚一組 略号(そち) 六〇〇円

美女のおいしい足を戴く

大手札四枚一組 略号(そぬ) 六〇〇円

むしゃぶりつく素足の味

大手札三枚一組 略号(そは) 五〇〇円

凌辱と美女のなぶり者

大手札五枚一組 略号(そり) 七〇〇円

素足を舐める構図

大手札四枚一組 略号(そへ) 六〇〇円

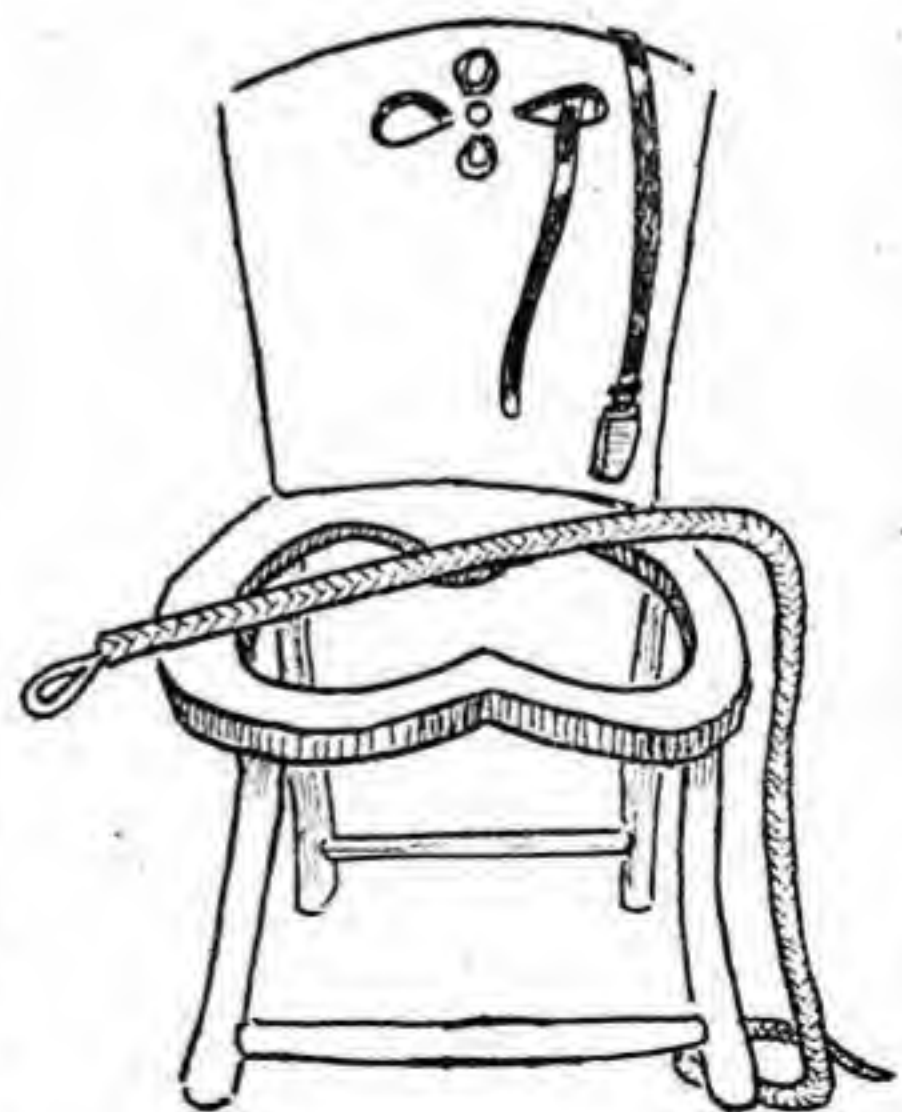


## 連載サディズム小説

## コンピエーヌのイヴェット看守

心痛たむ遍歴 八第十四章そのかみのこと(十四) V

## 西 条 操



其の頃、コンピエーヌ婦人刑務所に勤務するイヴェット婦人看守は、漸く所内の勝手や慣習も分り、女囚達の顔と番号も覚え、札つき女囚の二、三人に初めてビンタを喰わせてもやった、と云ったところだった。

六月からは夏の制服に衣替えた。刑務官ともなれば、いくら夏でも上衣とネクタイは着用しなければならぬ。寮の新聞全部と機関紙の法廷欄に眼を通し終えたイヴェットは、紺リネンの上衣の襟にバッジを輝やかせて、朝の並木道を刑務所へ急いだ。

(昨日もなかったし、今日も未だの様ね)

夙に官舎へ移って、母と共に住む彼女だったが、毎朝寮に立ち寄って新聞全部をひろげるのが日課になって居た。目的は勿論ミシュリーヌ奥様の公判のこと、其の気になれば一週間は以前に公判日を知ることの出来る彼女ではあったが、誰にも気取られたくはないのだった。

其の日、第三監舎の収容人員は一挙に六名ふえて、第十一監房がふさがってしまった。新入りが三名、病監から戻されるのが一名、

それに第二監舎の半端二名の転舎だ。ジョアンヌ看守長女史は不満顔だった。所属刑務官の数は二監より一人少いの、担当受刑者の員数は同じになってしまふ。イヴェットは二階労役場の監視から詰所へ呼び戻され、六名の収監をジャンヌと一緒に担当させられた。イヴェットは云わば見習いと云う訳だ。

「罪人はふえる一方だねえ。今年中にはここも満員になっちまうよ。私が来た頃は、五監舎と六監舎は空だったもんだけどねえ。」  
ジョアンヌ女史は嘆いた。



「ジャンジャン仮出獄させちゃえばいいわ」  
ソファの連中の誰かが大声で云う。そう云う訳にも行くまい。

「こう忙しくなっちゃ、もう何だね、十把一からげ一律に扱うしか仕方がないわね」

女史は業務過重と定員不足をこぼす。其の癖、忙しいと云う御本人は暑さに向うと云うのに、近頃、又一きわ肥えて来た様だ。それに、舎内労役の時には、詰所に三、四名の古顔がいつも、ゴロゴロして居る。電話が鳴った。

「三人様の御到着よ。御苦労だけど頼むわ」

「どんな連中ですか？」

コーヒを干したジャンヌが訊ねた。

「さあ。未だ読んでないのよ。引張ってくれば分るわ」

看守長女史は豊かにくびれた顎で隣りのデスクをしゃくり、補佐格フォンテーヌが眺めて居る指圖書を示す。

イヴェットはジャンヌに命じられて、戒具棚から手錠三個を取り出した。黒光りする旧式のごつい手錠で、牢獄の陰惨さにふさわしい代物だ。

「重いでしょ、三つも持つと。一つお貸し。これで度胆を抜いてシユンとさせてしまうの

よ。此の式のは、蓋が閉まると鍵が要るわ。ぼつぼつ行く？」

本館の総務課では、広い室の片隅に、三人の女がうなだれて立って居た。体の前側で荷物や包みを持たされたままの両腕は、夏のドレスで肘も露わ、両の手首に手錠が光る。身柄の仮受渡しは既に済んで居て、傍の椅子で監視して居た保安課の婦人看守が、ジャンヌ達を見ると立ち上って小声で叱った。

「おそいじゃないの」

「すみません」

ジャンヌは肩をすくめた。婦人看守が二人やって来て、女達の手錠を手際よく外す。護送して来た拘留所の連中だ。二人は保安課の女丈夫に誘われて、喫茶室へ姿を消した。

「さ、こっちへおいで」

書類を受取ったジャンヌが、せき立てて背を小突き、女達は鼻を吸った。

「お前、一体何を持って来たの？旅行に出掛けるつもり？ぐずぐずするんじゃないの」

ジャンヌが嘲けり叱る三十女は小股の切れた金髪、ふくらんだ大きなトランクを重そうに提げ、数少い男性職員達を盗み見ながらノソノソして居る。

「だって、ずっと持たされたままで、立って

待ってたのよ。肩が、抜けたわ。ね、これには、あたしの全財産が入ってるの。気をつけて藏っといてね」

「何だって!!」

ジャンヌは矢庭に女の片腕を背にねじ上げ女はハイヒールを踏みもだえて身をもがく。

「痛いッ。い、いたいったら。放してよ」

手首が更にしたたか折られ、女は悲鳴を大仰にあげたが、重いトランクは片手から離さない。

「痛けりゃ、おとなしくするがいいわ」

ジャンヌが突き放し、女は二、三步よろめいた。

「どうして、そうすぐに腕をねじるの？」

忌々しげに呟きながら、女は素足の爪先でハイヒールを穿き直す。

「何だって？不服なの？」

「あっ。す、すみません。かんにん……」

他の二人の女は何れも蒼ざめた顔で戦々兢兢、肩を震わせ唇をわななかせ、今にもガクリと膝を落としそうな風情だった。

総務課と刑務課との間、地下通路への鉄格子の前あたりに、大きな殺風景な処理室がある。追い込まれた女達の手から荷物や包みが取り上げられた。今着て居る衣服と共に一ま



とめにされて整理番号をつけられ、二階の保管室行だ。

「全部お脱ぎッ」

覚悟を決めて居た三人の女達は、それでも哀しげに鼻を鳴らしつつ衣服を脱いだ。靴下は最初から穿いて居ないから、ハイヒールを脱ぎ捨てればだした。生まれのままの姿になった女達は、命じられるまま両手を背に握り合って立ちすくんだ。たえ切れない鳴咽を抑えようと、咽喉がわななき胸が喘ぐ。

念入りに化粧した記録係の娘が二人、カウンターの内側で頬杖をつき、女達のそんな姿を無表情に眺めた。指紋採取と撮影の準備はとうに出来て居る。

「二人は『じきにゆう』ね。」

一度も見ない書類をカウンターに投げて、ジャンヌ婦人看守がそう云った。『じきにゆう』とは、拘留所からではなく、社会から直接入獄して来た連中のことだ。

「そうらしいですわね」

答えながらイヴェットは、裸身の鳴咽を身も世もなくこらえわななく二人の女を見やっていた。イヴェットの横の台上には、彼女が音を忍ばせて置いた三対の手錠が黒々と並べてある。顔もあげ得ない二人の女が着て居たドレ

スはしわもなく、地味ながら小ざっぱりとして居たし、下着も清潔でハイヒールにも汚れがなかった。収監状を回わされて、昨日の午後か今朝早くかに、検事局執行課へ震えながら出頭して来たのに違いない。彼女達二人の顔には、化粧の跡が未だ残って居た。

本館で使役中の女囚が一人やって来て、床に囚衣を並べた。二組宛の下着、労役衣と房内衣が一枚宛、髪を包む黒ネットが一枚、それに革サンダルが一足。獄衣には既に大きな番号布が縫いつけられており、それを見える様にして並べて行く。遠からず出して貰える身の使役女囚は中年女、入獄して来たばかりの三人に、優越感を露骨に示して薄笑いを浮べて居た。洗いざらしの青灰色の下着、赤い横縞のみじめな獄衣。女達はそれから眼をそむけて啜り上げた。二十は年下の娘が使役女囚を威文高に顎で使い、カウンターにペコペコした中年女囚が女達の荷物と衣類を一まとめに網に包み、それぞれに番号札をつけた。

「いいわ。持ってお行き」

「は、はい」

所持品は、身柄の確認を待たずに運び去られ、見送る女達は涙ぐむ。全くの裸一貫にされて自由に別れを告げ、隔絶された恐ろしい

世界に、これから入って行く心細さと悲哀とが、彼女達の全身の肌に残って居た。こらえ切れなくなった一人が、後手の両腕を思わず解いて顔を掩い、声を忍んで泣き出した。四肢の引き緊った二十五、六才のブルネット、三人の中で最も品のある女性だ。

「命じられた通りにしてないと駄目よッ」

ジャンヌがきびしく叱ったが、それでもピントはしないで尻をビシッと平手で打ち、女はビクッとわなないて再び腕を背に回わした。投光器が女囚達に向けて点もされた。

「さ、一人宛前に出なさい。両手を上げて、脚をひろげてッ」

いくら馴れても、時には情けなさに涙のこぼれる身体検査が始まった。

「あッ。又!! 又ですの? ここへ来る前にも検査されてますのに……」

もう一人の「直入」女囚が、おろおろと訴える。

「そんなこと云ったって駄目さ。先刻のは予備校の卒業式よ。これは入学式。担当さん、もういい?」

ジャンヌに背を向けて四つ這いになり、腰を高くあげて脚をひろげて居た女が、そう云って鼻で笑う。



「余計なこと云うんじゃないのッ」

ジャンヌは尻をピシャッと叩いて起き直らせ今度は髪や耳、口、鼻の中を調べ上げた。ジャンヌの検査を受け終えた女達を一人宛、イヴェットが腕を掴んでカウンターへ連れて行く。採取された指紋が照合されて身柄が確認され、受刑者番号が、娘の口から言い渡された。

「クリスチーヌ・メリメ。お前は二八六号よ分った？二八六号」

「よく分ったわ。ありがとう。けど、前と同じなのね。新しい名前を、つけてくれないの？」

場馴れして居る其の女は、若い娘をカウンター越しに白い眼で睨み、むき出しの肩をすくめた。どうやら、仮釈放を取消された女らしい。

「ルーシー・アントワネット。お前は三一〇号」

「は、はい。三一〇号……」

今、受け終えた身体検査の屈辱感に未だ全身を仄赤く染めたルーシーは、打たれた番号を虚ろに呟いて声を詰まらせ、其の両眼に溢れた新たな涙で頬を濡らせた。もう一人のミルドレーヌは三八五号。身に打たれた受刑者

番号を二、三度唇に繰返して、其のみじめさを胸に噛みしめる風情だった。

「自分の番号の服を着なさい。房内衣を着るのよッ」

クリスチーヌは平気な顔で、あとの二人はしゃくり上げつつ、ごわごわの下着をつけ、獄衣を頭からかぶって身にまとう。

労役衣と房内衣とは同じ様なものだが、労役衣はデニムで裾が窮屈に狭く、膝あたりの内側には補強の布がぐるりとつけてある。ルーシーとミルドレーヌは涙をポロポロ流してまごまごした末、漸く囚衣を身につけ革サンダルを穿き終えた。順番に胸から上の写真を撮られ、髪を黒ネットに包み束ねる。長い髪は情容赦なく切られて仕舞うのだが、此の三人はその必要もない様だ。

「ここへおいで。まごまごおしでないよッ」

ジャンヌがきびしい声を張り上げてイヴェットに眼で指図した。みじめな囚衣をまとい終えた女達に此の重い手錠を更に嵌めて、ここがどこであるかを思い知らせてやろう、と云うのだ。台上に並ぶ重々しい手錠を見て、女囚達の顔が歪んだ。

（可哀想に。びっくりして、もうシュンとしてるわ。でも、仕方ないわね。此のひと達は

縛られるのが当たり前なんだもの）

打ちひしがれたドレーヌの顔を見やって、イヴェットは哀れに感じつつ手錠の一つを取り上げた。検事局へ送り迎えする時に使う連鎖手錠の手枷と同じ様なものだが、更に重くてごつい。其の手枷が二個、たまげる程の鉄鍔三個で繋がれ、消えなかった刻印は二十世紀の初め頃の製造年代を示して居る。

眼を伏せてそむけ、イヴェットの前へ差出すミルドレーヌの両手が震えて居た。馬蹄鍔を下からかぶせ、蓋を上から閉じると、錠に歯止めがギリギリと鳴って、黒い鉄枷の中に手首が捉えられた。受け終えたミルドレーヌが鼻をシュクツと吸り、両手首をのろのろと前に垂れた。そして、ずり落ちた鉄枷をおぞましげに指先でいじる。一瞬怨めしげにイヴェットを見た其の顔は、今にも泣き出しそうで、初めて受けた監獄の手錠の重さに打ちひしがれた姿だった。

「これは今だけよ。辛抱しなさい」

イヴェットは思わずそう云ってしまった。ジャンヌが書類を見ながら注意した。「もっと締めなきゃ駄目よ」

イヴェットは可哀想に思いつつ、ルーシーの手錠を更にギリギリと鳴らせた。マニキュ



アの残るルーシーの指先がわななき、悲しげな泣き声が一声洩れる。ふくよかに細い手首が、黒光りするごつい鉄鎖の中で痛々しく、折れてしまいそうだった。こんなことまでしなくとも、イヴェットは思ったが、慣例とあれば仕方ない。ツーロンやアンジェーでは、此の手錠を常時使用して居るのだ。

「おや、お前は矢張り仮出獄だったのね。二カ月足らずで出戻り？ 恥かしいと思わないの？」

書類から眼を上げたジャンヌが、三人目の女囚をきめつけた。

「そうよ。この方が居心地いいの。あと、二年ちよっと、お願いするわ。」

二八六号のクリスチーヌは両手を差し出しながら、強がって云った。

「あたし、二監舎に居たのよ。担当さん達は新しいの？ それとも、あたしの方がお引越しの？」

「お黙りッ」

イヴェットは声張り上げて叱ってやり、手錠の鉄蓋を思い切り締めつけてやった。

「いたいッ。痛いわよう。あーあ、これ、気が滅入っちゃう程に重いわねえ。サツの手錠なんか、これに較べりやオモチャみたい。」

しかめた顔でぶつぶつ云ったクリスチーヌは、上目遣いにイヴェットの若々しい顔を忌々しげに眺め、鉄枷の中で手首を動かして、一番楽な所に鉄鎖をずらせた。

「お前達、そうして頂くと自分が何なのか、段々に分って来るだろ？ さ、ついといで。ちゃんと並んで歩くんだよッ」

ジャンヌが如何にもさげすみ切った調子で嘸鳴りつける。今は流石にそんなことはやらないが、昔は此の上になお足鎖をつけ、更に鉄枷を首に嵌めて、獄内至る所へ挨拶回わりさせたものだ。

刑務課へ引き立てられて行く三人の女囚は申し合わせた様に両手を前に突き出して歩いた。両手を前に垂れると、手錠の重さ硬さが手首にこたえるのだ。マルチーヌ課長の前では、クリスチーヌも先ずは神妙だった。ジャンヌが差し出す書類にサインした課長は、前に立ちすくむ女囚達には眼もくれず、暫く爪の手入れを続けた。みじめさと恐怖に耐え切れないで、ルーシーが身悶えミルドレーヌが脚を踏み替える。途端、ジャンヌの手が二人の尻に小気味よく鳴った。

やおら顔を上げたマルチーヌ課長は、女囚達を一人宛見据えて行った。課長はなかなか

のお洒落女、わざとネックレスをつけない首筋から肩の付根までを広くあけて、大きな折返しの襟が柔かそうな其のドレスは、今年の初夏の最新モードだ。

「お前達は、どうしてここへ来ることになったのか分ってるわね？ 念のため、自分でお云い」

課長はデスクに肘をついて口を切り、立ちすくむ女囚の三人は、言葉も出ない風情で鼻を吸る。

「え？ 何故黙ってるの？ そっちの三一〇号、お前からよ。罪名と刑期を云うのッ」

両手の手錠を見詰めて打ちうなだれて居たルーシーが、ややあって自分の受刑者番号を思い出したのか、ビクリとわなないて声を詰まらせた。

「は、はい……。あの、車を……車を運転してて轢いてしまったんです。女の子を、過まって。死んでしまったんです……」

しどろもどろのルーシーに、課長が眉を上げてきびしく云う。

「ちゃんとした罪名を言い渡して頂いてるだろ？ 大学まで出てる癖に、そんな舌足らずの甘ちゃんいこと云うんじゃないのッ」  
「はい。あの、重過失致死罪。懲役二年……」



「罪名はまだある筈ね。自分の犯した罪を忘れるなんて呆れたもんだこと。まじめに刑を受ける気があるの？」

「はい……それから……贈賄未遂、道路交通法違反です。すみません、悪いことをしました」

「ここで謝まったって仕方ないわ。要するに轢き逃げね。男を横に乗せて、いい気持でドライブと洒落れてたって訳なのね」

ルーシーは唇を噛み、其の伏せた長いまつげの先に涙が光った。

「医師法違反、堕胎罪及び業務上重過失致死罪。懲役五年でございます」

三八五号のミルドレーヌは、割に落着いた声で静かにハッキリと云った。無許可で施術した人工中絶手術に失敗し、妊婦を殺してしまったのがバレた元女医だ。

「お次はあたしね。えーと、売春常習と詐欺と脅喝で懲役四年六カ月。仮出獄したんだけど、こないだ街に夜立ってたら、フン捕まってる、又ぞろ、ここへ連れて来られちゃったのよ。夜の街を散歩したら何故いけないのかしら。あたし、どうしてもそれが分らないの」

ジャンヌがスカートをさっと翻えして素早く近寄り、その頬を撲りつけた。

「ここを、どこだと思ってるの？そんな口の利き方の出来る所だと思ってるの」

「う、ヒーッ。す、すみません。あたし、口が軽いんだわ、ジャックもそう云ってたし。つい、ペラペラと云っちゃまうんです、すみません」

クリスチーヌは手錠をガチャつかせて両手を上げ、頬を押えてショげた。その鎖が掴まれて矢庭に押し下げられる。

「ちゃんと立ってられないの？」

手錠がガツと喰い込み、クリスチーヌは顔をしかめた。

「お前達、まあどうやら、自分の犯した罪は覚えてる様ね。まじめに刑に服しなさい」

そう云って、マルチーヌ課長は長いホルダーにシガレットを差し込む。

「あんまり楽しくはないだろうけど、まじめに勤めれば御慈悲もあるわ」

課長はライターを鳴らした。給仕の娘が茶碗とポットを運んで来てデスクに置く。十時半にはコーヒーを飲むのが此の婦人課長の習慣だ。番号を打たれた獄衣に手錠姿の女囚達を、可愛らしい小娘がじろじろと眺め、来た時と同じ様に遠回りして出て行く。ここでは珍らしい眺めではないだろうに、さも汚ら

わしい物をでも見る様に、おぞましげな振舞いだった。胸掻きむしられたルーシーが両手に顔を埋め、ジャンヌが舌打ちして、それを引きはがした。

「お前達、犯した罪を悔いてるの？どう？其の服を着て、其の手錠をかけて頂くと、気持ちが落ち着いて来ないこと？ほんとに罪を悔いて居るのなら、そうあるべきね。」

課長はコーヒーを啜りながらそう云い、ミルドレーヌが何か云いたそうに唇をわななかせたが、其の顔はすぐに力なく再びうなだれた。ゆっくりと、コーヒーを飲み終えた課長は、二杯目を注ぎながら切れ長の眼を光らせ「連れて行きなさい」と冷たく命じた。

「あ、そうそう、忘れちゃう所だったわ、二八六号には革鞭を半ダース程当てておやり。二カ月娑婆の風に吹かれて戻ると、もうタガがすっかりゆるんじゃってるわ。」

クリスチーヌが、忽ち哀れっぽい声をあげた。

「あッ、か、かんにん。お赦し下さいまし。革鞭だけは、もう……」

「ホ、ホ、ホ。お前、革鞭当てられたことあるの？ない筈よ。ま、娑婆で暮していいこと



もして、その二カ月も刑期に入れて頂ける埋合わせね。いくら泣いたって駄目よ。」

革鞭の懲罰は、刑務課長の承認を要する事項だ。懲戒指圖書にサインしてジャンヌに渡すマルチヌを、女囚クリスチヌは怨めしげに見て居た。

先刻の処理室に寄り、各自の労役衣や着替えの下着を床から拾い上げ、そして女囚達は地下への鉄格子の前で哀しげだった。労役衣を胸に抱き、ルーシーとミルドレーヌは其の前で立ちすくみ、追われ促がされた脚をもつらせて鉄格子戸を潜る。ジャンヌが先頭に立ち、従う女囚達は悄然と力もない足取り、最後尾から監視するイヴェットは其の気持を思いやって、せき立てるのが可哀想だった。背後で鉄格子が非情な音を裏ろかせて閉じ、錠が冷たく鳴り響き、ルーシーがよろめいて労役衣を取り落とす。

(可哀想。私と同一年ね、このひとの気持、分るわ)

振り返ったジャンヌがきびしい顔で舌打ちしたが、イヴェットは黙って立ち止まり、女囚ルーシーがままならぬ手で拾い上げるのを待ってやった。監舎への長い陰惨な地下通路を行くと、ルーシーが耐えかねた啜り泣きを

初め、ミルドレーヌも嗚咽を洩らし出す。

「鞭だけは、何とかかんにんして頂けないのかしら。ねえ、担当さん、お慈悲よ。」

クリスチヌも鼻を噉って哀願したが、所詮無駄なこと、マルチヌ刑務課長の命令は絶対だ。監舎入口の鉄格子戸を涙ながらに潜り入ったルーシーとミルドレーヌは、左手にずらりと並ぶ、監房群の鉄格子の冷たい光りに、膝も崩折れるばかりの様子を示した。これからの何年間かを、あの中で暮らすのだと胸に云い聞かせたのだろう、無理もない。連れ込まれた看守長室にはジョアンヌ女史の姿はなく、デスクの前の床には三米の腰連鎖が一本おいてあった。

「ずい分手間取ったじゃないの」

と、詰所のソファから声がかかる。

「ええ、生憎とマルチヌのコーヒー・タイムにかち合っちゃったの」

「そう。で、どんなのが来たの？」

「そんなこと、どうだっていいじゃないの。」

ね、ジャンヌ見た？ 総務課へ若いハンサムが来たって云う話よ。これから、皆で行こうって——」

「あら、あんたも欺まされたのね。お爺ちゃんもいい所だったわ。希望的観測は遂に空し

かったわね」

境いのドアは開け放したが、やりとりし乍ら誰一人として覗きにも来ない。

「並ぶのよ。面倒かけるんじゃないの。荷物を床におおき」

ルーシーとミルドレーヌは、うろろと戸惑いつつ、多勢の支配者達の制服を垣間見て身を硬張らせた。其の瞳には、諦めと観念の色が更に深まる。

「其の鎖を膝に挟んで。馬鹿だね、裾をからげてじかに挟むんだよッ。二八六号の通りにおやりッ」

鎖と手錠の音が溜息と共に物悲しく聞え、床に這う三米の鎖は三カ所を獄衣の裾の内部で持ち支えられる。

「そうして待ってるのよ。落したら承知しないからね。」

重い手錠の両手を前に、三名の女囚は肩を落してじっと立った。意地の悪いことを考え出すものだ。五分や十分は何ともなくても、二十分、半時間ともなれば、脂汗の噴く努力が要る。イヴェットは眉をひそめたが、新米の彼女が口出し出来ることではない。ジャンヌに促がされたイヴェットは、振り返りながら詰所に入った。開け放した扉越しに監視で



きるし、少しでも身動きすれば鎖の音が聞える」と云う訳だ。ルーシーは顔を閉じて頬を濡らし、ミルドレーヌは唇をそっと噛んで床を見詰め、そしてクリスチーヌは横眼で詰所の中を時々睨んで居た。

ジョアンヌ女史は案外早く戻って来て、イヴェットはホツとした。ジャンヌは面倒げに腰をあげる。

「両手を前で伸ばすのよッ」

席につくや、ジョアンヌ女史は開口一番そう呟鳴った。

(まあ、ほんとに苛めるのね)

イヴェットは又しても胸が痛んだが、これからの長い月日を維持し続けねばならない秩序を思えば、此の位のことは或いは止むを得ないかも知れない。ルーシーとミルドレーヌの二人も、命令には、絶対服従しかないことは、まだ誰にも云われては居ないが既に分つて居ることだ。三人の女囚は両腕を前にまっすぐ伸ばして水平に支えた。二本宛繋がれた六本の手の指が哀しげに悶える。看守長女史の云いたい放題の訓戒が長々と始まった。

「……公民権のないお前達受刑者は……」

看守長の訓戒には、此の枕言葉が絶えず出て、ルーシーとミルドレーヌは其の度に世に

も悲しげに肩震わせた。ルーシーの両腕がジリリと下がり、額に脂汗が光る。

「三一〇号ッ、腕が下がってるよ」

ジャンヌが呟鳴り、喘いだルーシーは必死の努力を両腕にこめた。曲げた肘が哀れにわななく。

「自由に出来ることは、これっぽっちも、ないんだと思つて間違いないよ。刑罰なんだから、辛らくて苦しいのは当り前さ、誰も恨むこともなよ。みんな自業自得、身から出た錆だね」

ルーシーの両腕が悶えてズルズルと垂れ落ちた。舌打ちしたジャンヌが、床を踏み鳴らし、ルーシーは哀願のまなざしで支配者を仰いだ。鋭く射すくめられた若い女囚は一声喘ぎ、死物狂いに肩をもたえる。命令にそむいたらどんな目に逢わねばならないか、今ジョアンヌ看守長からオーバー気味に説明描写されたばかりだ。

「か、かんにん、ゆるして……」

「駄目ッ。まだ御言葉は終わってないのよ」

ルーシーの小鼻が脂を浮べて切なくふくらみ、懸命に挟み支える膝の鎖が、獄衣の裾の中でチャラチャラ鳴った。漸く又も持ち上げた両肘は曲がり腰が折れて、声なき苦吟と共に

に上体がくねる。

「いいかえ、此の建物だって其の服だって国民の税金で、出来てるんだよ。鎖も手錠も鞭も、ただじゃないんだよッ。みんな、お前達が、公民権のないお前達が、罪の償いの出来る様にと、ただそれだけのために準備されてるんだからね。有難く思つてまじめに刑に服させて頂かなきゃ、バチが当ると思わないかい。公民権もないお前達のために、要る費用で、学校や養老院がいくつ出来ると思つてるの？ 私達だって、お前達の御蔭で朝から晩まで苦勞させられてるし……」

詰所の方で笑い声が起った。三人の女囚の中で、誰が一番先にへばるか、そして、鎖を落すのが先か、両腕を支え切れなくなるのが先きかを賭け興じて居たらしい。

「いただき!! 当分、コーヒー代が浮くわ」

「三一〇号の腕」と当てたベルディーヌが嬉しげに笑った。

「大体、ああ云う育ちとタイプの娘はね、脚より腕の方が弱いものなのよ。でも、おかしいはね、あのジャンヌが……」

と、ベルディーヌが覗きに来。答かビンタの音がしないので不審なのだ。

「あら、肘をあんなに曲げちゃってるじゃな



いの、あの娘、今日は一体どうなってるの、ジャンヌ？やけに又、寛大ね。」

苦笑いして肩すくめたジャンヌが、ルーシーの前へ寄り、軽くビンタの一発を喰わせ、手錠を掴んで肘を伸ばさせた。その隙を盗んだクリスチーヌが、肘を曲げ腕を少し下げて一息入れる。イヴェットが監視して居ると云うのに、新米と判断したのか、ナメた振舞いだ。それに、苦痛を耐えて身じろぎもしないミルドレーヌの表情に較べると、クリスチーヌは極限までの努力を払ったとは思えない。「これッ。何をするの？ちゃんとおしッ」

そのズルさを怒って頬染めたイヴェットは鋭く唳鳴りつけ、気に喰わない表情の頬をしたたかに撲りつけてしまった。

「あら、イヴェットの方がやるじゃないの。此のひと、なかなかどうして、今に大物になるわ」

新入り女囚達の品定めをついでに終えたベルディーヌが笑って云い、ソファに戻る。

「大物って、こうなっちゃうこと？」

ベルディーヌを迎えながら、手真似で肥えた体つきを示した詰所のひとりが、片眼をつぶってまぜかえした。ジョアンヌ女史が肥えた体で、椅子を軋ませ、太い声でなおも続ける。

る。

「私達だって、必要以上にお前達を苦しめたくはないんだよ。けど、ちゃんとケジメだけはつけないと、善良な社会の人達に相済まないからね。まじめに罪に服する気持のない者は容赦しないよッ。まじめに勤めりや、いろいろと御慈悲もないことはないが、そうでないとひどいよ。いいかい。打たれた刑期だけ勤めりやいいんだなんて了見だと泡喰わせてやるからね。お前達の出方によっちゃ、いくらでも刑期を延ばせるんだよ。公民権がないと云うことは、裁判を起すことも出来ないんだからね。」

ジョアンヌ女史は、一寸おかしなことを云い、減多には適用されない例外規程を振り回して脅かす。

「お前達は、どう思っているか知らないけれど、ここはお前達みたいな罪人にとっちゃ天国なんだよ。なんなら、いつでもツーロンあたりへ送って、ほんとの監獄でものが、どんなものか教えてやるよ。」

突然、ミルドレーヌが崩折れ

「も、もう……とても、もう……。おゆるし下さいまし」

と身を揉んだ。

「もう少しだと思っわ。我慢しなさい。さ、立って」

ミルドレーヌの態度に心打たれて居たイヴェットは、其の腕を抱えて扶け起し、落ちた鎖を膝に挟んでやったのだった。そんなイヴェットを看守長女史がジロリと見やる。

「……以上が、公民権のないお前達の守るべき規則だよ。細かいことは其の都度習うといいよ。一度で覚える様に、教えて頂ける筈だよ。分ったかいッ」

看守長女史が、途方もない大声を張り上げた。

「はい。よく分りましたわ。ありがとうございます。良かったです。」

出戻り女囚二八六号がホッとした様に云い他の二人も口々にそれにならった。もう、一刻でも早く、此の苦しみから逃れたいのだ。「よろしい。では、もう十分間、そうしてなさい。いろいろと考えて整理することがあるだろ」

ルーシーが笛の様な声で呻き、ミルドレーヌが齒を喰い縛って喘いだ。要領のいいクリスチーヌは、ここぞとばかり、両腕を伸ばして姿勢を正す。三人の女囚達の心身をいたぶった看守長女史は



「じゃ、頼んだよ。あんた達いつまでも油売ってないで、フォンティーヌと代わっておやり。お帳面つけなきゃならないの」

と詰所の二、三人に声をかけ、又ぞろぞろ出て行く。

「いい御身分ね。油売ってるの、自分じゃないの」

「フォンティーヌが、しっかりしてるからいいのよね。私達はこんなだし、看守長があれじゃ、ね」

「分ってりやいいの、さっさとフォンティーヌを呼んどいでよ。」

「ギョ、私が行くの？非番明けて、まだエンジンがかかってないのよ、私」

ベルディーヌが、こぼしながら腰を上げ「ジャンヌ。いい加減でケリをおつけよ」と詰所を出る。

「あんた、商売道具を忘れてるわ」

注意されたベルディーヌは、面倒そうに革ベルトを腰に締めた。

「でも、女史、新しいセリフを覚えたじゃない？」

「そうね。緑滴たるコンピエーヌの森で、汚れた心身を洗い清めなさい」か。フ、フ、フ、」

詰所の笑い声をよそに、三人の女囚達は声もなく呻いて居た。ジャンヌは早めに切り上げてやった。

「看守長はああおっしゃったけど、特別のお慈悲で赦したげる。もういいわ、腕をおろしなさい。私が叱られるかも知れないけど」

ルーシーとミルドレーヌは、感謝の色を浮べた。流石にジャンヌは老練なものだ。看守

長女史が引っぱればそれを受けて、そっと撫でる真似をしてやる。石の様になった両手に衣類を拾い上げた女囚達は、硬張り痺れた両腕をもつらせた。

物入れが定められ、食器とタオルを与えられ、労役衣と着替え下着を納める、重い手錠の喰い込む棒の様な両手で、丁寧にキチンと規則通りに畳むのだ。

「手錠、はずして頂けませんの？」

ミルドレーヌが涙声で呟やき、床にひわげた囚衣にうずくまる。イヴェットは黙ったまままで見下ろし、ミルドレーヌは、眼頭を押えた。

「これが懲役と云うものですね」

ミルドレーヌの三八五号は、両腕を切なげにノロノロと動かし、ままたらぬ両手をもどかしそうにガチャつかせた。ルーシーもジャ

ンヌに叱り飛ばされてオロオロし、救いを求める様なまなざしをオドオドと投げながら、涙をポロポロこぼして居た。初めてのの上に、気も打ちひしがれて動揺して居るのだから、少しはやさしく教えてやればいいのに。クリスチーヌは、勝手知ったる、と云った様子で小憎らしい。

第十一監房の鉄格子の前で、重い手錠が漸く外された。覚悟を決めた足取りで房内に入って行った、ルーシーとミルドレーヌだったが、鉄格子戸を閉めるイヴェットを、それでも恨めしげに仰ぎつつ、両の手首を撫でさすっていた。

鉄格子と鎖、錠と鍵の此の世界に隔絶されて、今日の此の時から彼女達には自由のかけらもないのだ。世にも哀しげな其のまなざしに、イヴェットは思わず眼をそらせ、仮錠の音を出るだけ静かに鳴らせたのだった。「初めてのを連れて来てブチ込むのは、何度やってもいい気持のものじゃないわね。今日の『直入』の二人みたいなのは特にそうね」

ジャンヌが云う。

「そうですね。あばずれだと気が楽なんですよ」

イヴェットは答えながら、重い手錠の三対



を戒具棚へ戻した。

「そうよ。でも、今日の二人なんかでもさ、しおらしくはしているけど、犯した罪には同情の余地なしだわ。中には、ほんと可哀想になっちまうのが居るわよ。あら、やっぱり泣き出した様ね。」

あとにして去った第十一房から、啜り泣きの声が洩れて来た。

「叱りに行かなくてもいいわ、イヴェット。あの位なら大目に見てやりましょうよ、最初だものね」

時々見せるやさしさを示してジャンヌが云った。或いは、最初は、そっとしておいた方がいいと云うことを見越した老練さかも知れない。

引き続いてイヴェットは、病監からの引き取りを、今度は独りでやらされた。病監は三階にあって、出獄を控えた女囚のための個室群の並びにある。白い扉を入ると、治療室に薬の匂いが漂よい、其のずっと奥に、鉄格子が見えた。病人とは云え受刑囚の身は、鉄格子と錠を免れることはないのだ。窓にも勿論鉄格子が冷たく光り、十数台のベッドが並べられ、五、六名の女が寝た顔で横たわって居た。第三監舎からは、在病監者の居ないの

が、ジョアンヌ女史の自慢の一つだ。若い看護婦とチェスをして居た年配の婦人看守が錠を掴んで立ち上がり、鉄格子戸を開けてくれた。女囚一七〇号は小柄な金髪女、年の頃は卅に手が届くところか。鉄格子戸の音に碧い眼をあけてイヴェットを認めると、覚悟して居た様に身を起して髪を掻き上げた。既に、病衣を房内衣に着替えて居る。

「一七〇号。今日から監舎に戻るのよ。今度は第三監舎。分ったね？」

銀髪の混じる婦人看守がそう云い、鍵束を指先で探りつつ毛布の裾をはねのけた。女囚の右足首には足錠が銀色に光ってガッチリ嵌められ、短い鎖でベッドの鉄脚に繋がれて居る。規則とは云えむごいものだ、数年前、手当に来た看護婦を人質にして、脱走を企んだ女囚があって、それ以来、此の処置が取られて居る。足錠を解かれた女囚は静かにベッドを降り、寝台の下から革サンダルを取り出して穿き、イヴェットの前にそっと立ってうなだれた。

「お願いします」

と神妙に呟いた女囚は、腰のホルダーに手をやるイヴェットを見て、両手を極めて自然に揃える。近くのベッドで女囚の一人が力な

く咳込み、イヴェットは、小柄な一七〇号の細い両手首に、手錠の鋼鉄をゆるくからませた。

「いろいろと御世話になりました。ありがとうございました。」

鉄格子戸を出た一七〇号は、書類にサインするイヴェットの横に、丁寧に礼を述べて居た。

「元気だね。悲しいだろうけど、辛抱するのよ」

手配の担当看守は女囚の細い肩を抱く様にして送り出した。マルチーヌ課長は黙って手早くサインを済ませた。回わされて来る労役衣等処理室で待つ間、イヴェットは一七〇号の書類に眼を通した。マルチーヌですら、一言のきついことも云わなかったのも道理だった。

「あなた、赤ちゃんを産んだのね」

イヴェットは、地下道をとぼとぼと歩む一七〇号の後ろから声をかけた。

「は、はい……でも昨日、連れて行かれましたの」

声震わせた女囚は抱えた労役衣に顔を埋めて咽んだ。女囚一七〇号はシモーヌ・ベルモンド、殺人罪で八年の刑。子供を二人も持つ



てなお素行おさまらぬ夫の情婦を、口論の果ての逆上から射殺してしまった中流家庭の主婦だ。同情はされたが、拳銃を用意して居たため刑は重かった。そして、去年の夏の盛りに逮捕された時、既に身ごもって居た赤ん坊を、此の刑務所の中で産んだのだった。悄然と歩む其の後ろ姿には、冷酷な規則によって奪い去られて行った我が子を想う悲しみが切々と滲み出て居た。規則によって許された四週間の愛児との添寝の日夜は、此の女囚の身には天国の様に思えたことだったろう。今後まだ、少くとも三年の月日が経たねば、仮出獄すら彼女には許されないのだ。イヴェットは、瞼の熱くなるのを感じて、思わず呟いた。

「お気の毒ね。」

女囚は鼻を嚙り上り上げた。

「……でも、私、人を殺したんですもの、こうして刑を受けるのが当り前でございます。あの娘さんには、ほんとに済まないことをしたと思ってますの。ただ、あの子のことだけが心配で……可愛がってくれると思って居るんですけれど……」

姉夫婦や妹達の手に引き取られて行った愛児達の身を、ひたすらに案じて身を揉む姿が

哀れだった。規則によれば、満一才未満の赤ん坊は、面会に特別の許可が要って先ず難しい。身を切られる思いで其の一年間を待ち侘びた後、一カ月に一度許される面会日に連れ来て貰えるか、どうかも分らない愛児の姿をひたすらに待ち焦がれつつ、此の女囚は鉄格子の中の一日一日を過ごして行かねばならないのだ。想い叶って眺め入る愛児の顔も金網越し、其の鉄網に、隔てられて手錠の身には、抱くことはおろか、指一本すら触れることも出来ないだろう。

「もう一目だけ……一目だけでいいから逢いとうござい……ます」

昨日訣れたばかりの、みどり児の寝顔を想い浮べたのだらう、女囚は喘ぐ様に呟いて胸のふくらみを抑える。抱えた獄衣の下で手錠が音を立てた。

「こんな……こんな所で産んでしまうなんて、ほんとに、済まなかったわね。悪いママだと、許しておくれ。恨まないでくれよね」

涙ながらに名付けたに違いない名、その愛児の名前を繰返し呼んで、女囚はおろおろと泣きながら、腕に抱える獄衣の一束を胸にしつかと抱き締める。柔かなみどり児の体を掻き抱いてでも居るかの様だった。

「当分の間舎外労役には出なくていいのよ」  
イヴェットは第十一号監房の前、看守長女史の意向を嬉しく告げてやった。

「戸外運動はさせて上げるわ」

「ありがとうございます」

女囚シモーヌも嬉しげに礼を云い、指先に黒ネットを持ったまま、手錠を外し易い様に動かしした。

「あの、身体検査はいいんですの？」  
と小声で訊ね、濡れた瞳をおずおずと上げる。

「あら先刻済んだじゃないの、忘れたの？」

イヴェットは片眼をつぶり、女囚一七〇号は会釈して監房内へ入って行った。

第二監舎から催促の電話を受けてジョアンヌ女史が舌打ちした。

「早く引き取りに來いってさ。二人共、成績は余りよくないね。特に若い方は、箸にも棒にもかからない女らしいよ。じゃ、ついでに頼むわ」

看守長の言葉に、ズルけるつもりらしかったジャンヌも渋々立ち上った。移監される三五五号と一四四七号の二人は、第二監舎の広間に立たされて待つて居た。近寄るジャンヌとイヴェットを見るや、パイと、顔をそむけ



る。受刑者番号の下の整理番号布は既に除かれて居た。たちの良くない女囚達であることは新米のイヴェットにも、一目で分る、それでも、三十過ぎの金髪の方は、イヴェットに向い両手を出した。

「あんた、新米らしいわね。あたし、三監に居たことあるのよ。ジャンヌ様、またお世話になりますわ、お手柔らかにね。手錠かけるんだろ？片手でいいの？矢張り両手かい。あんた、バッジが曲ってるわよ」

三五五号は、イヴェットの手錠を受けながら、顔をしかめて忌々しげだった。

「お黙りッ。余計な口を利くんじゃないの」「はい、はい、でもねえ、あんたみたいな可愛らしい娘にワッパかまされると、ほんと情けなくなっちゃう。殿方に縛られるんなら嬉しいんだけどねえ」

かけられた手錠の鎖を二、三度引張って見た三五五号は、憎まれ口を叩きながらも、されるままになって居たが、一四七号の方は不貞くされて手を出そうともせず、両腕を背に向わしたままだ。

「外へ出してくれる訳じゃないんだろ？手錠かけなくたって、いいじゃないの。」

「規則よ。詰まらない駄々をこねるんじゃないな

いのッ」

ジャンヌは手錠をカチャンと捌いてきめつける。未だ二十才をいくらか越して居ない一四七号は、今日の移監が、気に喰わないらしい。或いは生理日なのかも知れなかった。

「何かと云えば、すぐ手錠なんだもの、こっちの身にもなって見てよ。其の鎖の短い手錠がキラキラするのを見ると、いらいらして来るわ。あたし、十六の時から御厄介になってもう飽き飽きしてんの、其の腕環には」

立ち会う二監の婦人看守がきびしい顔で近寄り、いきなり往復ビンタを喰わせた。

「ヒーッ、ウ、ウッ、ち、ちくしよう。あ、あんたにも色々可愛がって貰ったわね。忘れないよ」

憎しみをこめて思い切り振り終えた婦人看守は、両手の指を伸ばせつつジャンヌに云った。

「こいつと来たらね、若い癖にもう始末におえないの。革鞭一ダース喰っても、翌る日にはケロリとしているし、一度や二度の禁食なんかテンでピンシャンしてるし」

窃盗で三年の一四七号はモニカ、十六の時から感化院の御厄介にもなった札つきの女囚で、一監から二監、そして三監へとたらい回

わしだ。

「こんどは、ツーロンかアフリカあたりの刑務所へ送っちゃった方がいいのよ。さ、縛に就いたらどう？」

一四七号は未だふてくされて、カモシカを思わせる四肢や体をくねらせ、白い眼を剥いて居る。大抵の女囚なら、ものの三十分で息も絶え絶えになる窄衣も、此の一四七号は制限時間の二時間位なら平気だと云うことだ。

「出さないんなら、出さないでいいのよ」

ジャンヌはそう云い、矢庭に女囚の肩を掴んで振り回わした。モニカはよろめいて背を向けながら、流石に反抗しない。手首の急所を掴まれて口惜しげな悲鳴が洩れ、ねじ上げられた左手首に手錠が叩き込まれた。

「こいつにはね、斜め手錠が案外利き目あるのよ」

「あら、そう。腕は長いのにね」

そのまま後手錠をかけようとして居たのを止めたジャンヌが掴んだ右手首を上から回わし、肩越しに背へ引き寄せる。

「あ、あッ。かんにんようッ」

呻いたモニカは打って変わって哀願の声をあげたが、上下から力任せに引き寄せられた両首は、鋼鉄鎖に忽ち捉えられてしまった。



馴れた手つきのジャンヌは、他監舎の同僚の前だけに、一きわ手際のいい所を見せた。そして、取り出した革ロープを手錠の鎖にかちりとつけ、軽く、二、三度引っ張る。若い女囚の唇が喘ぎ、苦痛の呻きが低く洩れた。

「馬鹿な娘だこと。痛い目に逢うだけじゃないの。お役人様に敵いっこないじゃないか」  
 呟いた三五五号が手錠をガチャつかせながら、ままたらぬ手に一四七号の衣類をも拾い上げて抱いた。

「御苦労様」  
 と送り出された地下道路で、一四七号が又しても喚いた。苦痛もさることながら、口惜しさもあるらしい。

「ガタガタしてないで、サッサとお歩きッ。どうして手間ばかりかけちゃうの？」

悶え立ち止まって喘ぐ女囚の背を、ジャンヌがしたたかに突き飛ばした。そして、今度は革ロープを手許へグイと引き絞る。前方へよろめいた女囚の腕が背でしない、苦痛の絶叫がコンクリートの灰色に飢した。

「どう？少しはこたえ？ こたえないなら何度でもやったげるわ」

「……か、かんにん……して……。苦しい、痛いわ。肩がもげ……。と、といてよう。もう、か

んにん……」

呻く一四七号の額には脂汗が光って居た。

「痛けりや、おとなしく行くのッ。向うへ着いて、ちゃんと謝まったら外したげる」

「……いま……今、あやまるわ。だから、もう外して下さいまし」

「ホ、ホ、ホ、ホ。案外だらしないのねえ、お前も。もっと性根が、据わってると思ったわ。ここでいくら泣いても駄目。お立ちッ」

とうとう跪まずいてしまった女囚の腰を蹴り飛ばして、ジャンヌが革ロープをしゃくり上げる。必死に立ち上った女囚は又も背を突き飛ばされ、長く延ばされた革ロープがピンと張るまでたたらを踏んで、軽く引き戻された革ロープの先で身をよじり、凄まじい悲鳴で喚いた。

地下広間を掠めて曲がり、三監舎への通路へ入る時、三五五号は悲しげな眼で階段の鉄格子を見上げた。コンクリートと鉄格子とで息も詰まる監舎の中に四、五日も過すと、たとえ労役は辛らくてもいいから、腰に鎖をまとってでもいいから、戸外に出して欲しくなるのだ。

「担当さん。三監の戸外労役、次はいつですの？」

「昨日やったばかりよ」

イヴェットの答を聞いて、三五五号は切なげに頭を振った。

戻った三監の広間の床に跪まずき、一四七号は、詫びを云わせられ、服従を誓わせられた。もがいたので頭のネットが脱げかけ、燃える様な赤毛が乱れて、額の脂汗にまつわりついて居た。

「ふん。そんなんじゃ駄目。もう一度。」

ジャンヌは、少しでも口惜しげな響きを女囚の声に、認めると何度も、云い直しをさせた。

「まだ、眼つきが気に入らないね。捕縄かけて吊ってやろうかしら」

と、斜めに突き上げたままの右肘を乱暴にゆすぶる。

「ふん。やっとなあ、何とかまじめな声を出せたわね。」

ジャンヌは女囚を見下ろして嘲笑した。

「一四七号ッ」

「は、はい……」

「お前、一体私達に勝てるつもりで居るの」  
 若い女囚の唇が又しても口惜しげに歪む。

「言い分や思っていることが通る所だとは、まさか考えてやしないだろ？そりゃまあ、好き



好きだから、思ったことを云ったりしたりしてもいいよ。けど代金は払って貰うからね、体でね。顔が歪がむほど高いわよ。どう？何よ、その眼つきは!!」

不幸な境遇に、すさみ切り、薄情な世間にひがみ果てた、此の娘の瞳に、一瞬怒りの色が浮んだが、その眼は忽ち伏せられて、まっげが震えた。如何に強がって見た所で所詮勝てる筈もないことは、此の娘にも身に泌みて分って居る。

「神妙にしなきゃ、苦しい目に逢って自分が損するだけよ。私達だって、心にもないことをしなきゃならなくなるし。お前、大抵の懲罰は全部もう受けてしまってるじゃないの。ここへ移して頂いたのを機会に、心を入れ替えて、まじめに勤める気になれないこと?」

「は、はい。よく分りましたわ。まじめに致します。おとなしくするわ。お、お赦し下さいまし」

苦しい手錠を、解いて欲しい一心からだろ、女囚は喘ぎつつも神妙にうなずき、涙を浮べて哀願した。

「そう。じゃ外したげる。後ろ向いて、今度戒具を忌避したりしたら、ひどいわよ」

鍵を取り出すジャンヌの足許で、女囚はい

そいそと膝をにじった。解いてやりながら、ジャンヌは冷たい苦笑を頬に浮べる。此の若い女囚の言葉を信じて居る表情でないのは勿論だった。其の二名を叩き込むと、第十一監房は六名の定員になった。

「ねえ、ジャンヌ。丁度三人々々ですわね。悪い三人も感化されて良くなりますかしら」

「さあねえ、ま、其の逆が順当な所ね。思惑外れの三フラン安か。フ、フ、フ」

ジャンヌは株をやってシコタマ貯めて居ると云う評判だ。

すぐに昼食時間となり、二階の労役場から女囚の群が降りて来た。広間に整列した女囚達に、新人りの六名が引き合わされる。品定めする女囚群の視線はとげとげしく、殆んどまともには見ない。娑婆の匂いを未だ強く体に残したルーシーとミルドレーヌには、特に憎しみの色が集まった。

(化粧の跡だけでも、洗わせときやよかったわ)

イヴェットは思いつつ、ふてくされて天井を仰ぐ女囚の頬を摸りつけた。拘置所からの書類を其のまま受理して、新入所者の三名には健康診断を省いたし、ついでにシャワーも省略したのだ。ジャンヌに云わせれば、何し

る今日は、忙がしかったものね、と云うだろう。

ルーシーとミルドレーヌは体を硬張らせて肩を縮めて居たし、シモーヌもじっと眼を伏せて居た。出戻りのクリスチーヌは平気な顔を上げて多勢を見返し、一四七号のモニカは挑戦する様な、眼をキラキラさせて睨み回す。三五五号のエドウィージェは、あちこちに顔見知りを認めてウインクして居た。

仮釈放を取消されて出戻って来た女囚には再収監の際に何等かのヤキが入られるのが慣わしだ。折角お慈悲をかけてやったのに、顔をつぶされたと言ふ訳だ。クリスチーヌは手初めとして禁食を言い渡された。広間に独り立たされたクリスチーヌは情けなさそうな顔を精一杯にふてくされ、それでも、くわえさせれた革サンダルは口から落とさないで、食卓の女囚達の正面で睨んで居た。ルーシーとミルドレーヌは、二口、三口で鼻を吸り、顔を掩い、そして、突伏した食卓の鉄の冷たさに、肩震わせた。当番囚達の跡片付けも終り、新人り六名も、それぞれの整理番号を囚衣に縫いつけた。

「みんな、お聞き。これから二八六号に革鞭を当てます。反抗的態度をした罰です」



恐怖の色を浮べたクリスチーナは広間の中央に引き摺り出された。ざわめいた女囚の群が三方を囲んで立ち並ぶ。ツーロンやアンジェーやアフリカの刑務所ならいざ知らず、ここでは革鞭の懲罰は滅多にない。

「いくつやられるって云ったっけ？」

「半ダースだってさ」

女囚の群は囁き合う。

「マルチーナに口答えしたんだって」

「馬鹿ねえ。少し足りないんじゃない？」

「どう？ 賭けしないこと？ あたし、気絶すると思うわ」

「あたしはしないと思うな。でもさ、一体何を賭けるのよ？」

「いいと云うまでオッパイしゃぶったげる。」

見付かったら、無理にやったと云うのよ」

「あーら、いい線ねえ。ぞくぞくして来ちゃった。ふ、ふ、ふ。」

「シーツ。ベルディーヌの奴が見てるよ」

「いけすかない奴。けど、嵌口具は切ないからねえ。」

女囚達は、自分が、喰う懲罰でない気易さに、眼を盗んで囁き合いながら、好奇の眼を光らせた。壁に吊った数本の革鞭。その一本を選び取ったジャンヌ婦人看守が、クリスチ

ーナの眼前で、ゆるく振りながら顎をしゃく。本来ならば、第八、九、十監房担当の主任看守が収監をも担当すべきなのだが、其のマジョーリ婦人看守が非番だ。

「どうしても打つのね。」

呟いたクリスチーナがわななきを懸命に抑えて虚勢を示しつつ、のろのろと囚衣を脱いだ。胸や腿になお薄く残るキスマーク。眼ざとく見つけて女囚の群が生唾をのみ、怒りと嫉妬の色を漲らせた。イヴェットはキャスリーヌを手伝って、クリスチーナの白い肩に木の棒を背負わせた。昔、水汲みに使った天秤棒の様に、首の後ろに当てがう部分をくり取った檜の平たい棒だ。長く重い棒が軋の様にクリスチーナの肩やうなじに載せられ、白く柔かい肉にめり込む。

「腕を伸ばすのよッ」

キャスリーヌが嗷鳴り、女囚はされるままになりながらあたりを心細げに見回わした。棒には、位置の調節の利く革バンドと尾錠が要所要所に沢山ついて居て、中央を女囚の首に固定し、左右水平に棒の下で延ばした両腕の肘と手首をも固縛するのだ。棒の両端は指先より更に三十センチは、左右に伸びて、握り易い様になって居る。重い檜の棒の軋を肩

に、クリスチーナは打ちひしがれた様子で、命じられるままに脚を折って床に坐った。其の両側で棒の両端を握って抑えるイヴェットとキャスリーヌの掌に、恐怖のわななきが伝わる。

「か、かんにんして…お願い」

クリスチーナはむき出しの白い背を斜め前に倒し、背後に回わるジャンヌを感じて身動きならぬ身を悶え、未練な最後の哀願を洩らした。

「しっかりおしよ。なにも、死刑を受ける訳じゃないの。さ、いい？」

ジャンヌの振り下ろす革鞭がヒューッと鳴って、先ずは床をバシッと叩く。

「ヒーツ」

音と共に女囚の腰が僅かに浮いて、全身が必死によじれもがく。眺める女囚群から笑いが洩れ、クリスチーナの血走った眼が口惜しげにそれを睨み上げた。

「さあ、今度は本番よ。みっともないことになったら、舐めて綺麗にさせるからねッ」

長々と背に吸いついた革鞭の音に絶叫が洩れ、激しく動こうとする棒の一端を、イヴェットは力をこめて押えつけた。脂の乗った白い背に走った斜めの赤い条痕、それが見る見



るみみずばれに盛り上って来る様で、イヴェッとは思わず眼をそむけた。棒の反対側で、キヤスリーヌが押えながら棒を回す。一鞭当てる毎に九十度回わして、周囲の女囚達に鞭痕や顔つきをよく見せつけてやるのだ。職務とは云え、キヤスリーヌは平然としたもので、眉一つ動かさない態度、容赦なく棒を回わして被懲罰女囚の体を床にねじ動かせる。

一鞭毎にクリスチーヌは喚きを絞り上げ、キヤスリーヌの靴先で蹴られ小突かれ、絶え入る様な悲鳴の糸を曳きながら膝をにじって体の向きを変え、重い鞭の棒にガッシリ押さえられたまま、免れる術のない次の一撃をわなないて哀れに待つのだった。

(残酷な懲罰だわ。廃止しなきゃ文明国の恥ね)

耳掩いたくなる悲鳴と呻きに胸痛むイヴェットは、それでも棒はしっかりと押えつつ思った。

大体の話が、此の国の行刑の実態は文明国の中では最も苛酷な部類に属する。肉食族の直系子孫たる国民性のせいだろう。鞭打刑廃止の声は高いが、保守的な行刑当局は其の実施に手続き上だけの制限を付して存続させて居るのだ。何しろ、革鞭で打ちのめすのが最

も簡便で、効果的な方法なのだから無理もない。そうは云っても、革鞭を当てる箇所にも制限はあって、顔面は勿論のこと、胸や腹は禁じられて居る。しかし、経験豊かに意地悪くすれっからの刑執行者達は、其の制限範囲内で、最大の苦痛を与える術を知って居るし、第一、鞭を振るう力を加減するのは彼等の思うままなのだ。

ジャンヌ婦人看守は容赦ない鞭の痛撃を女囚クリスチーヌの素肌に加えた。一鞭毎に、必ず其の前に床を激しく叩く。時には、一度ならず二度三度と、女囚の肌すれすれの空を鋭く切って、哀れな被懲罰囚を恐怖で震え上らせた。

鞭と革具でガッキと固縛された首や肩を必死に悶え、女囚は背後の鞭を辛ううじて盗み見て、恐怖と怨嗟の眼を見開いたまま喘ぐ。交叉して背に二条、次は上体を更に低く押さえ倒して両尻に各一撃。ルーシーとミルドレーヌは顔面蒼白になって、今にも失神せんばかりの様子だ。

「ようく見ておくのね。ここが刑務所だ。ことがよく分るだろう。何故横を見るの？」  
近寄ったベルディーヌ看守がルーシーのブルネットをネットごと掴んでゆすり、ミル

ドレーヌの尻をバシッと平手で撲りつけた。

棒の両端を支えられて、クリスチーヌは、よろよると立ち上がる。首に締めなれた革具が、ギシギシ軋めば、嫌でも立つはかないのだ。今度は腿の前側。がっくりと鞭に体重をかけたクリスチーヌは、それでも必死に脚を合わせた。

「少し開くのよッ。云う通りにしないと、おまけがつくわ」

ジャンヌは鞭を片手に靴先が女囚の膝をこじる。よじりわななく両脚が少しひろげられ片方の腿の前側な程に革鞭が炸裂した。先端は勿論向う側の腿にも、まつわって吸い着く。魂切る悲鳴と共に腿がよじれ、涎れが滴たり、全体重が再び棒にかかった。反対側からも、もう一方の腿の前側に一撃。クリスチーヌが絶叫を振り絞って崩折れる。

「本式の革鞭って矢張り凄いわねえ。けど、あんなに痛いものかしら？」

「お前さんは未だ知らないからよ。想像以上だわ」

其の味を肌知る女囚が呟いて唇をわななかせた。哀れなクリスチーヌの姿を嘲けりの色さえ見せて眺めるのは、未だその苦痛の程を知らない連中だ。空を截る革鞭の下に素肌



を曝したところのある女囚達は、鞭音の度に恐怖の色を全身に走らせ、最後の一撃と共にホッと表情をゆるめた。

「でも、なんと意地の悪いこと。前と後ろと側を、打つんだものねえ、暫くは堪まらないよ」

女囚の一人が呟き、革鞭を点検するジャンヌを白い眼で見やった。当分は尻が疼いて腰かける度に呻かねばならないし、仰臥すれば背が、俯臥すれば腿の前側が痛む。腿の両外側にも回った鞭痕に、側臥も辛いことだろう。何しろベッドは固い鉄製で、麦藁マットにじかに寝るのだ。大抵はそのまま平常通りの労役を課されるのだから、昼は昼で、激しく摺れる囚衣の硬さに呻かねばならない。暑い時には、流れる汗に泣きたい程でもある。

肩の棒を除かれたクリスチヌの肘、手首には、革バンドの金具が喰込んだ痕も深かった。革鞭と窄衣と一週間以上の重屏禁とは、

原則として刑務課長の承認が要る。そして、それらの懲罰の後では医師が一応診察する規定で、這って行ける限り大抵は、真冬でも素裸のまま医務室へ追われるのが普通だ。しかし、今日はどう云う風の吹き回しなのか、

診察者が内規通り、足を運んでやって来て居て、看守詰所の窓越しに眺めて待つて居た。

その代り、医師の姿はなくて若い看護婦一人だけだ。常勤の医師は高慢ちきな女医師、それに開業医の男が一日おき位に顔を出す。そして、歯科医が一週間に一回は来ることになっては居た。

若い男の医師が現われる僥倖を希って居た女囚達は失望の舌打ちをして、看護婦の白衣姿から、プイとそっぽを向く。クリスチヌは、床にしがみついて呻きもがき、若い看護婦は白衣を気にしつつ中腰に屈み込んで其の体を調べた。赤いマニキュアをした指で鞭痕に薬を塗る。凄まじい鞭痕にも平然とした看護婦は、女囚の体に指先が触れると、描いた半月形の眉を大仰にひそめた。何か汚らわしい物に触わりでもするかのような態度だ。泌みる薬液の灼痛に喚いた女囚の腕が悶え動き、白衣の裾に触れた。途端、飛び退いた看護婦が手で払う。

「手錠かけといてよ」

看護婦が呟いて不平らしかったが、婦人看守達は面倒臭いのか黙って眺めて居た。

「ちきしょう!!あの阿魔ツ子の奴」

若い看護婦の仕草に、女囚の群の眼が白く

光り、憤怒の呟きが洩れた。

「さあ、今度は仰向くのよ。何さ、ぶたれた油虫みたいにしてて」

看護婦は、床に手足を縮めるクリスチヌの体を靴先で突つく。さげすみ切った其の仕打ちを見て、年増の女囚が歯ざしりして呻いた。

「なんてことを!!同じ人間じゃないの」

女囚同士の間ではなんだかんだと云って居るものの、囚人以外の人間に対しては忽ち団結して歯を剥くのが人情だ。その無念の呟きが運悪くベルディヌに聞きつけられた。

「お黙リッ。食卓を離れたら交話禁止だよ」

「だって担当さん。あの看護婦はひどいですわ。あれじゃ、あんまりだと思いませんか?」

近寄ったベルディヌに歯がみして訴える年増女囚は三六三号のマーサ、脅喝罪で二年の米国の女性。此の国の男性と結婚して、其の夫の共犯だ。

「お黙りと云ってるのッ」

ベルディヌのビンタが三、四発小気味より鳴り、無念の形相を更に増したマーサが、よろめく脚を踏張って呻いた。背に握った両拳がわななき、爪が掌に喰い込む。

「お前はいつまで経っても性根が直らないん



だね。お前が生まれた国の刑務所じゃ、どうだか知らないけど、此の国ではね、ビンタ位で齒ざしりしてちゃ、到底懲役は動まらないんだよッ」

マーサは生国での前科は二犯、しかし其の国では、女囚を撲ったりすれば先ず大ごとになる国柄だ。せせら笑ったベルディーは更に二、三発喰らわせた。

「いいかい？お前はね、社会の方のなさるところ、かれこれ云うことが出来る分際じゃないの。分らないけりゃ、お前もついでに革鞭で撫でたげようか？」

「す、すみません。お赦下さいまし。今後氣をつけますから」

マーサはかすれた声で云い、肩と首を垂れて屈伏を示した。

「異状ないね？」

途中から姿を現わしたジョアンヌ女史が訊ねた。

「大丈夫ですわよ。たった半ダースなんですよ。」

濃い化粧の看護婦は答えて、女囚の群に軽侮の一べつを与え、白衣の裾を軽やかに翻えして立ち去る。見送る女囚達のまなこは憎悪にギラギラ燃えて居たが、鉄格子戸の音が響

くと其の殆んどは悲哀をこめて床に伏せられた。デスクの出入簿には、医師も来たことになって居るに相違ない。

出戻り女囚クリスチーヌに課される懲罰はこれで済んだのではなかった。革鞭はマルチーヌ課長の分で、出戻りに対するヤキ入れが未だ残って居る。

「二八六号ッ、そんな大層なザマして見せて駄目だよ。いつまで、つくばってるんだい？お医者様ごっちは、もう済んだんだよ」  
嗚りつけられたクリスチーヌは、両手を突張って弱々しく起き上がり、よるめく膝で跪まず。ジョアンヌ看守長は豊かな腰をゆすって女囚を見下ろした。

「どうだった？革鞭の味は。どうやら汚ないことにならず、わり合いと、しっかり受けたわね。嬉しかったろ。では、これから重屏禁一週間」

事もなげに冷たく言い渡した看守長女史は理由を告げない。娑婆に二カ月暮らした埋め合せなのだ。覚悟はして居たらしいクリスチーヌは裸のままで鞭と棒を磨かされ、女囚達は、なおも周囲に立たされたままだ。たった今、此の体に今も残る凄まじい苦痛を与えた革の鞭、そして背負わされて居た重くみじめ

な桎梏の軛、それらを油布で磨き拭って光らせるのだ。膝を折って床に坐らされたクリスチーヌは、命じられた仕事の情けなさに、手は休めないまま時々腕で眼をこすって居た。クリスチーヌが泣きながら、革鞭と棒を所定の位置に納め吊ると、待ち構えたキャスリーヌが其の裸身に革手錠をかける。

女囚はおとなしく立ちうなだれて、革ベルトを腰に受けて締めつけられ、腰の両側やや後ろで、兵手首を固縛されて行った。拘束度は、金属製手錠より革手錠の方が段違いに強い。ねじれ気味に固定された両腕は、もうビクとも動かせはせず、くくの字に曲げられた肘が微かに悶えた。ぎしぎしと鳴りきしむ分厚い革具の縛につくクリスチーヌは、されるままに其のいましめを受けながら、時々顔を弱々しく上げて、救いを求める様な眼であたりを見回わして居た。

「さあ、荷造りは終ったわ。お行きッ」

突き飛ばされたクリスチーヌが数歩前にのめって膝をつく。立ち並ぶ女囚群は向きを変えさせられ、既に鉄扉を開かれた懲罰房へ向かされた。見せしめのためだ。

「かんにん。赦して……。どんなことだってするわ。靴の底でも舐めますから……」



鉄扉の所で、クリスチーナが最後の哀願を絞って身悶え、其の背をキャスリーヌが黙って押した。房の天井に点された電灯の光の下で、クリスチーナの白い体がうごめいて泣き出し、ネットをむしり取られて金髪が乱れ、赤いみみずばれが蛇の様にのた打つ。床中央

の鉄鎖に鎖を通した足錠が、これ又たまげる程の鉄鎖を重々しく曳き摺って両足首に当てがわれ、鈍く大きな音と共にガッキと嵌め込まれた。恐怖と絶望に満ちた顔が、音高く閉じる鉄扉の向うに消え、外壁のスイッチがひねられた。これで、女囚クリスチーナは漆黒

の闇の中で革手錠の一週間だ。重屏禁は革鞭ほどには珍らしくはないが、眺める女囚の身にとっては矢張り恐ろしい。革サンダルをくわえての禁食に初まり、革鞭そして、重屏禁と、いちぶしじゅうを見せつけられた女囚達は、流石にシュンとした。

(未完)

### ☆浣腸関連資料の部☆

#### 只今浣腸実施中

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
東浦ひかる 略号 (かみ)

#### 強制空気浣腸

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
東浦ひかる 略号 (かく)

#### 百CCのポンプ浣腸

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
東浦ひかる 略号 (かな)

#### 浣腸責の極致

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
東浦ひかる 略号 (かむ)

#### 女体浣腸シリーズ

大手札十二枚一組 略号 (一〇〇〇円)  
梨花悠紀子 略号 (れち)

#### 強制女体浣腸三態

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
絹川 文代 略号 (きか)

#### イルリガートル浣腸

大手札十二枚一組 略号 (一〇〇〇円)  
梨花悠紀子 略号 (いるり)

#### 太い浣腸器で浣腸

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
東浦ひかる 略号 (かふ)

### 自分で浣腸をする女

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
遠藤百合子 略号 (ゆか)

#### 浣腸器と女

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
絹川 文代 略号 (ほの)

#### エネマ・シリーズ

大手札四枚一組 略号 (四〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (るい)

#### イルリの嘴管挿入

大手札五枚一組 略号 (五〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (るは)

#### 女体浣腸プレイ

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (ほは)

#### 進ばしる浣腸液

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (ほい)

#### 浣腸後の排便

大手札五枚一組 略号 (五〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (へき)

#### 便意に苦悶する女体

大手札五枚一組 略号 (五〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (へか)

### ☆女体切腹資料の部☆

#### 血紅女体切腹腸露出

大手札十二枚一組 略号 (一〇〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (せい12)

#### 血紅切腹絶命ポーズ

大手札四枚一組 略号 (四〇〇円)  
梨花悠紀子 略号 (せん)

#### 血紅切腹祭壇の女体

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (せぬ)

#### 禪裸女血紅切腹

大手札五枚一組 略号 (五〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (おお)

#### 血紅使用苦悶悦楽表情

大手札五枚一組 略号 (五〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (くえ)

#### 肉体美全裸女体切腹

大手札五枚一組 略号 (五〇〇円)  
長野 良子 略号 (なせ)

#### 瘦身女体切腹姿態

大手札二枚一組 略号 (三〇〇円)  
細川アヤ子 略号 (ねは)

#### 瘦身女体自刃姿態

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
細川アヤ子 略号 (ねに)

### 血紅切腹血塗れ下腹

大手札五枚一組 略号 (五〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (わい)

#### 殿中の女性切腹

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (わこ)

#### 切腹美態から絶命へ

大手札五枚一組 略号 (五〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (わは)

#### 豊満の下腹を切る

大手札五枚一組 略号 (四〇〇円)  
東浦ひかる 略号 (えん)

#### 女体介添切腹

大手札四枚一組 略号 (四〇〇円)  
甘木 春子 略号 (あか)

#### 下腹を切り裂く

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (やい)

#### 下腹に刺す氷の刃

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (やお)

#### 柔肌を切り裂く女

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (やえ)



# 嗜虐の歴史

(ソバイの記録より)

チャリオット・レースに関して

三原 寛



「ペン女王がクメール族の新統治者として即位した時、首都シエムリアプの街は暴動と騒擾の真只中にあった。尨大にふくれ上った此の王国の経済状態は丁度ほどこかかったセーターの様であった」と表現されている。

「最新式のいしゆみ、軍艦、戦車等で装備された巨大な軍隊を維持して行く為の費用は、王国を青白く出血させ更に新しく増えて行く植民地域の統治に要する出費は王国の致命的な重荷となった」とある。

ペン女王はふくれるだけふくれ上り民衆の混乱を押えるだけの資金力も実力もない王国を引継いだのである。かかる危機に当面して船舶運輸の司政官から「船は何時でもトンレ

サップ・メコン下流域の肥沃地帯からシエムリアプに出帆準備完了して御座います。飢えた民衆の為の穀物も積めますし、斗技場用の白砂も集ってございます。どちらにすればよろしいか御決断を」との伺候に対し、女王は「お前は頭がどうかしたのじゃないかい？」と声を荒らげた。「今の世情をみるがいい。

人心は狂暴となり軍隊は将に反乱を起そうとしている。そして民衆は飢死に追い込まれているのだ。砂よ、当り前じゃないか。民衆共の頭から煩事を追い出すのよ！」

やがて未曾有のショーが斗技場で行われる旨の発表となる。三百組の斗技士が死闘し、五千人の捕虜が猛獣の餌食とされ、そして百

人の捕虜はペン女王みずからの御手により命を奪われるべき生犠牲として選び出された。ゲームは二週間に亘って繰り広げられ群衆は血に酔い我を忘れた。女王は人心の掌握に成功したのである。血と鞭による嗜虐の歴史は将に此の時に始まるのである。

かくて、最も効率高い経済性をもたらす奴隷労働を基盤としてクメール王国は繁栄への第一歩を踏み出す事になる。ソバイは丁度こんな時に捕虜となりペン女王の鞭の下に呻吟するのである。ペン女王は常に鞭から手を離さなかったといわれる。鞭による支配ームチ——一度でも此の味を知った者を震え上らせずには置かない絶大な支配権の確保にこれ程有





用なものは考えられない。鞭の前には如何なる人間的理性も消し飛んでしまい、ただひたすら鞭打者に対して迎合しようとの考えのみが行動を支配する。畜化されるのである。

稀大の英雄ソバイが女王の靴の底に接吻し

女王の固形排泄物を土下坐して拝受する様に仕込まれたというのも、ここで肯ける。ペン女王の好むショーの一つにチャリオット・レースというのがある。ペン女王にとっては人氣取り政策の一つでもあったし、国家財源の主要な役割を果たす事にもなった。レースの模様が詳しく記されていないのは残念だが、最も刺戟的な想像を加える事は出来る。二輪のチャリオットは目かくしをした捕虜の奴隷によって引かれ女騎手の鞭によって運転される。チャリオットは各色に彩られ番号がつけられる。奴隷馬達は汗と血にまみれた背中を女騎手の鞭にさらしながら広大なトラックを全力疾走するのである。

鞭の威力で必死の力を振り絞って力走を続ける奴隷馬達も何周目かには力尽き息が切れ頻死の状態に追い込まれるが、それでも後に待っている刑罰への恐怖から、遂には四つん這いになってもゴールを目指して、這い続けるのだ。レースに十二台のチャリオットが出場し、一着でゴールインした奴隷馬には、賞品としてペン女王御みずからの排泄物を御下賜されるのである。これは奴隷馬にとって非常に名誉ある事で、おそらくソバイ等は既に幾度も女王の御固形

物を口にする榮に浴した事と思われる。

一着以外の奴隷馬は総て死刑を宣せられ、そして一番先に乗り潰された奴隷馬に対しては最も残酷な虐殺が待っているのである。アンコールワットの壁画をみると全身に釘を打ち込まれている男や、その上から踏みこじられている図が彫刻されているが、恐らく冷酷な女王の考えつかれる凡ゆる苦悶の拷問に耐えた上で漸く死のお情けにありつけた事だろう。

奴隷馬に対しては以上の通りだが、一方女騎手に対しては別のやり方が、このレースを一層興味深いものにした。女騎手達は総てプロであり、選ばれて訓練所に入り激しいトレーニングを課された後に一人前の女騎手として高給を以て遇せられるのであるが、レースに勝てば更に莫大な賞金と名誉ある地位が約束されているので、当時の女性達の憧れの的であったと思う。

この職業女騎手達に対する順位のつけ方は変っていて、最も早く奴隷馬を乗り潰した騎手に対して最高額の賞金を与えられ、以下ゴールに遠い順に順位をつけられるのであるから一番にゴールインしたチャリオットの女騎手は最下位として大した賞金も貰えないので



ある。斯様に馬と乗り手の利害を一致させなかったのは、ペン女王の素晴らしい着想といえる。

女騎手達は多くの志願者中から厳選されるだけあって、何れも美貌揃いであるが馬を早く乗り潰す為には、相当のヴォリュームを要し、又乗り潰す為の種々のテクニックを身につける為には運動神経のすぐれた均整とれた肢体を要求されるので、この職業女騎手達は何れも我々マゾヒストにとっても理想的な女御主人様達であつたに違いない。訓練所では女騎手達は捕虜共の中でレース馬としての使用に耐えない老馬、病馬等乗り潰し専用の奴隷馬を稽古代に乗り潰しのいろいろのテクニックを身につけるのである。

奴隷馬達は何としてでも一位でゴールインしない限り身の毛もよだつ残虐無比な死刑を逃れ得ぬ窮地に追い込まれており、それを何とか少しでもゴールから遠い点で乗り潰すべく女騎手達は懸命になるのである。車券は一番早く乗り潰しに成功した女騎手と一番にゴールインした、奴隷馬との連勝式となっており、例えば十二台のチャリオットのうち三番コースの馬が真先に潰れ七番コースの馬がトップでゴールインしたら三ノ七の車券に配当

がつくのである。

奴隷馬が最初全力疾走している間は女騎手は鞭を使って出来るだけ馬を弱らせ、馬の動きが鈍った所でチャリオットから半身を乗り出して奴隷馬の腰を足で蹴りつけたり、或は奴隷馬の肩車に跳び移って奴隷馬の頭を股の間にさみ込んで、ゆっくりと料理に取掛るのである。この跳び移るタイミングが早過ぎれば女騎手は全力疾走する奴隷馬にしがみつくだけが精一杯で、そのままゴールインされるおそれがあるので、この間合のとり方も女騎手のテクニックの一つとなる。

ペン女王御自身、時にレースに参加される事があつたが、どの様に優秀な騎手も女王の敵ではなかった。女王は御愛用の黒光りした革鞭を、まるで自由自在に駆使された。普通奴隷馬の肩車に跳び移ってからではなかなか鞭が使えないのだが女王は奴隷馬の頭を股下にしっかり締めつけ、鞭の先を馬の足に絡ませ乍ら跳び下りて馬を転倒させ起き上る処に再び跳び乗って今度は鞭の硬い柄で馬の下腹部をこねたり鞭を馬の股下を通してしごいたり或は鞭の柄を馬の口中に突っ込んだまま鼻をつまんで絶息させたりした。

或るレースで女王は大変面白い趣好で観衆

の大喝采を浴びた。スタート時に奴隷馬に今日は手心を加えてやるから必ず一着でゴールインせよ。そうしたらほうびとして専用便器として、使つてやるとの暗示を与えたのである。女王様の専用便器こそ総ての奴隷の渴仰の的といって良かった。丁度現代の洋式便器を大きくした様な便器で中に奴隷は上向いて正坐する様になっている。平素貧粗な食物にしかありつけない奴隷にとって豪華な美食をなさる女王様が、例え排泄されるものとはいえ、その高貴な御身体内の芳醇な体液で熟された芳香溢れる最高の食餌にありつけるのである。

その奴隷馬が如何に興奮し意気込んだかが判る。スタートするや女王はその巧みな鞭さばきで、目かくしをした馬を少し宛位置を変えて行つて遂にレースと逆の方向に向き直らせる事に成功したのである。喧々々々たるどよめきの中をこの目かくし馬はトラックを逆廻りに必死で力走するのだった。最初の言葉通り女王は余り鞭を使わず又馬体に跳び移る事もしなかったのだ、馬は死にもの狂いで走り続けた。既に一位の馬はゴールインし、それ以外の馬、途中で潰された馬共は鎖でつながれ処刑を待たされていたが大観衆の騒音の



中に無我夢中の馬は

「そら、もう直ぐだ、便器になりたくないのかえ？あれが欲しくはないのかい？」

と女王に励まされ、既に立つ気力も尽き果てて息も絶え々々死力をふるって四つ這いに進むのだ。遂に流石の体力の限界に至り女王様が四つ這いの背中に跳び乗ると同時にくたくと崩折れてしまった。

目かくしを外され哄笑嘲笑の渦の中ではじめて自分の立場を覚った馬は真蒼になり女王の足下に土下坐して御慈悲を乞うのだった。傲然と立ちはだかった女王は自分の排泄を食べたい為命の限り這いずり廻ったこの哀れ

にも滑稽な奴隷を冷く見下していたが

「さあ、一位になれなかったお前が、どういう目に遭うか、覚悟はいいね？お前がこういうへまをやったのは、きっと鞭が足りなかったんだね、どうなの？」

勿論女王様の御言葉に逆う等、考えられもない。

「そうかい。鞭が欲しかったのかい。それでは、たっぷりこの鞭で打ち殺してやるから、お礼をお言い！」

女王の鞭が、びゅーっと風を切る。

それっ／＼びしっ／＼さあどうだ／＼びしっ／＼お礼はっ／＼びしっ／＼これでもかっ／＼びしっ／＼嬉

## 梨花悠紀子逆吊り写真特集

大中判印画紙焼付  
各集五枚一組 一〇〇〇円

### 第一集

略号（さか）

#### 両足首括り逆吊り

足首を揃えて括られた縄を滑車に連結されて、足を上に逆さに吊り下げられた美女梨花悠紀子は、両手を背中後手に縛られ胸には乳房がつぶれんばかりの縄目が肌に喰い入っている。全体重を両足首の縄で支えて痛さを耐えている梨花悠紀子。

### 第二集

略号（させ）

#### 逆吊りの女体折檻

逆さ吊りにあえぐ梨花悠紀子に対して、更にあくなき暴虐の手は、情容赦なく竹の棒にて女体のあらゆるところを叩き、こじ入れ、踏みつけ激しい折檻を加える。美しい眉をひそめて必死に耐える美貌の彼女の凄絶にして、しかも美しい吊責めフォト。

### 第三集

略号（さと）

#### 手足逆宙吊り

両足首と両後手首を括った縄を滑車に連結して、じりじりと宙に吊り上げてゆく。顔胸、腹を下にして、足首と背中を上にして宙に浮いてゆく梨花悠紀子。柔肌には恐ろしい程縄がうずまって、吊責めの真価が鮮明な印画紙焼付によって發揮される。

しいかっ／＼びしっ／＼それなら、さあどうだ／＼びしっ／＼お礼は／＼

一鞭一鞭、土下坐して額を地に摺りつけ或は両手を合せて、お礼を言わせ乍ら思う様打ちのめし遂には女王様の鞭の下に絶命する。

奴隷の頭に片足をかけ嬌慢な笑みを浮べた女王はやがてナイフを手にして奴隷のシンボルを切り取る。これはレースで一番に乗り潰した女騎手に与えられる権利で人気騎手となると、いくつものシンボルを部屋に陳列して戦績を誇るのだが、女王は勿論何時でもこれを切取る権利があるのだ。

この様に消耗品として奴隷の需要は増加の一途を辿り、征服と嗜虐の歴史は着々と歩みを続けて行く。

時間に恵まれず翻訳しかけては、空想の方に筆が走って益々翻訳の速度を落すので、肝心の筋が一向に進まないが、本人にとってはその方が結構楽しく、元来その目的で着目した書物なので道草の方が自然多くなる。

今回は女性斗技士について記録の現実と空想の道草を織りまぜて翻訳を進めたい。挿入の写真は本題の遺跡である。

（未完）



—これがノンフィクションであるべき筈がない—

小説

# 箕田京二 (続)

木戸川 健

芳野眉美はハ働けど、働けど、なおわが暮し、楽にならざりVじっと手を観ていた。

湘南の浜辺の磯の白砂に、彼泣き濡れて、サクラと神秘的な遊戯に耽りつつ、である。彼はハながら族Vである。神酒を飲みながら、小説を書き、ニッコリ笑って人を斬りながら泣くのである。

「どうしたの——？」と、サクラが鼻声でいった。——ヨ、ウン！と、続くのだが、カット！。それにしても、ヨ、ながら、手相観てちゃあいけねえな、眉美君！。もっと真剣になれ。——ヨ、なあ！。ウン。

ところで、彼の手相は、手の小指が比較的短く、左手の親指の上あたりから右下に向う線は、彫は深いが直線状で、上端はギザギザ

になり、薬指の付根から中に細かい線が何本か乱雑に走っていた。

「当たった！」

「タカラクジが——」

サクラも、どうも真剣でない。いきなり、彼を突きとばして、はね起きたので、こんな事って実際に本当に現実にあるのだろうか。

○

台風十七号の接近が伝えられる、八月二十二日の日曜日の午後、箕田京二は読者の一人木戸川健から送られて来た、以上のような原稿を読みながら、内心苦笑を禁じ得なかつた。ハグラビヤ廃止其の後Vを危惧したのだが、読者は以前にもまして、幸い、ハッスルしてくれているようである。同人雑誌的になったといわれるが、本来、マニア誌は同人雑誌で

ある。本来の姿に立ち返ったまでだ。

しかし——。箕田京二は、ハイライトを口にくわえた。——果して、これでよいのだろうか？俺は、同人雑誌の世話やきじゃあないんだぜ。お道楽に奇譚クラブという雑誌を出しているわけじゃあないんだぜ。

経営者の頭とかけて、痛いと解く。経営者箕田京二の頭は、いつも痛かった。二〇〇号突破！それは、一面、彼の頭痛の積み重ねでもあった。何度、ホッター！と思った事だろう。放り出さなかつたのは、情熱という他はない。しかも、この情熱は、容易に、一般人はワカッチャアくれない。そこに箕田の無念があった。

時折り、声を限りに叫びたくなる。

「箕田京二のバカヤロー」て、ね。こんな事



に情熱をそそぐのはバカにきまっている。しかし、俺は、日本一のバカになろう。

最近、バカな事をする奴が少なすぎる。二十五才で結婚して、三十五才で課長になり四十五才で家を建てる、それが大学出の青年の夢だというから、情けない。

昔の青年は、万里の長城から小便すれば、てんで、わざわざ中国へ出かけて行って、梅毒をもらって帰って来たものである。そういう素敵なバカヤローが、たくさんいたからこそ、とに角、世界を相手に戦う程国興ったのであるし、国亡びても、十九年にしてオリンピックをやれる程復興したのである。今の青年諸君、まごまごしていると、インドネシアや韓国に追いこされてしまうよ。

堀江青年——そう、いる事はあるんだな、今でも、素敵にバカな奴が。太平洋を、ヨットで、独りぼっちで渡った素敵にバカな奴。しかも、わが大阪の産。

「おい！」

彼は急にうれしくなって、彼が愛する愚かしき者と呼んだ。人間の感情とは微妙なものである。彼の妻は、何故彼が急に陽気になったのかわからない。甲子園では、三池工高が優勝したけれど、彼と三池とは何の関係もな

い。炭坑節を知っているくらいのものだ。

「ビール持って来いよ」

「書きものしてたんじゃあ、ないんですか」  
彼が書斎にとじこもっている時は、いつも不機嫌である。それに人ながら族Vではないので、まして、ビールを飲みながら論説を書いたり、読者原稿に朱を入れる、などという味な芸当は出来ないにきまっている。

「どういう風の吸きまわしなんです？」

「台風は、東京方面に向うらしい」

「それで喜んでるんですか？」

「とに角、ビールだ」

素敵なバカ者、——堀江青年——大阪の産——台風十七号——東京。この五つの連想に八月二十二日、日曜日の午後の箕田京二の上機嫌があった。

人間の感情とは、微妙なものである。

B、

「堀江青年は、わが大阪の産だな」

翌日、箕田京二は親友辻村隆の顔を見るなり、いきなりそう言った。

「堀江？——ああ、太平洋ひとりぼっち、のね」

「それに、大西洋をひとりぼっちで渡った奴も、たしか神戸の出身だ。二人とも関西人だ。

うれしいじゃあないか」

「そうかねえ、俺はちっとも嬉しくない」

辻村隆は、糖尿病に効くといわれている、昆布をなめながら、心は遠くの方にとんでいた。実は、箕田には内証だったが、これから南志津子とデートの約束があるのである。想いのミナミのK館で、映画を観て、それから、後どうするか……。これはもうブライバシーの問題。(ここに、くどくど書くのは木戸川健や夜乃探郎などの羨望をかき立てるだけである)

「東京方面の読者ばかりが——」

と、箕田は言った。

「素晴しくバカな事を書いてくれて、それは感謝にたえないんだが、実をいうと、関西人の俺は淋しかった。でも、関西にもいるんだよ。素敵なバカ者が——」

「辻村隆がいる」

「そう。しかし、堀江君には及ばない」

「ぼくが若ければね——」

「二人は世界的なバカ者だ。うれしいじゃあないか——」

「関西ナショナリズムか——。それもいいだろう」

昨日の彼の感情は、かくして理解された。



しかし、彼は果して、この時の、親友辻村隆の微妙な感情を理解し得たであろうか。

自分の感情や、情熱や、信念が、容易に理解されないかわかると、それならば、と自己の心の聖域(サンスクリット・エリア)にとじこもってしまう者もいる。称して、精神貴族という。その心は、気高く、淋しい。奇譚クラブは、そういう人々をも救うだろう。

彼等は、精神貴族ではないので、わだかまっている感情や、やむにやまれぬ情熱を、気高く隠蔽することをしない。

この時も――

「変だな？」

「なにが？」

「元気がない」

「糖尿病のせいさ」

「それに、金欠病――？」

「ずばり――」

そして八持つべき者は友達であるVという結果になったのであった。

辻村隆は、今月約二十万円も飲んでいた。稼ぐ奴ほど、よく使う。そして、使う奴ほど女房に頭があらがない。嗚呼、辻村隆！

辻村隆が、△ゴーイング・マイウェイVと行ってしまった後、箕田には、さし当り何も

する事がなかった。

ぼんやり、壁に張ってある世界地図を眺めているうち、やはり眼は中国大陸に行つて、若い頃の事が想い出されて、突然待てよと思つた。△ぼくが若ければね――Vと、辻村は言っていた。若ければどうなんだ――、太平洋をヨットで渡るとでもいうのか――？

南志津子――。サロン楽我記で、△ヒョンなことから、遂に交渉してしまつたVと、公開しているほどだから、本当なんだろう。一体どうなっているんだろう？恋なのか、それとも浮気なのか――？

「編集長、こういう方が――」

彼の△心配Vを停止させたのは、編集部員のKのさし出した、一枚の名刺であつた。

C、

「夜乃探郎です」

「ああ、あなたが――」

箕田には、それっきり、もう言う事はなかつた。初対面にも拘わらず、十年の知己のよくな感じがする。昨日も、会つて、葉山啓氏や久我庄一氏など、知性派寄稿家の事なども話したような感じがする。恐らく、夜乃探郎も、思ひは同じであろう。

木戸川健は、彼の事を△赤シャツVといつ

たが、そんな事はない。△世相診断室Vは、ヤブだとの評判である。胃ケイレンを盲腸炎と間違えて、手術したら盲腸がなかった、考えてみたら、その患者は既に盲腸を切つていて、盲腸がはえる訳がないから、切る奴も切る奴だが、切らせる方も切らせる方だ、という類いのお話が△世相診断室Vである。

夜乃探郎も、誤診された口である。

「サーカスが、好きのようですね」

「好きです」

夜乃探郎は、遠い眼をした。

「サーカスには哀愁があります」

「道化について、どうお考えです？」

「ピエロ。――悲しみをかくして、人を笑わせる。ぼくは、芳野眉美君にピエロを感じるんですよ」

箕田は深くうなずいた。芳野文学に、ピエロの哀愁を感じる、彼、芳野眉美の好敵手、夜乃探郎は本ものである。

「公開状については？」

「後悔はしていません。黒淵賀集子さんが、十月号でいっておられた事も、一部は本当の事だと思います」

「木戸川氏は、反対の立場ですが――」

「ええ、芳野派を宣言しましたね。これで芳



野派は葉山啓氏、保藤久人氏、三原寛氏、野中芳久氏、市川夫婦氏——と七人になりましたか」

「夜乃派は——？」

「黒淵嬰一氏、賀集子夫人、麻生保氏、それに、多分久我庄一氏、黒田寿氏、栗瀬長氏、といったところでしょうか。そうそうたるメンバーです。敗けやしません。それに、辻村派という大派閥もごいますよ」

「中立派——」

「ええ。参謀は団鬼六氏——」

箕田京二はとたんに愉快になった。派閥大いに結構。論戦大歓迎。たあいのない事では決してない。たあいがないといえ、この世の中のことすべてがたあいなくなってしまう。つまらなくなってしまう。つまらない、という事は、△つまり▽と好奇心を持って構えないからつまらないのだ。お互いに、つまらな生を送ろう。

英語では、△私はその事が知りたい△という事を、△アイアム・キュアリアス・アバウト・ザット△という。直訳すれば△私はその事に関して好奇である△となる。好奇心をもやす事、そこに不毛でない、人生が拓けるのだ。△つまり▽と好奇心をもって構えれば、

この世の中の事全部が面白い。アメリカ合衆国が、今日世界の王座に君臨しているのは、△アイアム・キュアリアス・アバウト・ザット△と関係がある。同じ英語国民でも、本家のイギリス人は余りそうは言わず、△アイ・ウォント・ツウ・ノウ・オブ・ザット△と、スクールグラマーに忠実に言うのだそう。どうです、席を改めて、一献——。行ける口なんでしょう？」

と、箕田が誘うと、夜乃探郎は、

「いや、駄目です」

と、にべもなかった。

「全然——？」

「いや、酒は行けますが、——ぼくは夜乃探郎です」

「成るほど——」

箕田は微笑した。△夜乃探郎▽名がわるい。

○

夜乃探郎が立ち去った後、暫くたって、夜が来た。箕田京二は、部員のNを相手にヘボ将棋をさしていた。どの位ヘボかといえば、金が斜めにさがる事もある。相手のNも相当なもので、黙っていると、突如として角が一直線に突っ込んで来て、味方陣地を混乱させ

る。ルールは守られなければならない。法律は遵守すべきである。箕田は、痛切にそう思う。

青少年保護育成条例は、歩が金になったようなものである。しかし、この成金が、桂馬になっではいけません。そんなムチャな将棋はさせない。

「やはり、夜乃探郎でなく、ヨルヲサグロウ(夜緒探郎)だなあ」

箕田は、王手のかかっている玉の頭に金をおいて、そう言った。(オワリ)

木戸川 健 記

——文中、御登場の各位様の、御熱演と、御尊名を勝手に拝借しました事を、謹んで、感謝、かつお詫び申し上げます。とりわけ、辻村さんと夜乃さんは、御熱演でしたが、演出未熟の為、従来新劇俳優を軽演劇俳優にしてしまいました事、返す返すも残念、いや、深くお詫び申し上げます。

猶、文中、最後のくだり、玉にかけても王手というは、これ、いかに？

橋行司子氏へ——十月号短信往来拝見、御指導の通り浜本浩(浅草の灯)の誤りです。△浅草物語▽が多すぎて、ゴツチャになりました。ワテ、ホンマニ、感謝です。



かす こ さい ごと  
一期の子の最期

<切腹プレイ奇談>



宗川一子

それは八月十五日の夕方でした。一子（つまり私）は、姉の協力を得て最後の装いをこらしていました。昭和二十四年八月十五日私が死んだものと誤解して、私を追った最愛の今はなき人の後を私は追うのです。姉はまたあの終戦の日に自決した夫を追う気にいる

のです。

兵隊の経験もあり、男性であった私も前回申し上げたように亡き人らしい人の魂を、わが身に入れて、身も心も女性としてくらしただこの年月、もともと似ているといっただ評判をとった私は、本当に亡き本人になり切って

いるのでございます。戦争で一族をなくした私はそうすることが姉にも喜ばれ、亡き人にも供養になると思つてのことなのでした。

姉も私も、すっかり化粧し、白みがかつた訪問着姿、年令に十才以上も若く見える私になつたのでした。そして姉との最期の小宴です。三十分もかかりましたでしょうか、私は大きな花束と、仏間の骨箱をあたえられて住みなれたわが家を出ました。ふりかえると姉は無言で見送っております。私の行く先は、直ぐ近くにある比翼塚、つまり私を送つたあつた亡き最愛者との墓なのです。姉は私を送つたあと、あと始末の後、やはり自分できめた行く先に行く筈です。

日はトツプリ暮れて、西空は夕やけ雲にまっ赤です。時折風が顔をなでますが、やはり夏の夕暮で、しかも、和装姿には汗がにじみ出るようです。

墓の前に来ました。一昨十五日の墓参りに植えた桔梗がよく咲いています。

ここに私は亡き人と、たのしく永遠に眠れるのかと想うと、心のトキメキを感じ、骨箱を、抱きしめるのでした。ゆっくり、一步步登ります。五段登ると、そこには『宗川一子の墓』と記してあります。そして両側の太



い竹筒には、いっぱい花が、飾ってあります。その石碑の前下が一米立方の納骨室なっているのです。

私は静かに、そのコンクリートの蓋をあけました。そしてわたくしはそこにはいつていくのです。腰の辺まではいつて、これが最後であろう見納めて、四方を見まわしました。いつてもわが家の庭です。へい垣でまわしてある中の中央に、見えるものは夕やけの赤さでした。姉はまだ見ています。そして

「おしあわせにネ」

と、いつて手をふりました。

私は足もとのところを引きあげると、そこは又蓋です、すると中は二米余の深さではしごがあります。私は、そこを降りはじめました。無言で、ユックリと……

はしごの角に着物のすそがひっかかりました。すると下半身が不意に裸になりビックリしました。長じゅばんの下は何も着ていないからです。とうとう身体も納骨室の中に入りました。姉もいつの間にか帰ったようです。

はしごにつかまりながら、蓋をとりました。それこそ雨がはいらぬようにです。そして持っていた骨箱と花束を置きました。まっ暗です。そしてなお暗いところへといつてい

き、二回目の蓋もしました。それから脇のスィッチを入れると、乾電池灯が、ともるので

二回目の蓋は再度あけられないように丈夫な鎖をかけて錠をガッチリとしました。鍵は無いのです。私も絶対に、出られないわけです。そして、脇の細い針金を力いつぱい引くと、納骨室の片すみにもりあげておいたセメント粉にやはり同じ箇所ナイロンに入れておいた水が「ダブリッ」とかかり、納骨室に自動的に広がるようにしておきましたから、これがかたまれば、この第二の蓋に気付く人はないでしょう。

スケジュールどおりにいつて、はしごの脇の一米の巾のカーテンをあげると、ここが私の最期の部屋になるのです。昨日までかかって準備したところ、畳一畳分の広さで、乾電池を電源（普通の電灯線では発見される危険あり）とする花のような電灯がつき、両側はともに幅二米の大鏡、正面はピンクのカーテンがかけてあります。そして天井鏡です。

中にはいつて更に見ればすみずみには夏の草花、特にレンゲ、菊、ダリヤなどが飾ってあります。床はピンクのじゅうたんです。脇に開いたようになっていた扉を閉めると、今

はいったカーテンのところは、鏡戸がボタンと閉まりました。これは中からあけられない仕組みです。天井と三方が鏡、そして後と床がピンク地ということになります。

しらぬ間に汗ビッシヨリになっています。これも電源は乾電池ですが、スィッチを入れると、換気扇がまわりはじめました。空気の入出口はあの大きな竹筒の花ざしからなのです。私は着くずれと化粧くずれとを直しました。姉から教えられたように。

私のそばにはもう時計も又いつもの縫合材もいらぬのです。又繃帯なども不要です。そういうものはありません。もう誰の指示も注意もいらぬのです。只自分が愛する人のところに少しでも早く行けばいいのです。

化粧をなおして落ちついてみると、前にも両脇にも私が居ります。死出の衣裳でしようか白い着物に身を包み、マゲの黒かみもフツクラと……。長い間の女体研究と努力、そして前に申した罌丸摘出後の身体は殆ど女性にかわりなく、これに最高といわれる化粧品をもつてのカラー化粧は、自分ながらホレボレするのです。今はもう換気扇の音以外は外からは何んの音もしません。

大部暗くなったのでしよう。換気扇から入



る風も涼しさをましてくたので、一旦とめました。そしてしばらくすわったまま、消灯して想いにふけたのです。今直ちに決行しようか一寝入りしてからか、と、考えました。しかし、これが落ちついて孤独感が襲うとなると大変だということを、思い至ってそのまま決行ということにしました。

悟りを開いて、電灯をつけると、更に美しい四十才前後の美人が、幾分青白いような顔で、こちらに向いホホエンでいます。そうだこの美人と心中なのだ、鏡に写るわが姿の美しさに見ホレるのです。

何時間たったかわかりません。私は準備をはじめました。香もよく、美しい花に囲まれて、そして最愛の人とそっくりの美人になって、これ程幸福なことではないでしょう。最愛の人とソックリ、否最愛のその人になり切つて、特製の折畳み座イスを組み立て、脚を立てて(約二十センチメートル)それに座ブトンを敷きました。そしてその上に白布のカバーをつけたのです。私は先にうしろと床はピンク地と申しましたが、白衣裳をひき立てるための手配でした。それができると白足袋の両足を揃えて、その座イスの下に入れてすわるようにすると、いつかも申しましたように、

立て膝の様になるのです。そしてヒモが両足をギッシリとしばりました。それから更に用意しておいた、白木の三方に白布を置いて白鞘の短刀をのせて前に置きました。香炉もたきました。花の香と香の心よい香がみちています。

それから私は帯をときはじめました。静かに静かに、しかも無言です。といてこれを疊んで脇に置く、ヒモも同じです。とき終つて前をひろげると、エメラルドのネックレス、そしてフックラとした乳房(人工ですが)は象牙色です。いつものとおり毛という毛はカミをのぞいてありません。全身カラー化粧(といっても大部白い)ですが人形のような感じもします。私は座ったまま、上半身肌ぬぎになりました。下は足をしばっているののでぬぐわけにいきません。そして、決行のとき見苦しいことをしないようにと思い、両ヒザとも、その付け根のところをギッシリとイスにしばりました。又ヘソの上のこととをやはり三重にイスのモタレにヒモでしばりました。

これでもう私は手が動くだけです。結んだところは、絶対とけないようにしました。折々正面を見ると、裸の美人が最期の準備をしつつ、こちらをみては話しかけてい

ます。

この私の最期の姿、亡き最愛の人のところに改めて嫁しづくような気(亡き一子は私の羽織袴を着用男装して腹を切った)がするのです。故に、わが身を思う存分料理してみたい、鏡の美人の最期の姿を、たんのうしたいという慾望が湧いてきます。ここで先に準備していたマスイ剤を、腹部に注射しました。いままですべて調査し、研究し、準備してのことです。局部マスイですが。

すると間もなく腹部をしばった感覚がなくなりしました。両脚のつけ根も殆ど同じです。今はもう介しゃくをしてくれる人はない。ない方がよいかもしれませんが、自分を好きなようにする。三十三年間待ちに待った、この日、ついはその時が来たのです。すっかり用意ができました。私がここで腹を切れば、それを知る者は姉だけです。その姉も今頃は住生しているでしょう。この部屋の電灯はいつまで保つか、私の亡きあと電源が切れて自然に消灯するでしょう。又長い間にはあの花を活けた大竹筒も腐り、そこから雨水がこの部屋に流れ込むでしょう。

一時消灯していろいろのことを思いつつこんどは別のスイッチを入れると、御詠歌が流



れて来ます。鏡の蔭のテープレコーダーからです。

電灯をつけました。万且用意ができて、最期の時が迫ったのです。腹のマスイも切れないうちに……。私は静かに右手で短刀をとり上げました。そして左手で鞘をとり、三方の白布をその刃にキリッと巻きました。

一旦三方に短刀を返して、もう一度足りないことはないかを確かめ、香水をふんだんにかけると共に、香炉にも香をたし、線香もつけました。ローソクの青白さにうつる一子の裸姿。この悲愴感、私は左手で無感覚のわが腹を撫でまわしました。正面の一子の両脇の美人も同じことをしています。

やがて右手でさき程の短刀をしっかりと握りました。そしてその切っ先きを左手でもって全く感覚のない左脇腹にあてがったのです。

只押し込んだだけでは、いかに切れ味のよい名刀も思うようにささりません。力を入れて押し込むと共に、刃を右に向けているのです。が、柄を左右に数回転かすと、「プスーッ」と苦もなくはいりました。一センチ以上ははあったと思います。痛みはありません。しかし筋肉にささった為かドン痛の感がします。力を入れて更に右へ廻していきます。五

センチばかり切ると、血が飛び出します。ああわが最期。正面の美人も最後のほほえみをかけています。ヘソ下約一寸のところを刃はとおりました。傷には脂ぼうが白く見え、盛んに出血します。私の太ももも又鏡にも血が飛びちりました。

おそらく一センチ五ミリ以上でしょう。長い長い時間かかって、やっと右まで切り終わりました。呼吸は荒くなります。こんどは、ヘソからの切り下げです。「イチ、ニ、サン」と、力をふりしぼってヘソにさし込みました。それでもう夢中です。これだけ切ったらハラワタも出なければならぬ筈です。グーッと押し下げて恥骨にとどくまで切ったときです。「ブルブルッ」と腹部がしたかと思うと、ピンク色のハラワタが飛び出して来ました。

「アッ、」  
もうマスイも何もない、痛さは猛烈にあります。

ウウウウウ、  
私は目的を達したのです。あといくばくもなく愛する者のところにいけるのです。痛いとはいえ、望みどおりの女体になって、望みどおりに切って最期を迎えたのです。

だんだん耳も目も遠くなっています。テープレコーダーは、どこかの和尚様のお経を放送しています。ああ、望み叶ったこの気持ち、いつの間にやら私は来世の者となり、最愛の人と再会できたのでした。

(おわり)

私は考えるところがあって、一子の十七日忌たるこの八月十五日には『切腹供養』をしませんでした。今後も女装に毎日をくらしませんが、遊戯としての切腹はやめることにしました。姉も同様です。何んとなれば、最近、姉は病弱なので、二人共身体を丈夫にするためです。そして来るべきいつの日にかは、必ずこの文のようなことを、実際にやりたいと考えております。大部先のことでしょうが、私達はこれが運命と思い、また一つの大きなたのしみでございます。

皆様のご批判を仰ぎたいと存じます。

なお私の切腹記事は、これで当分お別れいたします。といっても奇クでは毎月、これからも皆様の文とお会いして参ります故、今後共宜しくお願いいたします。

(おわり)

×

×



兜 かぶと首 くび

万田不仁

## △悦虐絵灯籠（その十四）▽

足輕拾兵衛は兜首を取った。

相手は中年の武者で、首級は首帖に記され

落城後は相当の恩賞がある筈だった。

得意の拾兵衛が弟分の太郎次に陣中で語っ

た首取りの模様はこうだ。

長光寺の城内には水が乏しかった。六月上

旬の炎暑一滴の雨も降らぬからから照りて、

病を発する兵も尠なくない。水乾しが利いて

もう落城間もなしと見た心驕りから寄手が深

く睡っておる短夜の明けやらぬ頃おい、城方

の将士で、ひそかに梓川の細い流れに水を求

める者もある。

ある朝、黒い夜のとばりが、やがて蒼い色

に変わる時分、陣を抜け出した拾兵衛は芦の

間に身をひそめて待っていた。彼の胸は期待

と一沫の恐れに熱い血が高鳴り、目は油断なく暗い城の方に注がれていた。

するうち微かに馬蹄の音が聞えて、やがて

拾兵衛の期待違わず、葦毛の馬に乗った武者

一騎、静かに現われた。

武者は鹿角の兜を被り、白絲おどしの鎧を

着ている。

葦の茂みの中で、じっと拾兵衛は隙を窺う

武者が馬から降り、川の中ほどまで、足を運

び、旱天の下の細い流れに身を踴め、両手で

水を掬って飲んでゐる様子を曉の星明りに透

かし見て、彼は固唾を飲んだ。

襲撃は、武者が再び馬上の人となろうと鎧

に片足をかけた瞬間に起こった。引き絞った

矢を正に放ったように拾兵衛は芦を分け、身

を躍らせて、武者の背を目掛けて一気に槍を

突き込んだ。ぎゃつとかわアツとか叫んだ声

が耳を打ったが、拾兵衛は遮二無二槍の穂先

も折れよと抉った。そして俯伏せにどうと倒

れた武者の上に乘しかかって我ながら驚く程

手際よく首を掻いたのだが、自分で自分の軀

がよくもあゝ素早く動いたものだ。と太郎次に

半ば自慢げに実感をこめて喋るのだった。そ

れもその筈、拾兵衛も太郎次も膳所の百姓の

倅で、田を打つより戦さに行つて大将首でも

取つて一挙に立身しようという、戦国の世に

はいくらかも例のあった青雲の志の達成に望み

をつないで国を出奔し、江州の雄佐々木承禎

の軍に加わったのだった。拾兵衛廿三才、太

郎次十六才。年少の太郎次は、しかし話と実



際の全く違う戦さの現実、臆病風に吹かれて、それを拾兵衛に見破られまいとせいぜい虚勢を張っていた。だから

——明日の朝、梓川に行こうぞ、もう川は殆ど干ておるが、おとつい屈強なやつが三騎、来よった、口惜しかったが手が出なんだ、明日行こう、二人なら気強い——

と、拾兵衛に誘われた時、大きく合点せざるを得なかった。

短夜はすぐ明ける。炎暑に耐えかねて武者でさえ素肌でいる、まして雑兵は半裸体、拾兵衛と太郎次はいぎたなく睡りこけている朋輩に気付かれぬように、そっと陣を抜け出した。落城を信じて、些か安閑とした哨兵の目も難なく掠めた二人の姿は一刻の後には、梓川辺りの葦の間に隠れていた。

「来るかの、敵が……」

太郎次は暗い空を見上げて云った。勇を揮って出てきた彼も今は何か心細く、おそろしく、曇って黒い空の色はまだまだ夜も深いかに思えるくらい。

「うむ、きつと来る。一人ならいぢばんいいが。もう城の水甕は残り少なくなっているに違いないぞ。尤もこの川の水だって濁っておるが……ハハハ如何に柴田勝家でも水乾しに

は参つたらうて」

「多勢で来ることもあるだろうか？」

「ばかな。そんなことをすれば、こちらも兵を出す、小戦さがおこる。こんな小さな流れで、水たまりに等しいから、こっちも監視せん。そこが敵のつけ目だ。おいらのつけ目でもある訳さ、フフフ、見ろうまくやってやる、手ごわかったら手伝うんだぞ、太郎次」

五位鷺が鳴いていく。その声が太郎次には殊に無気味に聞える。遙かに長光寺の方向で犬が弱々しく鳴いている。蚊が半裸の二人の腕や脛を食う。時が流れた。

「そら、来た」  
蚊に刺された脛をポリポリ搔いていた太郎次は、拾兵衛の声にさっと体が硬直するような驚きに打たれ、拾兵衛が指さす闇へ目をこらした。

彼には黄泉の国に通ずる黒い穴のようにも思えた暗がりの中から、夏草の間のほの白い径を夜目にも鮮かな白馬に跨った武者が現われた。

「ようし、一騎だ。またうまく討取るぞ」  
舌なめずりした拾兵衛。彼の胸算用ははや二つめの兜首を組頭の前に差出している己れの胸を張った姿を頭の中に、はっきりと描き

出している。

厚い雲が割れて、赤い夏の月が顔を出したその爛れたような月の光に照らされて、敵方の武者の姿は、はっきり雑兵の目に映った。  
「まだ若いやつだ、少年かな。よし、よし周章てることはない、たっぷり水を飲ましてから絞めてくれよう」

まるで鶏でもひねるように拾兵衛は既に勝った気である。また五位鷺が、鳴き渡っている。太郎次は何か不安な気がした。

若武者は、童具足と呼ばれる華やかな軽い鎧を着て、銀の三日月の前立のついた兜を被り、薙刀を小脇にしていた。

彼は白馬を下りると、その俥馬を曳いて、袴の稜を高くあげ白い脛をあらわに夜の色に浮き立たせて川の中へ入っていく。己れも水を飲み、愛馬にも水をやるらしい。

「まだ若僧だ。弱い奴だろう。だが城のえらいやつの餓鬼らしい。案外の手柄になるかも知れん。どうだ太郎次、お前ひとりやってみないか？」

太郎次は首をふった。嘲笑いとも憫笑とも取れる笑みを浮かべて拾兵衛は獲物が彼の罠に入ってくるのを、じっと待っている。蚊に責められることも彼には苦にならぬ。



「若武者が俯きがちに白馬を曳いて引返して来た。右手に水を入れた革袋をくくりつけた薙刀を提げている。」

「ふむ、すぐお駄仏になるのも知らんで」

拾兵衛が呟く。

やがて若武者は、先日拾兵衛に討たれた武者と同じあたりで、拾兵衛に背を向けて、白馬の鞍に乘ろうとした。

太郎次の耳元で、いきなりつむじ風が起った。——そんな激しい勢いで拾兵衛が長槍を揮って芦の間から飛んで出た。

「やーあ」

槍の穂が膿んだような赤い月の放つ光りにぎらついた。あッ、田楽刺しになった若武者の断末魔の叫びを太郎次は確かに聞いたと思った。

ところが、一瞬目を閉じた太郎次が目を開くと、拾兵衛の槍先は外され、薙刀をかざした若武者の凛々しい後姿が拾兵衛を圧して立ちはだかっていた。

どうしようもなく太郎次は体がふるえた。

「うむ、わしは三雲新左衛門様の足輕膳所の拾兵衛という者だ。うぬの素ッ首を引ッこぬいてくれようぞ」

必殺の槍をかわされ片膝ついた拾兵衛が喚

いた。若武者は月かげに白い横顔をさらして無口。

「いやアーツ」

再び拾兵衛が槍を突き出す、掠される。槍を持ったまま突んのめりそうにたたらを踏んだ拾兵衛は辛くも踏みこたえ、今度は槍を振り回して槍の柄で薙ぎ倒そうとする。技も法もない戦国の槍さばきだ。芦の間では太郎次が息を詰めている。彼は存外手強い若武者の様子に驚き、拾兵衛を助けるべく隙を見ている心算だが、どうにも足が、つっぱって動けない。するうち、拾兵衛の槍が若武者の薙刀の一なぎに、ざっくり真二つにされた。

「うぬッ、組もう」

拾兵衛大手をひろげる。若武者もいさぎよくさっと薙刀を打捨てた。忽ち両者は川辺の砂地の上でがっしり四つに組み合った。

「えい、えい、えい」

拾兵衛の懸声が勇ましく明け方の青い空にひびく。大兵の拾兵衛と中肉中背の優し気な若武者、捻合、組合、寄りつ放れつ虚々実々凄じく争う。太郎次はこう組討ちになっては、胸板や手足に剛い毛の生えている荒くれ男拾兵衛の力が勝ることを疑わぬ。

ついに両者砂地に倒れて互に相手を組み伏

せようと闘う。袴の稜をたくし上げている若武者の足が白々と閃くよう。何度か拾兵衛は上になったが、その都度若武者の強靱な体が拾兵衛の体を跳ね返した。と、揉合ううちに兜の緒がゆるみ兜が飛んだ。

「やッ、女だ」

太郎次が愕いた。結んでいた黒髪がほどけて、さっと流れている。

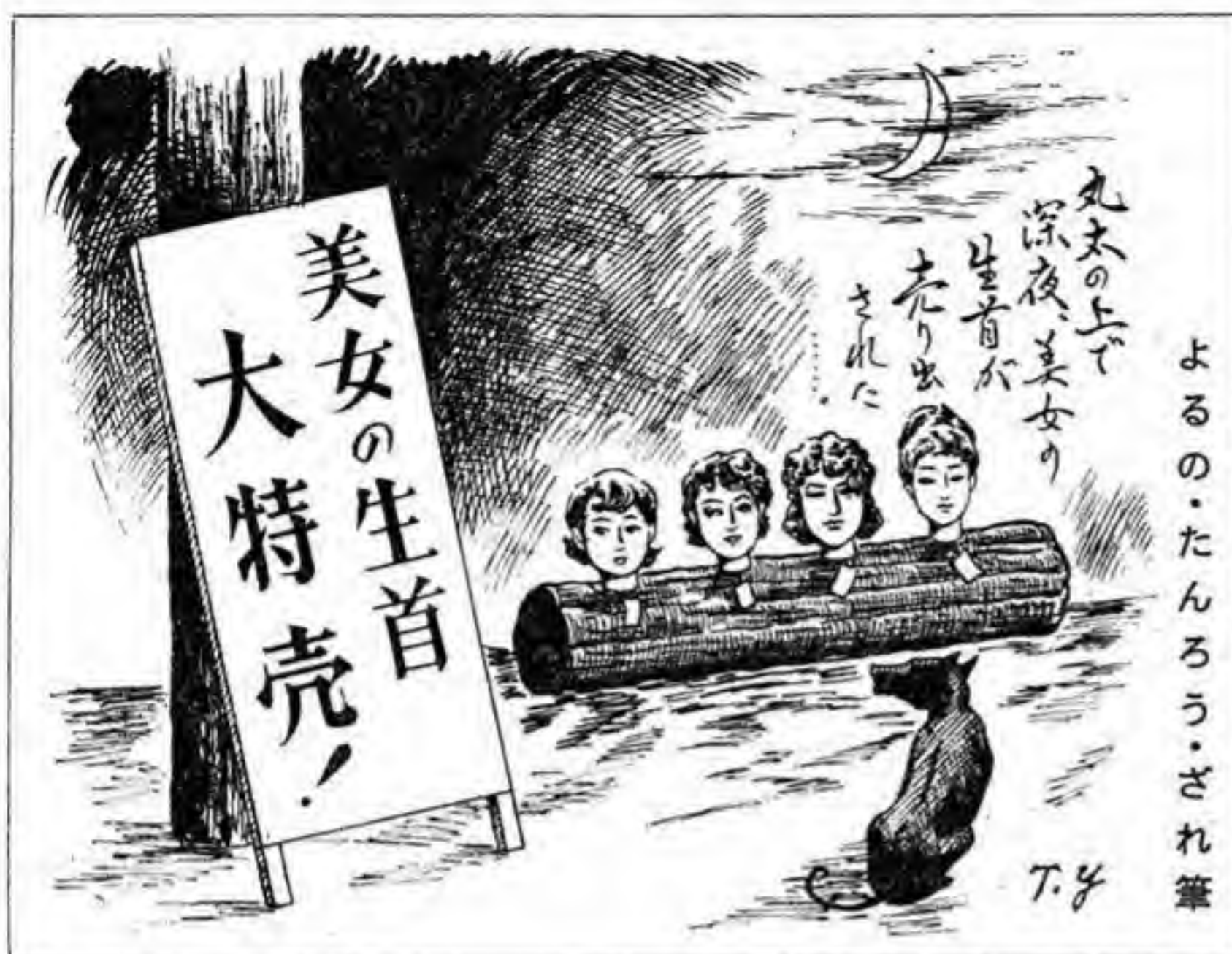
「女め、手捕りにしてくれるわ」

拾兵衛も一段と勇を増したように喚いた。が、何ということか、ともすると不甲斐なくも彼女が女武者の膝下に敷かけけるのはどうした訳か。よほど女武者は剛力なのか。伝え聞く木曾義仲の愛妾巴御前は普通の女人よりやや大きいくらいの体であったとか。この女武者も大兵の雑兵拾兵衛の死物狂いの力を凌ぐ程の臂力の持主であつたらしい。太郎次がひいき目に見ても拾兵衛は危なくなってきた。

「ううむ、無念、太、太郎次助けてくれ、上の女に斬りかかってくれ」

女武者に遂に背中に馬乗りになられた拾兵衛が恥も忘れて悲鳴をあげる。而も彼は俯伏せに抑えつけられて顔を砂に押つけられているので声がひびかぬ。拾兵衛の悲鳴で、もう一人敵のいることを知った女武者はきつと四





辺を見回した。太郎次は意気地なく声の間で首をすくめてしまう。

「太郎次、太郎次」

かねての腕自慢、おまけに兜首を取って増

長していった拾兵衛もそこは雑兵の情なさ、

よるの・たんろう・ざれ筆

女武者の尻の下で必死に足掻きながら弟分の

名を呼ぶ。半裸に黒い胴丸を着けただけの拾

兵衛の両足が空しく砂を蹴り空を蹴る……。

「ホホホ、うしろから襲うた卑怯者、いやし

い雑兵ずれを討ったところでいささかも手柄

にはならぬ、が、敵は敵、それに

またひそかに水を飲みに来る味方

がそなたに討たれぬとも限らぬ、

不びんだが観念しや」

女武者の優しい声音が太郎次に

も聞えた。

「げえッ、太郎次、早く出て来い

うわッ」

女武者は、右手にたし首掻刀で

のたうち回る拾兵衛のうなじをぐ

さツと刺し貫いた。ぶツぶツと噴

き出る血汐を避けてすつくと立ち

上がった女武者の前に逆上した太

郎次が躍り出たのは、拾兵衛には

あまりに遅い助太刀だった。しか

し、太郎次には拾兵衛の殺された

ことで、始めて焼養な勇気が湧い

たのだ。

「おのれ拾兵衛の仇、おいらは膳

所の太、太郎次じゃ、女になぞ負

けんわい」

いつか城方の戦死者から盗んだ彼には少し

重い太刀を抜いて、彼はめちやくちゃに斬り

込んだ。

「ホホホ、そなた隠れていたのか、もうわら

わは殺生したくない、帰してくれやれ」

はやあか時の光の中で、緋の童具足を着た

身を軽やかに、舞踏のように鮮かに太郎次の

太刀筋をよけながら女武者は云った。

「なにを、臆病風に取つかれたか、くたばれ

牝狐め」

兄貴分の頸から未だぼこぼこ溢れている血

の色が弱虫の太郎次の理性をすっかり狂わせ

た。彼は踏込み踏込み切つけた。蜘蛛開手獅

子の洞入と形容すればむろん嘘になるが雑兵

としては精一杯の奮闘。汗が目に入ってもう

目もよく見えぬ。

「ええ、うるさい、聞きわけのない、ええい」

帰城を急ぐ女武者は到頭いら立った。忽ち

太郎次の太刀は女武者の雑刀に撓ね飛ばされ

てしまった。

「組もう」

太郎次は愈猛り立って、すでに死体になっ

た拾兵衛同様汗みずくの半裸体を女武者の胸

に打つけた。



「ええ、めんどうな、命知らずメ」

持てあまし気味の女武者の声には、何処か悪童を叱る母親に似た柔か味があった。

えいえいえいと太郎次は満身の力をふりしぼって女武者を捻じ倒そうと足業に行き、腕も折れよと力を尽したが、拾兵衛でさえ討たれた相手にかなう筈もない。

連日の照りで、地熱のさめやらぬ砂地にどうと倒された太郎次。跳ね起きようとする肩を足で蹴られ、その雑兵具足、粗末な腹巻の上に荒々しく馬乗りになる女武者。拾兵衛の俯伏せの骸とももの二間と離れてない。

「ちくしょう、女に負けてなるものか」

もろくも両手を膝に敷かれ、両足をばたつかせ、腰に力をこめて跳ね返そうとする少年の真赤な顔を見下した女武者は二十二、三才その大きな目、形のいい赤い唇、上気した頬が太郎次を命の危うい瀬戸際にも拘らずはたとさせた。彼は拾兵衛の仇を討ちたい一心でそれまで女武者の顔をよく見ていなかったのだ。

「もはや悪足掻きにしても甲斐ないこと、そなた武士の子ではなからう。そこにわらわの手にかかった男もそうであらう。大方戦に浮かれ出た百姓の子であらう、戦さはおそろし

かったであらう。ホホホホ、首をふつても顔に書いてある、ホホホホ」

女武者は笑った。優しい姉のような笑顔だった。それにうるおいを帯びた円やかな声が太郎次の血を見てのぼせ上った、心を醒ました。彼は俄にこわくなり、無性に命が惜しくなった、助けてもらいたい、もう戦に出るのはいりごりだと本心から思うのに、いとまはかからなかった。彼は何時か足掻きをやめていた。

女武者は袴の稜をたくし上げていたから白い匂うような膝頭が、彼の鼻に女の臭を嗅がせ、柔かい尻のしっとりした重みが更に年上の女の豊かな体を感じさせた。女武者は彼をゆるそうと思っているのか、まだ首掻刀を抜かぬ。帰城を急いでいるのだろうにふと太郎次の髪を結んだ紫色の細紐をほどこき、これ己れの長い黒髪を両手を後ろにあげてゆっくり束ねた。その紫の細紐は、彼がこの戦の前に堅田の下級の遊び女に貰ったものだった。彼はそんな女武者の女らしい恰好を抵抗も忘れて眺めているばかり。

城で太鼓が鈍く鳴った。

「ああおそくなった。早く戻らねばならぬ。そなたは年も若く、かわゆい顔立、ほんに不

びんじゃが、雑兵とはいいい条、敵は敵、こう組敷いたからには、討たねばならぬが戦の定め、覚悟するがよい。名は何という？」

ひよっとすると助けてくれるんじゃないかと漠然とした一縷の希みを抱いていた太郎次は女武者の美しい顔ややさしい声音と裏はらな容赦のない言葉に今更愕然とし、またぞろ拾兵衛のうまい誘いに乗って戦に來たことを後悔した。

「太郎次、膳所の太郎次」

泣き声に近い声で彼は下から応えた。

「ああ、さい前そう名乗ったナ、ホホホホ」

女武者は白い喉を見せ、仰向いて笑った。

味方の陣中でも法螺貝が鳴っている。

「わらわは、柴田勝家の臣佐久間三左衛門勝政の妹、月子。城方は今苦戦しているが、やがて佐々木どのは敗れましよう。そなたのような雑兵と一騎討をする折りには武者の方では首級を挙げぬことになっておるが、そなたの首は掻いてあげよう。さア観念しや」

月子は両膝に心持ち力を入れて、太郎次の両腕を制し、一度尻を少し浮かせてからぐつと馬乗りの態勢を固めた。空に茜がさし、四辺は明るくなりかけている。月子の黒髪が爽やかな朝風に揺れる。緋おどしの童具色のき



い首すじの痛みとともに彼の世界はまっくらになった。

キヤビネ版印画紙焼付

|        |       |
|--------|-------|
| 各組三枚一組 | 五〇〇円  |
| 八組全部にて | 三五〇〇円 |

背中から二の腕太股にまで刺青を施した稀代の女賊が捕縛されて白洲で厳しい拷問を受けた上、白状しないので全裸に剥かれて砂の上で折檻、更に逆さ吊り、海老責木馬責、大の字磔と凄惨な拷問が重ねられるという想定である。

三枚一組 略号(よき)

荒縄できりきりと縛りあげられ、た女賊は、両足首に取縄を何重にも巻かれて高々と逆さに吊り上げられる。首がかるうじて床について、え、忍んでいるが血が逆行する苦しさ、耐え、折檻棒が豊満な乳房や咽喉元に、の折檻棒が豊満な乳房や咽喉元に、烈しい苛責のムチを加える。流石の女賊も氣息えんえんとして、つたりと吊られたままである。

三枚一組 略号(よゆ)

白洲へ荒むしろを敷いた上へ引  
き据えられた女賊は、先ず手荒な  
ことをしないうちに有体に白状せ  
よといわれたが、せせら笑って答  
えないので、打役の手でその入墨  
も見事な背中を、したたかに竹棒  
にて打ちまくられる。次第に変化  
する女賊の苦悶の形相も物凄く、  
全身を波うたせ、ムチの痛さに悶  
えるサジスチックな場面。

三枚一組 略号(よひ)

木馬の四方の脚に両手両足をが  
つちりと固定された女賊。いかに  
仰向けに固参らない女囚に對し  
痛めつけ、最も無防備な姿をさらけ  
だした女の刑罰を強要した。女囚は只  
顔をのけぞらして、この羞恥責め  
に對して必死になつて耐えている  
にばかりである。裂けるやうな痛さ  
に失神しそうになりながら。

三枚一組 略号(よせ)

出た。着て、白洲の砂の上に裸身をさらけ  
 された。男たちの目の前に裸で放置  
 され、縄は、女をきくことながら素早  
 い取上、更に股間縛りにしてしま  
 した。竹棒で追いまわ  
 った。泣く砂の上を、転りまわ  
 った。呻め、女囚は、砂の上を、転りまわ

三枚一組 略号(よす)

いかにしぶといふ女賊にしても、この海老責めだけは骨身にしてみても、こたえたことだらう。高手小手に両手首を高々と釣られた上、両足首と連結されて全身が二つ重ねにされた苦しさに更に盛り上った肩先を竹がささるに成るまで打ちのめされる痛さ。喘ぎつつ転った女賊の顔には竹棒の先が、白状せよと容赦なく突きあげてくる。

三枚一組 略号(よさ)

は、遂に稀代の女賊  
 げ、た大に四の罪を白状した女賊  
 よ、これから胸斬り、足斬り、両腕  
 斬り、首斬り、一寸刻み五分試  
 の鬨り、殺しにさねるのである。命が  
 分の身に、こんな恐ろしい運命が  
 待つてゐるとは、ハッ、ケラレない。  
 縄で、どの字にするか、ツケられてい  
 女賊は、どうするとも出来ない。  
 。

三枚一組 略号(よも)

木馬の四つ足に手足をひろげて  
四つ這いに縛られた女賊。見事な  
刺青をさらけて、その臀部も、背  
中も、肩口も、無防備のまま露出  
してはいる。力まかせの竹のささら  
が、はっしとばかり豊満な臀部に  
背中、炸裂する。髪ふり乱し絶叫  
し、つな耐え忍ぶ女賊の凄惨きわ  
りない光景。尚竹ムチは雨となつ  
て裸身のあちこちに降り注ぐ。

三枚一組 略号 (よめ)

かずかずの拷問仕置折檻に對し  
 て、尚ますその若さと美し  
 さを發揮して衰れえを見せぬ女賊  
 に對して、その美しさの残つてい  
 る中にハリツケにしてしまおうと  
 僅かに白布を前に當てた裸の女賊  
 を磔架にかけてしまった。架上の  
 美しい女賊の真白い肌も、やがて  
 錆鏽の穂先に貫かれて血汐にまみ  
 れることだらう。



△ S M 時 評 △

小説

箕田京二も出るにぎわい!!

まぼろし ネクター  
△白熱化した幻対神酒論争△

晴雨画伯の再評価気運も上る

— 新刊十月号を見て —

橘 行 司 子



東西、東西、天下御免はSM時評。まさに新刊十月号は論壇ヶ原を(関ヶ原をもじった新造語?)を舞台として、相対するものチョウチョウ・ハッシと舌戦を展開、こうなると行司子も、もろ肌ぬいで、さて、これで六回目——。

「小説箕田京二」も出るにぎわい!!!△白熱化した幻対神酒論争△・晴雨画伯の再評価気運も上る。これが奇クは十月号の軍配のポイントだ。

行司子の知る所、編集長がモデル小説の主役のタネにされたのは、奇ク出版史上、大特記?すべき快事か?。「小説——」の口火を切った夜乃探郎氏もとんだ罪づくり?の男かよ。行司子は△SM時評△新刊七月号を見て——の中で、演劇に例えて見れば、演出者も役者も、観客も、みんな舞台上に上ってドラマを進行させる“ETCと述べたが、まさに十月号の誌上は超バラエティーにとんだ編集振りではある。木戸川健氏も今回は△小説△に

△世相診断室△に△一筆啓上△と八面六臂の活躍ぶりだ。「小説・箕田京二」のトップ“死亡広告”は大諷刺的逆説レトリックで、氏日頃の自論たる芸術的?諷刺が開花された傑作として、ただウナルのみ。日付がよかったですネ。△二月三十日△と△二月三十一日△。死亡広告にしてしかも、奇クの永遠に、発刊が、つづけられることを暗示しているなど、心にくい限りである。(この日付の解説は書くだけ語るに落ちるのでやめる。)



○行司子に対して「奇ク共和国大審院長橋行司子博士」とたいした尊称を捧げて下さるエキゾティックな美女・黒淵賀集子女史にはオセッカイを一言（残念ながら行司子の自論として△判決△はデキナイ）奇クの舞台からきこえるマニヤの声にこしばらく耳をすましなさい。すでに、△一筆啓上△木戸川健氏。「読者通信」ランの△芳野眉美さんへ△木戸川健氏、同ランの△芳野眉美様△市川千鶴子氏と続々と声が上りつつあるようだ。

九月号の「編集後記」の言葉△論争の場合は十分与えられるので△じゃないが、まだピリオドは早い。すべては「読む雑誌」としての発展を願う、その過渡期でもあることを信じましょうか。（真剣に、論争・語り合うことは、人間にとって前向きを意味し、けっしてマイナスではない）



「幻対神酒論壇」は、△芳野眉美氏への公開状△夜乃探郎・八月号よりマニヤの声も十月号現在。（九月号で、麻生保氏の生活と意見△麻生保と飛火し、それもふくめて）木戸川健氏他ETCと、すでに満開。後は花の咲き乱れる工合を鑑賞という所で舞台は白熱化してそのまま十一月号へと移動するか――。



「創作・伊藤晴雨画伯」と久我庄一・九月号が△問題提起△と、皮切りしてから、早くも「久我庄一氏の労作に感謝しつつ伊藤晴雨に関して」の、保藤久人氏と△奇クサロン△伊藤晴雨先生を偲ぶ△黒井珍平氏の二作が投稿された。しかも黒井氏は△八十二年△より、つい筆をとりなくなりました△とのこと。これを機会に大方古い読者もカムバック。御健筆を寄稿され「本文充実」への支持を願うと共に、晴雨画伯の再評価の炎は奇クマニヤの手でとしたいものだ。



○奇クサロン冒頭・編集子の言葉は「或る疑問に答えて」。これは、行司子も、九月号の△S M時評△でチョット触れ、編集長殿から返事あるでしょう」と付け足しておいたが、△誌上で公明正大に文通してこそ誰憚かることのない共通の広場△ETCの編集子の一節と九月号の奇クサロン・「奇ク」雑感・久我庄一氏の言葉を支持したい。それにしても、近頃の編集子の言はまさしく本誌の前進とともに、すこぶる元気！（たのもしい限りですネ）

○「短信往来」今回の編集構成はスッキリと

しており、便りもまた生きた読者の言が興味深い。このランはグラビヤの廃止中であるところから、モデル通信などを中心としたその他を期待したい。できれば二頁分はほしいところ――。

○サジズムの極致「青木順子」京で大いに活躍・を投稿された、東山映史氏には感謝したい。月刊という奇クの発行形態から云って、青木順子ファンの要望があっても、その実演日付の予告が、発表しにくいと推察されるとき、せめても近況が読めることは大いにうれしいことでもある。今後の御健筆をいっそう期待する。

○詩「落書」と「秋」梶天平作。熱気のこともある論壇もまたけっこうだがそんな片隅に△さあどうぞ冷めたいお水でも△といわんばかりのさわやかな詩もうれしいネ。詩・短歌・俳句などの「奇ク文芸ラン」もだんだん必要になってきたようです。



妖しく光るルビーの如きS Mの詩も――。

サーカス文庫、紹介「サーカスの哀愁」――座らぬ座談会について――夜乃探郎「近頃また、サーカスなどの読みものを書いて下さる方が多くなり、暫く誌上で見られな



かった分野なので、私は非常に嬉しく思っている。——という『耕土散筆』の保藤久人氏の言葉も見られるが、夜乃氏もヤジ馬？振りも面白い？が、サーカス・マニヤのためにいっそうのサーカス文献紹介を。また『実録・奇譚クラブ』八夜乃探郎Vでは、カット、「30年6月特大号」印刷されながら遂に発売されなかった涙の六月特大号の付文にはハッ！とした。「制約」というこの文字がい

つかこの誌上より消える日を願う。  
あの時も、そしていまも……。裏付けされた出版の自由は、いつのことやら——。

## ◇

○『花と蛇』団鬼六氏の今回は、続篇（第十回）。枚数も多く読みごたえ充分。お膳立として秘密ショーのフィルムも登場。やがては哀れな美少年文夫と美少女美津子も、いよいよ映画出演か？という暗示ある幕切れ。ま

## 「事故死」の怪

黒田 寿

二十世紀の文明のなかに生活していると時には、思わぬ災難にあうことがある。殺人事件の「殺しの手口」にも、いろいろとあるが、惨酷なのは「事故死」であろう。悲惨な最期をとげた美女たちには、大変気の毒だが、死刑マニヤにとっては、惨酷であれば惨酷なだけ「事故死」も極めて興味のあるものだ。そのいくつかを次にひろってみよう。

## ①

若い女性が首に長いマフラーを風に靡かせて、恋人と二人でドライブを楽しんでいたが、突然、マフラーの端が木の枝にひっかかり、彼女の首は絞められた。咄嗟のことで、車は急には止まらない。この突然の強烈な首絞めにあって、彼女の生命は一瞬のうちに消えうせた。

さにハいよいよ佳境にVと「編集後記」の言葉のように、いっそう期待したい。

△懸賞「告白、手記、体験」入選作品発表V  
ますます快調で『本文充実』にいっそう拍車をかけるわけだが、

「病院の一室にて」太田尚子、  
「蚯蚓のたわごと」田代俊夫、

の二作が十月号では発表されている。

前者は、カテーテルで導尿とお浣腸ETCという泌尿器入院の体験記といううら若きBG二十一才の女性の、いつわらない告白であり、後者は芳野眉美氏とは対象的な立場にあるマゾヒストの人生断片のようなもの——。

太田氏は体当りの、そして田代氏は生きた文献的な意味で、評価したい。

## ◇

◇「私流アブ的解釈・「地獄」メモ」久我庄一氏は、地獄という表現からくる異常な世界の物と、奇ク・マニヤの世界を結び付けた異色作——。

○グラビヤが消えて緊縛フォトも（分譲という限られたハニイとなって）大方マニヤも淋しいとき。『亜紀子奇譚』麒麟児久・（モデル五月亜紀子のことについてなど）は、楽しいせめてもの文章による楽しい好読物として



②

歩道の端を歩いていた女性の傍を一台の車が通りすぎたが、突然、彼女もまた車と一緒に走りだした。同伴の彼氏が、はっと気づいた時には、彼女は数十米もひきずられて、数分前までの美しい姿は、ズタズタに引き裂れて、哀れな屍体と変っていた。彼女のハンドバッグが、疾走してきた車のドアのハンドルの金具にひっかかったのだ。すぐに放せばよい、と言うのは、女性の心理を知らぬものの言である。絶対に放せるものではない、女にとっては。

③

女性とハンドバッグといえば、こんな話がある。モーターボートで遊んでいた女性が海に放りだされた。

波の荒いところで助けることができず、翌日、彼女の屍体が収容されたときには、すべての着衣は浪にさらわれて、完全なヌードになっていたが、しかし、その腕にはしっかりと、ハンドバッグだけが握られていた。

④

四発の爆撃機が高層ビルに激突した事故があった。その部屋のBGたちが惨死した

ことはいうまでもない。翼の破片で首をスッポリもっていかれ、その生首が課長の机の上に、さながら獄門首のようにのっけていたとか、エレベーターの綱が切れて、一階まで墜落。なかの美女たちは、ことごとく血泥と化した話がある。

最も「奇」なのは、爆撃機の機銃弾が自然発射されて、その一発が遠く離れたビルで仕事していた美女の、心臓部をきれいに射ぬいたことである。

⑤

ガス風呂の事故はよくあるが、これが一人暮しの美女のうえに起った。中毒死した彼女は、浴槽のなかに沈んだが、ガスの火は消えず湯の温度は次第に上り、やがて熱湯となって、彼女はゴトゴトと風呂の中で煮られてしまう。

発見された時、浴槽の湯は三分の一くらいに煮つまり、すくなくとも三日間のあいだ煮られた美女は、白骨と毛髪以外、何一つとどめていなかった。

湯の表面には、あぶらがいちめん、二厘位の厚さに浮いていた。まさに、美女の肉体の溶解した液である。

うれしい投稿である。

○これはまた、本格的なSM小説を御執筆。△御厠番秘聞・夢の、また夢▽芳野眉美氏の連載はじまる。変った時代神酒小説として、そのスタートを期待したい。

×

×

×

——いつのまにか、もう一枚でラストとなる。夢中で十月号をよみ、ガムシヤラに時評を書きとばす。行司子にとって、月一回の楽しいペンによる重労働？でもあろうか。△表紙▽も九、十月号とだんだんと特色が出てきたし△目次▽のカットも良くなってきた。美女が浣腸されて、化粧室へ行きホッと一安心という、まことにユーモラス？な中に妖しきムード。

終りに△SMカメラ・ハント▽山本阿津子の巻・『息詰まる殺那に酔う女』で辻村隆氏の再起を祝い、特記して（大変に御苦労さまです）ともかく、パチパチと拍子木鳴って、これで幕。——

（オシマイ）

×

×

×

×

×

×



## 小説『芳野眉美』

夜乃探郎

☆

異常な快楽は、異常な苦悩から生れるらしい。そこから、人生悲劇も喜劇も幕があげられるようだ。いま、ガン作・マニヤのノート「濡れにぞ濡れし」で健筆をはこる芳野眉美の軽妙なアフォーリズムも、その一線を乗り越えたユーモアの世界だからこそ——味があるのだ。

スタイリスト・芳野眉美も、ときにペンが脱線することがある。諷刺は叛骨からにじみでる故にユーモアも生きる。だが、むき出されたコンプレックスは、読者の頭に混乱を与えるにすぎない……。

ともあれ「自分のSEXのことですから、

熱心にならざるを得ません」という芳野眉美の存在は、創作として取り上げられるべき異色的な、人物であろうことは間違いないことだ。

☆

ドア、あなたは、なんていじわるなんだろ。あなたのおかげで、その御婦人は何をして

いるの？

ドア、私はあなたを殺したい。

……神酒の世界のロマンチスト・芳野眉美

は、省線のある駅で、そんな詩をくちづさんだ

(新しい奇麗な便所なら、古典的な美しい夢を。こわれたきたない便所なら悪魔的な美しい夢を)。そんな気持をいだく彼は、影の部

分に行く贅沢な、放浪者でもあったのだ。眉美は、ふたつき前のことを回想した。有名な大学はいくらでもある東京を離れ、なぜ未知の仙台までも受験のために行ったのだろうか。……とにかくあの時の私は、東京にいるのが、いやだった。たえられなかったのだ。

——東京に帰った眉美にとって、雨のそぼ降る夕暮も、星が流れるアパートの夜景も、ネオンがまばたく夜の街も、硝子便所へのフアンタジイにつながる果てしない孤独の道でもあった。

◇「昭和二十八年二月号——当時」

☆

紫の帳よりかいま見る真白き幻想——という言葉があるが、すりガラスの彼方にうごめくシルエットは、それは限りないなやましさを……一条の白線が……白いかわいいお尻を見せながら……

△悪魔ハ硝子便所ノ戸ニハバリツイテコチヲ  
ヲムキふえていしすむノ男ヲ笑ツテイタ

荒れにあられた芳野眉美の生活も、東京のある大学に入学を許されてからは、新しい希望にすべてを忘れさせたようだった——が……悪魔はじりじり焼きつくような太陽の舗道に



も、孤影を映す小さな部屋にも……まるで分身のように……。

吉原の夜の街をいろどるネオンの世界を出た八女を知ったVその男には、まるで肉体と

あのつんと鼻をつく液体が別個の生物のように、不安と孤独と絶望と自嘲が、はね返ってくる焦躁をどうしようもなかった。さびしさにたえかねてさまよう森の小路。秋の枯野。

◇「昭和二十八年五月号——当時」

☆

「この間ね、白い便器に赤い花びら散ったんですよ」

「ほう」

「ちよっと詩的でしょう」——芳野眉

美は微笑えんだ。その彼の横顔には、もうショーペンハウエルの好きな学生であった面影は、うかがうすべもなかった。そして△悪魔Vも去っていた。

ドクターN氏が帰ってから、眉美はのどのかわきを知った。これもSEXなのだ……△どの娘をくどいてみようかVいまは、バーのマスターでもある彼はカウンターでグラスをかたむける女客を見渡した。

◇「昭和三十七年七月号——当時」

☆

神酒ファンは「S・M」——どちらに入るのだろうか。女上位ということに自虐的な悦楽を感じる世界も本当だ

たんろう・ざれ筆

☆美女と落下傘

こころ美  
お荷物  
を  
ひろうやう



ろうし、美しい女性の羞恥に頬を赤らめる姿をサディズム的なひそかなよろこびをもって眺めるのも本当だろうか——五色の虹を散らす噴水を背景に、いつも濡れにぞ濡れて、カンパスに妖しきデッサンを描きつづける繊細な白き手をもつ人生の画家。あるいは、スタイリスト（文章家）でもある故に、いつもポーズを意識し、それがために他者の欠点にもいらだちを感じるSMの貴族。

……「あら、またエッチさんが、やってきたよ。などという女給たちの嘲けりの声にむかえられて、彼はいつもの場所に、落ちつくのだ。いつもの場所：女給たちにチップをやって、カウンターの下に寝かせてもらうのだ。バーのカウンターの下というのは、完全な死角である。お客は絶対に気付かない。この場所、彼は思うさま女給たちのハイヒールに踏まれるのだ」

芳野眉美は、アパートの四畳半中央——というより部屋全体にわがもの顔にのさばるダブル・ベッドの上で足を投げ出し、週刊文春六月十七日号の「ひとわれを、変った人という」という特集記事「ハイヒールに踏まれて喜ぶインテリ男」を読んでいた。



△ホントかいな▽眉美は、まゆをしめた。  
 “ハイヒール”と気軽に書いているが、この記事を書いた人は、ハイヒールのかかとの細い底が、兇器であることに気がつかないのであらうか。手でも足でもいい、もろにハイヒールで踏まれてみるといい、傷がつく。△まったくバカラシイ▽

彼は、いつも奇クを思う。だから△S Mに就いて、一般の知識がまだまだオトギ話の世界にある。奇クの読者だってそうだ。こいつは一丁、書かなくちや▽原稿用紙を取り出しペンを走らすのである。

# ◇「昭和三十八年九月号——当時」

☆

『オール読物』の終りのページにある「オール横丁」は、なかなかシヤレタ読者通信がのっている。例えば、近刊八月号には、N町某劇場映写室に、若い女が現れ、技師のH氏に「おいしいモノあげるから目をつむってアーンしなさい」と云う。アーンとやったH氏、口に硫酸を入れた。上映中の映画が△危険がいっぱい▽。ところがF市の映画では売店の売上げをかつぱらった男がいた。こっちの映画は△にっぱん泥棒物語▽。危うし（福島・魚狗郎）

——ところで、「ガン作・マニヤのノート」では、眉美氏“Cマスク”としてこの「オール横丁」を紹介している。こちらは、同じ泥棒物語でも、まことにエレガント？な方だ。Cが「オール読物」を買って来た。最初にくったのが、最後のページの、「オール横丁」である。

中心部だけをキレイにくり抜いていくパンティ泥の記事があった。

「盗んでいって、あとでゆっくり切りぬけば発見される危険も少ないのに」

と投稿者は心配している。

切り抜かれたパンティを持っている女性の絵が書いてある。

「中心部を何に使うと思う」

とCが嬉しそうにいった。

「ぼくなら、マスクのガーゼにするな」

# ◇「昭和三十八年十二月号——当時」

☆

軽く踊っただけで、美沙夫人の肌はしっとり汗ばんでいる。九月だというのにこのクラブは暑すぎた。（それがねらいで、いそいそと彼はおともして来たのだが……彼とは勿論、濡れの大人、芳野眉美という男。）

夫人のうなじに、うっすらと、汗の粒が集

る。そっと吸う。

……「美沙さんの汗のかたまりが飲みたいな」

「汗のかたまり」彼女は首をかしげる。眉美は、美沙夫人の、耳に口を寄せてささやく。美沙夫人の顔が真赤になる。

「知りません」

——まことに、天下泰平。悩ましのネクタールふあんたじいよ。

（探郎いわく、モウイケマセン、ホント）

# ◇「昭和三十九年一月号——当時」

☆

東京の夜は、色彩の街でもある。

ネオンサインは、華やかで美しい。だが、それが硝子で出来ているところに、どこか人間のもろさを反映させ、哀愁を感じさせるのだ。

夜乃探郎は、上京すると、いつも商用が、かたずくのもの、もどかしくトルコ風呂で汗を流し、マツサージをする美女のお尻の感触を楽しむと「バー」で、一杯という段取りになる。

——その「バー」。はじめてだが、そこはなれたもの、音無しのかまえで、すうっと入った。



一流の剣客同志となると、お互いすれ違っただけで名前を言い当てるそうだが、花はお江戸の舞台で、現代のSMサムライたちは、期せずして、そんなドラマを打出した。その「バー」のマスターと、客である夜乃探郎が数秒視線をかわす。

「夜乃さんですね」  
——眉美さんですね。  
（「作者いわく」こんな場面なら書いて居ても、気分がよいね）さぞかし、舌戦がビールをのむほどに二人の間にかわされるかと思うとさにあらずだ。数語が吐き出されただけで

### 毎月確実に入手されるために

### 本誌予約購読者を募る

予約申込者月毎増加中です  
毎月確実に二十五日発売！

|     |     |       |
|-----|-----|-------|
| 一月分 | 一冊  | 三〇〇円  |
| 三月分 | 三冊  | 九〇〇円  |
| 半年分 | 六冊  | 一八〇〇円 |
| 一年分 | 十二冊 | 三六〇〇円 |

○本誌は只今の情勢から場所によっては入手が困難な所もあると思われましますので、確実に毎月御入手されるためには、是非直接予約お申込み下さるようお願いいたします。

○直接御予約下されるのには、天星社宛に（阿倍野局私書箱第十四号）予約購読料をお払込み下さればよいのです。

○本誌の送料、包装代などは総べて当社にて負担いたしますから、誌代のみ御送金下されば結構です。

○本誌の誌代は、一部三〇〇円ですから、従って、予約購読料は一月分一冊三〇〇円、三ヶ月分三冊九〇〇円、半年分六冊一、八〇〇円、一年分一二冊三、六〇〇円です。今後誌

代の改訂は当分の間しない予定です。

○予約お申込みの方には、毎月二十日頃印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、お送りいたします。

○毎月一冊宛お申込み下さる方は、誌代三〇〇円を、なるべく十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約者の分と一齊に発送できます。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何カ月分とお書き願います。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので、お留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上にて「本号にて前金切」の判を捺印いたしますから、継続お払込み願います。その際、継続でも何月号からとお書き添え下さい。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りに行きたい郵便局（特定郵便局でも結構です）と受取人のお名前とお知らせ下さい。当方では御指定の局留としてお送りいたしますから、数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間ですから、その間にお受取りにならないときは、発送人に返されます。

「奇クのために、乾杯！」

後は、きれいに、グウ、バイーだ。どんな会話ですか、まるで禅問答のようなもんですよ。

「私の友達でね、花見で酒をのんでいたら、とつぜん、パイと席を立て、表に出ちゃった。なんにも理由はないのさ。だから、この行動はホンモノだと思った……」

——判るね、ウン

「私は柴錬の『眠狂四郎』を世界的文学？と思うんだが」

——おおそびの意味でね。……ニヒルに色も香もあるかい、でも、チャンバラは面白い。「陽気なニヒリストって、禅僧のような代物だな。彼らは坐ることに、俗にも徹している」

——ズバリ、夢哲学をどうぞ

「私はお金があるなら、一つアフリカへでも行って、クロンボウの娘とプレイをしたい」

——太陽がいっぱいだ。

「アラン・ドロンが主役だったか、あのカラツとして、みように佗しい……ラスト。」

◇「昭和四十年九月号——当時」

（終）



## アブ随想

## 萌 芽

(ほうが)

栗 瀬 長



「小学校四年の長女のことでご相談します。先日、家で絵をかくており、見ようとしたら隠します。無理に見ますと、裸の女の子が、首を太いヒモで巻かれてつり下げられ、写真をとられている絵でした。」

驚いて問いつめますと、同級の男の子が友達を集めて絵のような話をしたそうです。こういう絵は楽しいかと問いますと、見つかったらどうしようと思ったけれど、胸がドキドキしてスリルがあるもの、といいます。どうしたらよいでしょう。S・T子先生のご意見をおきかせ下さい」 (神奈川 A子)

これは七月某日、三大紙の一つにのった相談欄の一文である。これに対し、指名された教育評論家のS・T子先生は、

「ひそかに残酷なことを考えたり、絵を見たり描いたりするような傾向は、多かれ少なか

れ誰にでもあるものです。あまり大げさに考えないことです。注意してみなければならぬことは、不健全な傾向と、まじめで健全な傾向との割合です。所謂健全そのもので、不健全さや俗っぽい影もないでは、人間くさみに乏しいような気がします。多少の不健全さを包みこんでしまえるほど、健全な生活領域が広ければ、さして心配はいりません。

子供は青年期に近づくにつれ、明るくガラス張りだった生活に、さまざまな陰影ができてくるのが普通です。発育の早い子供なら、小学校四年でそろそろ性的関心も高まれば、スリルのあるもの、危険性のあるものにも魅力を感じるようになります。折りにふれ俗っぽい話題も出して、堅苦しくない世間の常識を伝えておくことも必要でしょう」

良識をうたわれる新聞紙上にこうした話題

が取り上げられたのが先ず面白かった。勿論僻目でみれば、世に投書マニアは少くなく、かく申す私も、その一人かも知れないが——小生の友人にも、新聞社の好みそうな話題、相談を、いろいろ工夫しては送って、適中率三〇%などと喜んでいた輩もいたから、必ずしも真実がどうか疑問としても、いやこうした偏見はよしにして素直にこの問題を考えてみよう。

小学校四年という所が面白い。サディズムの萌芽が、そろそろ絵心というか、一応絵のかける段階に到達して、はっきりした形態をとったのだろう。勿論、まわりの男の子の影響はあったろう。しかし、それが心の琴線に触れたとしたら、この女の子の心の裡には立派にサディストとしての素地が育まれていたに相違ない。



「胸がドキドキしてスリルがあるもの」

何という素直な素晴らしい表現だろう。私達大人には、もうこうした素直さが失われているのではないだろうか。つまらない社会道徳とかいうものに禍されて。

今、私は、サディストとしての素地といった。成人して、見事なドミナに成長してゆくであろう彼女を想像してみるのも面白い。

しかし一方からみれば、この子は逆に、マゾヒストとしての素地があるとも考えられよう。

「裸の女の子が太いヒモで首をまかれ（首をまかれがやや幼い）つり下げられ」ているその子に自分を置き換えて、「胸がドキドキ」しているとも考えられる。被虐の心理、これも見逃すことは出来ないと思う。

私達の子供の頃を思い出してみよう。泥棒ごっこで、刑事となって、泥棒をつかまえて縛り上げた時の快感、と同時に、今度は泥棒の番になって追いまわされ、遂につかまって立木に縛りつけられた時の、フト脳裡をかすめる被虐の快感、これが交々となった時の思ひ出があるだろう。それが、その後の思考、環境等の影響をうけて、或る人はサディスト的に、或る人はマゾヒスト的に成長してゆく

のでは、なからうか。

この女の子も、男性から、貴重な存在ともてはやされる。美事なマゾ女性に成長してゆくのだろうか、想像するのも楽しい。

さて、S・T先生は、頗る常識的な解答を寄せられた。世の道学者的先生ならば、すぐ様、異常だの不道德だの、この子の問題は、親の教育がどうの、社会環境がどうのと、わめき散らすところであろうが、さすが良識あるS・T先生だけに、暖い眼でアブの萌芽を認められたことに敬意を表したい。

「ひそかに、残酷なことを考えたり、絵をみたり描いたりする傾向は多かれ少なかれ誰にでもある」——正にその通り、常に私達奇く同人が、人間心理の底にあるアブノーマルな面をより一層人間的なものとして浮き彫りにしようとしている真理をついているというところが出来よう。誰にでもある以上、「あまり大げさに考えない」のが正しい。

そして、「所謂——そうだ、いわゆる——健全そのもの」では、「人間くさみに乏しいような気がする」乏しいような気がする、と、世の抵抗を意識して、やんわりと表現しておられるが、気がするだけでなくて、人間性そのものが全く感ぜられないと断言してもよさ

そうである。

「多少の不健全さを包みこんでしまふ」これこそ、社会生活を円満に行う私達の行くべき途であろう。社会規範にふれぬ程度で、アブを堪能するボンサンスを私達は常に持ちたいものである。

子を持つ親として本当に考えなければならぬ点は、「小学校四年で、そろそろ性的関心も高まれば、スリルあるものに魅力を感じるようになる」こうした動きに、親たるもの常に暖い眼を向けねばならないだろう。そのために、「折りにふれ、俗っぽい話題も出して世間の常識を伝えておくことも必要」なのである。

極めて常識的な意見だが、果して、質問を提出した神奈川のA子さんは御理解になったであろうか。何か分ったような当然のことのようには思えるだろう。

しかし、このS・T先生の意見が、本当に正しい考え方として、人間性を最も尊重する立場を採れるのは、我々奇クを通じて、人間の本性を、心理を追求しつつある私達同人以外にはないのではなからうか。



# 緊縛の女性美を求める ある男の告白

小こ

泉いずみ

正ただし

緊縛の女性美を求めるある男の告白

「はじめに」

——この一篇は、私の知るある男の告白をもとに『緊縛の女性美』を求めてやまぬ一人の男の心情を克明に描写したものである。同好の志に共感を得れば私にとってこの上ない喜びである。

これを公開するにあたり、登場関係者の承諾を得ている。そしてA君は今生涯の伴侶を得て幸福な生活を築きつつある——。

## 【ある男の告白】

### A君の話

私はこの文を書くに当って、最初に文中の

総べてが事実である事を告白する。

私は既に、人から、もの事を相談される年令になっていた。仕事の面でも、人の長となり、家では二人の子の良き父親でもあった。世に云う分別のある物解りのいい親父（おやじ）である。又若い頃の多彩な道楽が世間の云う物識りの部類に私をおいていた。どんな話題にも年令を越えて誰彼の区別なく、話相手となり場合によっては相談役となる日常であった。

そんな私は、ある日、会社の帰り道でAと云う私の部下の一人から、ある異状な相談を受ける事となったのである。

いや、悩める男の告白と云った方が適切だ

ろうか。ここで少しAと云う男を説明する必要がある。彼は既に妻を娶り世帯を持たねばならぬ年令になっていた。

その事で時々彼を捉えた私は何故結婚しないのか聞いた事も有ったし、相手が見付からなければ世話をしようと言った事もあった。

そんな時、彼はいつも決って云うべき言葉を忘れてもしたように黙して、苦痛とも悲しみともつかぬ物云いたげな顔を私に向け苦笑するのが常であった。

性格の明るい、誰にでも同様な笑顔を示す彼は、会社の誰からも、好かれるタイプである。仕事の面でも有能であり、将来を嘱望され、誰とでも友達になれる彼は、男友達も、



若いガール・フレンドも内外を問わず多かった。若い女の子も何の蟠りもなく彼のフレンドとなっていた。

そんな彼が何故、結婚を避けようとするのか、私にも理解出来なかった。

いつも一緒に風呂に行く近くの友人の一人は、彼に身体的な欠陥は決してない事を断言しているし、彼の家庭も普通より明るい方であり、総べてに理解ある両親は彼が早く身を固める事を願っていた。

なかなか話を切り出さない彼を、私は分好気心に引かれ近くの喫茶店に誘った。

道を歩きながら突然彼は「あなたは奇巧という雑誌をご存じですか」と事務的な口調で尋ねたのである。しかし、平静を繕った彼の心の閃きを私は見逃す事はなかった。彼の悩みの内容を、この一言が如実に明らかにしていたからだ。

故意に感情を抑えた彼の表情は、前を見つめたまま変化する事はなかった。

私も無感動に、「知っている」と答えた。

が、実を云うならば、一瞬自分の心の内を見透かされたような電撃が、私の頭の中を走った。暫く二人の間に沈黙が続き、互いに心の乱れを整えている状態にあった。

彼は安堵し、私はうろたえた。そしてそんな自分に苦笑した。さして客のない店の片隅で彼が私に話した告白とは、こんなものである。

### A 君の告白

子供の頃から彼は親に叱られるような遊び方は、決してしなかった。

彼は仲間を友達をいじめるような事はしなかったし、誰からもいじめられるような事はなかった。学校での成績も良かった彼は常に皆の難事（宿題や親に叱られる事）を解決してやり、いつもリーダー格の地位を保っていた。

彼が小学校四年の時の事だったという。ある日、いつものように友達を自分の部屋

に招き入れたのを見た女親は暫くしておやつを持って彼の部屋に入っていた。が、そこに見たのは意外な光景であった。それは彼の前に座らされている同じクラスの女の子が細紐で両手を後手括られ神妙に彼の説教らしきものを聞いている図である。女の子のいましめを解いた母親は、その子を家に帰した後、彼を叱った事は当然の成行であろう。

彼が女の子を縛った理由はこうである。

彼はクラスの総務係であり女の子は会計係であったので、いつも学期末には集金されたクラスの金を決算し、次の学期始まで担任の先生に預けておくのが常であった。女の子はその時はやっていた大きい手マリを登校するその日の時、集金の中から出して買ったというのである。当然集金額と決算合計とは合わなかった。

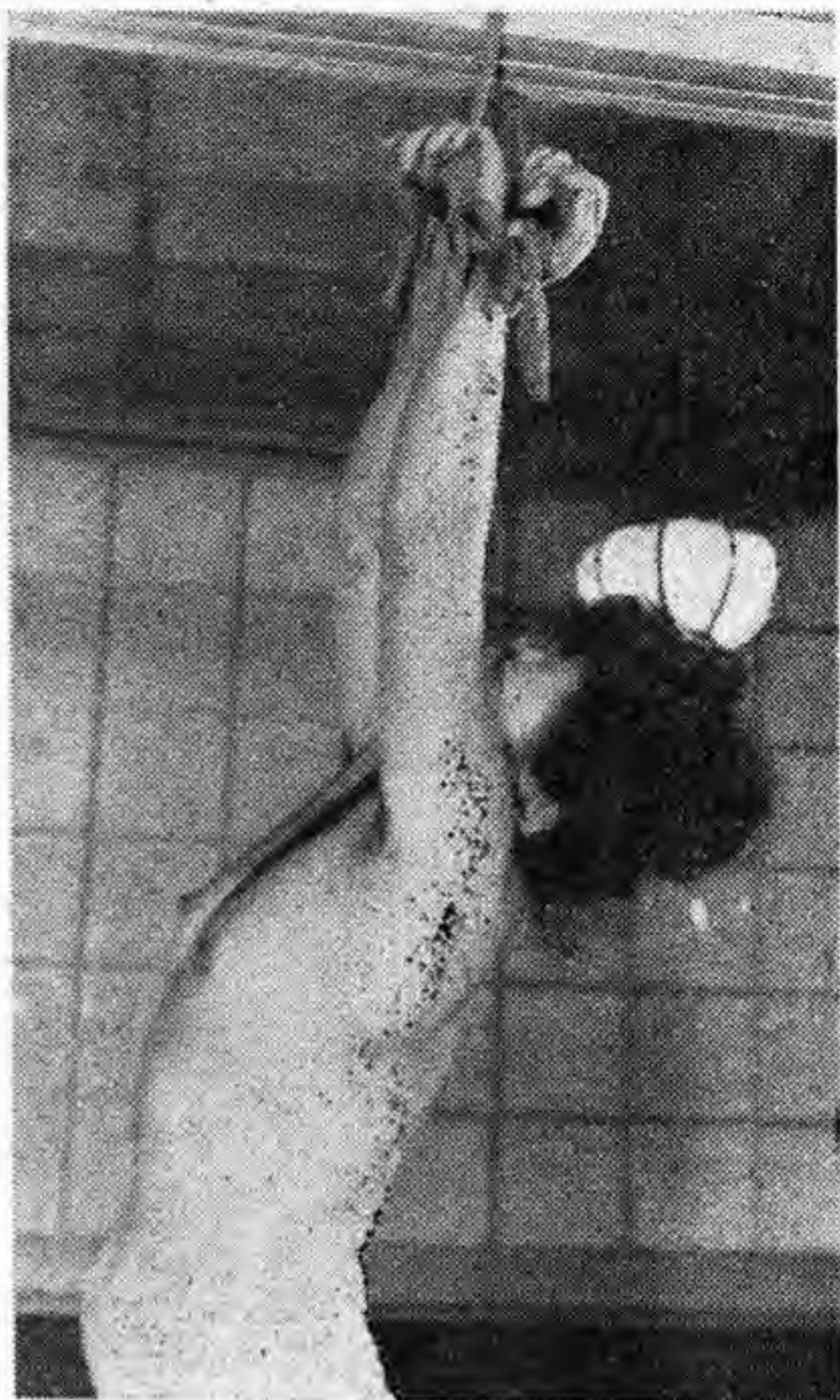
そこで彼は放課後、彼女を家に寄せ、いつか先生から話してもらった大岡越前守の話に習って、その子を裁いたというのである。

子供心に正義感と芝居気が湧いたのであるうし、罪の意識に女の子も、おとなしく裁かれる気になったのであろう。

彼が両親に叱られたのは、この時ぐらいだと彼は言う。

「私が実際に異性の縛りに心を引かれ始めたのは、これが発端であろうと思います。あの時は実際今のようなこんな気持ちではなく、何の下心もない無邪気なものでした。もしあの時、既に私がアブを意識していたとしたら、子供心にもあのように女の子を縛る事は、却って出来なかったのではないでしようか。何も知らぬ私の心が後手にいましめられ神妙にうなだれた女の子を見て、普通とは別の感慨





が動いたのでしよう。」

それからと云うものは、普段眠っている筈の、そんな感情が突然目を醒す事が時々に起ったという。秘して外に出さぬその感動は年令と共に成長して行った。

やがて世の常識を知り、自分の異常さを知り、それを一層秘なるものにしたが、内に燃えさかるその感動は、決して消える事なく強く大きく成長し続けて行った。

「そんな自分を恥しいと思い、時には嫌悪し

段若い異性の姿を見る時、想像の緊縛姿が重複する始末となったのです」

彼は私に悲しげな目を向けて語り、再度確かめるように、その雑誌を知っているかと聞いた。彼への同情からではなく、既に私はこの雑誌のある事を知っていたし、読者の一人であったので、今度ははっきりと私がその雑誌に関心のある事を示した。

彼は、それでも真偽の程をたしかめるように暫く私を見つめていたが、やがて、再び静

た程でしたが、後になって知った或る雑誌を読むようになってからその嫌悪する感情は消えましたが

恥かしい事ながら、今度は緊縛された女に心をひかれ、そのため普

かに語り始めた。

「学生時代も皆が異性に関心を寄せる程、私には、その面では、あまり関心がなかったのです。だから面と向って年輩者が話すように担々と、どんな話でも異性の前で話す事が出来ました。しかし、まったく関心がなかったわけではなく、やはり人並な気持はあったのですが、それは湖の水面のように静かなものでした。

自室を持っていた私は家に帰ると、縛りのプレーに耽りました。相手のない私は、自分を縛りの対象とするより方法がなかったのです。異性を縛ることに関心を示す私は、女装に興味はなかったのですが、自分の体を異性に見せるために、女の下着をつけ、そんな自分を縛って満足していたものです」

私は彼の話を聞いている内に、彼が現在深刻に、悩んでいる気持が手に取るように解った。しかし、この様な事に無関係な人であつたら、彼の話を徹頭徹尾理解する事は出来なかつたろう。そればかりか、そんな事を考えそんな事を口にする彼を変態性と決めつけたかもしれない。

実をいうと私は、その雑誌の長い愛読者なのである。若かりし頃、Aと同様の心の経験



をした事がある。現在でも、その気持は消えていない。唯現在、妻がそんなマゾ的傾向を微塵も持っていないので、敢えて妻を相手に行おうとしないだけなのである。

時々、酒に酔ったはずみに妻を後手に括る事があるが、それとても形式的なものに過ぎない。長い生活の間に互いに相手を理解し許せる我々は、お互いに許して来ている。

私が熱心に協力してくれる事を願った時の妻は、快くそれを引受けてくれ、長い時間プレーを続ける事はあるが、決して妻はそれに熱中せず、私のする事がまったく理解出来ぬという顔を私に向け、されるがままに座して終るのを待つのが常であった。

マゾ性を理解出来ぬ妻にとって、そんなプレーの持つ意味を解せないのも、熱中出来ないのも無理からぬ事であらう。

もはや私は虚しさなどは感じない。既に虚しさを感じる程の情熱は失われて居る年令なのだから。

それに理解出来ぬながらも、協力してくれる妻が居れば、それで現在の私には充分なのである。唯、彼は若い。こんな諦めを持たせることは、あまりにも残酷である。出来得る事なら理解ある異性を探して、そんな彼

を救ってやりたい。彼の話の途中で、私には彼の云わんとしている事が了解された。

こんな事を思っていた私を、彼は自分の話が理解されていないと思ったのであろうか、一層細かに、その気持を説明し始めたのである。

「僕は、もやもやとしたやるせない、そんな気持を持ち続けていたのです。誰に話す術もなく、気持を打明ける相手もなく。そんな時なんです。あの雑誌を知ったのは、神田の本屋街を何とはなしに歩いていた私は、とある店先でこれを手にし、嬉しさに、躍る胸を抑え、それでも落付いた動作で、それを求めたものです。

無秩序な頭の中を秩序立るようにその雑誌は、僕のもやもやとした気持を整理してくれました。全国に友がいます。一人ぼっちの今までの自分とは違い、これからは何も恐れる事はないのだ。私は心の中に蟠った不安な気持を晴すべく、それからしばしば読者通信欄に投稿したものです。異性に呼び掛けもしました。だが、やがてそれも虚しい一人相撲に外ならない事を知らされました。返って来るものは、空しいコダマだけでしかなかったのです。理解ある異性を得る事も、実際にプ

レーを楽しむ事も出来なかったのです。

せめて、私達の近辺に特別な秘密の緊縛ショーのようなものがあり、実演を特別会員だけが楽しめる機会があったらとどんなに思った事か知れません。日本に一つぐらい常設のこんな特殊なショーをする場があっても良いのではないかと真剣に考えた事もあります。虚しい気持が、胸一杯にわだかまっていた。それ以後、やがて来る、それへの不満に不安を感じ自分を恐れしました。

行動に出ようと思ったこともあります。私は言葉を交わす身近な異性の中に理解あるマゾ女性を捜そうと思ったこともあります。しかし、自身の心の内を考える時、それが如何に困難であり、不可能な事であるかを知りました。誰もがそうでありましょうが、私は日常どんな場合にあって、決して自分の中に、そんな感情を表面に出す事はしませんでした。例え何かのはずみに縛りの話が出たとしても、故意に無関心を装い、場合によっては逆にそれを攻撃し嫌悪の感を示し、まったく自分がそんな事には無関係であるという態度を示すのが常でありました。

人に自分の心の秘密を知られる事を、最も恐れたためです。これは私に限った事ではな



く、だから、もし異性の中にマゾ傾向の女性  
がいたとしても、同様に外面に、それを表わ  
す事は決してないでありましょう。どんなに  
私が耳を澄まし目を大にして探したって、理  
解ある異性を得る事は、まったく不可能だっ  
たのです」

熱を帯びた彼は自分の声に驚いたように、  
そこで声を切って、何にかを恐れるようにあ  
たりを見廻した。

室内を流れる音楽が、あたりの声を消し楽  
しげに語りあうアベックの口だけがせわしく  
動いている。それぞれの客が他とはまったく  
無関係に話し笑い、楽しんでいる。

彼の目が周囲を見廻し、やがて私の顔に戻  
った時、私は今までの彼の話を総べて理解し  
た事を示すべく顔を振って見せた。

そんな雰囲気と私とに安心したように、彼  
は又話し始めた。

「通信欄を見ても解りますように、女性の投  
稿の数はごく僅かです。それでも勇気のある  
女性は投稿をしてくれますが、口を閉じて黙  
した女性の読者の方が遥かに多い事は事実で  
す。そんな気持を心に秘めたまま、彼女達は  
耐えていられるでしょうか。」

何故理解ある異性を捜そうとしないでしょ

うか、いや読者欄には毎号沢山の異性の呼び  
掛けがあります。彼女達は只それに答えるだ  
けで良いのです。文通するだけでも、良いで  
はないでしょうか。しかし、冷静に考える時  
こんな女性の心情を無視した言動を、私は考  
え直さねばなりません。

見た事も会った事もない、まして見ず知ら  
ずの異性を、どうして彼女達が信用する事が  
出来ましょう。相手の人柄も素性も、真実知  
る事は不可能でしょうし、一般の交際とは違  
いアブ性のものであれば、特にこの点が問題  
になるのです。

そしてこのプレーなるものが普通見られる  
デートとは異り、二人だけの間に別の危険性  
が加味されている以上、絶対の信用と保証が  
相手になければ、文字通り受身となる女性に  
とっては、まさに最大の危険と無暴を意味す  
る行動と言わねばなりません。自由を実際に  
奪われた女性を前にして、今までの紳士がい  
つ豹変して襲いかからないともかぎらないか  
らです。そうなった時、その難から逃れる術  
はありません。総べてに受身となる女性が文  
通でさえ家庭的事情からも世間的にも、まし  
て婚期をひかえた若い女性であれば、異性か  
ら来る手紙でも、それを避けねばならないの

は当然でしょう。

一瞬の間違いと誤解から、彼女を破滅に導  
き、一生を棒に振ると云う事態を招く事にな  
ります。我々男性が、考える程、女性にとっ  
て、その行動は安易なものでは決してなく無  
暴で危険なものなのです。

辻村先生のカメラ・ハントのように安易に  
プレーを楽しもうと考える事自体が所詮無理  
な事なのです。

我々が百万遍自分の潔白を唱えてみても、  
それは空念仏に過ぎません。保証される何物  
もなければ、信用され得る証拠とてありませ  
ん。そんなわけですから、奇巧主催の緊縛撮  
影会が催されたら、どんなに救われることで  
しょう。若い女性を縛り行く過程をカメラに  
とらえる、こんな特典がなぜ私達に許されな  
いのでしょうか。そんな事を考える時、辻村  
先生のカメラ・ハントが真実羨しい。どんな  
高い代償を支払っても、それをして見たい欲  
望が胸の中を駆け廻るのです」

夢にうなされたように熱を帯び、私の存在  
を忘れたかのように彼のうわずった一人言は  
続く。そんな彼を私は不憫に思った。

又ある面では、そんな若さを羨しくさえ思  
った。だが、こんな善良で有能な好青年が、



かくも熱心にこのような話を語る場面を、今までに見た事がなかった。

「私は考えたんです。このようなプレーが心おきなく出来るのは、夫婦の間でしかありません。夫婦であれば総べての問題は解決されるのです。それに双方が満足を待たれるのですし」

私は彼の云わんとしている次の言葉を恐れた。夫婦であれば総べての悩みは解決する。

しかし、先決問題は、そんなどんぴしゃりの異性を捜し出す事である。どうして、どんな

## 連続組写真Mフォト

### 二人の女性の餌食

大手札印画紙焼付

三十六枚一組 六〇〇〇円

略号(ほや)

〔MS女性〕……刺青女性山原清子他一名  
〔M男性〕……Mモデル志願者M・H氏

男性をいたぶることについては定評のある刺青女性山原清子が、他に一人のアシスタントの豊富な肉体の女性と共に二人して一人のM男性を、こてんこてんに虐めしめ尽す有様を、順を追って刻明に写真化しました。縄、ローソク、浣腸器などの小道具を用い、マゾファンクの思わず、ぞくぞくする場面ばかりを連続組写真に編集しました。どうか、この写真集にてマゾの醍醐味を心ゆくまで味って下さい。

方法で協力してくれる異性を捜し出せば良いのだ。

私程の年輩になれば、普通の結婚相手を探し出してやる事はさして難しい事ではない。

現に二、三の仲人になった事もあるし、各方面に、その適任者を知っても居る。しかし、彼の場合、一般に言われる良妻賢母型の女性であるだけでは不適確なのである。

夫のラブを理解出来るマゾ性を加味した女性でなければならぬのだ。一般論から云えば、良妻の部には入らない、別の意味で理解ある妻でなければならぬのだ。

「私もすでに妻を娶らねばならない年令になっております。私の身近かにも好意をもてる人は居りますし、先方も私を決して嫌ってはおきません。出来る事ならと思いますが、結婚すれば私はきつと彼女を相手にプレーを行うでしょう。しかし、それが為に彼女を一生苦しめるとしたら、私にとっても、彼女にとっても、悲しむべきことであり、場合によっては、それが為に生活を破滅に追いやる危険があります。願う事なら、こんな異常性を理解してくれ、相手も楽しみ、満足し甘えてくれる。そんな、異性を捜したいと思いました。

私は長い間、その為に心を労しました。待ちもしました。しかし、もう成す術は私にはありません。そんなわけで、もしあなたに何か捜し出す方法なり、あるいは、そんな女性を御存じでありましたならと思い、恥も外聞も捨てて打明けたような次第なんです」

胸を圧していた重い空気を吐き出してしまった彼は気が晴れたのか、上気した顔を上げすがするような目を私に向けた。そんな彼とは対照的に、古い傷跡を抉られ、重い荷を背負わされた私は思案の顔を伏せて、しばし上げる事が出来なかった。

彼の囁る冷切ったコーヒの音が答を求め促す。追われるように私は重い口を開いた。

「君への慰めや気休めではなく、真実私にも君の抱くような異常性を持っていた。いや今でも持っている。だから君の気持は、充分過ぎる程私にも解る。実をいうと、私はこの点で君から相談を受けても、答える資格はないのだ。

現在の妻を見てもらってもわかるように、あれにはラブの片鱗すらもない、世にいう正常な女なのだ。若い頃、君のような気持を抱きながら悩んだものだ。それは自分のラブ性にはない。勿論、求めて求め得なかった異



性の為にだ。しかし、それは満されなかった。

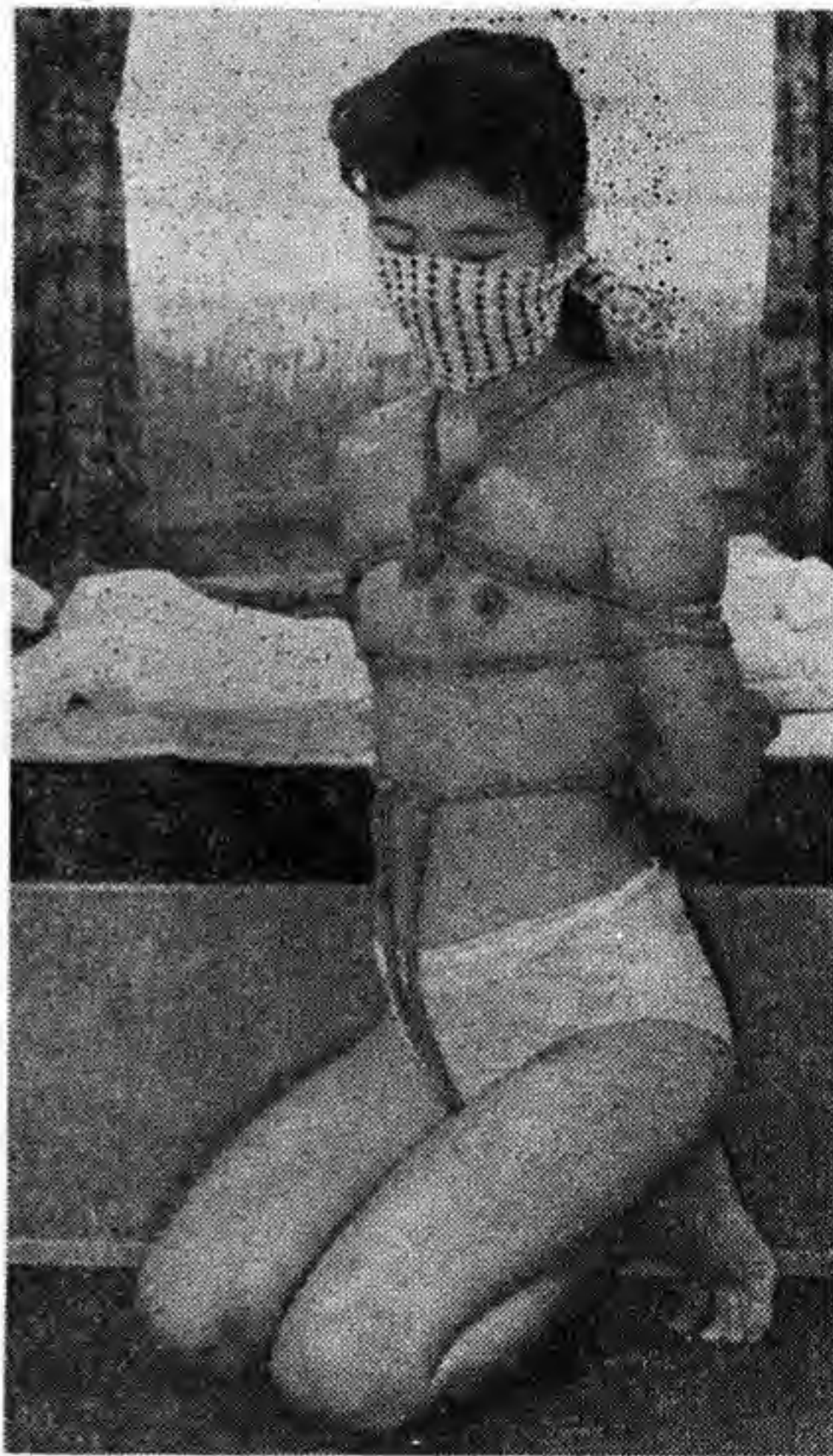
だが、現在君と私が違う所は、私は君より遙かに年をとっているという事だろう。

それ故に、色々な面で経験も深く多い。君のよくな純粋な情熱は失なわれたが、巧みに壁を乗り越え打ち破る術を知っている。長い経験と見聞が私なりに満足を与え、現在なおプレーをあちこちで楽しんでいる。

そんな私であれば、何とか君の力になってやれると思う。今この場で解答を出す事は出来ない。しかし、その内、きっと君が満足する良き方法なり、協力者を捜し出してあげよう。それまで待つてはくれぬか」

この場に於て心の内をすっかり話してしまつた彼は、既にその目的の半分を遂げてしまっている。あとは彼を勇気付ける希望を与えてやればよいのだ。

今の私に、確たる解決策はなかった。しか



し、先にいって彼を落胆させるような事は出来ない。私が、若い頃求め得なかったかわりに、今、彼の為にその悩みを解決して喜ばしてやろう。万難を排しても、きっと。

### 雨に濡れた奇ク

この文中で私は奇クの宣伝をするつもりは毛頭ない。だが、全文を通して奇クの果たした役割は大きい。終始、奇クが要点を握り、主役を演じた事を残念ながら認めぬわけにはゆかない。

てみた。

旅行先で客が一夜を遊んだ女が客の匂わず縛りの話に、マゾ性を表わし、客に自分の体を縛らせ、その緊縛のまま一夜を明したという話。

拷問、緊縛を加味した映画を上演する映画館でハントした婦人の話。

偶然縛られた事から、緊縛の虜となった若いBGの告白。

恥かしめ、晒される事を望む一女性。プレーを楽しむ若いカップル、夫婦、同性

あの時以来、彼の依頼が私の心を重く圧迫し続けていた。行動を開始しようにも、その特異性とプライベートルな秘密性がそれを阻止した。

無計画に行動したとしても、それが無関係な人に露見した場合、良く行って痴漢か変態と見られ、悪く行けば警察沙汰となる可能性が、充分ある。仕方なく以前、奇クやその他の風俗誌で読んだ話などを思い出し



同志の話など。しかし今の私には役に立ちそうなヒントを与えてくれる話はなかった。

秘かに蔵書している関係風俗誌の読者欄、

通信欄などを丹念に調べてみた。しかし、彼が既に調査済であれば、彼を救ってくれる当面の適任者は捜出す事は出来なかった。旅行好きな私は気晴しに旅行でもして見ようと思った。少しぐらい大胆に行動しても旅先であれば、旅の恥はかき捨てというごとく理解ある人に逢えるかも知れない。

一刻の恥と気まずさを覚悟の上であれば、この年輩が、どんな言動も可能にしよう。今の私はそれが、自分の事のような真剣であった。若かりし頃に満されなかった思いを、せめて彼にだけは満してやりたい。

そんな俠気と、一つには自分の胸にある緊縛への思慕の念とが、私を久々の旅に立たせた。しかし、総べては無駄な浪費に終わった。

所詮、このような事に熱中し行動する事自体がおかしいのだ。正常に求めて得られるべきものではないのだ。悄然と帰える私の頭の中には、諦めの影が暗く垂れ込め、旅の虚しさが脳裏を去来していた。

生来、女性にはマゾ性が、多かれ少なかれ潜んではいる。それは何か突然の出来事により

マゾ性は言動となって表に現われ、過去の恐怖がやがてマゾの欲求となって変化するのである。

真夜中に押し入った強盗に縛り上げられ、その恐怖がやがて快い刺激と変り。お仕置された思い出が。いじめられた過去が。あるいは世間話が。物語が。映画の場面が。涙を深した芝居の場面が。偶然目にした責絵の驚きが。その他諸々の衝撃が。

「こんな姿に責められたなら、どんなに苦しかろう、されてみたい」

そんな感銘が彼女達を、この世界に誘い入れる。

何かの動機と衝撃で彼女等が、それを身をもって体験しなければマゾは芽生えるものではない。しかし女性の危険から逃避し近づくうとしない本能がアブの立ち入る事を阻止する。とすれば、まだこの世界を知らぬ彼女達は、そんな行動や行為や言動を口にする者を避け、決して再び近付こうとはすまい。

危険から逃避せんとする本能の成せる必然の業である。

私は捜し出す以前に、そんな女性の行為と行動から彼女等をプレーの対象とする事の困難さを、今さらながらに痛感した。私は、こ

の問題に深く兜を脱ぎ、彼の前に頭を下げようと思った。

もはや、幻想を追うごとき自分の哀れな姿に、嫌気がさしだしたのである。そして悲しいかな、混乱した私の顔は、良からぬ考えをさえめぐらしていた。

現在交際中のガールフレンドを、何かの機会に縛って見たらどうであろう。さすれば彼女のマゾは芽生え、彼の求める理想の相手となるのではなからうか。しかし、辛じて、この悪魔的考えを阻止した後、我ながら、その愚さに一層自己嫌悪を感じたものである。

お宮入しかけた難事件を担当した刑事のよう、もはやこの依頼を私は持て余し、諦めかけていたのである。

そんな時、私を救ってくれたのは、名和弓雄先生の時代考証された、「十手、御用提灯からまで展」なる催物展が八王子のMデパートで開かれた時の、展示場での対談記事である。

江戸時代の刑具、捕物道具などが展示されそれを実際に用いたマネキン人形の捕縛姿、拷問場面などが見られたと云うか、こんな異様な会場に意外にも若い女性の姿が多かったという事実である。



以前に私も都内某デパートで催された同様の物を何度か見に行った事がある。しかし、いつもながら女性の見物客の事にまで気が付かなかった。

名和先生は対談の中でこう云っている。

「私が説明して廻る時、若い女性の見物者達は最初あらぬ方を見ているが、本能的に興味を覚えるのか、次第に熱心になり見物してました」と。

現代の若い女性が、このような事に決して無関心ではなく、それを一つの刺激と考えているのかも知れない。

この事が失望しかけた私の心に、望みを与えてくれた。そして私は待った。現代を割り切った理解ある女性の現われるのを。

○ ○ ○

私の身近かにアブの女神がほほえむ。

「事実小説より奇なり」

それから暫くして、この言葉がびったりするような事が、それもごく身近かで起ったのである。再三云うがこれは決してフィクションなどではない。真実本当の事なのである。その前日、昼から降り出した雨は、夜半遅くまで降り続いていた。

明日の日曜日は雨か、そんな事を考え、私

は床に入った。当然休日の計画は取り止めとなった。翌日、昨日の雨は嘘のように上り、外は絶好の春の行楽日和であった。しかし、昨日の雨が我々の行楽日程を中止させてしまっていたので、妻はこの時とばかり皆を下水掃除にかりだしたものである。

不平を云いながらも、暖かな春の日差しが別の意味で日曜日を満足させてくれた。

こんな時だけ泥の為に悪臭を放つ手足は井戸端で洗うが、いつもは、もうこの井戸を使う事はなかった。ここで少し家の様子を話さねばならない。私の家は下のKさんの家と地続きである。もともと一家であったものを私が上の一戸建を買い、暫くして下の一戸建を買ったKさん達が引越してきたのである。

私の方の宅地はKさんの宅地より一メートル程高くなっており、そこに積まれた石垣がKさんとの家の堺になっていた。

その堺となっている石垣の脇に、手押ポンプがあり以前は両家共同でそれを使用していた。しかし、今はその井戸にホームポンプをとりつけパイプで水道を引いている。だからめったに、今ではこの井戸端を使うことはなかった。

井戸端がこんなに賑うのは、今となっては

珍しい事なのである。

井戸端の隅には、私の方の家庭ポンプのモーターを覆った木の箱と、Kさんの家のポンプを覆った木の箱とが仲良く並んでいた。手足を洗う子供達の騒然たる様子を眺めていた私は、ふとポンプの箱と箱との間に雨に濡れたものであるろう雑誌の干されているのを見たのである。

一面に青を見せる裏表紙には緊縛姿の女の絵が画かれてあった。一目で私はそれか奇くの最近号である事を知った。

この時の私の慌てた姿を御想像下さい。私と妻以外知る由もない、この雑誌を、心ない家内が濡れたからとはいえ、このような所に干すとは何と迂闊な事であろう。

妻の成せる業と思ひ込んだ私は、子供達やKさん宅の人達に発見されなかった事を願いながら、急いで生乾きのまま自分の書斎に持ち帰ったのである。

濡れて部厚くなったそれを、石油ストーブにかざしながら、書棚の鍵を開け奇くの近刊号を取り出した私は再度驚かねばならなかった。その中に、その一冊の同号を認めたからである。自分が最近に求めたそれと、今濡れて部厚くなったそれと。







## ガン作・マニヤのノート

## 濡れにぞ濡れし

芳<sup>よし</sup>野<sup>の</sup>眉<sup>まゆ</sup>美<sup>み</sup>

## A 十月号への返書

ヘヤ・ゲネラル・クロ夫人

橘 行司博士

山 嵐殿

赤シャツ様

田代 俊夫様

葉山 啓様

久我 庄一様

市川千鶴子夫人

## B 美しい話二題

## C 週刊紙から二題

## D 人生経験

## E 森山美歌夫人との二日間

## A 十月号への返書

ヘヤ・ゲネラル・クロ夫人

過酸化水素のパーセント混入は、食品衛生法はともかく、せっかくの美味を破壊するオソレがありますから、特別性サンプルびんを御使用することをお進めします。

それは、実にオソレオオイことなのでありますが、ヘヤ・ゲネラル・クロ夫人の柔らかなまっ白なオン肉体であります。

これなら絶対に腐敗するようなことはありません。誓って断言致します。ハイ。また、一週間分どころか、末ながく使用出来るという経済的価値もあるのであります。しかし、

「私は嬰一の傍に居て、彼に次期作品を書かせなければなりません」

とありますから、私のほうから、ヘヤ・ゲネラル・クロ夫人のお傍に参上します。喜々として飛んで行きます。

つまり、ですね、片手間に、チョイと飲ませれば、御主人のヘヤ・ゲネラル・クロも安心して名作を書かれるであろうと確信致します。そして、ヘヤ・ゲネラル・クロ夫人は彼の傍をカタトキもはなれる必要が無くなり、將軍はますます幸福そうな微笑を浮かべるでありますよう。

これで、皆が円満に治って、奇ク共和国は安泰なのであります。

ヘヤ・ゲネラル・クロ夫人



愛しています。ホント。

親分

(黒淵賀集子・コンスチチューション参照)

× × ×

奇ク共和国大審院長橋行司博士

私は特定の方を批判するようなことは致しません。シャクにさわる時は、どなたにでもシャクにさわります。これが私の長所でもあります。『花と蛇』を読物だと断言しても、団鬼六充生を批判する気は全くありません。一例をあげたのが、たまたま団先生の作品になったまでのことです。これでよろしいでしょうか。

旦那 拝復

(橋行司子・SM時評参照)

× × ×

山嵐殿

鶴見なら、別世界、御存知でしょう。今年

の元日に、観音様をハツモウデしたきりで、その後の観音様にお会いしてないのですが、元気でしょうか。また、そろそろ観音様にキスしたくなった。群集の面前で、観音様にキスする気持、味わったものでないと、この感激ワカラナイよ。生きた観音様って大好き。

閑話休題。

「世相診断室」に書かれた「食って、寝て、性交して」の意味、トリチガエテいらっしやるように思えるのですが、人生経験の相違かしら。

「一筆啓上」と「読者通信」有難う御座居ました。うれしく拝見しました。ただし、別に「哲学的苦斗」は経験しておりません。そうおっしゃられると、全く困ります。夜乃さんとは、別に感情的になっていませんから御心配なく。売名の為の慣れ合い論議にならないように心掛けています。どなたに対しても感情的にならないのが、私の長所であります。箕田京二終身執政官殿が来店したら、サクラの神酒を飲ませることを誓います。絶対、水なんか飲ませません。

どなたに対しても、妥協は決して致しません。

ボンボン 一筆啓上

(木戸川健・世相診断室・読者通信・小説箕田京二・一筆啓上参照)

× × ×

赤シャツ様

昭和廿七八年頃の私と、現在の私と、どう興味があるのか、お教え下されば幸いです。勉強になりますから。決してナマタマゴはぶ

つけません。

坊ちゃん

(夜乃探郎・実録奇譚クラブ参照)

× × ×

田代俊夫様

「蚯蚓のたわごと」拝見しました。「不可解」な方に、説明しようとは思いません。これは感覚の問題であって、感じない方が理解しようとしても、根本的に無理なのです。

私にも、奇ク誌上で、不可解なSEXにぶつかって戸惑うことがあります。が、強い理解しようとも思いません。興味が無いだけです。それでよろしいのではないかと存じます。

『家畜人ヤプー』に関する批評は、全面的に同感です。どなたか、あの偉大な作品を、ヤツケル方がでてこないかなと心待ちにしておりました。

沼正三先生は、奇ク誌上での私の恩師ともいうべき方ですが、それとこれとは別問題。

神酒愛好者

(田代俊夫・蚯蚓のたわごと参照)

× × ×

葉山 啓様



「前衛」のお話、大変参考になりました。本質的な前衛小説に就いて、もう少しお話をうかがいたいのですが。その方法論をどうぞ。

破壊主義者

(葉山啓・私と私の周辺参照)

× × ×

久我庄一様

人間の本質は孤独だと思っています。孤独に立脚してSEXは展開すると考えます。SEXの実体は私にもわからない。ただわかっているのは、自分のSEXと考えている小さなSEXを裏切らないということです。序曲も終曲も孤独だとわかっていながら、終着駅に向かって、引かれたレールを走っていく。去ることは不可能。

だから、私は、孤独という言葉をも、軽く使用する方はキライです。

私のものの考え方、おわかりでしょうか。

謹白

(久我庄一・地獄メモ参照)

× × ×

市川千鶴子夫人

彼の知らないうちに、サクラがお手紙を読んでしまつて、ヤキモチを焼いたものだから

あわてて、M氏にプレゼントしたんだよって云ったら、ニッコリして、ああ、助かった。彼、ホントは、M氏にあげたくなかったらしいのだけど、約束は、守らなければならぬ。ソニンタ。

優しくて、慎ましい千鶴子夫人の醜態と秘めた香は、一生忘れることが出来ないであろう。お顔を知っているだけ弱い。

彼は、あまりにも陽気で健康なので、スケベで困る。女の子のお尻ばかり追いかけている。全くドウシヨウモナイ野郎だ。

コマネズミ拝

追伸——ヤキモチヤキのサクラに右の小指をかじられたので、彼はオオゲサだから右の手全部にホウタイを巻いたから、返事を書くことが出来なくなったので、フツツカナガラ代筆しました。

女予言者の予言通りだと、彼はボヤいています。

(市川千鶴子・読者通信参照)

## B 美しい話

その一、中元

「お中元」

「どうも有難う」

「着たら、見せてくれる」

「いいわ」

「ホント」

「ええ、いいわよ」

「それ、ビキニのおパンティだよ」

「あら」

「いつ見せてくれる」

「——」

「わざわざ、すけて見えるのを選んだんだから」

「H」

「今でもいいよ、穿いてみせてよ」

「やだあ」

そこで、だ、美女の隣りに坐っている道德的な彼氏に云ったね。

「俺の代りに見ておけよな」

残念でした。

× × ×

その二、虹

そのバーはマンションの一階にあるから、トイレは共有だった。

キャバレーのホステスさん達が酔っていたから、午前一時頃でしょう。

三人が一度にトイレに立ったら、ホステスさんの一人が、戸を開けたまま、堂々と、美



しい虹を描いていたんだ。

閉めようだったって、戸に手がとどかない。

そこで、三人は用事をあとまわしにしたのは勿論である。

中の一人が、そのあられもない美女のところにつかつかと近寄ったと思召せ。

ドアを閉めてやるのかと思ったら、まだ発射中の彼女の肩に左手をやさしくかけたね。

「これから、俺とつきあわないか」

奴の右手は、うしろにのびて、

「ホテル代、借せよ、早く」

ホント。

そのトイレの中の美女を誘ったのは俺じゃないよ。

### C 週刊紙から

その一、平凡パンチ八月九日号「海外話のタネ」より。進歩。

——人間はこと性行為に関しては、この何千年間というものの、まったく進歩していないのだそうだ。

——ほかのことはすべておどろくほど進歩したのだから、セックスの方法も、このあたりで新段階にはいるべきだ、とスエーデンの性科学者たちは主張している。

——受胎を目的とするばあいは別として、セックスを楽しむだけのときは、昔ながらの方法は忘れて、まったく新しい方法を見つけるべきだ、というのだ。

——だれか、おもしろい方法を発見してごらんよ。

そういうこと。

その二、女性セブン七月廿八日号「医学の相談室」より。酸化。

投書——生理日のおいが気になるのですが、なにかいい方法は。

とあって、その答は石垣純二医博。

——においというのは、血液が酸素にふれておこるものですからね。血液を体内で吸収してしまつて、空気中の酸素にふれさせないように入式にすればにおわないわけですよ。つまり挿入式の生理用品で。

## ☆四馬孝☆力作画

### 時代風俗 女体切腹図絵

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

略号(ゆい)

#### 一、座敷牢の美女切腹

無実の罪によって、座敷牢に押し込められた武家の美しい娘。牢内に白布を敷きつめ、双肌ぬぎとなるや、自らの潔白をあらわすため、恋人の見ている前で、雪をあらわす真白い下腹をあらわにして、短刀できりきりと切りさばき、左の乳房の下に止めの一刺し。天晴れ覚悟の美女切腹の姿。

#### 二、介錯に果てる美女

ふくよかな胸、まろやかな肩口、可愛いくふくらんだ腹部をあらわして肌ぬぎになつて庭に端座した娘。ふつくと脂づいた左脇腹から脇下にかけて、脇差でたたかいた切り腹せば、介錯の刃がきらりと一閃。麗わしの美

女の細首が、さつと飛び散る血しぶきと共に身首異にする凄絶のシーン。

#### 三、駕籠の中の姫君切腹

氣にそまぬ縁談の相手の家へ駕籠で送られてゆく可憐な姫君。腰巻一つの裸身となつて覚悟の切腹を果す。守刀を抜き放つて豊かな脇下へずぶりと突き刺し、更に鳩尾へかけて十二分にはねあげて、凄惨にして美しい十字腹の見事な姫君切腹の有様。

#### 四、男装の美女切腹す

小姓姿もあでやかに身を変えた男装の美少女が、豊かな乳房もむきだしに着物の前をくつろげて、白く輝く下腹にしたかにかに突き刺す懐刀の切先。深夜の奥御殿にくりひろげられた倒錯美切腹絵巻。

#### 五、美女裸身の切腹

もはや逃れられないと決心した美しい腰元は、死んで操を守りぬこうと、すべすべとした柔肌のすべてをさらけだして、守刀の短刀を抜き放つと、下腹のたっぷり肉づいた皮下脂肪を切った上、咽喉元に止めの一突き。



問題は——酸化のことである。酸化しないような方法を、とればいいのである。

何が云いたいのか、わかるでしょう。

## D 人生経験

八月十日

「今、お会いしたばかりとは思えないわね」

「そうですか」

「二、三年前、もっと前かな、知っているみたい」

「甘えん坊だから」

「そうね」

「皆様がそうおっしゃって下さると、こちらでも、その気になってしまう」

「お育ちがよろしいから」

「顔が赤くなる」

「赤いのはウイスキーのせいよ」

S氏の書斎で二人はサントリーのオールドをストレートで飲んでいたのである。彼女とはその時初対面。S氏の紹介である。BG。

「飲ませていただけですか」

「いいわ」

ウイスキーの話ではない。話は飛躍する。飛躍しても、私はちっとも飛躍したとは思っ

ていない。自然のなりゆきである。彼女はS氏から私のことを聞いているはずであった。くどくど説明する必要は無い。人生経験の豊富な方は、それだけ理解するのも早い。

「浴室を拝借します」

とS氏に云った。

別に酔っているわけではない。私はいつでもシラフである。

書斎とウイスキーと浴室と彼女と、S様、種々と有難う御座居ました。

## E 森山美歌夫人との二日間

土曜日——美歌夫人のマンションにて。

(イ)

「テレビに」

とS氏が笑った。

美歌夫人とは、その時初対面。

ビールを、

「お茶がわり」

すすめられて鯨飲した。

「いかが」

美歌夫人が、ふと、微笑した。

「浴室にいらして」

蠱惑的な甘い声である。

服を脱いだ背中で、衣づれの音がした。

「どうするの」

眩しいほどのまっ白な裸体に、気臆れがして、あわてて眼を逸らした。

「お好きなように」

優しく云われて、やっと勇気が出た。

タイルに湯をまき、仰向けに寝た。

「立ったままでよろしいの」

「坐って下さい」

「はじめから」

「そのほうがいい」

「せっかちなね」

秘められた芳香が、ほのかに漂って、眼の前が、暗くなった。

(ロ)

S氏が着用している奴隷帯と毛皮のシッポは、平伏人氏の作に依るものである。

七月号の『奴隷』の中の誓約書に、

「奴隷は、特別の命令なき場合は、常に全裸にて、奴隷用革褌を着用の事」

とか、

「奴隷は、家畜となる場合、アーヌスに特別製の尻尾を挿入する事」

とある。その作品らしい。

スタンドのシェード越しに柔らかく霞んでいる美歌夫人の寝室は、絨氈も椅子もベッド



も刺激的な赤一色に統一されて、身震いするような情感が湧き立ってくる。

絨氈に腹這いになって、美歌夫人がS氏を飼育するのを見ていると、S氏の背中にまたがった美歌夫人が、長い睫毛の影をひっそりと揺らして声を掛けた。

「浴室に行きましょうか」

落着いているつもりでも、むやみにビールを飲んでいたらしい。

S氏が何も云わないのは、美歌夫人のほっそりした素足が、S氏の口に入っていたからである。

「さ、いらっしやいな」

S氏にかまわず、美歌夫人は促がした。

「今度は、立ったままですよ」

思うように口が利けないのが、いらだたしいが、自然に俯向いてしまうのは、どういうわけだろう。

くすっと、美歌夫人が笑った。

(い)

恥づかしかったから、ウイスキーを飲んだのだが、それがいけなかった。ビールとウイスキーと美歌夫人の美酒が混合して、酔ってしまったらしい。

「外野、うるさいぞ」

柱を背に鎖でつながれた。

「少し静かにしている」

S氏が飼育されているのを、舌の回転が良くなるにつれて野次った罰である。

「痛いよ」

「せいたく云うな」

いきなり口に詰め込まれて呻めいた。

「女王様のだよ」

耳元でS氏がささやいた。

「我慢して穿いていて下さったのだぞ」

「——」

「お礼を申しあげろ」

そんなこと云ったって無理だよ。

鎖に吊るされたまま、酸郁と秘めた芳香に酔いしれた。

どのくらい時間がたったのだろうか。

甘美な猿ぐつわがとられて、側に、美歌夫人が立っていた。

濡れるような赤い唇が近づいた。

美歌夫人はウイスキーを口に含んでいたのである。

それまで、しびれたように縮んでいた斗志が、急激に沸き上がった。

美歌夫人を抱こうとして手の鎖を忘れた。

手首を鎖でこすった。跡がついた。

美歌夫人の唇から、むさぼるようにウイスキーを飲んだ。続けて、二度、三度。

鎖をはずされて絨氈の上に長々とのびた。その口に、S氏がジョウゴをくわえさせた。ジョウゴはS氏の専売特許である。

美歌夫人が、そのジョウゴに腰掛けた。

うっすらと脂肪が乗って、腰まわりもゆたかな、悩ましい柔肌が眼の上にあった。

「こぼすなよ」

とS氏が云った。

「ここは浴室じゃないんだぞ」

そのあとのことは、よくわからない。

日曜日——ホテルにて。

(二)

そのホテルの浴場は混浴だった。他の客の姿は無かった。

入るなり、飲め／＼と云う。

「誰か入って来るよ」

S氏が驚いた。

「いいわよ」

よくないよ、と云おうとして、やめた。

「我慢してたのよ」

そう云われると弱い。S氏の乗用車でゆっくりとドライブしていた結果でもある。

「早く」



タイルに湯をまいて（これが癖なんだ）床にひっくり返った。ヤブレカブレである。

美歌夫人の両脚が、胸の両脇にある。誰かが浴場のドアを開けた瞬間、丸見えとなる。が、そんなことはかまわない。

あまり堂々としているので、美歌夫人の華奢のわりに、官能的な、透きとおったまっ白な裸体を見ることができない。ソシタ。

S氏はドアを見つめている。脱衣場に客の影があったら、すぐ知らせるつもりである。仁王立ちの美歌夫人は目標など定めない。目標に合わせるのは、こちらである。

水びたしになっても、ここは浴場である。終わった。

誰も入って来なかった。一番安心したのはS氏かもしれない。

これで解放されたと思ったら、そうはいかない。

「台におなり」

床に四つ這いになった。

S氏が美歌夫人をせっせと洗う。

柔らかな、暖かい感触が背中に伝わり、全身がむず痒くなった。どんな顔をして四つ這いになっていたか興味がある。

あわだらけになったところで、

「お湯をかけて」

今度はお湯びたしである。

S氏が美歌夫人と一緒に湯舟にひたった。勝手にしやがれ。そんなことは云わないよ。一組の客が入って来た。

(注)

料理が並ぶと、美歌夫人が、S氏に、入れ歯をとれと云う。

「入れ歯」

「女王様の命令でね」

「全部」

「そう」

「入れ歯にしたの」

せっかくの料理がたべられない。

と、S氏考えた。

女中さんが次の料理を並べている間、かたはしから呑み込んでしまうのである。

女中さんが居る間は、まさか、女王様も止められない。あつという間に、自分の前の料理を綺麗にたいらげてしまう。

「待ち切れないのよ」

美歌夫人が笑いながら女中さんに云った。

「次のお料理、早くして下さいね」

「朝食を抜いてきたものだから」

「よほど、おなががすいたのね」

「急がして御免なさい。欠食児童ばかりで」

二人は勝手なことを云っている。

「お豆、好きなんでしょう」

「――」

「わたくしの、さしあげるわ」

S氏は何もしゃべれない。しゃべると、入れ歯が無いのがバレるからである。そのしぐさがおかしくて、女中さんまで笑いだした。最後の料理が運ばれ、女中さんが下ると、美歌夫人はいきなりS氏を腰紐で縛った。そして、いつ用意したのか、皮バンドで背中を、尻を、打ち据えた。皮バンドは小気味の良い音を部屋全体に響かせた。

「音がー」

蹴飛ばされて勢よく横転したS氏が、小さな声で叫んだ。

「ー聞こえるよ」

それでも、美歌夫人はやめなかった。あまりにも刺激的な、強烈な酒の肴であった。時間のたつのは早い。

S氏を残して、汗を流しに浴場に立った。二人の留守に、入れ歯をして、御飯をたべつもりなのよ

と美歌夫人が、おかしように云った。浴場には、また、誰も居なかった。

今度は、見張りもないのだ。

二人だけであった。



# 四馬孝画 秘蔵版 責め画集 分譲

## △責められる美女波津子の痴態▽

大中判印画紙焼付 五枚一組 一〇〇〇円 略号(しお)

- 一、白く輝く肌にどす黒い縄。
- 二、恐怖の浣腸責め展開す
- 三、庭に於けるハダカ責めシーン
- 四、裸の美女荒縄の股間縛り
- 五、チェン・ブロックの吊り

## △可憐な美少女加奈子の羞恥責め▽

大中判印画紙焼付 五枚一組 一〇〇〇円 略号(しる)

- 一、捕われの美女加奈子の運命
- 二、ローソクの火責めにあう
- 三、逆エビ縛りの柱宙吊り
- 四、股間縛りで被虐の絶叫
- 五、鑑賞に供される緊縛美体

## 『花と蛇』画集

大中判五枚一組 一〇〇〇円 略号(えに)

- 一、京子に芸を仕込む鬼源
- 二、静子令夫人への汚辱
- 三、操り責めにあう美津子
- 四、片足挙げ縛りの桂子
- 五、粗相を強要される京子

## 浣腸と排泄画集

大中判五枚一組 一〇〇〇円 略号(えい)

- 一、恐怖の浣腸台の美女
- 二、浣腸のあとの楽しみ
- 三、百CCのグリセリン浣腸
- 四、塩水をヤカンで飲ます
- 五、排便を耐えぬく美女

## 女体吊責め特集

大中判五枚一組 一〇〇〇円 略号(えほ)

- 一、弓吊りローソク責め
- 二、エビ縛りの宙吊り
- 三、股間縛りの責め
- 四、美女の舌の先縛り
- 五、股間縛り鼻孔吊り

## 美貌汚辱と鼻責

大中判五枚一組 一〇〇〇円 略号(えは)

- 一、美しい女の鼻をなぶる
- 二、一本一本女の鼻毛をぬく
- 三、美女の口中をほじくる
- 四、泥絵具にまみれた顔
- 五、ラーメンを食べさせる

# 安原さゆり第二回妊娠妊婦フォト

## 第二回の妊娠について

「奇クサロン」にて、妊娠についてお話しをさせていただきます。妊娠の経過、出産の準備、育児の心得など、ご質問も歓迎です。また、妊娠中の体の変化や、食事のアドバイスもいたします。お気軽にご相談ください。

## 妊娠九カ月の腹

安原さゆり 三枚一組 四〇〇円 略号(にみ)

大きな腹部をもった妊婦の姿、まるで動物園の動物のよう。お腹の膨らみ、手足の動き、そして笑顔。妊娠の喜びが溢れています。

## 九カ月の妊娠腹

安原さゆり 三枚一組 四〇〇円 略号(にん)

側面から見た妊娠九カ月の腹。膨らみ、そして足元の動き。まるで小さな世界が広がっています。

## 八カ月の妊娠腹

安原さゆり 三枚一組 四〇〇円 略号(にへ)

全裸で撮影した八カ月の妊娠腹。足元の動き、そして笑顔。妊娠の喜びが溢れています。

## 九カ月の妊娠腹

安原さゆり 三枚一組 四〇〇円 略号(にの)

どたりと脚を投げだして横坐り。妊娠九カ月の姿。まるで小さな世界が広がっています。

## 六カ月の妊娠腹

安原さゆり 三枚一組 三〇〇円 略号(にそ)

妊娠五カ月から六カ月の姿。足元の動き、そして笑顔。妊娠の喜びが溢れています。



悪魔派・ハイド氏を夢みた……

## 「江戸川乱歩」の影の世界

—SMマニアの私は斯く推理するノ—

久 我 庄 一

「江戸川乱歩」の影の世界

△「一寸法師」と「パノラマ島」をほとんど同時に完結してから……一年以上の日子をついやしているのだが、その間かれはクサリっぱなしだったのである。厭人病そのものであった。……日頃、如才なく、社交性にとみ、ことに心の温かな人物だけに、いっそう取りつく島がない感じで、いつもほうほうのていで逃げてかえったものである。それでいてときどき、ひとりでこっそり浅草あたりを放浪していたらしいのだから、そういう乱歩の姿を思いうかべると、ポーのいわゆる群衆のなかの孤独という言葉を、私はしみじみと噛みしめなければならなかった。▽

—『オール読物』昭和四十年十月号—

「二重面相」江戸川乱歩・横溝正史

△摘宜抜粹▽

昭和四十年七月。——この時期はSMマニアにとって生涯忘れられないものとなった。日本推理小説の草分けでもある、あまりにも有名すぎる江戸川乱歩氏の御逝去を二十八日に見送り、続いて三十日、M派のメッカとしての世界を描く谷崎潤一郎氏を哀悼のうちに送った。

まさに二巨星落つ！——の感があった。

両先生の御作には私の半生涯の懐かしい思い出があり、いまも時によって再読、これからも耽読するであろうことは、間違いないこと

だが、特に私の青春にあって△阿片の妖気である。……そこに映える恐しき夢、奇怪なる幻の影……血と泥で、塗りつぶされた地獄絵巻△の乱歩の文学は制圧された時代を背景にしていただけに、いっそうの刺激と、この世ならぬ、妖しき耽美の世界を夢みさせてくれた。

△死の絵と死の島。奇怪な装飾品に囲まれて、昼なお暗き土蔵なる書斎で蠟燭の焰で執筆△という妖美な伝説を頭に入れて△江戸川乱歩全集△の『蜘蛛男』など胸躍らして読み耽けたものだ。

——江戸川乱歩氏の御逝去の報は、直ぐに私



にペンを取らせた。SMマニアでもあったからだ。

小説の面白さを知らしめ、物を書くという文学的開眼を、乱歩の作品は教えてくれた。そのくせ、純文学的な物を同人誌に発表することはあっても、本格的な「探偵小説」一篇だに書こうとせず、発表しようという野心だに起さなかった。(その理由をいま自己解明しようとする時間も無い。ただ、なんとなく読者として通してしまったのみ記す。)

せめて、私なりの「江戸川乱歩メモ」を書くのが、急務であり、探偵小説マニアとしての道ではないかと思った。

……だが、ペンは進まなかった。適当な刺激は創作欲を増すようだが、強烈な衝動はペンをにぶらせる。……書けない。その状態は、

「奇譚クラブ」十月号が発刊になった日まで続いた。ハマニアの目から見た両先生の業績なり作品感なりを今後の誌上に飾りたいと思います。何卒御投稿下さるようお待ちしております。V——の、「奇クサロン」の後尾にあった編集子の「哀悼の辞」にある一節が、私を焦燥させた。

「でも書けないのだ」と、私はその場におおむけになって声を上げた。

——二、三日たってから、やむなく「江戸川乱歩メモ」が書けないこと・という一文をものし、十一月号の「奇クサロン」向として投稿した。なにかほーっとした気持だったが、その底に淋しさもあった。

△あれもこれも書きたいことがある。それが取りとめもなく胸中を過ぎ去る。だが気持が一杯で、一つも私の頭にメモとしての構成をなさない……V

いまはやめたが、若い頃、江戸川乱歩の作品「猟奇の果」の主人公をまねて深夜の街を放浪し、巡査に、不審尋問をされたことがある。「奇クサロン」に投稿した一夜、乱歩を偲んで久方振りに、それを実行した。

▽作者註・土蔵での妖しき執筆伝説は「探偵小説四十年・江戸川乱歩著」(桃源社、36年七月刊)によると、「報知新聞」昭和五年十

一月二十六日号の六面最上段の大記事、カットは「名士の家庭訪問記」とあり、「……奇怪な装飾品に囲まれて、江戸川乱歩氏」とあり、砂上に、骸骨のところがっている写真が二つ、大きく入っている。……記者は余りの不気味さに——という調子で、それから段々話

が若い女のことになり、……目を美しくするには目薬スマイルを——という私の意見で終っている。——すべて、架空の会見記事である。しかし、私にはこれに抗議を申込むことは出来なかった。記事広告そのものについては承諾していたからである。この男は大毎時代の先輩筋に当るので……とうとう説きふせられて承諾してしまった。——だが、乱歩氏が極端な妖しき影に包まれ執筆したでないとしても土蔵の書斎が好きであったことはたしかのようである。

▽作者註・「江戸川乱歩全集」金色のレザ―表紙・昭和六年五月より七年五月まで平凡社刊行。十三巻・処女作から刊行完結時までの全作品、即ち長短五十八篇の小説及び八十篇の随筆、ポーの翻訳七篇を収録し、毎巻諸家による批評集が添えてある。「江戸川乱歩選集」も出版(新潮社・昭和十三年九月・十四年九月まで十巻。)

戦後も全集は三十七年前後頃にかけて(この全集所持せず、推察であること、御了承乞う)十八巻・桃源社刊。この桃源社刊をまぜて全集または全集類似の叢書は、同じ紙型を使った改装版をも加えると、六種。——正しくは四種。(同じ紙型を、使ったものをはぶ



く。

▽作者註・随筆と評論の本は昭和三十七年現在調・十二冊。大著『幻影城』『探偵小説四十年』ETC。

江戸川乱歩に関する文献は、その数多く特に戦前では『新青年』（博文館）、戦後では『宝石』岩谷書店（いまは廃刊40・九月に、光文社より同名の△宝石▽がでるが、推理小説専門誌ではない。）にエッセイが多い。☆〔著作〕は総体的に異版・改裝版を合せる（探偵小説辞典・中島河太郎・昭和二十八年現在によると）約二百冊に及ぶ。☆この稿、伝記ではないので、註としてはダイジェスト的に記したことを御諒承乞う。



駅前「東宝劇場」屋上、ビヤ・ガーデンでは黄昏の風を頬に感じながら生ビールをかたむけた。乱歩が、遠く昔、連作シリーズで「殺人迷路」第五回目に筆をそめたことがあったが、深夜の都会の谷間から妖しき幻影をとらえるには、未だ時間があつた――。ほろよい気分でそこを出て、私は時間かせぎと、いつも探書でやっかいになっているある古書店をのぞいてみた。私の頭は乱歩のことで一杯だったのでこ

りをかぶった「宝石」の旧号を幾冊か手に取った。（私が所持している「宝石」はバックナンバーが大分欠けていた）

△第一陣 早くも幻怪、ハイド氏と畸形少女が深夜に描いた恐ろしい殺人図▽

連作サスペンス小説 畸形の天女

第一回 江戸川乱歩――の文字が私の眼に飛び込んできた。いままで「殺人迷路」の世界を思い浮べてあるいてきたので、はっ！とした。

戦前の連作を空想していた私の前に、戦後の連作が眼に付く。この偶然さに、おどろいた。「宝石」昭和二十八年十月号の本文巻頭にある一篇だ。

前に読んだ記憶は多少あるが、殆んど忘れていた作品でもあった。

宮城貿易商社々長、宮城主助は、客の商談を熱心に聴いている顔をしながら、映画の二重写しのような感じで、全く別のことを考えていた。

何カ月もつづいて同じ場所を夢見ることがある。今日もまた、あそこへ行くんだなと思ふと、きっと、その同じ陰鬱な、しかしふしぎな魅力のある場所へ来ている。何か怖いものが待ちかまえているような気がするけれど

も、それが出てくるわけではない。そして、どんな現実の場所よりも懐しい。まるで母の胎内のように懐しい。

宮城主助は、そういう懐しい夢と同じものを人為的に作っていた。今日はその夢の国には「畸形の天女」がいる。彼女との逢う瀬を思うと、矢も楯もたまらない。四十五才の、商社々長の彼が青年のように、矢も楯もたまらなかった。――中略――変装の種は、古本蒐集用の鞆の中に、そろっていた。――中略――襟のあぶらじんだ、肘のすれて光った紺サージの背広、――――そこまでは読み進むうちにふと、九月号「サロン楽我記」△第十五回▽にのっていた辻村隆氏の「……夜乃探郎にハイド氏を託して、夢と空想とロマンのSM追求に生きる夜乃氏は、悪く云えば、ズルイのだし、よくいえば、夜乃探郎がそのすべてで、誌上公開主義者なのであります。」という文句がうかんだ。無刺激なきうつくつな社長にあってハイド氏を夢みることがはたしかに一つのスリルである。夜乃氏ほどでは無いが、私もハイド氏を夢みる一人かも知れない。ただ、伝記文学を好み、伝記物を執筆研究しようとする私には小説家の△感▽を大事にするが、それに、おぼれることを警戒している。





△夢により夢を△ではなく、夢に現実的な裏付けしようとする努力している。△現実の中に空

昭和五年発行の「アサヒグラフ」に掲載された若き日の江戸川乱歩氏。芳年の無残絵に熱心に見入っているところ。

想は更に飛躍する△という辻村氏の言葉は、それ故に私の共感をよぶ。ここで興味を感じ

るのはリアルに徹すると自称する辻村氏の旧作に『闇雲博士の回想』というハイド氏が主役である小説があることだ。辻村氏もまた私と同じような意味でハイド氏を肯定しようとする一人ではないだろうか……。奇クの投稿者は比較的、誌上でのハイド氏になりうることはやさしい。(編集部では実名と住所その他、投稿者の意志に反して、さらけ出すことは絶対にしない)

そこから(ズルイ)「ヒキョウ」という言葉もでるのであろうがその反面、その人なりの夢を見ることが出来、また告白の分野に金字塔も生ずる道もありうる。——乱歩氏は、そう乱歩氏はハイド氏を夢みていた一人ではあったろうか(作家にとって、自分の好きな世界はあまり創作的情熱はわき得ない。「畸形の天女」を書く乱歩氏が、ハイド氏を愛しないわけではない。)

雨上りの夜は街も華やかではあるが、どこか静かな夏の終りを告げるたたずまいもにじませていた。それがちよつとした横丁の露路に入るといつそう間のびした酔客のちよつしはずれの歌もきこえ、その感を深める。あれほどの人の渦に熱っぽい空気をかもしだした名物「仙台の七夕祭」も今になってみると、まるで夢のように思われた。

——その酒場で私は一人の知人とあった。彼は、私より年配で、古き良き時代の空気を吸った男であり『新青年』時代の探偵小説マニアでもあった。話はすぐ江戸川乱歩のことが話題になった。

彼も、私と同じく乱歩の死はショックだったようだ。私はさしさわりのない程度にハイド氏と江戸川乱歩のことにふれた。彼はつと一冊の雑誌を出し「読んだかね」と言った。そしてまた言葉を続けた。「オール読物・十月号が発売になった。その中に、早速、乱歩の死を偲んで横溝正史が『二重面相・江戸川乱歩』を書いているんだ。いまだから話そう——という、相当つつ込んだ事を語っている。いま書店から買ってきて、拾いよみしつつビールをかたむけていた所なんだが……」幸いこのバーはインテリイ・マダムと評判



の女が、経営しているの、特によばなければ、ウエイトレスはあまり近づかず、自称、文化人の雑談場所には、もってこいのオアシスだった。

「おい、この所をみてみるよ」と、彼は入ってそり浅草あたりを放浪していたらしいのだからVという個処をゆびさした。

——彼と別れて、私は仙合駅に足を返えした——。

待合室の電気時計は九時を指していた。駅の売店で『オール読物』を買い求め、私はベソチで本をひらいた。乱歩の『一寸法師』と『パノラマ島奇談』を書いた後の、昭和二年当時の△放浪時代Vの事は、『探偵小説四十年』江戸川乱歩著でくわしく知っていた。だからいっそう横溝氏の『そういう乱歩の姿を思いうかべると、ポーのいわゆる群衆のなかの孤独という言葉、私はしみじみ噛みしめなければならなかった……。』の一節は刺激だった。奇クに、作品を投稿している小説家と、乱歩の場合は同じ作家でも立場が違った。公私共に彼は有名すぎた。

夜乃探郎氏ETCは、自分の分身でもある人物を作品に登場させて自由自在に活躍させ、実在の人物は、△?Vでいることが出来

る。だから、なんでも書けるだろう。(それが奇クの特異な新しい風俗文献誌としての存在でもあるが——)

——『一寸法師』発表当時になると、いよいよ乱歩は、グラビヤその他で、いっそう顔は知られることになった。本名も平井太郎・住所も公表されている。だから、もうハイド氏を描く世界は限定されつつある段階になりかかったようだ。

「新しい、乱歩が登場する——名作『陰獣』が十四カ月の全く、休筆ののち、昭和三年七月に『新青年』に発表を経て、その昭和四年度の△私は三十年の作家生活のあいだに、非常に多作であった時期が二、三度あるのだが、大正十五年度は、その最初の多作期であった。

——昭和四、五、六年は第二の多作期でVという再度の出発を、乱歩は、『探偵小説四十年』で『生きるとは妥協すること』(傍点作者)とタイトルしている。その意味で多作期がはじまったとは故、ハイド氏と乱歩の関係は、ますます離れて行くわけで、乱歩が夢み、ハイド氏を探偵小説にたくすことの出来た『パノラマ島奇談』あたりまでが、乱歩にとっての真実あるるまんある人生ではなかったらうか——。

後年『畸形の天女』(『宝石』28・10月号)

・『影男』(『面白倶楽部』30・1月号より連載)ETCなど発表する乱歩にとって、ハイド氏は不可能であるだけ秘やかな願望を持ちつつけてきた——それがうかがわれる。……ともあれ、そう、あの『一寸法師』の執筆を終って、ハイド氏の影が薄れゆくことを予期した江戸川乱歩にとって、その一つの吐け口は△放浪の旅Vということでもあった。

横溝正史は、江戸川乱歩を称していま△二重面相Vという言葉を使っているが、ズバリジエキル・ハイド氏を夢みる乱歩氏を意味していることにもなるようだ。

さて、この年の初め、私は『一寸法師』と『パノラマ島奇談』を書き終ると(同時に終ったように記憶する)いよいよベシヤンコになっちゃった。作品についての羞恥、自己嫌悪、人間憎悪に陥り、つまり、滑稽な言葉でいえば、穴があればはいりたい気持ちになって、妻子を東京に残して、当てもなく旅に出た。(『探偵小説四十年・昭和二年の頃』)

この状態について横溝氏はこう言っている△「しきりにおだててくれたので、私もその気になり」と、乱歩自身書いているように、かれはじつに、おだての必要な作家であった



—中略—おだてられていないと淋しくなり、自信を失い、クサリ、そして厭人癖におちいったがさいご、著にも棒にもかからない作家になってしまふ・原文通り—「二重面相」江戸川乱歩—▽

これも一理はあろう。長い近づきをしていた横溝氏の言である。だがはたしておだて、だけで心境の変化を左右されるだけだったろうか？小説家はおほむね小説に情熱をもてなかった時にペンを捨てる。乱歩はそれが激しかった。それは「新青年」大正十三年夏の増刊に、文壇諸家の探偵小説論が並べられたとき、乱歩氏は「探偵小説四十年」で「これから探偵小説を書いて行こうとしている私にとって、この編集は実に魅力がある」と言っており、事実、大正十四年度には「探偵作家専業」をころざし、この年は「新青年」の二月号から連続短篇をのせはじめた▽という点からも書く刺激が人一倍にほったことはいなずける。書く刺激があれば、自分からハイド氏にたくして進んで書けた時代もあったのだ。

処女作『二銭銅貨』をひっさげて（大正十一年の夏執筆）探偵小説界に登場したのが十二年の春だが、その一作でいちやく江戸川乱

歩がクローズ・アップされたとは云え、探偵小説家・江戸川乱歩の名が一世を風靡したのはハむしろ楽しんで書いたといってもよかった▽と乱歩が自称する『パノラマ島奇談』が大正十五年（昭和元年）十月から「新青年」

に連載され、同年十二月初旬から、約三カ月にわたって、東京大阪両朝日新聞に「一寸法師」が連載されたことをケイキとしていと推察される。（私は当時では唯一の報道機関でもあったろう新聞の宣伝価値をより注目したい。）ところが、その乱歩にとって、全盛期を迎えたとも思われる『パノラマ島奇談』と「一寸法師」発表いくばくもなく昭和二年三月・早くも当分筆を絶つことを決意、放浪の旅に、出ることになるわけだ。その原因を「愚作『一寸法師』に嫌悪を感じ▽と乱歩氏は、その『探偵小説四十年』で言ってるが、『二重面相・江戸川乱歩』では横溝氏は「それには『新青年』の編集者でもあった私にも大いに責任があり（『パノラマ島奇談』掲載について、乱歩氏は「例によって書き出しは大いに好評であったが、全体としてはさしたることなく編集部の方は余り喜んでいかなかったように思われる」と考え、横溝氏は、その当時のことを、いまになって「あの作品

に惚れ込んでいたのである。乱歩は「編集部でも終りの方は余り喜んでいなかったように思われる▽という、勝手な幻想を抱き——」と記している。

放浪の原因としては、『一寸法師』の方を『探偵小説四十年』では、特記してあり『パノラマ島奇談』については、あまりふれてない。横溝氏は『パノラマ島奇談』を特記している。——「私は朝日新聞に『一寸法師』を書いていく中途ごろから、一時休筆の決意をしていた。……中絶したかったのだが、許してもらえず、死ぬ思いでともかく書き終ったその苦しさは胆にこたえたのである。……しかし書くのをやめれば、忽ち生活に困る。▽と乱歩氏自身が言ってる『一寸法師』の放浪原因説もある。

——だが、その裏に秘められた「何か？▽はハイド氏の問題ではなからうか……。

——私は待合室を出た。

夜空に月は、星は無いが、私のこうふんしている身体に夜風はうれしかった。私はまたもあるきながら推理の糸をたどる。

奇巧の編集部としての江戸川・谷崎両氏への「哀悼の辞」に、たしか、殊に江戸川乱歩



先生は、本誌の直接購読者として……と記してあった。SMプレイなどは、しなかっただろうが、空想による耽美的なSMマニアではなかったらうか。

初期の短篇「二銭銅貨」から「人間椅子」などを経て『湖畔亭事件』そして「パノラマ島奇談」あたりまではたしかに江戸川乱歩の分身らしき者が、作品の中にかがわれる。

——私は幼少の時分、遠眼鏡とか顕微鏡とかいう、レンズや鏡に、関連したものが好きで——と『鏡地獄』の着想について乱歩は語っているが『湖畔亭事件』も「潜航艇の潜望鏡のような仕掛けが——そのモチーフとなっている。ともかく書きはじめた当時は、作品の中に江戸川乱歩の空想を自由にハイド氏にたくして書くことができたようだ。それにまだ、そんなに私生活までは読者は介入せず、書きたいことを書きたいように書けたのでは——。

「パノラマ——」と前後して発表された『一寸法師』を書いてるうちに、なにかハイド氏をおびやかされる影を乱歩は知った。「東京大阪両朝日新聞、二百万の読者というかけ声が、初めての私をビクビクさせた。Vと語る

乱歩氏が、何かガラス張りの箱（新聞紙上）

の中に神通力がうすれかかったハイド氏が多くの観客（二百万の読者）から、さらし者になろうとしているのを発見した。「書きたいことを書くのでなく、とにかくペンを運ばせなければならぬV」新聞社の督促はなかなか厳しく、間に合わなければ、口述筆記をとると（乱歩の言）——これではますますハイド氏どころではない。そもそもの乱歩の探偵小説への出発は、紙上を借りてのハイド氏を登場させることではなかったか……。『パノラマ——』では、紙上に夢のパノラマ島を創造しようとした。「D坂の殺人事件」も、『心理試験』も現実生活では考えられそうもないことを、紙上に再現させることで、それは「美VもスリルVも感じられ、血みどろな事実と違った世界が現出した。乱歩はたしか「現実の殺人事件Vはきらいだと言うようなことを語っていた。そう昭和七年の玉の井八つ切り死体事件があった時も、玉の井の事件現場へ出向いてくれという新聞社があったのを、私は例の人嫌いで——と、断ったと乱歩は記していた（『探偵小説四十年』）「二回目の休筆宣言の項V」

これは人嫌いばかりでなく、殺人の、「事

実」がいやなのだ。

▽作者註・名古屋の変態性慾殺人事件といひV——これがまたひどいものであった。女の皮膚をはいで、それを犯人が自分の顔に貼りつけて死んでいたというような事件だったと思う——実にいやです。こういうことを想像によつて書いていただけに、私としては事実を見せられるのが堪えられない。「探偵小説四十年」昭和七年度より・（傍点は作者）

乱歩は戦後になっていち早く本格探偵小説を提唱したが、本質的にはロマンチストであったようだ。

彼の推理小説界の立場が、指導的な意味でその方向として正しい公的な「本格推理小説」開拓に力をそそいだが、乱歩氏でなくあたりで書きたいものを、書きたいようにというそれこそ「変格物V」を書いてもらう気運を作ればおそらく、もっともっと、作品は生れたのではないか……。？……。

そう、「宝石」の昭和二十八年十月号に、乱歩がハイド氏を登場させたのは、彼の生涯にとつて、どれ程、ハイド氏という存在が秘そかに多きかったか判るような気持がする。



紙上にハイド氏の影が薄れようとした乱歩は、あの放浪時代（昭和二年度）小説に背をむけ、

「この一年間は、殆んど女房の住んでいる場所にはいないで、東京市内や近国を浮浪者のように、何の意味もなく、ある山国の昔風のランプを使っている淋しい温泉に一月居て見たり……上州のある町では、天勝一座がかか

## 女性切腹（時代篇） 絵巻

### 四馬孝画

略号（えま2）

大中判印画紙焼付 六枚一組 一〇〇〇円

若き女性の切腹のイメージを時代風俗に求め、その構想を縦横に發揮しようと試みたのが、この時代篇です。近代的なリアルなタッチを活かして、美しい過去の女性の姿を追求して貰いました。

- 一、落城の姫君、火中の自刃
- 二、武家の娘、覚悟の切腹
- 三、恋人に抱かれて切腹
- 四、介錯に落ちる女の首
- 五、死を賜った腰元の切腹
- 六、操を守る若妻の切腹

ここに掲載しました「えま2」「えま1」二組の切腹画は以前感光紙焼付にて分譲したものですが、今回御希望の方にのみ特に印画紙に焼付けて頒布いたします。

## 女性切腹（現代篇） 絵巻

### 四馬孝画

略号（えま1）

大中判印画紙焼付 六枚一組 一〇〇〇円

その精細にしてリアルなタッチにて、数多くの口絵を発表してリアルな独特の新風を吹き込んだ四馬孝氏が、女性切腹をテーマに制作の意欲を燃やして、うら若き現代的な女性に絶対命の境地に追い込まれて、自らの手で自らの命を断たなければならぬ場面を設定して、その哀婉に満ちた現代女性切腹の姿を彩管に托して、ここに華麗な絵巻が完成しました。

- 一、将校と女学生の切腹情死
- 二、女間諜ゆうべに切腹す
- 三、大和撫子、乙女の自刃
- 四、美女、雨中の腹立プレイ
- 五、夜会服貴婦人の切腹
- 六、女子大生の切腹自殺

っていたのが懐しくて、東京で見たままの番組の手法を見て……近所の一膳めし屋で食事をして、朝から晩まで浅草公園をぶらつくのを日課にしたり……」（随筆「無駄話」より摘宜抜粋）——などハイド氏が地上の影の部分をさまざまなのである。

探偵小説に、紙上にハイド氏のみならず無いような世界から、地上にむかってハイド氏をあるかせようとする、乱歩の孤独はそれが、△江戸川乱歩△の名が一世を風靡した時だけ

にいつそうその影は長かったらうか……。

探偵小説家としての名声が、上れば上るほど、出発当時、あれほどさっそうとしていたハイド氏の影も紙上に薄れ現実の中に、ハイド氏を見ようとしても、その探偵小説家としての社会的にゆるがぬ地位は、いつか、またその足をとどめてしまう……。

江戸川乱歩とハイド氏の関係は、いつも背をむけてしまふ△孤独△なドラマをはてしなく続けてきたようだ——。



——かつて、深夜、乱歩氏も放浪したであろう世界を久我庄一も——ではない、実名×××の中年男も乱歩の妖美な世界に流されながらハイド氏の影を意識しつつ……歩く。

腕時計を闇にすかしてみると、あのおなじみ△黄金仮面△が、明智小五郎がそして一寸法師△たちが、紙面からそっと抜け出し都会の、深夜の地上をわがもの顔におどり出るのであろう神秘的時刻、

——午前二時を指していた。

（終）



## 連載小説

花

と

蛇

団

鬼

六

## 続篇(第十一回)

## 美しき敗北者

全身に脂汗をにじませ、キリキリ齒を噛み鳴らして、狂気になって首を振り、傷ついた獣のようにうめきつづける静子夫人。

深窓の麗夫人の断末魔を見ようとして、夫人が人の字型に固定されている卓の周囲には悪徳弁護士伊沢を始め、田代、森田、川田や鬼源達までがつめ寄り、酒に濁った眼を細めて、仔細に観察しつつ、盛んに揶揄しつつけるが、もう夫人の耳には、悪魔達の哄笑も冷笑も雑音のように聞こえるだけであった。身分も自尊心も、一切の人間的感情も剥奪され、生まれたままの光沢のある裸身を卓の

上へ乗せている麗夫人に残された最後の抵抗は、悪魔達の期待する敗北者のみじめな浅ましい姿をさらけ出さないという、ただそれだけであった。

だが、悪魔達は、それを一層面白がり、笠にかかって攻撃の手はゆるめない。命をかけたよう、必死にがんばったものの、生身の悲しさ、夫人の体内の血は音をたてて、逆巻き始め、もう意志の力では、どうしようもなくなってしまったのである。嘔吐とも悦びともつかぬものが、身体内部から、ふき上げ出し、静子夫人は悲鳴に似た叫び声をあげて、艶やかなうなじを大きく見せて、のけぞるようにしたと思うと、がっくり悶絶してしまっ

た。

「まあーホホホ」

千代のけたたましい怪鳥のような笑い声。銀子の隠微な含み笑い。

美しい白い芙蓉の花びらが、ハラリと落ちた如く、静子夫人は、くずおれている。

静子夫人が失心する事によって、ようやく鬼達の責めは中止される。攻撃の矛先を抜いた銀子はニヤニヤしながら千代を呼んだ。

「まあ、すごいわ」

千代は、ハンカチで口元を押さえ、じっと見入っていたが、頓狂な声をはりあげて笑いこけた。

激しい暴風雨にあい、ついに決壊してしま



った堤防を悪魔達は、乗り出すようにして眺め合い、手をたたいて笑い合うのだった。

「おい、しっかりしろよ。みっともねえぜ」

川田は、意識を失っている静子夫人の頬を指でつついた。がっくり仰向いた静子夫人は眼を閉じたまま、小さく唇を開き呼吸している。彼女の美しい富士額には、べっとり脂汗が浮かんでいるのだ。

稀代の好色漢というレッテルをはられている悪徳弁護士の間達も、この屋敷に巣くう人間達が人もあろうに、絶世の美女と評されている遠山財閥の令夫人、静子に対し、このようならぬ責めを加えるとは夢想だにしていなかった。啞然とした顔つきになり、氣を失ってしまった美女の顔と痙攣しつづける身体に眼を落している。

全身にべっとり脂汗を浮かべ、人の字型に台上に固定されている美女二人。桂子の方は意識が回復し、顔を横へねじ曲げるようにして地獄の羞恥にすすりあげているが、静子夫人の方は、豊満な乳房を波打たせながら、意識はまだ回復しない。

それでは面白くないと思ったのか、川田は二つの豊かな胸の隆起に手をかけて、ゆさゆさと揺すりつづけた。

うっと、静子夫人は、小さくうめき、ようやく意識を元へもどしたようである。

何か遠いものでも見るように夫人は、そっと美しい瞳を開くのだった。

「へへへ、気がついたかい」

川田はニヤニヤして、千代と二人、まだ忘我状態の夫人の顔をのぞきこむようにする。

くすくす笑いつづける千代の視線に、夫人のうっとりした瞳が合った。その途端、夫人は、はっと夢から覚めたように眼を固く閉じて、耳たぶまで熱く染める。

「ホホホ、今更、羞かしがたって、手おくれよ」

千代は、キンキンした声でいい、再び笑いこける。

その通りだ。静子夫人は、遂に言語に絶するおぞましい責めを受けて、浅ましい姿をこれら卑劣な人間達の目前にさらけ出してしまったのである。もうそこには、口惜しさもなければ羞恥もない。そんな言葉で形容出来る生易しいものではなかった。自分の身体の内側に巣くう女という実体を、これら悪魔達にひきずり出され、臓物に至るまで、はっきり目撃されてしまった今となっては――。

嫌悪はあっても、肉体的な苦痛は、一種の悦びに変化しつつあるという事を夫人は、はっきりと知ったのである。やがて、こういう怖ろしい責めに対しても、精神的な嫌悪感は次第に薄れていくのではないか、静子夫人は、もうこうした異次元の世界よりの脱出は不可能である事を知悉した今は、この世界に狂い咲いた花として、生き抜く事を決心し今後、更に、この屋敷の化物達が自分の肉体を如何に変化させていくかという事に、むしろ、妖しい期待を持ち始めたのである。

銀子と朱美は、勝ち誇ったように静子夫人の耳もとに口を寄せ、

「フフフ、さすがに女盛りね。すごかったわよ、奥様」

「ちょっとや、そっとでは、始末しきれないわ。一体、どうすんのよ、奥様」

静子夫人は、ズベ公達に如何に揶揄され、如何に笑われても、眼をうっとり閉じ合わせ、小さく口で息づいているだけであった。

千代もズベ公二人の間に混って、

「すっかり拝見致しましたわ。ホホホ。御満足されたようね」

静子夫人は、元女中だった千代に頬を両手ではさむように持たれ、顔をしげしげ見つめ



られるのだったで、完全に敗北した事を覚った夫人は、

「ね、今、奥様、完全に——でしよう。御返事して頂戴な」

と催促され、うっすらと眼を開き、妖艶なばかりの瞳をキラリと光らせたが、すぐにうっとり眼を閉じ、かすかにうなづくのであった。

それは、無事、出産を終えた美しい人妻のような幸福に、浸っている表情でもあった。

「じゃ、記念に写真をとっておいたげるわ」

銀子、朱美、千代の三人は、カメラを手にして夫人の足の方へ廻っていく。彼女達は、くすくす笑いながら、夫人にレンズを向け、シャッターを切り始めるのだった。

静子夫人は、もう悪あがきはせず、男達が女達の仕事に協力する意味で、くちびるをこじ開け、舌を指でつまみあげるような事を始めても、うっとり眼を閉じたまま、させるがままにさせている。

今までの激しい抵抗が、まるで嘘のように静子夫人は、わめきもしなければ、あがきもしなかった。

「色々な角度から、たとと写真をとってあげたわ。これが遠山静子夫人の写真だとわかり

や、ものすごいプレミアヤがついて飛ぶように売れるわよ」

朱美が銀子の肩を抱くようにして笑いこける。

そうだわ、と銀子がホクホクした顔つきになって、夫人の耳元へやってくる。

「ね、こうなりや、ついでじゃないの。千代夫人と伊沢先生に、何もかも、すっかり見て頂きましょうよ」

次に観賞したい花は、菊の花、と銀子は唄うようにいい、川田や鬼源に自分のアイデアを説明する。

「なるほど、そいつは愉快だ」

早速、川田と鬼源は手分けし、梯子を持ってくる、美女二人が仰臥している上の天井の梁へ一本ずつの縄を通し、垂れ下がって来た縄の先端に各々一本ずつの青竹を横にしてつなぎ止める。

「さあ、奥様もお嬢様も、いいわね」

かっちり合に縛り止められている二人の美女の足よりその縄は解かれたが、ぐすまた、青竹の両端へ——。

怖ろしい責めに合い、身も心も完全に屈服してしまった夫人と桂子は、中身の無い人形と化したように、やくざやズベ公達のするが

ままになっている。

幾分かの後、静子夫人と桂子の足は、仰臥した台上から直角に折り曲げられた恰好をとらされていた。何時か京子とその妹の美津子が、すさまじい浣腸責めをかけられたのと同じであらぬないポーズを今、静子夫人と桂子は強制的にとらされたわけだ。

手に手にウイスキーの入ったコップを持ち野卑な男女は、みじめなというより一種グロテスクなポーズをとらされた二人の美女のまわりを取囲み、揶揄しつつける。

「まあ、可愛いいわ。菊の花とは、よくいったものだわ」

夫人のと桂子のを、千代は見くらべながら口を開けて笑い出す。

静子夫人の耳もとに口を寄せて先程から銀子と朱美は何かニヤニヤと話しかけている。

夫人は、心持、赤らんだ顔を横へそむけ、軽く眼を閉じて、二人のズベ公にいい含められてる事をうなづいて聞いているのだ。完全に屈服した静子夫人のいじらしいまで従順になった姿である。

「じゃ、わかったわね」

と銀子と朱美は満足した表情で立ち上り、千代と伊沢を手招きする。



「静子夫人がね。伊沢先生と千代夫人に、お話しがあるんですって。何だか知らないけど聞いてあげて下さいよ」

そして、朱美は、再び、夫人の耳もとに口を寄せ、念を押すように、

「いいかい。あんたは、もう森田組のピカ一女優なんだよ。うんと色っぽくお客様に持ちかけなきゃ駄目よ」

伊沢と千代が静子夫人の顔をのぞきこむようにして、朱美に用意された椅子に坐る。

「どう奥様、御気分は？」

千代は、夫人の頬を指でつつき、ニヤリと口元を歪めるのだった。

静子夫人は、うるんだような美しい黒眼を開いて、伊沢と千代を見上げる、

「静子のすべを、ごらんになって下さいました？」

静子夫人は、けだるい陶醉に浸りつつあるように小さく唇を開くのだった。

「ええ、何もかもね。もうこれで奥様の秘密は、何もないわけですね。ホホホ」

千代は口に手を当てて、くすく笑いながらいう。

「——静子も、これで気持ちがすっきり致しました。先程は、駄々をこねたりして申訳ござ

いません。二度と、あんな態度はとりませんわ。どんな事でも静子、喜んで致します」

千代は、金歯をむき出して、顔をくずし、

「さすがは、元、遠山夫人だわ。よく、そこまで決心して下さったわね。私も及ばずながら、遠山老人に対し、貴女が尽して来た以上に尽し、幸せにしてさし上げますわ。だから決して遠山家の事は心配しないで。というよ

り、昔の事は一切忘れて頂戴。これからの貴女は、どのような芸当も出来る日本一、いえ

世界一の秘密ショ一のスターになるべく修業することだけよ。それと同時に、一日も早く

美しい妊婦になって下さる事。女ってものは妊娠しなきゃ一人前とはいえないそうよ」

千代は、煙草を口にしながら、ペラペラしやべりつつけた。

「わかったわね、奥様」

銀子が含み笑いしながら、近寄って来て、

静子夫人にいう、

「——わ、わかりました」

静子夫人は、眼を閉じて、唇を震わせるようにいった。

銀子はつつけていう。

「じゃ、奥様、次に今夜のお相手になって下さる伊沢先生に対して、何かいいたい事があ

ったそうね。朱美のいうよう、うんと先生に甘えてごらんよ。ショ一のスターとして、奥様はまだ色気が不足よ。先生には悪いけど少しけいこ台になってもらって、さあ、お色気の練習といきましょう」

静子夫人は、銀子と朱美に教えられた科白を使って、のっぺりした顔を、ぬーと近づけて来た伊沢に対し、話しかけねばならなかったのだ。

「——ねえ、先生」

静子夫人は、気を持ち直したように、ごくりと唾をのみこみ、妖艶なまなざしを伊沢に向けるのだった。

伊沢も、静子夫人のその乳白色のきらめくような肌全体からまきあがるばかりの色香を感じて、ごくりと唾をのみこみ、圧倒された気分になる。かつての慈善パーティでふと見

かけた艶麗な静子夫人が、長い間脳裡から去らず、一度でもいいから、あの女をと、悶々としたものであったが、その夢にまで見た美女の眼もくらむばかりの落花無残の姿を、次々と見せられた上、なおも今夜は共に朝まで過ごせるのだと思うと、果してこれはこの世の出来事かとばかり、しきりに自分の頬をつつく伊沢であった。



「——静子——何もかも、あからさまに先生の眼にさらしてしまつたので、何んだか、お床に入るのが、羞しいわ。こんな静子ですけど、可愛がつて下さいます？」

静子夫人が話しかけた言葉に、伊沢は、これが色事師という名をつけられた男とは思えぬほどうろたえ出す。

「一度、あんな風になつたからって、静子、今が女盛り、熟れ切つた身体ですもの、先生が直接責めて下さるなら、二度でも、三度も——」

伊沢はたまらなくなつたように、吊り上げられて肉づきのいい夫人の太腿から、脛のあたりまでに接吻の雨を降らす。

「ああ——先生」

静子夫人は、白い歯を見せて、うめく。

銀子は、そつと、伊沢の傍へ寄つて来て、女に耳うちするようにいう。

「何なら先生、浣腸してやったら」

それをふと耳にした千代は、頓狂な声をあげた。

「まあ、浣腸ですって？」

千代は、大笑いするのだった。

「至れり尽せりの大サーピスつてわけよ」

朱美もゲラゲラ笑つたが、

「でもね——」

千代は、川田に注がれたウイスキーをちびりちびり飲みながら、

「これら先生のお相手をなさろうという奥様に、そんな事をするのはどうかと思うわ。こないない匂いをなさっている奥様を、くさくするなんて、先生に失礼じゃない」

「それもそうね。じゃ、お部屋の中での事がすんでから、先生の手でしてあげて頂きましようよ」

銀子は一人でうなずきながら、台の上で仰臥している静子夫人にいう。

「じゃ、奥様、大分、時間もくつたから、先を急ぎましようね。これから、たつぷり一時間、親娘ショーを、先生と千代夫人のお眼にかける。それがすめば、二階の寢室へ先生のお供をする。浣腸は明日の朝、桂子嬢と一緒に、先生と千代夫人の手で行つて頂く。わかつた。こういう予定でお願いするわ」

静子夫人は、身じろぎもせず、静かに眼を閉じ合わせているだけだった。

「じゃ、先生、明朝、十時頃、浣腸器と便器を、お部屋へお待ちしますわ」

朱美が、夫人の美しい、そして、すさまじい肢態を喰い入るように見つめている伊沢に

対してそういった。

悪魔達は、なおも写真をとりまくり、酒をくみかわして笑い合つていたが、頃を見計らつて、川田と鬼源は室の中央に敷かれている布団の上の天井梁へ、ロープを二本つなぎ止める。

二本のロープは蛇がからみ合うように垂れ下がつたが、その一本一本に夫人と桂子をつなげ止めるべく仕事を開始したのである。

「立技三十分、寝技三十分というわけよ」

銀子と朱美は、あられもない姿態となつて卓上に仰臥している夫人と桂子の縄を解きながら、おかしくてたまらぬよう顔を見合せて笑いつづける。

両手両足の縄を解かれ、卓上から下へようやく降ろされた静子夫人と桂子は、もう立ち上る気力もないように、床の上へ、へなへなとくずれ落ち、互いに身を寄せ合い、抱き合うようにして小さくなっている。

「それだけ休めば充分だ。さ、土俵の上へ行くんだよ」

川田に背をつかれ、若い母親と娘は、きらめくように白い裸身を互いにかばい合うようにして立ち上る。それは、古いローマの美しい彫刻の裸女のように、見ている野卑な男女



も溜息をついて眺め入るのだった。

## プレイ開始

布団の上へ追いあげられた二人の美女は、川田の命令で気をつけの姿勢をとらされる。夫人も桂子も、小さきみに身体を震わせつつ、消え入るような状態で並んで立つのだった。

「そんな気をつけがあるかよ」

川田は舌打ちして、

「両手を頭のうしろで組み、足を開くんだ」

川田や鬼源は、布団の上に、もじもじしながら立っている二人の美女に色々なポーズを面白がってとらせるのだ。

「銅像の西郷隆盛、桂子は犬の役目よ」

銀子がいうと、朱美が演出者気どりで、美女二人に、そういうポーズをつける。

「広瀬中佐に杉野兵曹野！」

千代も、キャツキャツ笑いながら声をあげる。

次に川田がいった。

「こんなのはどうだい。小便小僧だ」

どっと爆笑が起った。

朱美もふき出しながら、

「そう、たしかにそれも銅像に違いないわね」

そして、夫人と桂子を並ばせて、

「あんた達も見た事あるでしょう。さ、足を開いて、お手手は——」

朱美の指導で、そんなポーズを二人がとった時、再び、どっと、野卑な男女の哄笑がまき起った。

千代は、舌なめずりをしながら、カメラをかまえ盛んにとりまくっている。

これで、いよいよ静子夫人も桂子も本物のスターとして完成されてきたのだと田代と森田は顔を見合わせ、口元を歪めるのだった。

やがて、川田と鬼源は、それぞれ麻縄を手にして朱美にかわって布団に上る。

森田が川田にいった。

「何も縛り上げなくたって、ここまで素直になつて来た奥様とお嬢さんだ。手数をかけず演じて下さると思うぜ」

「しかし、親分」

鬼源が首を振っていった。

「まだ、そいつは無理でさあ。やっぱり、これだけは、当分、こういう方法で仕込みあげていかねえと駄目です。うまくごまかしやるもんですよ」

成程、鬼源さんのいう事だから間違いないだろう、と森田も納得して何度もうなずく。

「さあ、別嬪さん」

鬼源は、立ったまま、互いの肩に顔をうずめ合うようにして嗚咽している美女のスペースした白い背をつつく。

「本縄をかけるからな、しっかり胸をはって両腕を背中へ廻すんだ」

静子夫人と桂子は、すすりあげながら、観念の眼を閉じ、抱き合っていた腕を解き、静かに、うしろへ廻していくのだ。

「縛りやすいように、ちゃんと背中で手首を組み合わすんだ。」

鬼源はライオンでも調教するかのように、大声をあげる。

静子夫人も桂子も、自分はもう人間ではないのだと心にいい聞かせた如く、正面を向き胸をはり、両手を背中へ廻すと手首を重ね合うのだった。

「ほんとに、素直になってきたわね。教育のしがいがあったというものよ。あたしも肩の荷がおりたような気持よ」

銀子は、川田に手伝って、静子夫人に、ひしひしと縄がけをしないう。

静子夫人の雪をとかしたような、色香あふれる首筋には、どす黒い麻縄が、一卷二巻きし、縄は更にたぐられて、たくましいばかり



に盛りあがった二つの胸の隆起にわくをはめるようキリキリと締めあげていく。

「全くだいおっぱいをしてるわ。この半分でもいいから欲しい位。何だか口惜しいわ」

銀子は、わくをはめると、ねたましげに赤い乳首を指ではじき、川田と一緒にあまった縄尻をたぐりながら、形のいい臍を中心に菱形に縛りあげていく。更に余った縄尻を、二本にしつらえ、その一本一本は、尻の方から通されて、逆三角形に大腿の附根を二巻きばかり、固く巻きつけていくのだ。

桂子の方も、鬼源と朱美の手で、夫人と全く同じ形に縄がけされていた。

「さて、これでよし」

川田と鬼源は、仕事の点検をするように、本縄をかけられた二人の美女の周囲をぐるぐる廻る。

「いいおっぱいをしてるぜ。二人とも」

川田は、ビールをラッパ飲みしながら、夫と桂子の尻を平手でたたくのだった。

銀子と朱美は、じっとしてられなくなったのか、再び、近寄って来て、がっくり首を垂れている美しい顔をこじ上げ、

「さ、奥さん、今度こそ、本当に面倒は起きないでよ。じゃ、も一度、千代夫人と先生に

心からお願ひしてみてごらん。」

そして、銀子と朱美は、一流のスターらしく、うんと色っぽくおねだりして、今夜のお客様である伊沢先生を、カッカさせてくれなきゃ駄目よ、などと、その方法を色々指導し始めるのだった。

鬼女達が面白がって、耳もとでしゃべりつづけるおぞましい言葉を静子夫人は、魂を失った人間のように聞いていたが、

「——銀子さん。静子、——千代夫人や先生のおもちゃに喜んでなりますわ。でも、一つだけ、一つだけ、お願いがあるの。静子、一生のお願いです——」

美しい黒眼に一杯浮かべた涙が、キラキラ光っている。静子夫人は、もうほんとに、これが最後の哀願ですとばかり、必死な眼を銀子と朱美、更に川田や鬼源にまで向けるのだった。

「一体、何なのよ」

銀子は、ウイスキーを飲みながら、  
「まさか、今夜、伊沢先生のお相手するのが嫌だというんじゃないだろうね」

蛇のように陰険な眼を夫人に向けて、銀子はいう。

夫人の縄尻と桂子の縄尻を合わせて、天井

から垂れ下がっているロープにつなぎながら川田も

「先生と寝るのが嫌だなんていったら、奥さん、銀子や朱美が只じやおかないぜ」

「ち、ちがいます。そうじゃありません。静子は、よ、喜んで、先生の、お部屋へ参ります。でも——」

静子は、ハラハラ涙を頬へ流しつつ周囲につめ寄っている悪鬼達にいうのだった。

「じゃ、一体、何だよ」

「お、お願いです。今夜限り、桂子と私と一緒にして、なぶるような事は、なさらないで。それに、伊沢先生のお部屋へ、私と一緒に桂子も入れるというような恐ろしい事は、なさらないで下さい」

静子はたまらなくなったように激しく鳴咽しながら、ひきつったような声を出していたのだった。

「娘を思う親心ってやつだね」

川田は、鼻で笑うようにいうのだった。

静子夫人の必死な哀願を黙って聞いていた千代が、のっそり近づいて来ていう。

「わかったわ。奥様。奥様がお嬢様の身をおわれる気持を知って、私、感動しましたの。じゃ、そのお願い事、たしかに聞いてあげま



すわ。」

「——ああ、千代、千代子奥様」

静子夫人は、千代の顔に、美しい、うるんだ黒眼を向ける。

「私ね。最初はお嬢様の方も、奥様同様、たとえ、人工受精という手段を用いても、妊娠させ、奥様とコンビにして、秘密ショーに、出演させようと思っていましたの」

千代は、恐ろしい最初の計画を話し出すのであった。

「でも、考えてみりゃ、それは、あまりに残酷だし、私だって、それほど悪い方法を好む女でもありませんわ。奥様が私に約束をして下さるなら、私、社長にお願いして、桂子嬢は、明日から始まるショーに出演させることもせず、ただ地下牢に監禁しておくだけに致しますわ」

それを聞くと、静子夫人は、

「お願いです。桂、桂子だけは——」

あとは言葉にならず、声をあげて泣く夫人であったが、千代は、意地悪そうに口元を歪めて、

「そのかわり、私との約束を守って下さらなきゃ、いけませんわ。それはね。簡単なことですの。いいですか。これから始まる親娘ショ

ーは大熱演して、私を充分、楽しませて下さること。それから、今夜、伊沢先生をたっぷり楽しませる事、そして、最後に、何度もいうようだけど、三カ月以内に妊娠すること。もし、三か月後、私がここへ来て、奥様が約束を守っていて下さらなかったら、私は知合いの婦人科医をつれて参ります。確実な人工受精を致しますわ。勿論、約束を守らなかった罰として、お嬢様の方も、お受けになるわけよ」

千代は、そこまでいうと、例の怪鳥のような声をはりあげて笑い出すのであった。

「いいわね、奥様」

銀子と朱美が夫人の両側に立ち、びしゃりと尻をたたいて念を押す。

三カ月以内に妊娠しなければ、桂子も共に人工受精を受ける、何という恐ろしい悪魔の計画であろう。静子夫人は、身も心も完全に屈服した状態におかれていたが、千代のそういう言葉に全身鳥肌立つ思いになった。

「じゃ、三つの約束のうちの一つ、すばらしい親娘ショーをお願いしましょうか」

千代は、桐の箱をとって、夫人に近づいていく。

「今、教えてあげたように、ショーのスター

らしく、お客様にサービスしなきゃだめよ」  
今度は朱美が、ピチャリと夫人の尻をたたくのだった。

「さ、千代夫人と先生におねだりするのよ」  
銀子に肩をつつかれ、静子夫人は、涙がキラ光る美しい黒眼を開き、足下で桐の箱を開き、それをキャツキャツ笑いながら、手に持ち合っている伊沢と千代を見る。

「——さ、先程は、お手数をおかけ致しまして、申し訳ございません。どうぞ、取りつけて下さいまし、静子、喜んで、お受け致しますわ」

それを聞いて、千代と伊沢は、坐り直し、「ホホホ、じゃ、今度は、ほんとに、おとなしくして下さいましね」

千代は伊沢と一緒に仕事にかかり始めた。  
川田、鬼源、それに銀子達の眼が、一せいに千代の動作に注がれる。

静子夫人は、先程までの狂乱した姿とは、うってかわり、その熟れ切った光沢のある肉体は、風の晴れた海のように静かになり、うっとり眼を閉じ合わせ、千代と伊沢の作業を甘受しているのだった。

やがて——静子夫人は、美しい眉を八の字に寄せ、いーと白い歯を見せて、大きく首を



のけぞらせた。

「うまくいったわ、やれやれ」

千代と伊沢は、額の汗をふきながら立ち上る。

「どう、御気分は？」

千代に頬をつつかれた令夫人は、苦痛というよりも、むしろ、悦びに顔を歪めているように、見物する卑劣な男女の眼に映じたのである。

「まあ、奥様、よくお似合いですこと」

千代は、自分の仕上げた仕事をしみじみ観察し、たまらなくなつたように、伊沢の肩にもたれかかつて笑いこける。

「傑作だわ。ね、静子さん、この奥様の姿、カメラにとっておいて頂戴よ」

「あいよ」と銀子はカメラを手にし、そうなつた静子夫人にレンズを向け、幾枚もとりつづける。

「駄目よ、眼を閉じちゃ。大きく眼を開いてニッコリ笑って——」

朱美に尻をたたかれ、乳首をはじかれ、静子夫人は、カメラに美しい瞳を注ぐ。

「さ、桂子もよ」

言語に絶する悪鬼達の責めを受けつづける夫人の横に、これも同じく、立縛りにされて

いる桂子は、先程から恐ろしさのため、声もあげ得ず、夫人の背に顔を押し当てるようにして泣きつづけていたが、朱美は、桂子の頭髪をひきつかむようにして、ぐいとカメラの眼に向けるのだった。

「さ、二人とも、ニッコリ笑うのよ」

銀子がいい、二人の美女の背後に廻って、その両方の肩に手をかけるようにして、カメラの前にしっかりと並んで立たせるのであった。

静子夫人も、桂子も、もう完全に骨抜きされた女のように、やがて、その美しい顔をカメラに向け、朱美に強制されるまま、白い歯を見せ、何とか笑顔を作ろうとして、努力し始める。

「これ以上の幸せはないという風に、にっこり笑ってごらん。奥様の百万ドルの笑くぼをカメラにおさめたいのですわ」

千代は、そういつて、カメラを持ち直したが、たまらなくなつたように吹き出して、  
「でも、まあ、奥様、ほんとに傑作ね、そのスタイル——」

千代や銀子、朱美に強制されて、静子夫人は、無理に笑くぼをつくり、白い歯を見せてひきつったような笑顔を作るのだった。

「さて、写真も充分とらせて貰ったし、じゃ銀子さん。ホホホ、そろそろ次のショーを、お願いしましょうか」

千代は、カメラをケースにしまいながらいう。銀子は、うなずいて、異様に光る眼を二人の美女に向けるのだった。

「さあ、奥様とお嬢さん、千代夫人がお待ちかねよ。そろそろ始めて頂くわ。お互いに向かい合って下さいナ」

鬼源が、近ずいて、

「さあ、向かい合うんだ」

と、ドスのきいた声をはりあげる。

静子夫人と桂子は、鬼源に強要されて、互に向かい合い、涙にうるんだ美しい黒眼を向け合うのだった。

「まず、熱い熱い接吻からね。フッフ」

銀子は、朱美に注がれたウイスキーを一息に飲み、静子夫人の盛り上つた尻を一発づつ平手打ちするのだった。

静子夫人も桂子も、もう飼育された白い動物と同じである。二人美女は、互に向かい合い、気弱な眼差しを向け合っていたが、

「桂子さん、——許して」

「ママ、ど、どうしよう」



二十六才と二十一才のまるで姉妹のような若く美しい母親と娘は、元遠山家の女中、千代の好奇に光る眼の前で、魂も凍るばかりの恐しい演技を示さねばならなかったのだ。接吻し合ねばならぬ、という身の毛もよだつ屈辱だけではない。その次に、悪魔達は、

どういう行為をとらせるつもりであるのか、夫人も桂子もわかつている。あのように身も心もバラバラにされるような、おぞましい責めを互いに受け、森田組の永遠の奴隷になる事を誓わされた二人であるとはいえ、胸のはりさけるばかりの屈辱に、全身をぶるぶる震わせるのであった。

「なにを、ぐずぐずしてるんだよ。あんた達は、ショーのスターなんだよ。母親と娘の関係にあるかも知れないが、こっちは知ったことじゃない。照れたりせずしっかりおやり」

銀子と朱美は、互いに青竹を手にして、夫人と桂子の尻を突いたり、たたいたりするのだった。

「——桂、桂子さん」

「——ああ、ママ——」

静子夫人も桂子も互いに決意し合ったよう固く眼を閉ざし、そっと唇を近づけていく。唇と唇を静かにあてて、そっと、触れ合っ

いる二人の美女に、再び、銀子や朱美の叱つたが飛ぶ。

「レスピアンてものは、そんな生ぬるいもんじゃないだろう。お互いに舌を吸い合って、もっと熱烈にやらなきゃ、駄目じゃないの」

うしろから、青竹で尻をつかれる夫人と桂子は、遂に、唇を開き、舌を使って、銀子のいう熱烈な接吻を始めるのだった。吸って吸わせて、よだれまで流し合い、本格的な接吻を演じるころまで、二人の美女を追いつけた銀子と朱美は、どんなもんですといわんばかり千代の顔を見る。千代は、くすくす笑いながら

「こうして見ると、山本富士子、若尾文子共演の配といったところね。」

といい、銀子に向かって、次は、どういう風にするの、と聞く。

銀子はうなずき、屈辱の接吻をつづける美女の顔をニヤニヤして眺め、

「じゃ、次をお願いするわ。フッフ、いわなくとも、わかっているでしょ。」

銀子は、夫人と桂子に最後のものを要求するだった。

「ホホホ、今更、照れることはないじゃないの。そうね。二人とも両手が使えないのだから、専門家に手伝ってもらったげるわ」

朱美はそういって、鬼源と川田に眼くばせをする。

「へへへ、二人とも、全く、いいケツをしているぜ」

川田と鬼源が、夫人と桂子の尻をなぜつつ身を沈ませる。

途端に、静子夫人も桂子も、唇を離し、激しく首を振るのだった。

「待、待って、待って、川田さん！」

静子夫人は、がくがくと体を震わせつつ、泣き出す一歩手前のような哀願的な眼つきで川田を見おろす。

「——や、やくそくして。今夜で、今夜かぎり、桂子と私とを、こんな目に合わせないって——」

ハハハ、と大声で笑ったのは銀子である。

「だから、それは、奥様の心がけ一つだといってるでしょう。すばらしいプレイを演じて千代夫人を充分満足させてくれたらの話よ。」

ごまかしたプレイをしちゃ駄目よ。桂子を完全に——フッフ、そうしてくれなきゃ、今夜は桂子も、先生の寝室に入らねばならなくなるわよ」

銀子は、坐って、グラスを口に当てている



千代の方を見ながら楽しそうにいう。

ああ——と静子夫人は打ちのめされたように、首を垂れる。

悪魔達の眼に一切をさらけ出し、完全に屈服した肌身とはいえ、実の親娘ではないにせよ、こうした畜生にも似た浅ましい行為を演じさせられるという事に痛烈な屈辱感がこみ上ってきた静子夫人ではあるが、鬼女達は更にそれに追打ちをかけるよう、もし、静子夫人が桂子を、そこまで到達させ得なかった時は、伊沢の相手を夫人と共にさせるだけでは、妊娠させるための手術を受けさせるとおどすのである。

「あ、あんまりです、そんなこと、そんなこと、私——ああ」

静子夫人は、泣きじゃくる。

「やってやれない事はないさ。桂子を助ける方法は、それしかないのよ。一生懸命、がんばってみることね」

銀子は高笑いして、次に、桂子にいう。

「いいわね、桂子嬢、これからママがその気になって貴女を責めるそうだから、ママの努力を無駄にさしちゃいけないわ。貴女もその気になって、フッフ、わかってるわね」

さ、川田さん、と銀子がさいそくする。

「うっ、あっ、嫌、嫌っ」

静子夫人と桂子は、激しく歯ざしりし、脂汗のべつとりじんだ額と額を押しつけるようにしていたが、やがて、頬と頬とをびった合わせるようにして、むせび泣く。静子夫人の頬を流れる涙は、桂子の頬を伝わって流れ桂子の涙は、静子夫人の頬にうつって、したり流れるのだ。

かなりの時間がかかったが、ようやく川田と鬼源は仕事を終え、ほっとしたように立ち上る。

二人の美女は、はり合わされたように、びったり、体をつけ合い、そのすべすべした白磁の背中の中程に、たくしあげられている両手首が、憤辱のためか、ふるふる震えているのだった。

千代は、身をのり出し、のぞき見るように眺めて、狂ったように笑い出す。

長年、仕えていた遠山財閥の令夫人と令嬢が、畜生にも似た浅ましい姿を、眼の前にさらしているのだ。

「ホホホ、私の主人の遠山が、これを見たら何というでしょうね。」

卑劣な男女の団は、そんなポーズをとらされている美女の周囲を取囲むようにして、

一層、賑々しく、酒を飲み始める。

川田は、静子夫人の尻と、桂子の尻を交互にピチャピチャたたきながら、

「ここまでお膳立をしてやったんだ。あとは奥さんの腕——いや、尻の振り次第というところだぜ」

どっと、哄笑がまきおこる。

「さあ、ぐずぐずしてちゃだめ。始めて始めて——。うんとお尻を振り合うのよ」

朱実がそういつて、笑いこける。それに調子を合わせるようにして、千代が、ふらふらと立上り、全身を火柱のように熱くして、桂子と頬を合わせている静子夫人にいうのだった。

「ね、奥様、先程から伊沢先生、早く寝室へ入りたくて、うずうずなさってますの。あまり時間がかかると先生に失礼ですわ。ですから、ショーの時間は三十分と致します。その時間内、お嬢様を——ホホホ、もし、時間内に果すことが出来なければ、お気の毒だけど、お嬢様にも、先生のお相手を務めて頂く事になりますわ。まあ、そういつているうち五分すぎましたわ。あと、二十五分、ホホホ奥様、お急ぎになった方が、よろしくはございません」



## 【女相撲と女斗美写真】

## 湖畔女相撲

モデル 大塚啓子

二人とも「相撲」着用

雪崎京人氏から秀ノ山勝一著の「相撲」を送って貰ったので大塚の二人に十分研究させて室内で練習させた上で琵琶湖畔近江舞子にて女相撲を展開させました。光線の豊富な湖畔ですの激しい投げの打ち合いなども早いシャッタイでの動作をキャッチしました。今までの室内と違って野外です。その点迫力が出ました。暑いので何遍もの練習で砂まみれとなり、汗の間に砂が入って痛いといひ、悲鳴をあげ、いささかへこたれ、味で主なの、二人とも豊満な肉体的持主なので美しい写真が出来上りました。是非一見して下さい。

【第一組】略号(すや)

大手札印画紙焼付 二五〇〇円

【第二組】略号(すゆ)

大手札印画紙焼付 二五〇〇円

【第三組】略号(すよ)

大手札印画紙焼付 二五〇〇円

## 女斗美場面

モデル 大塚啓子

二人とも「水着」着用

【砂浜での格闘】

大手札印画紙焼付

十二枚一組 略号(すえ) 一〇〇〇円

「叢で止めをさす」

大手札印画紙焼付 略号(すう) 一〇〇〇円

「松林の中の死闘」

大手札印画紙焼付 略号(すき) 一〇〇〇円

## 全裸強烈縛り

大手札三枚一組 略号(なの) 三〇〇円

暫くの間非常に肉づきのよくなつた全裸の肢体に遠慮会釈なくからまる厳しい縄目のむごさ。

## 猿ぐつわにあえぐ

大手札三枚一組 略号(なむ) 三〇〇円

口も鼻も一緒に覆った布片の息苦しさにあえぎもがくが、急所の縄目に制せられて、すすり泣く。

## 真紅の腰巻をする

大手札三枚一組 略号(なれ) 三〇〇円

腰巻を腰に着けようとしているところ三ポーズを提供いたします。

## 膨大な臀部責め

大手札三枚一組 略号(なに) 三〇〇円

遅ましく盛り上った臀部をつきだしたポーズに縛られて今まさに暴虐の触手が迫まろうとする。

どっと、一座がわき立った。

静子夫人が、取囲む卑劣漢の冷笑、哄笑を全身に浴びながら、ゆっくりと尻を動かし始めたのである。それにつられて、桂子も、

再び、どっと、爆笑がわく。

「場末の三流ストリッパーだって、もっと、上手に振るぜ。あと二十分だよ」

川田がげらげら笑いながらいった。

やがて、悪魔の団は、伴奏してやるぜ、と手をたたき出し、お座敷小唄を唄い出す。

金切声をはりあげて唄っているのは千代である。ざまを見る、という気分、美女のダン

スを眺めているのだ。貧民くつで、育った千代は、上流階級にある人間に対しては、常にひがんだ見かたをするのが、習慣になっていたが、美人に対しても、同じようなひがみを持っていた。同じ女でありながらどうして、こう差別されなきゃならないのか、あるえらい人は、人は、生まれながらにして平等である、などといったが、それはとんでもない間違いだと思うのである。容貌や肉体が平等でない限り、ほんとうの平等なんてありはしない。遠山家に女中奉公することになり、絶世の美女だと評判される静子夫人の世話をしなから、夫人の美しさを、ねたみつつけて来た千代である。

眼の前で、言語に絶するプレイを演じつつける静子夫人と桂子の二人を、千代は、薄笑いを浮かべて、銀子達と一緒にからかいつつける。静子夫人は、遠山の娘、桂子の成熟した肉体を、また、桂子は、父の後妻、静子の脂の乗りきった女盛りにある肉体を、如何に二人は感じ合い、如何に、苦しい切ない気持で、強制されたプレイを演じ合っているか、想像するだに、わくわくする千代であった。肉体的苦痛より精神的苦痛の方が、夫人と桂子にとって、たまらないものであるはずだ。



桂子が、そういう状態になるまで、静子夫人に責めさせる、という銀子の念の入った残忍さ、そういう銀子の異常神経は、千代にとってはむしろ頼もしく、この、いわば、母親と娘という立場におかれている二人の美女を肉体的極致に陶醉させ、母娘という関係を同性愛的関係に追いこんでやるんだ、と千代の体内に銀子に負けずおとらずの残忍な血が逆流し始めたのである。となると、静子夫人と桂子にはっきりした共通の秘密を持たせるべきだと思われる。やはり、この若い母と娘は今夜、伊沢の相手をさせるべきだ。そう自分にいって、自分でうなずいた千代は、素知らぬ顔をして腕時計を見ている。

「奥様、あと、十分よ、大丈失なの」

静子夫人と桂子は、烈しく泣きつつ、尻を振り合うのだった。

千代の腹の中は知るよしもなく、静子夫人は、桂子と共に、伊沢のなぶりものになるよりは、と、もう何もかもかなぐり捨てた心境でそこに命をかけたよう必死になり始めた。

「そうそう、その調子」

美女の尻ふりダンスを酒のさかなにしている悪魔達は、どっとわき立ったが、もうそんな声は夫人の耳に入らない。

# 四人の美女の縛られポーズの代表的作品集

女体緊縛写真のアルバム  
限定版グラビヤ印刷写真集

豊満と清楚

一般書店には一切市販しません。是非直接発行所へお申込を！

限定版頒価一部一〇〇〇円（送共） 略号「限二」

「モデル」

長野 良子——大塚

啓子——五月亜紀子——新井マリ子

「嫌、嫌よ、待って、ママ」

荒々しくなった静子夫人のテンポに合わせきれず、桂子は、激しく首を振り、泣きじゃくる。

「お願い、桂、桂子さん、お願いよ、ね、お願いだから——」

静子夫人も激しく泣きながら、桂子の唇をむさぼるように吸い、胸をすり合わせ、激しい調子で責めるのだ。自分を大きく傷つける底知れぬ苦しさ、得体の知れぬ官能の火花の間をただよいながら、奈落へ落ちたという言葉が、自分達、女同志の悲しい肉体の上にかぶさってくるのを、静子夫人は感じとったのである。

「あと五分よ」

銀子と朱実が、キャッキョウ笑いながら、携帯ラジオのダイヤルを廻し、

「このリズムに合わせてごらん」

ラジオは、ダンスをする美女の足もとへ置かれる。

コーヒルンパの、急調子な旋律が流れ始める。悪魔達は、酒を飲む手を止め、声を殺してガラガラするにこった眼をショーに向けた。

身体中、汗みどろになって、演じつつける白い女体。静子夫人も桂子も、一瞬、催眠術にかかったよう。その急テンポなリズムに合わせて動き始めたのである。波打つ乳房、揺れ動く尻。見守る男女の間から、どっと爆笑が渦巻き上る。

「ホホホ、奥様、大熱演ね、でも、もう間もなくお時間よ」

千代は、ふらふら近ずいて行き、再び、たくましいばかりに盛り上った、静子夫人の尻



を平手打ちするのだった。  
その途端、がくりと桂子は、夫人の肩に顔を落してしまふ。

ベテラン山原清子、大塚啓子二嬢出演

Mフオト最新作

M場面決定版

Mファン待望の超傑作集

大手札印画紙焼付

各組十二枚一組

二〇〇〇〇円

八組全部にて

一三〇〇〇〇円

裸女二人の尻の下

十二枚一組

略号(まふ)

遅ましい素肌の臀部が男の顔の上に乗ってゆく、全裸の美女二人から責められる幸福なるMモデル男の生態。

二女の戯むれと男

十二枚一組

略号(まも)

美しい蝶々のように二人の裸女が尻に敷いた男の上にて、戯れていたが、やがて尻の下でうごめく男をなぶるのだった。

美女から縛られる

十二枚一組

略号(まね)

暴君と化した二人の遅ましい美女の前に跪いたM男は、必死の抵抗も空しく縄で厳しく縛られてゆく甘美な過程。

「桂子さん、ゆ、ゆるして、許して」

静子夫人は、激しく泣きながら、失心したように動かなくなった桂子の頬や首筋に接吻

男馬を乗り潰す女

十二枚一組

略号(まめ)

二人の肥った女を背中に乗せてハイドウドウ。いくばくもなく乗り潰された男は、勝気な二人の美女から辱められる。

痛烈ムチのご馳走

十二枚一組

略号(まれ)

後手に縛りあげられた男は、二人の裸女にとつては恰好の遊び道具である。男の肌にムチが炸裂してミミズ脹れが凄い。

首絞めで刺す止どめ

十二枚一組

略号(まむ)

いくら痛めつけても喜んでるM男に対しては、最後の止めとして遅ましい太股による首絞めで昇天させてやるのがよい。

汚臭と足舐の強制

十二枚一組

略号(まり)

女の肌にじかにつけていたパンティを頭にかぶせられ、口に押し込まれても、縛られている男はどうすることも出来ない。

二女の臀臭に泣く

十二枚一組

略号(まみ)

肉づきのよい二女の臀の下に押し潰された男の顔は、醜くひしゃげ、その臀臭をいやという程嗅がされている。

するのだった。

白 い 指

「どうしたのよ、美津子。まだ世話をやかせないの」

文夫の足もとにうつぶして、泣きじゃくっている美津子の背やお尻をつついて、義子と悦子はさいそくする。

「貴女の恋人じゃないの。今更、羞しがらなくて、おかしいわ」

義子と悦子は、業を煮やして、床に泣き伏している美津子の肩に手をかけるようにして引起しにかかる。

「あっ、嫌、嫌です！」

義子が美津子の白い手をつかんで、触れさせるべく持って行こうとすると、美津子は狂乱したように首を振り、尻をひいて、逃げようとするのだ。

「馬鹿ね、こういう風にすればいいのよ」

悦子は、まるで蛇使いが蛇の鎌首でも持ち上げるような平気さで、ぐいとわしづかみにし、二三度、揺り動かして見せる。

美津子は、恐怖に顔を歪めて尻ごみするだけだった。

「仕様がないわね。恋人に、それ位のサービ



スがしてあげられないのなら、こんなもの、あったって仕様がないうわ、ね、悦子、チョン切ってしまうおうよ」

義子が笑いながらいう。

「そうね、そうしなければならぬっていうのも、美津子嬢の愛情が足りないからよ。文夫さん。恨むなら美津子を恨むがいいわ」

悦子は、竹田に眼くばせをする。

「こんなもので、いいかい」

竹田は、ポケットの中から大きなジャックナイフを取り出して、美津子の目の前の床にズブリと突き立てた。

美津子の恐怖を充分に計算してから、竹田はナイフを引き抜き、文夫の傍に近づく。

「どうでえ、お坊っちゃん。よく切れそうだろう」

竹田は、ナイフの背で文夫の頬を軽くたたく。

「殺せ、一ト思いに殺してくれっ」

文夫は、わなわな唇を震わせていう。

「へへへ、一ト思いと、いうわけにはいかねえ。まず、ここを切り落とす、それから、耳にするか、鼻にするか——なあ、可愛いお嬢ちゃん」

竹田は、恐怖に顔を硬張らせている美津子

を面白そうに見て、

「どうだい。まだ、決心がつかないのか」

美津子は恐怖にがくがく歯が鳴り、一体どうすればいいのか、自分で自分がわからなくなっている。

「仕方がねえ」

竹田は、やくざが人を刺す時のように、びたりと自分の身体を文夫の身体に押し当てるようにして、左手で、ぐいと持ちあげ、右手のナイフを当てがった。

「待って、待って下さい！」

美津子は、竹田の足に取りすがるようにして、許しを乞う。

「じゃ、恋人の悩みをといてあげるのね」

義子が美津子の傍にしゃがみこんで、ニヤニヤしながらいった。

美津子は、すすりあげながら、小さくうなずく。

悦子も、舌なめずりをしやがら、胸を抱き立膝をして、小さくなっている美津子の横へしゃがみこむ。

「ね、お嬢ちゃん。貴女も色々修業して、女らしくなってきたけれど、これからはいよいよ本格的な修業に入るわけよ。明日は待望の夫婦プレイでしょう。その前に、男性

というものの身体の構造を、はつきり知っておかなきゃまずいわ。私達がそれを今、貴女に勉強させてあげようというのじゃないの。

しかも、相手がフィアンセであり、ショーのコンビである文夫さんなら、文句があるう筈はないでしょう」

さ、始めるのよ、と義子がひったくるように美津子の手首をとり、強引に、握らせようとすのだ。

「ああ——」

文夫の苦痛よりも美津子の羞恥の方が大きかった。

「遠慮する事はないわよ。さあ——」

義子と悦子は顔を見合わせて、くすくす笑いながら、慄えつつける美津子の身体を一層前へ押しやり、竹田も手伝って、美津子の白い手を——。

美津子は、その瞬間、息も止まり、身体全体が凍るのではないかと思った。心臓は高鳴りつつけ血の気は消えて、その美しい額から汗がたらたら流れ落ちる。

文夫の方も強烈な電気に感電した瞬間のようには首をのけぞらせた。

「いいわね。あたい達がよしというまでその手を離したら承知しないわよ。さあ、恋人の



悩みを解決してあげな」

義子は、文夫の前に、お祈りでも捧げるように膝まづき、両手を差し上げのばすようにしてすすりあげている美津子の背についていうのだった。

悦子も意地わるく、耳たぶまで熱くしている美津子に、

「ただそんな風に押さえているだけじゃ何にもならないじゃないの。こういう風にすんよ」

と、軽く包むように押えている美津子の白い手の甲へ、自分の手をそえるのだった。

うっ、と文夫は、突然の衝動に打ちのめされて、狂ったように首を振り、美津子も、嫌悪と恐怖の戦慄に身体全体を慄わせる。

「ね、わかったでしょう。お嬢ちゃんは夕霧

女子高校の才女ということだし、これだけ教えてあげりゃ、あとは一人で出来る筈だわ」

悦子は手をひいて、義子と二人、美津子の両側にあぐらを組むように坐り、美津子の仕事ぶりを点検しようとする。

義子、悦子、そして、竹田にまで背をつかれ、尻をつかれて、さいそくされる美津子は聖母像でも見上げるように屈辱に眼を閉じている文夫に、うるんだ美しい黒瞳を向け、

「——文、文夫さん、ゆ、ゆるして——」

美津子の白魚のように細い指先に力が入る

義子と悦子は、ニヤリと口元を歪めた。

「お嬢ちゃん、その気になってくれたのはいけど、駄目よ、眼をそらしちゃ。貴方の恋

人じゃないの。しっかり見つめながら仕事をするのよ」

美津子が、必死に眼をそらせているのに気づいた悦子は美津子の頬に手をかけて、視線を向けさせる。

「眼を閉じちゃ駄目。彼に対して失礼じゃないの。これ以上、あたい達に世話をやかせないでね」

義子が、美津子の涙に濡れている美しい横顔を見ながらいった。

美津子は、心も身体も、何か得体の知れぬ魔物に占領されてしまったように静かに眼を開き、ほのかに漂ってくる男性の妖気に、酔ったかのように、言われたままになるのだった。

## ☆本誌既刊号在庫一覧表

○本誌の既刊雑誌は左記の一覧表の通り在庫しております。昭和36年3月号以前の号は、全部売切れとなり在庫しておりません。

○倉庫整理の結果、36年4月号、36年6月号、36年10月号が若干出てきましたのでお申込み下さい

既刊号在庫案内

|           |          |
|-----------|----------|
| 昭和36年4月号  | (送共一七〇円) |
| 昭和36年6月号  | (送共一七〇円) |
| 昭和36年10月号 | (定価二〇〇円) |
| 昭和37年7月号  | (定価二〇〇円) |
| 昭和37年10月号 | (定価二〇〇円) |
| 昭和38年11月号 | (定価二五〇円) |
| 昭和38年12月号 | (定価二五〇円) |
| 昭和39年1月号  | (売切)     |

|           |          |
|-----------|----------|
| 昭和39年2月号  | (定価二五〇円) |
| 昭和39年3月号  | (定価二五〇円) |
| 昭和39年4月号  | (定価二五〇円) |
| 昭和39年5月号  | (定価二五〇円) |
| 昭和39年6月号  | (定価二五〇円) |
| 昭和39年7月号  | (定価三〇〇円) |
| 昭和39年8月号  | (定価三〇〇円) |
| 昭和39年9月号  | (定価三〇〇円) |
| 昭和39年10月号 | (定価三〇〇円) |
| 昭和39年11月号 | (定価三〇〇円) |
| 昭和39年12月号 | (定価三〇〇円) |

|           |          |
|-----------|----------|
| 昭和40年1月号  | (定価三〇〇円) |
| 昭和40年2月号  | (定価三〇〇円) |
| 昭和40年3月号  | (定価三〇〇円) |
| 昭和40年4月号  | (定価三〇〇円) |
| 昭和40年5月号  | (定価三〇〇円) |
| 昭和40年6月号  | (定価三〇〇円) |
| 昭和40年7月号  | (定価三〇〇円) |
| 昭和40年8月号  | (定価三〇〇円) |
| 昭和40年9月号  | (定価三〇〇円) |
| 昭和40年10月号 | (定価三〇〇円) |
| 昭和40年11月号 | (定価三〇〇円) |





10月号拝受致しました。何か近ごろ活気があるようですね。私のような者にはS派の方々のよろこぶ縛り写真のない現今の方が良い感じですよ。しかし、カットや挿絵は今少しあった方がムードがでているのではないのでしょうか。直接その文章に関わりなくとも、雰囲気のでる挿絵があったらと思えます。読者通信で私のものに反響があると些か嬉しい気がします。女武者ものを少し続けて書く心算です。まあ私は眉美さんや団さんの

ような馬力もガクもないのでせいぜい貴誌の一隅に、ささやかに小さなのれんを出して頂ければ幸いです。白表紙のころは、といっても私は白表紙時代のあとで古本屋で蒐めたのですが、沼さんや、原さんのような好エッセイがあったのに収支合わなかった由。現在も地味な形になり、而もあの頃より良いとすれば読者層ということが考えられます。表紙は白表紙時代がともハイカラでいいですね。何かともノーブルでエキゾチックで。とも角貴誌が存続してゆくことはM・Sその他の人々の喜びに違いありません。(万田不仁)

すばらしい映画が封切りされます。緑魔子の美容院の見習いがやぐさになされ刺し殺して栃木婦人刑務所に入れられる出だし八検身室Vの場面。女医の前に妙子を連れてくる。女医「さあ、裸にななさい」妙子乱暴に服を脱ぐ。女医「下着もとって」妙子、不貞腐れたようにパンティを脱ぐ。女医「後を向いて脚を開いて前屈みにななさい」妙子「女のくせに女の裸なんか見て、何が面白いんだい？」女医「面白くないよ。危いものを匿して持ってくる奴がい

るからね」いつかこのような身体検査がバス会社の車掌さんの入社試験で行われたと新聞で報ぜられたことがありますが、少くとも日本では大学の入試に際して男子に對して行われていると聞いただけです。勿論犯罪者の場合、直腸や生殖器が「かくし場所」になるから検査するので、事実密輸品がこれと少量で高価な麻薬や宝石がかくされてくる場合がかなりあるようです。以前男性の殺人犯が直腸に毒薬をかくしておいて、自殺したのは有名な話です。昔の小説「カンデイド」の中で海賊船に襲われ女性船客の直腸がしらべられる場面が出て来ますが、密輸品の容疑者に対してどのような身体検査が行われているかは是非知りたいものです。スチュワードス(エアホステス)などもよく逮捕されているところを見ると興味がつきません。先日、昭和二十三、四年頃のリーダーズダイジェストを読んでいたましたら、シベリヤ送りにされた女囚の体験記がのせられていました。やはり逮捕された時は頭髪などがすっかりしらべられ着物全部脱がさせられ、脚を開いてしゃがまされて検査されたところがありました。この後シベリヤの収容

所へ着くと又検査があつてここでは「毛ジラミ」の流行を防ぐという名目で、すべての女囚の陰毛が男性の手により剃毛されると言う下りがありました。女性の場合収容はセックスの問題もあることでしょうが又医学的にこのような収容者の性病の検診が必らず実施されているようです。同性の私としてもこのようにすることに興味がつきません。いつか「ミス……」がお金で不正に免許証を入手したため実刑を課せられるという新聞記事を見ましたが、彼女が逮捕されてから出所する迄いろんな場面を何度も想像してみました。又先日新聞には貴重品を宝石店でみせてもらふふり、そして、飲み込み、はじめは「身体検査でも何でもしてさがしてみよう」と居直ったものの、警察でレントゲンを撮ったからお腹の中にあるのが見付かったという記事がありました。その後どうして体の中の品がとり出されたか報ぜられていません。読者の皆さんと御一緒に考えてみたいと思います。(東京品川区・太田尚子)

○ 残暑の候編集部皆様の御努力感謝いたしております。貴誌を愛読



して十年余にもなりますが、その編集の御苦労には頭が下る思いがいたします。昨年あたりまでは松山市で貴誌が入手出来ましたが、最近では不可能となり、三カ月ごとの上阪で入手する次第です。グラビアがなくなり淋しくも感じますが、内容の充実が目に見えうれしく思います。昨日曜は、たまたま新聞により青木順子ショウの公演を見て、観賞するチャンスを得ました。今後とも貴誌の発展を祈りペンを置きます。(松山・青山須一)

○ はじめてお便りします。奇く愛読者の皆さん、お元気の事と申します。今年の五月号から皆さんのお仲間入りをさせて頂きました。昼は油だらけになって働いている者です。それでも早く家へ帰ってから奇くが見たいため、一生懸命働いております。私の好きなのは若い女性が手足の自由を奪われて責められるムードです。もしも私に、あの様な事が出来たらなあ、といつも空想にふけています。私は人並以上に身長があり体重もあるつもりです。もし県下に同好の女性がいましたら、文通しませんか。早目の便りを待っています。

(長野市・酒井辰夫)

○ 小生三年程以前「美姫城主の最期」という口絵をサロンに発表して頂いた事がありますが、其の後北海道の友人の牧場へ行っていました。牧場の附近は不便そのもので、手紙も思うように出せない所でしたが、最近自分の家に帰りましてので、早速行きつけの本屋さんで十六冊まとめて買い早々に拝見しました。悪書追放の声が高まり、貴誌がエロ雑誌と同類に見られたことは、誠に残念でなりません。帰宅して映画雑誌を見れば、日本拷問刑罰史のような残酷な血の流れるものや、白日夢の様な全裸の女を扱ったエロ的映画が氾濫し、都内の各ストリップ劇場のウインドウ内には堂々と股を開いて胸乳や腹に縄でしばり上げたストリップ、腰巻だけの高手小手に縛り転されたポーズなどは、一つも美しさはなくエロそのものです。その写真が大衆の面前にポスターにまでなっているのではないですか。その他スチール写真でも、バタフライだけの全裸に近い姿でエロとグロ的で、美しさなどは全然ない写真が氾濫している現在です。映倫の審査を楽々パスしてい

ますし、成人向としては当然の事だと思えますが、バタフライだけの大型ポスターやストリップのスチール写真などは未成年から子供達に至るまでが自由に見るわけです。聖人君子の様な顔をして道徳や常識論を当局はふり回しているが、倒錯美、悲愴美、緊縛の美しさを理解出来ない役人根性のたわ言に過ぎないと思います。今後共私達ファンの為め頑張ってください。(千葉県習志野市・小池生)

○ 私は長い間女斗美に限り貴誌を愛読してきました。なかでも「美術文学に現われた女相撲」「八重桜と君ヶ浜の血戦」や「娘相撲について・兄と妹の手紙」は内容に挿し画もよく水際立っていたようにおもいます。しかし、女レスリングについては空想的なものばかりで、これという程のものがなかったようにおもいます。と、申しますのは女子プロレスは女相撲と異なり(裸にまわしだけの本格的な女相撲興行というものは過去のもの、空想的なものとなっているのに対して)決して非現実的なものでなく、一時的にもせよ興行に成功しており、女のプロスポーツといえは女子プロレスと世の人が認

めたほどで、その記録や写真は女斗美ファンに大いに喜ばれるだろうとおもうからです。以下女子プロレス最盛期の様子を若干述べ、皆様の御一考を煩わしいとおもいます。昭和二十九年秋レスリングの本場アメリカより女子プロレスラーの一行が来日、各地で試合をし話題になりましたが、とくに一行中の花形ミルドレッド・バークの技・力・スピードに瞠目された方も多かろうとおもいます。ついでに申し添えますと、彼女は当時すでに三十五才、一児の母であり、それまでの十数年の長きにわたり不敗の王座(タイトルルマツチ)は女の場合でも男同様三本勝負を守り抜き、有名な「リング」誌やその他のスポーツ誌で、女レスリング史上並ぶものがない最も偉大な女子レスラーと限りない讃辞を送られているとのことでした。これに刺激されて数多くの女子プロレス団体が生まれました。翌三十二年八月十五日大阪府立体育館で行われたメイン・イベント山本芳子と東富士子の試合は両者体躯に優れともに二十三、四貫。竜虎相打つ自慢の肉弾戦を展開、事実上の全日本女子プロレスリングの選手権試合との前評判に応えたもの



でした。試合は十分余山本芳子の体固め勝ちに終わりました。残念なことは、この両雄(?)の一騎打ちはこの時限りで、山本芳子以来自他ともに許す不敵の女王の座につき、その美貌と堂々たる体軀をリング上に誇ったものです。続いて九月旧両国国技館で行われた第一回全日本女子プロレス王座決定戦で山本芳子はトーナメントで勝ち抜き、香取由美子とタイトルを争い、チャンピオンの栄光に輝き、東富士子はミドル級で王座につきました。更に三十一年月上旬旧両国国技館、一月中旬大阪での二回目、三回目の選手権試合へと続いたわけです。第一回、第二回目の試合はテレビでも放送され各スポーツ紙にも大々的に掲載されたものです。また映画「リングの女王」(山本芳子対香取由美子)「赤いパンツ」(山本芳子対双見昭子)「リングの女豹」(東富士子対T・水原)「花の決斗」「美貌のレスラー」等はごく最近まで上映されていきました。このように多数の女子プロレスラーの活躍が各地でみられたのですが、残念ながら写真一枚、記事一片も残っておりません。できれば貴誌で資料収集の上「女レスリング」特集を

行っていたただきたいとおもいますが、欲をいえば当時の十傑をあげ写真、体重、身長、対戦歴も載せて下されば女斗美ファンの反響は必ず大きいかと存じます。以上甚だ勝手ですがよろしくお願いいたします。(女レスリング愛好者より)

○ 八月六日旅行の途中、大阪に着いたわたしは報知新聞の芸能案内欄で、「エロ?グロ?サディズムの実演、青木純子、小浜みき、香月まさ子、ミッキー・ユリ、吉野劇場(野田阪神)」という広告を見ました。青木純子の純が気になりましたが、行ってみました。やっと探し当てた吉野劇場には、まちがいなく青木順子が出ていました。ハベトナムを取り上げた世界最初の残酷舞台ノベトナムの女、青木順子、向井一也Vあまり上手でないオシバイや、長々とつづく「特出し」のないヌードダンスが一時間程つづいて、やっと青木順子のショーがはじまりました。内容が捕えられたベトナムの女を、昔の恋人が責めるといふものですが、縛りの場面は拷問しほりなどを含めて、あざやかで迫力のあるもので、このシーン一つで五〇〇円出した価値があったというもの

## 刺青姐御脇差短刀六尺禪腰巻勇姿

### 禪一本艶姿脇差

大手札印画紙焼付  
八枚一組 一五〇〇円  
山原清子 略号(てね)

### 禪一本艶姿短刀

大手札印画紙焼付  
十二枚一組 二〇〇〇円  
山原清子 略号(てし)

### 腰巻一丁艶姿短刀

大手札印画紙焼付  
八枚一組 一五〇〇円  
山原清子 略号(てな)

### 腰巻一丁艶姿脇差

大手札印画紙焼付  
十二枚一組 二〇〇〇円  
山原清子 略号(てふ)

です。できれば脚本にもう少し手を入れて、一工夫ほしいところですし、青木順子のセリフがもう少し上手になれば、それこそ、特異のカップルとして日劇ミュージックなどにも出したいところです。今後の精進を祈るや切ないものがあります。話は変わりますが、今年の夏も日劇「夏のおどり」はオヘソの洪水、いかにも健康そのものの、英由美の特大的オヘソをはじめ、数十人から百人ぐらいのオヘソが腰ミノの上でユラユラするところ、は、まことに圧巻です。今東光氏が見たら喜ぶところでしょうが……。(多山皓)

○ 残暑きびしうございます。扱、

十月号拝読させて頂きましたが、少し読者として思うことがございます。旧号の懐古などは、文献としての整理の意味があつて掲載されていると存じますが、少しマニアの方の個人的な(私信)とも云えるのが多過ぎたのではないのでしょうか? やはり派手さはなくとも、文献(むつかしく考えなくとも)告白、手記、小説(創作)などの実に関するものがほしいうございました。今月号は殊に誌面をいづも占めておられる方々の個人的な、それでいて、あまり実のない文が目立ったと存じます。「本誌の信条」はやはり営業誌としては悲壮なものを感じさせます。理想



と発展を志さない編集者はないでしょうから。グラビヤ、挿絵、カットなどを慎しんでおられるため、誌面がともすれば、いかめしいもの感じられます。これも、カットなどの工夫で（もう少しアブストラクトにすれば）救われると存じますが、当分は編集の方の御苦心を要することでしょう。近頃、読物雑誌が従来の編集方針から脱脚出来ず、マンネリ化を来たしつつあるとき、ひとり本誌のみが、あらゆる受難に耐えつつも、その意欲の灯を燃やしつづけておられることは、驚嘆に価します。私

は奇クが、エロでもグロでもない真の文藝誌として、今後も着実に発刊をつづけるためには、やはり誌者との交流が第一と存じております。しかし、一部の読者や目先の現象や、周りの声にだけ囚われず、いつも広い見地から冷静に編集されることが、奇クの真の発展につながるかと存じます。編集部の方々の御健康を祈って居ります（大阪・白浜律子）

残暑きびしき毎日ですが、お見舞い申し上げます。先日は十月号を頂き有難うございました。いつも

ながら充実の奇クを拝見して居りますと、この二十年間が夢のようで今更の如く月日の経過の早いに驚かされます。エッセイばかりの昨今、小生には「浪江大五郎」のような創作が何よりも面白く、今後も「悦庵絵灯籠」を続けてほしいと考えます。又、谷崎文学についての原稿が十一月号を飾ること、早くも次号が待たれます。（静岡市・須渾朔生）

## 異色責写真分譲品

## 鼻責め万華鏡

大手札八枚一組

一〇〇〇円

モデル

MS 役

山原清子 鈴木晃子

略号（はた）

## 裸女レスリング

大手札四十枚一組

三五〇〇円

モデル

山原清子、大塚啓子

略号（れす）

## 入墨を踏みにじる

大手札八枚一組

八〇〇円

山原清子

略号（いつ）

## 黒禪奔放姿態

大手札十枚一組

一〇〇〇円

刑部典子

略号（ろち）

## 碧玉裸身緊縛

大手札三枚一組

三〇〇円

刑部典子

略号（のん）

## 全裸麻縄強烈縛

大手札十枚一組

一〇〇〇円

山原清子

略号（いね）

## 白禪奔放姿態

大手札十枚一組

一〇〇〇円

刑部典子

略号（ろて）

「特報ノヘビー級二十六貫白系ロシヤ人來演」の新聞広告を見、早速京都伏見ミュージックへ出かけ、たが成程看板に偽わりはないが、年の頃はもう年増もいところ、大ウバ桜、あの顔のシワに皮膚の弛みぐあいは四十の末ぐらいで体の方は大いに脂がのり、乳房も特大にはちがいないが特製ナイロン（透明）ブラで垂れた乳房を持ち上げ余りスッキリ（年令・乳房等）した女性ではないが、女性肥満体ファンには一寸食指は動きません、これから読者の方の街へでも巡業すればオッパイがブラブラ、オヒップがブリブリ、まア一見はしておいても、話の種にはなるでしょう。そのスタ（？）の名はマリガリタ。（滋賀県・赤畑修造）

芳野様、先月号では私書に對して懇切な返信誌上にて拝見致しまして厚く御礼申し上げます。一〇月号では、「夢の又夢」「濡れにぞ濡れし」何れも大変興味深く読みました。来月号楽しみにして居ります。東京・太田区の長谷川洋子様、貴方様の読者通信拝読致しました。暫らく杜絶えていた通信欄に素晴らしい女王様が登場されて何とも嬉しい事です。許されるならば直ぐにでも飛んで行って御前に平伏したい気持ちで一杯です。仰せの通り、犬でも馬でもトイレでも、御好きな様になされて結構です。四十才、一六三種、六八疋のこの身体を全力をあげて御奉仕に努めます。私の以前、御奉仕して居りました女王様は、大体貴方様と同じ様な体格の方でしたが、私と御会いになるときは決してトイレを使用なさらず、今日は朝からずっとこらえて居たのと極めて大量の神酒を一滴も外に洩さず直接戴いて居りました。そしてコートの約束迄して下さったのに、その方は海外に行かれたとかでコートの味は未だ知らず仕舞いになりました。葉山様、手記「私と私の周辺」大変面白く読みました。私



## 「今月の新版分譲品」

## 浣腸される清子

大手札印画紙焼付

三枚一組 五〇〇円  
山原清子 略号(かろ)

蒲団の上に足を投げだして長々と寝そべった清子さんの可愛いアヌスに浣腸器の嘴管は迫ってゆく。初めて試みられた清子浣腸実施の有様をごらん下さい。

## 浣腸に興ずる女

大手札印画紙焼付

八枚一組 一〇〇〇円  
山原清子 略号(かへ)

イルリガートル、エネマシリンジ、五十ccガラス製浣腸器というろに使用して自らの手で浣腸を施している清子嬢の艶なる姿はまことに刺激的である。

## 浣腸に悶える

大手札印画紙焼付

七枚一組 一〇〇〇円  
山原清子 略号(かに)

S Mに対して大きな理解をもつて没入している山原清子は、こと浣腸に関しても異常なまでの関心を抱いていることがわかった。もろもろの浣腸器に困れて、その陶酔の中にある表情をみて下さい。

## 乳房責め五態

大手札印画紙焼付

五枚一組 六〇〇円

山原清子 略号(てら)

刺青にばかり気がとられていたが、彼女のもう一つの大きな特徴はオッパイ小僧ばりの巨大な乳房である。内容の充実した重量感のある乳房が、縄によってどのような料理され誇張されるだろうか。

## 禪美に羞じらう

大手札印画紙焼付

六枚一組 八〇〇円  
玉田美佐子 略号(こん)

人一倍羞かしがり屋の玉田美佐子が全裸にされて、白晒の六尺フンドシをさせられたときは大変だった。大騒ぎをして恥らいながらポーズをとったが、さて、この魅力的な写真をマニヤへどうぞ。

## 啓子をいじめる清子

大手札印画紙焼付

八枚一組 一〇〇〇円  
山原清子と大塚啓子 略号(うの)

大塚啓子が殊の外は気に入った山原清子が自分のS Mプレイの相手に選んで縛り上げ、情容赦なく転がし蹴上げ、さんざんに弄ぶ様子は、二人とも若々しい美女だけに言うに言われぬエロチシズムがムンムンするS Mの臭気を混えて画面いっぱいに展開します。

## 啓子を縛しめる清子

大手札印画紙焼付

八枚一組 一〇〇〇円

もヴァギナよりも、アヌスの方が(女性の)魅力的であるとの説、共感です。矢張り崇養神のなせる業でしょうか。実現を目前にしながら果せなかった残念さが一層、この私の傾向を強めた様です。数少ない? コート党のために貴方様の今後の御活躍を期待して居ります。(富山・高岡久人)

十月号の愛知のT O生様の記事拝見致しまして私も色々勇気づけられました。私のもっているものは数こそ多いがほとんどニシキゴムのゴムカバーです。で早速そのダンロップ製のゴムカバー入手にとり掛ったのです。電話帳でダンロップの代理店に数軒当たって見ました。その内一軒が親切に教えて下さったのは、「当店に現物は無い。直接電話して見なさい」といってメーカーを紹介して頂いたのです。おむつカバーにはダンロップゴムと印してありますが、ダンロップゴムがゴム材を提供して加工をしているのは、実は大阪市東区淡路町一丁目一七の宇都宮製作所であったのです。ご存知でしょう、マニヤの方ならね、月経帯のメーカーですものね。電話でお値段を聞き五〇〇円を送金し、今日

郵便を受取り読者の方へお便りを書いている今、私はそのダンロップ総ゴムのプチプチした真新しいゴムカバーをおしめをせずに肌に直接着用しています。アメ色の半透明の魅惑的な良質のゴム、ああ、メンスバンドになったり、おしめカバーになったり女性に男性に愛されるゴム伸やかに柔かく私の腰にまといつくヌメヌメとした生きもの、ゴムの臭いがプンプンします。安田様貴方もどうぞお試しになりませんかT O生さんのヒント有難うございます。安田様吸い付く様な産後バンドメーカーをお教え下さいませ、あたくしもそんなのがほしい。生ゴムのコッテリ使っている産後バンドを、お産の後始末用に作られたものだけにメンスバンドよりずっと大きくゴム面積がうしろへ広がりは半ばおしめカバー的バンドと云えますわね。私はサクラ印産後カバーと云うのを五枚持っていました。もう何日もの使用で破れてしまったのです。是非ほしいのです。メーカーを安田様ならお調べ下さると思って厚かましくお願いいたします。お話は変わりますが、奇巧頒布のフォトで梨花さんのモデルになるもので全身ゴムづくめのものが数種発売になっ



て居りますわね。略号「こむ」あ  
 の中でピンキーバレリーナバンド  
 着用と云う解説紹介のあるフォト  
 御覧になりましたか？あれは一見普  
 通のパンティの様に見えますが、  
 よくよく御覧遊ばせ胴のところも  
 足の周囲も布製の様に折返しやふ  
 くらみが無いでしょ、布製のパテ  
 ッではありません。本当は極薄い  
 スーパーラテックス（超生ゴム）  
 製で何処にも縫目や継ぎ目、糊付  
 けなどの無いもので、型でぬき出  
 して作った製品です。ゴムの厚味  
 は氷のうと同じくらいです。色は  
 ピンクよりやや肌色です。ものす  
 ごく伸びが良いゴムで小さい方で  
 も大きい体の方にもピッタリする  
 事でしょう。このゴム製のパンテ  
 イに黒字でウエストジャーマニイ  
 （西独の事）と書いてある様にド  
 イツ製外国品でメーカーはピンキ  
 ー社です。東京日活会館のアメリカ  
 カンファーマシーで発売されたも  
 ので、すぐ近くの日劇ミュージッ  
 クのヌードダンサーやダンシング  
 チームの女子が足をピョンピョン  
 上げる舞台で使用する総ゴム製パ  
 ンティ型特殊メンスバンドで大量  
 にこの方々に売れたという事を知  
 りました。マニヤならずともこの  
 様なゴムのパンティは人々に必需

品なのですね。そのピンキー社バ  
 レリーナ専用バンドのフォトが奇  
 クにあり梨花さんが着用されてい  
 るのです。私も知人からこれを聞  
 いて入手致しましたの、それこそ  
 ネットリしたゴムのパンティその  
 ものです。薄着をする舞台で生理  
 日を休演するわけにも行かず極薄  
 ゴム製でかさばらずピッタリ、そ  
 してどんなに激しい運動にも飛ん  
 でもハネても安全なバレリーナバ  
 ンドです。神戸の宝塚歌劇からも  
 大量注文を受けたと代理店の方が  
 話して居られました。もともとピ  
 ンキー社は赤ちゃんのベビープロ  
 テクター製品メーカーでゴム製品  
 会社でその加工改造品で前記の  
 メンス用ゴムパンティが作られた  
 と聞きました。何かの引合せか、  
 ゴムに関したこんなお話を偶然に  
 お仕事の関係で知ったのです。梨  
 花さんのお写真をも一度レンズ  
 で眺め直しました。奇クフォトは  
 本間にすばらしいものの集積です  
 わね。愛知のT.O生様、次に入手  
 するつもりのカバー以外の品物と  
 は何か、私にはあの文面で解りま  
 せんでした。もう一度詳しくお教  
 て下さいナ。（兵庫区水木通り・  
 大西良子）

葉山啓様。連絡先から手紙が返  
 送して来ました。私の連絡先は、  
 三月号の読者通信に有りますから  
 よろしかったらどうぞ。（東京・  
 芳野眉美）

関谷富佐子様、如何お暮しでし  
 ようか。貴女が本誌に登場されて  
 から二年にもなりますが、ここ一  
 年程は全く姿を消されました。グ  
 ラビアにも、分譲写真にも貴女の  
 は新しいのが追加されず全く淋し  
 い限りです。Sのムード派と自認  
 する私としては、貴女の演技では  
 ない真実に恍惚とした、緊縛姿態  
 は、見るものを鑑賞ではなく貴女  
 を責めている張本人如き錯覚に陥  
 らせ、Sのムードを部屋一杯に満  
 たしてくれます。貴女は奇ク史上  
 随一のM女性です。貴女の豊満な  
 肌は、肉の肉のしみた、そして  
 上品なマスクが厳重な股間縛りに  
 あって悶える姿態は一生私の脳裡  
 に焼きついて離れないでしょう。  
 最近奇クサロンにおいて、御夫  
 婦のSMプレイの写真、手記が発  
 表され、夫婦プレイの花ざかりの  
 感があります。貴女の手紙および  
 貴女の写真撮影時の詳細は塚本氏  
 によって数度発表された事があり  
 ました。しかし御自身のその時の

感想に関する手記は発表されたこ  
 とはありません。加うるに御主人  
 とのプレイについてなどは全く未  
 発表です。貴女の手記が発表され  
 たらどんなに嬉しい事でしょう。  
 編集部の皆様にもお願いします。  
 是非、関谷様御夫婦の近況、プレ  
 イの手記の執筆を働きかけて下さ  
 るように。（神戸・佐郎富夫）

万田不二先生、「浪江大五郎」  
 を楽しみにしていましたが、呆気  
 なく終わりました。浪江と大五郎の  
 出逢いとその後の展開こそ我々M  
 派の期待する所でした。シチュエ  
 イションだけで、あとは読者の想  
 像に任せるとは、万田先生とも思  
 えません。ズルイ、ズルイ。美し  
 い悪女達が横行した江戸末期を背  
 景にした先生の傑作を期待致しま  
 す。昔、芝居で見た白浪五人女の  
 艶麗さを思い出します。芳野眉美  
 さん（さんと呼ぶ非礼をお許し下  
 さい。それ程貴方の筆は水々しい  
 のです。）昔の奇ク時代からの愛  
 読者です。「悩ましのサディズム」  
 は最近での傑作でした。十月号の  
 「濡れにぞ濡れし」は少し筆が走  
 り過ぎたようですね。下の章を一  
 読して意味の判った読者は手を挙  
 げて下さい。その代りと言う訳で



しようか「御厨番秘聞」は、しつくりと落付いた筆で、これが芳野さんかと驚く程の豹変振りで。未だ続く由ですから、又楽しみが一つ増えました。三原寛先生。ソパイは如何致していますか。我々をガッカリさせないで下さい。ソパイを読みながら、シンガポールで見た印度映画を思い出しました。女豪傑が出て来て、ヤツと計りに敵兵を投げ飛ばし、うつ向きに倒れた敵の両肩に飛び乗ると、腰の刀を引き抜いて、真向うから打ち下します。中年増のグラマー女優で、三年間セッセと印度映画館へ悪臭に悩みながら通いました。ペンの女王の活躍振りを御紹介下さるよう切にお願い致します。福田久文先生。キレイ事のみで済まさない先生の粘膜質なペンの愛読者です。変な議論に拘泥されず、独自の境地を開いて下さい。どうも近頃は議論が多過ぎるようです。平伏人先生。しばらく途切れていますが、如何で御座いますか。奴隷生活では仲々ペンをとる暇も無いかと思いますが、何卒、待ち兼ねている読者の為に御執筆をお願い致します。田沼醜男先生。九月号で久し振りに先生の筆に接し、昔の奇クを思い出しま

した。引き続き御活躍の程をお祈りします。箕田京二先生。田沼先生で思い出しましたが、ヤブーの沼先生、オラミイの真継先生、麻生保先生等の執筆にお骨折り下さい。忙しい先生達と思いますが、そこを押して原稿をとるのが編集者の手腕と思いますが……失礼の段、平にお許し下さい。(神戸・Y・K生)

○ 大阪市のカワカミ・ケイコ様。貴女のお名前を十月号の読者通信で拝見いたしました。小生、神戸に住んでおります、「花と蛇」の愛読者です。来年某大学を卒業致します。貴女が「露出症的なところがある」というのに非常に興味を持っております。女性の裸体をもぎたいというのは世の男性なら誰でももっている事でしよう。小生はM愛好者でもあり、芳野眉美氏の作品も愛読しております。浣腸を(女性に)してみたい、神酒をのみたいとも思っております。若い青春を奇クの思い出でいっぱい、うずめたいと願っております。将来の結婚相手は是非奇クファンからでないといいたしません。小生のようなM愛好者の男性と結婚する女性はいきと幸せでないか

### 〔今月の新版分譲品〕

#### 血紅使用

#### 屠腹される女体

大手札印画紙焼付  
十二枚一組 二〇〇〇円  
大塚啓子 略号(のる)

下腹部から脇腹、更に臍の傍から鳩尾へかけて、脇差にて切りさばられてゆく豊富な女体。やがて咽喉元に止めの一刀を刺されて、あきれ絶命。豊富な血紅を使用して、美しい女体が命を失ってゆく有様を順を追って、刻明に描写し、有様を最高の屍体となつた女の美しさを血紅使用

#### 美しき女の屍体

大手札印画紙焼付  
十二枚一組 二〇〇〇円  
大塚啓子 略号(のり)

下腹部を朱に染めて斃れた美しい女体。氷の刃を肌の上に残して、喉の刺傷から死血が溢れ、胸と咽の間に血が流れて、息絶えている。美が全面に漂っている。

#### 血紅切腹連続写真

大手札印画紙焼付  
十二枚一組 二〇〇〇円  
大塚啓子 略号(のせ)

なく腹を晒して、大勢の人達の前で、切腹の順序を連続で写真化した。そして、下腹から手まで血だらけにした。女の苦痛に、美しさと、胸に迫ってくることで、マニヤの方々の

#### 血紅使用

#### 切腹した女の死体

大手札印画紙焼付  
十二枚一組 二〇〇〇円  
大塚啓子 略号(のい)

自らの手で短刀によって下腹を切り、さばき、激甚な苦痛に悶え、切腹という崇高な儀式を終えた女は、今や全身を血に染めて、屍を横たえて、血を吸って、白い肌の上に見え、鮮烈なコントラストを作っている。人の目を魅了させるだろう。

#### 血紅使用

#### 立腹に悶える女体

大手札印画紙焼付  
十枚一組 一八〇〇円  
大塚啓子 略号(のさ)

一本の木の前で、散る花の如く、一羽の裸身で、仁王立ちになり、潔く立腹の壮絶なる実演を行う。麗らかな下腹を血まみれに、立腹したまま、行かう女体。切腹の苦痛に、展開したうつ姿、異性の目の前に、展開するマゾヒズム。性の昂揚するマゾヒズム。切腹の女







ばなりません。でも、三十分もすると疲れて倒れてしまいます。すると、お手伝いさんたち二人が、走り寄って私を容赦なく、鞭打つのです。鞭は、私がかう一度片足で立ち上るまで、加えられるのです。左足が縛られていても、どうやら立つことはできるのですが、鞭の痛さにおびえて、焦ってしまいますので、うまく立てないことも多く、また、すぐころんでは鞭を受けるのです。こんなことを二時間近く繰り返され、ヘトヘトになってしまいました。でも、こういう刑罰は、体が丈夫な私には、割合楽な方です。私は何カ月も、こんなケモノのような暮らしをしているのに、まだ羞恥心が捨てられないのです。先日も耐え難い屈辱を受けました。私は、床の間を後に寝かされ、両足を上げて上に挙げ自分の手でその足のヒザの後を抱くようにさせられます。ですから、腰が上を向いてしまうのです。哀れな私は、この姿で、生きながら花瓶になっていたのです。私の体から咲きでている（ホンコンフラワーでした）花を自分で見て、涙をこらえることができませんでした。その姿を半日以上続けました。花は、私の悲しさも知らぬげ

に、真赤な色を耐えず風にゆるがせていました。また、恥ずかしいことを書きましたが、お笑い下さい。旦那様との契約はあと二月です。私も、そろそろ二十四になつてしまいます。旦那様は、もう少し契約を延ばそうといわれますが、どうなりますことやら。皆様のご健康をお祈りします。（東京・山中冬子）

○ 山西一郎さんへ。十月号の通信を拝見しましたが、困った事になりました。八月号に通信が載った時には、とくにプレゼントをお送りした後でしたから、何処かで宙に迷っている事と思われます。妻も怒っている事ので、暫らくお待ち下さい。（市川高夫）

○ 大阪市の森本博司様、貴方の五月号でのお呼掛けを拝見致してペンを執りました。記憶していらないやうでしょうか？昭和三十年頃の奇巧の『被虐少年期』。貴方の好まれる少年刑務所を題材にしたものです。私があれを書いていたのは療養所のベッドの上でした。そして満たされぬ日々悶々としながら、それを原稿の形で吐き出していたのです。当時の苦しい闘

病生活のゆがみから箕田氏始め奇巧編集部の方に無理を云って迷惑をかけ、どうやら病に克ち社会生活に再起し得た今日当時の自分の態度、考え方の甘さを反省している次第です。『被虐少年期』の頃に較べれば現在の奇巧には溢れるばかりの文才を駆使される方々が誌上を飾っておられて華やかですね。そしてその反面、いわゆる男物少年物が少ないうらみもありま

す。私も今年で三十五才、一六四センチ五〇キロの瘦身ながら、唯ひたすら圧倒されるような、大柄で力の強い女性を求めていることは、今も昔もお変わりありません。でも未だに縁がなく独身であります。美人で恰好よくて気は優しく力持ちなどと自分自身のことを棚に上げて勝手な要求をしても、思うようには行かないものです。しかし私は何時までもこの夢を希望を信念を崩さず求め続けることでしょう。そして騎手待男が満男となる日を楽しみに、奇巧を愛読し活発な女性の出現を願うものです。（京都・騎手待男）

○ 暫く御無沙汰致しました。私は一昨年八月に初めて読者通信にお便り致し、また早速十一月にもお便りしましたが、同好の方の共鳴もなく、随分がっかりしたものです。その間唯唯毎月二十五日の発売日が待遠しく真新しい奇巧の表紙を書店で見つけることが随一の楽しみとなり、内容も見ないで早速に買求められるのも奇巧ならばこそです。八月号では木原氏の作品を拝見し私と全く同意見であることに本当に心強く思っております。

○ 私の妻と一緒に本誌を愛読している一人です。プレイの方も、私のS、妻のMで、毎日楽しく、くらしています。特に体にきずつく様なプレイは、好まず、もっぱら悦楽責、悦虐責の羞恥をねらったものが好きです。妻も、現在では、私に協力してプレイを楽しんでいる様ですが、これまでにするのは大変な努力がいりました。今では、股間しぼり、トイレでの責が、妻の好んで要求する責です。この間も、東京のロードショウ劇場の女性用トイレでプレイをいた



しました。その時の妻のすばらしさは、またの機会に本誌に書いて見たいと思います。この頃はトイレを主題にした責めがないので、妻も私も残念でなりません。分譲フォトも、この種のものを、もっと、多く出して下さい。奇クのアンの中には、PANTYファンも多い様ですが、妻の使いふるした、ブルーと、ピンクのPant yがあります。まだ使用できます。どなたか、ほしい方はありませんか？（横須賀市・斎藤住男）

河又光様、美しい人の穿いたひどく汚れたパンティを欲しいと云う、九月号の貴方の通信を拝見致しました。自分の容姿に私はそれ程の自信がある訳ではありませんが、私の名前が出た事でもあり、それに編集部がお答えするとも思われませんので、代って私が御返事申上げ様と存じます。河又様、貴方が本当に真面目な方で、しんから私の汚れたパンティをお望みになっていらっしゃるのでしたら、私の方もお送りするのに決して各かではありませんから、勇気

次号（十一月号）は十月二十五日に発売いたします

台風十七号も幸い大した被害も

を出してはつきりと、お送り先を御明記なさいませ。住所を隠したりしては卑怯ですわ。夫とはそういうお約束だった筈ではありませんか。私は貴方にその位の積極性を望みたいし、若しそうでなければ、今後貴方がどんなお仕事につかれたにしても、結局成功は覚束ないと思います（余計なお節介だったかしら）奇クファンでしたら、羞しくはあっても決して恥ではありません。河又様、貴方も男性でいらっしゃるなら、もっと堂々となさいませ。やはり殿方は何処か毅然とした処がなければいけませんわ。第一そんな事では、女の子にだって愛されやしませんことよ。私のパンティが、今後の貴方の生活に少しでもプラスを齎らすとするなら、私にとってもこんな嬉しい事はないのですから、貴方がお送り先を御明示になれば、直ぐにでも可愛いパンティを何枚か選んで、お望み通り存分に汚して差上げますわ。（東京都巣鴨・市川千鶴子）

なく海上に去りました。入れかわりに秋が近づくわけですが皆さんは如何におすごしですか。お送りいただいた十月号。久方ぶりの剣持氏の登場でしたが、残念にも首がどこにあるのかわかりません。水野氏のもそうでしたがやはりグラビアではなくてはならぬのでしようか。しかし想像の世界は広いのですからお互いに美しい夢を追いつけることに致しましょう。室井氏の「木馬の女」これから全身の体重が木馬にかかるというところでしょうが、私にはまだものたりません。今まで一番気に入ったのは「ギロチンの少女」ですが、首のとんだ瞬間とか絞首されて完全に吊り下った場合、及びハリツケ火あぶりなどの処刑中、処刑後の場面が私の望むところなのです。このようなものをお願い致します。それにしても前川氏はどうしたのでしよう。新宮氏も最近みかけないのはさびしい限りです。挿絵では一〇六頁が満点でした。本文の方も佐藤氏の「女斗美八景」が終ってから生首がでてきません。私の怪しげな、しかも幼稚極まる文章が結構採用になるのですから、マニヤの方はどしどし投稿願います。高野氏の「啓子散

華」第二ラウンド以下はどうなったのですか。みんなでよってたかって彼女をバラすことに致しました。カミソリの刃で喉の皮膚を少しづつ切ってゆき、頸骨と食道、気管。血管と神経だけ残して切り離してしまおう。こうして生きられるだけ生かしておいてから一刀のもとにバサリ。或いはローソク一本を使用するだけの火あぶりや、同じく一枚のカミソリでの股裂き。空気銃での銃殺。口をおさえ鼻をつまむだけの殺しなど、例によっていろいろ考えております。啓子嬢にも是非「殺される」記事をお願いしたいところです。「コレクター」という映画がきました。蝶を集めていた青年が美女を誘かいし自分のコレクションに加えるようにする。娘は必死にそれからのがれようとするが遂に殺されてしまふのです。私の空想コレクションには美女の生首が、死体がズラリ並んでいます。皆さんの如何ですか。奇クを発見してから三年になります。いつまでも交際したいのですが、来年早々南米出張の話がでており、目下出世とどちらか両テンピンにかけております。皆さんでしたら、どちらをえらびますか。（福島・黒田寿）



## 愛読者原稿募集

△体験、告白、手記▽

これだけは、どうしても人に話したい、書いておきたいといったことが、どなたにも一つや二つ必ずある筈です。物言わざるは、腹ふくるるのたえ、どうか皆様の真実の叫びや思い出などをどしどしお寄せ下さい。採用篇には本誌一年分以内贈呈します。

△創作、小説、物語▽

最初は余り長いものは無理ですが、本誌の内容に適した題材で皆様の夢を文章に托して下さい。採用篇には本誌半年分以内贈呈します。

年分以上贈呈します。

△感想、論評、批判▽

本誌に掲載された内容についてでも結構ですし、関連したもので結構です。とにかく本誌を読まれて感じられたことを皆様の筆でまとめて下さい。採用篇には本誌五カ月分以上贈呈します。

△(映画、雑誌)通信▽

映画、雑誌、演劇、新聞、週刊紙、或はその他見聞などで特に興味をお持ちになった事項の通信をお待ちします。出処は出来るだけ詳しく報導下されれば幸いです。採用篇には本誌三月分贈呈します。

は本誌三月分贈呈します。

△マニヤ、ファン通信▽

編集者、執筆者、投稿者、モデル嬢などへの呼びかけやファンとしての希望、或は前号の感想批評、本誌に対する希望や御意見、など愛読者としての通信をお寄せ下さい。本誌とファン、マニヤ同志の忌憚のない通信ですから、何なりと御遠慮なく。採用篇には本誌三月分贈呈します。◎尚、以上の採用篇に対する希望の方には、代理部分譲品の中から御指定下さい。贈呈いたします。

## ☆編集後記☆

○「花と蛇」続篇の原稿到着が遅れたので、今月号はあわや休載かと危ぶまれたが、九月五日に至って受領。滑り込みセーフというところまで若干の組替えを生じ、予定原稿や読者通信で翌月号回しとなったものが出来た。

○先月号を読まれて後、執筆された原稿も極力掲載したいと思うので、ぎりぎりの線まで締切を延ばしているため校正なんか、徹夜徹夜という有様で、若干のミスもあると思うが、これも拙速主義の副産物か。

○今月号も十月号と同じ常連の顔ぶれで力作が揃ったが、新人の「告白」が三篇ばかり原稿の書き直しが間に合わず未掲載となった。折角の原稿が、未だに横書きであったり、中

には左側の行から書き出したものがあって、整理係を面くらわしたりする。

○挿絵の投稿も多いのだが、どうも挿絵という性質を考えていないものが多くて残念だ。白い画用紙に黒インキで書いてもらわないと製版が出来ない。

○「伊藤晴雨」に引き続き先般物故された「江戸川乱歩」をひっさげて、久我庄一氏の「悪魔派・ハイド氏を夢みた」江戸川乱歩の影の世界」が登場した。いつもながら精緻な文獻蒐集を底辺とした氏の麗筆は、そこはかとなく哀愁をたたえて、我等の胸に強く迫ってくるものがある。氏の健筆を祈るや切。

○今年はどうとう臨時増刊号を刊行することが出来なかった。準備を整えた「続篇・花と蛇」も制約のため流産したのは惜しい。

## ☆本誌御購読の便☆

一月分(1冊)三〇〇円△送共▽  
三月分(3冊)九〇〇円△送共▽  
半年分(6冊)一八〇〇円△送共▽

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下さい。毎月二十日前後、印刷完成と同時に厳重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価 三〇〇円

十一月号

〔第十九巻第十一号〕  
〔通刊第二〇八号〕

昭和四十年十月二十日 印刷  
昭和四十年十一月一日 発行

編集人 箕田 京二  
発行人 吉田 稔  
印刷人 北村 俊夫  
大阪阿倍野郵便局私書函第十四号

発行所 天星社

(振替口座大阪五〇〇四二番)  
(昭和三十一年四月二〇日第三種郵便物認可)  
(国鉄大局特別扱承認雑誌第一二二二号)

## ☆書店の皆様方へお願い☆

○本誌は口絵、グラビヤ写真の廃止、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に関する各条例に指定されないうよう充分に注意して編集いたしておりますが、本来成人向として発行を企図しております関係上、未成年の方には絶対販売下さらないよう、特にくれぐれも、お願い申し上げます。